岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第520集

吉田館遺跡発掘調査報告書

主要地方道二戸五日市線緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査

2008

岩手県二戸地方振興局土木部 (財) 岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター

吉田館遺跡発掘調査報告書

主要地方道二戸五日市線緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査



吉田館遺跡全景(東上空から)

*安比川対岸の高台が浄法寺城



吉田館遺跡 調査区全景



上段平場から浄法寺城(左奥)を望む

*中央遠景は稲庭岳



SD02虎口跡とSA01門跡



SC01平場(上段)のSD01空堀跡と柱穴群



SF01切岸跡・SD04空堀跡・SC02平場(下段)



SD04空堀跡 堆積土断面



S | 11竪穴住居跡 (縄文時代後期後葉)

岩手県には旧石器時代から近代までの数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地に分布しており、岩手県教育委員会のまとめではその数9,000箇所を超えております。先人の残したこれらの埋蔵文化財を保護・保存していくことは、私たち県民に課せられた重大な責務であります。一方、豊かで快適な生活環境を実現するための地域開発もまた、県民の切実な願いであります。埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和のとれた施策が今日の課題となっております。

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターはその前身である財団法人岩手県埋蔵文化財センターの創設から数えて30周年を迎えましたが、この間、岩手県教育委員会の指導および調整の下、埋蔵文化財保護の観点から、開発事業によりやむを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、主要地方道二戸五日市線緊急地方道路整備事業に関連して、平成18年度に発掘調査を実施した二戸市浄法寺町に所在する吉田館遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。調査の結果、中世の城館に伴う複数の平場・空堀・切岸・虎口・土橋などの普請跡、掘立柱建物跡や竪穴建物跡などの作事跡が検出されるとともに、中国産磁器や国産陶器、中国銭や模鋳銭など中世の遺物が出土しました。特にも館跡の中心部分と推測される平場から多数の柱穴が検出されたことから掘立柱建物群の変遷が想定され、吉田館が長期に亘って営まれた城館であることが推測されます。浄法寺地区には浄法寺城をはじめとする数多くの中世城館跡が存在していますが、調査が行われているものは少なく、今回の調査成果は中世における当地区の歴史を知るための貴重な資料となると思われます。また、縄文時代の竪穴住居跡や土坑・陥し穴が確認されるとともに、早期から晩期の縄文土器、平安時代の土師器・須恵器、石器類や各種製品が出土しており、当遺跡が縄文時代・平安時代・中近世にも生活の場として利用された地であることがわかりました。

本書が広く活用され、考古学の研究に寄与するとともに埋蔵文化財に対する関心と理解を一層深めることに役立つよう切に希望いたします。

最後になりましたが、発掘調査および報告書作成にご協力とご援助を賜りました二戸地方振興局土 木部、二戸市教育委員会をはじめとする関係機関・関係各位に厚く感謝申し上げます。

平成 20 年 3 月

財団法人 岩手県文化振興事業団 理事長 武 田 牧 雄

例 言

- 1 本報告書は岩手県二戸市浄法寺町大手9ほかに所在する吉田館遺跡の発掘調査成果を収録したものである。
- 2 本発掘調査は、主要地方道二戸安代線緊急地方道路整備事業に伴い遺跡の一部が消滅するため、記録保存を 目的として実施した緊急発掘調査である。二戸地方振興局土木部と岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の 協議を経て、(財岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが発掘調査を担当した。
- 3 岩手県遺跡データベースにおける遺跡番号はJE37-0090、調査時の遺跡略号はYDD-06である。なお、野 外調査時点では本遺跡を「吉田館跡」と称したが、本報告にあたって「吉田館遺跡」と改めた。
- 4 調査対象面積は3.345㎡である。
- 5 調査・整理期間および担当者は次のとおりである。

野外調查 平成18年5月16日~平成18年10月6日/千葉正彦・川又晋

室内整理 平成18年11月1日~平成19年3月31日/千葉正彦

6 出土遺物の鑑定および保存処理は、次の機関に依頼した。

石材石質鑑定

花崗岩研究会

金属製品の保存処理 岩手県立博物館

7 基準点測量、地形図作成測量および航空写真撮影は、次の機関に委託した。

基準点測量

㈱柳平測量設計

地形因下风侧。

地形図作成測量 (株)シン技術コンサル

航空写真撮影

㈱東邦航空

- 8 掘立柱建物跡について佐々木浩一氏 (八戸市教育委員会)、館の縄張について室野秀文氏 (盛岡市遺跡の学 び館) から多大な指導・助言をいただいた。
- 9 野外調査および室内整理・報告書作成にあたり、次の方々ならびに機関から指導・助言・協力をいただい た。(敬称略;所属は平成18年度当時)

本堂寿一(前・北上市立博物館長)、渡則子(八戸市教育委員会)、茅野嘉雄・佐々木雅裕・永嶋豊(青森県埋蔵文化財調査センター)、坂川進(八戸市立博物館)、岡本直久・金子健一・河合君近(瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター)、関豊・柴田知二・山口巌(二戸市埋蔵文化財センター)、高橋一浩・菅常久・羽柴直人(岩手県教育委員会)、八戸市教育委員会、瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター、利田名部建設、二戸市教育委員会、二戸市埋蔵文化財センター

- 10 野外調査では二戸市および一戸町・八幡平市の方々、室内整理では当センター期限付職員に協力していただいた。
- 11 本書の執筆は I 章を二戸地方振興局土木部、他を千葉が担当した。編集は千葉が行った。
- 12 本書では国土地理院発行の以下の地形図を使用した。

1/25,000 地形図 浄法寺、稲庭岳、陸奥荒屋、上斗米、駒ケ嶺

1/50,000 地形図 净法寺、十和田湖、花輪、田山、田子、荒屋、三戸、一戸、葛巻

- 13 調査で得られた出土遺物および調査に関わる諸記録は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。
- 14 吉田館遺跡の平成18年度調査成果については本書が最終報告である。調査成果の一部については既に現地公開資料および「平成18年度発掘調査報告書」(岩文振調報第505集)において一部公表しているが、本書の記載内容と異なる場合は本書が優先する。

凡 例

1 調査では遺構種別による略号と検出順の数字を組み合わせた遺構名を付した。

S A:柱穴列

SB:掘立柱建物跡

SC:平場

SD:堀跡、溝跡

SF:切岸

SI:竪穴住居跡、竪穴建物跡、竪穴遺構 SK:土坑

SKF: フラスコピット

SKT:陥し穴

SKP:柱穴

SN:焼土遺構

SX:その他

2 本文中の註・参考文献は各節で一括して末尾に置いた。

3 図版における表現は、概ね下図のとおりとし、これに拠らない場合は各図版において付記した。

4 図版の縮尺は原則として次のとおりとし、各図版にはスケールを付した。

遺構 1/150 平場・空堀・切岸・虎口・柱穴群 1/100 掘立柱建物跡・門跡・柱穴列

1/60 竪穴住居跡・竪穴建物跡・竪穴遺構 1/40 土坑 1/20 焼土遺構

1/10 剥片埋納遺構

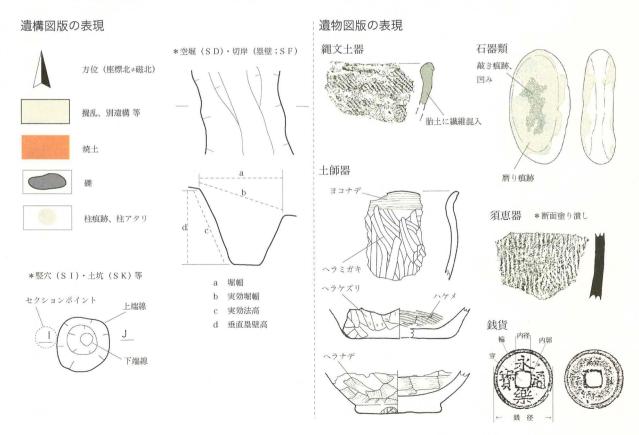
遺物 1/3 土器・陶磁器・礫石器 等 1/2 剥片石器 2/3 古銭

5 遺構図版において示した柱間寸法の尺換算値は、1尺=0.303 mとして算出した。

6 土層注記に際して、色名・面積割合・粒状構造については『新版 標準土色帳』(小山・竹原 編著)を基準として、 粘性および締まりについては主観的な判断により判定した。本書への掲載にあたっては、個々の細分層につい ては注記を割愛して大別土層の特徴を主として示し、粘性・締まりは強弱疎密が特にある場合以外は記載して いない。混入する火山灰については次のとおり略記した。

十和田 a 火山灰 To-a 十和田中掫火山灰 [中掫浮石] To-Cu 十和田南部火山灰 [南部浮石] To-Nb 十和田二の倉火山灰 To-Nk 十和田八戸火山灰上層 To-H(U) 十和田八戸火山灰下層 To-H(L)

7 写真図版は、遺構については不定縮尺、遺物については概ね図版に準じた。



目 次

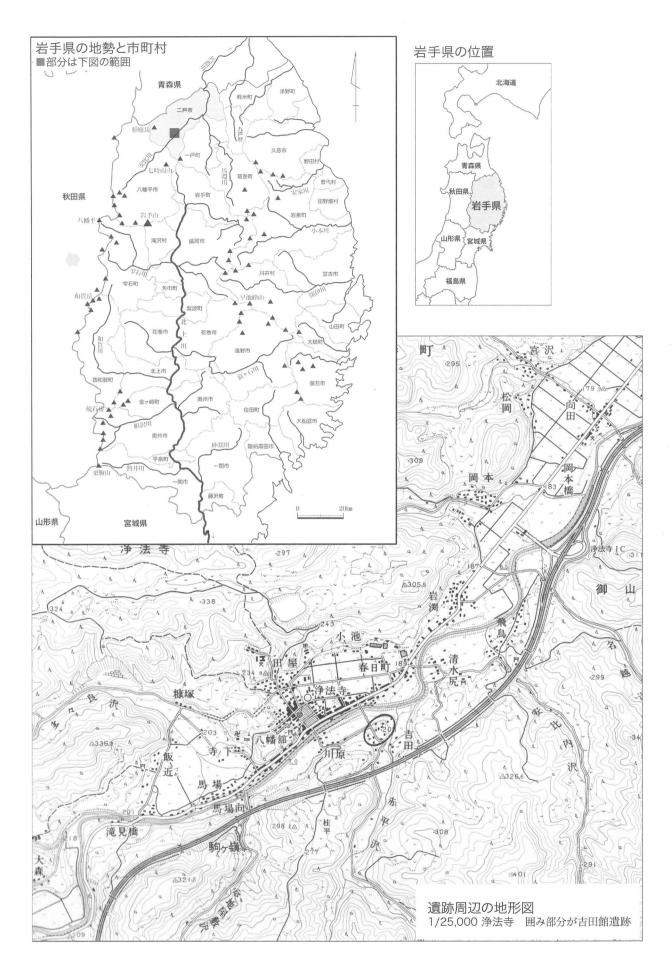
Ι	調査に至る経過	2
Π	遺跡の環境	4
1	遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	4
2	地 理 的 環 境	7
3	地質的環境と基本層序	9
4	歴 史 的 環 境	11
\coprod	調査と整理の方法	13
1	野外調査の課題と経過	13
2	野外調査の方法	14
3	室内整理の経過と方法	18
IV	遺 構	23
1	概 要	23
2	縄 文 時 代	23
3	中世・近世	35
4	近 代 以 降	102
V	遺 物	104
1	概 要	104
2	土器・陶磁器	104
3	石 器	114
4	土 製 品	120
5	石 製 品	120
6	金 属 製 品	120
7	銭 貨	121
8	接 合 剥 片	123
VI	総括と考察	132
1	縄 文 時 代	132
2	古 代	133
3	中 世	135
4		
	ま と め	142

図版目次

第1図	遺跡位置と周辺地形図 ・・・・・・ 1	第41図	建物跡集成 (2) 62
第2図	浄法寺工区の計画路線と調査遺跡	第42図	掘立柱建物跡配置 (2)63・64
	2	第43図	S B 013~017 · · · · · · 65
第3図	事業計画範囲と調査区位置 … 3	第44図	S B 018~023 ····· 67
第4図	調査区の呼称 ・・・・・・ 4	第45図	S B 024~029 ····· 69
第5図	遺跡現況地形測量図 · · · · · · · · 5 · 6	第46図	S B 033~034 ······ 71
第6図	地形分類と地質縦断図 ・・・・・・ 8	第47図	S B 035~041 · · · · · · 73
第7図	調査区の堆積土層断面 ・・・・・・・・ 10	第48図	S B 042~047 · · · · · · · 75
第8図	周辺の遺跡 ・・・・・・・・・ 11	第49図	S B 048~054 · · · · · · · 77
第9図	調査区グリッド配置 ・・・・・・・ 15	第50図	掘立柱建物跡配置・建物跡集成(3)
第10図	試掘トレンチ位置 ・・・・・・・ 16		79 · 80
第11図	時代別遺構配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20	第51図	S B 055 · 056 · 058 · 059 · · · · · · 81
第12図	遺構配置全体図 21・22	第52図	S B 057 · 060~062 · · · · · · 83
第13図	S I 10 · · · · · · · 24	第53図	S B 063~065 · · · · · · 84
第14図	S I 11、S X 01 · · · · · · · 25	第54図	掘立柱建物跡配置(4)86
第15図	S I 11、S B 101 · · · · · · · · 26	第55図	掘立柱建物跡配置 (5) · · · · · · 87
第16図	S I 12 · 13、 S X 02 · · · · · · 28	第56図	建物跡集成 (4) 88
第17図	S I 14 · · · · · · 28	第57図	S B 073~077 · · · · · · 89
第18図	遺構別出土遺物 (1) · · · · · · 29	第58図	S B 073~077 · · · · · 90
第19図	土坑 (1) 30	第59図	S A 01~05 ····· 91
第20図	土坑 (2) 32	第60図	掘立柱建物跡重複関係 · · · · · · 93
第21図	S N 08 · · · · · · 33	第61図	S D 05~08 · · · · · · 95
第22図	S X 04 · · · · · · 34	第62図	S I 01 · 02 · · · · · · 97
第23図	吉田館概略図 · · · · · · 35	第63図	S I 03 · · · · · · 98
第24図	縄張図36	第64図	S I 04 · · · · · · 99
第25図	地籍図37	第65図	S I 05 · 06 · · · · · · 100
第26図	S C 01 - a · · · · · · · 39	第66図	S I 07~09 ····· 101
第27図	S C 01 - b · · · · · · · 40	第67図	遺構別出土遺物 (4)102
第28図	S C 01 - c · · · · · · · 41	第68図	S N 01~07 ····· 103
第29図	S C 02 · · · · · 42	第69図	出土遺物 (1) 縄文土器 105
第30図	S C 03 · · · · · · 43 · 44	第70図	出土遺物 (2) 縄文土器 106
第31図	S D 01 · 03、 S X 05 · · · · · · 46	第71図	出土遺物 (3) 縄文土器 107
第32図	S D 04 · · · · · 48	第72図	出土遺物 (4) 縄文土器 108
第33図	S F 01 · · · · · · 49	第73図	出土遺物 (5) 縄文土器 109
第34図	S D 02 · · · · · 50	第74図	出土遺物 (6) 土師器・須恵器 ・・・・・・ 111
第35図	遺構別出土遺物 (2) · · · · · 51	第75図	出土遺物 (7) 陶磁器112
第36図	遺構別出土遺物 (3) · · · · · 52	第76図	出土遺物(8)陶磁器、土師質土器、
第37図	掘立柱建物跡配置・建物跡集成(1)		瓦質土器 113
	55 · 56	第77図	出土遺物 (9) 石器 115
第38図	S B 001~004 ····· 57	第78図	出土遺物 (10) 石器116
第39図	S B 005~008 · · · · · · 59	第79図	出土遺物 (11) 石器 117
第40図	S B 009~012 · · · · · · 60	第80図	出土遺物 (12) 石器 118

第82図 出 第83図 出 第84図 S 第85図 出	土遺物 (13) 土製品、石製品 · · · · · 119 土遺物 (14) 金属製品 · · · · · · 121 土遺物 (15) 銭貨 · · · · · · · 122 X 04剥片接合関係 · · · · · · · 124 土遺物 (16) 接合剥片 · · · · · · 125 土遺物 (17) 接合剥片 · · · · · · 126		第87図 第88図 第89図 第90図	竪穴住居跡 炉集成 132 桜松遺跡のデポ 133 縄文土器分類集成 134 糠部郡の中世城館・遺跡の分布 138
	表	目	次	
第1表 遺	物観察表(1)縄文土器······ 127		第6表	遺物観察表 (6) 石製品・・・・・・・・・・ 131
	物観察表 (2) 土師器・須恵器・・・・・ 129		第7表	遺物観察表 (7) 金属製品 · · · · · · · · 131
	物観察表 (3) 陶磁器 · · · · · · · · 129		第8表	糠部郡の中世城館跡 (1) ・・・・・・・ 139
第4表 遺	物観察表(4)石器130			糠部郡の中世城館跡 (2) ・・・・・・・ 140
第5表 遺	物観察表(5)土製品・・・・・・・・・・130			
写真図版 1 写真図版 2 写真図版 3 写真図版 4	遺跡俯瞰・近景ほか・・・・・144 S I 10・・・・・・145 S I 11・・・・・146 S I 11・・・・・147		写真図版 写真図版 写真図版 写真図版	\$\vec{x}\$20 \$S\$ \$I\$ \$03 \cdot 04 \cdot
写真図版5	S I 11 · 12、 S X 01 · 02 · · · · · · · 148		写真図版	$\bar{z}23$ S I 07 · 08 · 09, S N 01 · 02
写真図版 6	S I 13 · 14、 S K F 01 · · · · · · · 149			166
写真図版7	S K 02 · 03、 S K T 04~07		写真図版	
写真図版 8			写真図版	
与	S N08、S X04······ 151 S X04、S C01ほか···· 152		写真図版 写真図版	
写真図版10	S C 01 · · · · · · · · · 153		写真図版	
与兵因版10 写真図版11	S C 01 154		写真図版	
写真図版12	S C 01 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		写真図版	
写真図版13	S C 01 · 02······ 156		写真図版	
写真図版14	S C 02、 S D 01 · · · · · · · · · 157		写真図版	
写真図版15	S D01 · 03······ 158		写真図版	
写真図版16	S D 04····· 159		写真図版	534 出土遺物 (10)177
写真図版17	S F 01、 S D 02····· 160			
写真図版18	S D02 · 05∼08、 S A01 · 02			
	161			

,



第1図 遺跡位置と周辺地形図

Ⅰ 調査に至る経過

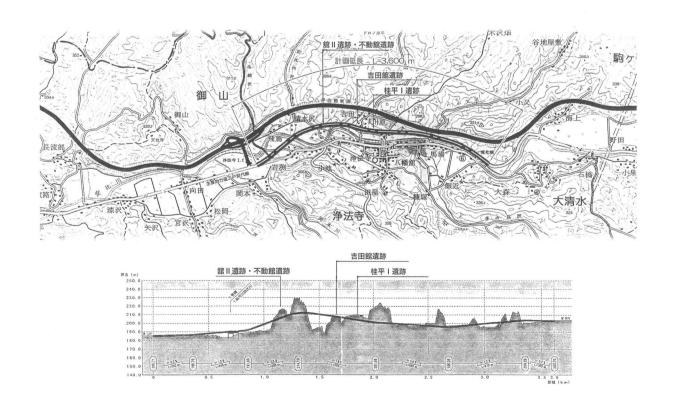
吉田館遺跡は、「主要地方道二戸五日市線緊急地方道路整備事業」工事に伴い、事業計画区間内に 存することから発掘調査を行うことになったものである。

主要地方道二戸五日市線は二戸市南西部に位置し、二戸市と八幡平市を結ぶ道路であり、その機能は東北縦貫自動車道八戸線の並行路線としての代替可能な幹線道路である。事業対象区域である「浄法寺工区」においては、浄法寺の中心地に位置しており、車道の幅員が狭い上に歩道がなく、さらに見通しの悪いカーブが多いことから、危険な状態となっている。そのような中、安全・安心に暮らせる地域の実現を目指して平成8年に「新交流ネットワーク道路整備事業」により事業着手したものであるが、平成16年度に新たに「緊急地方道路整備事業」の採択となり早期完成を目指すものである。

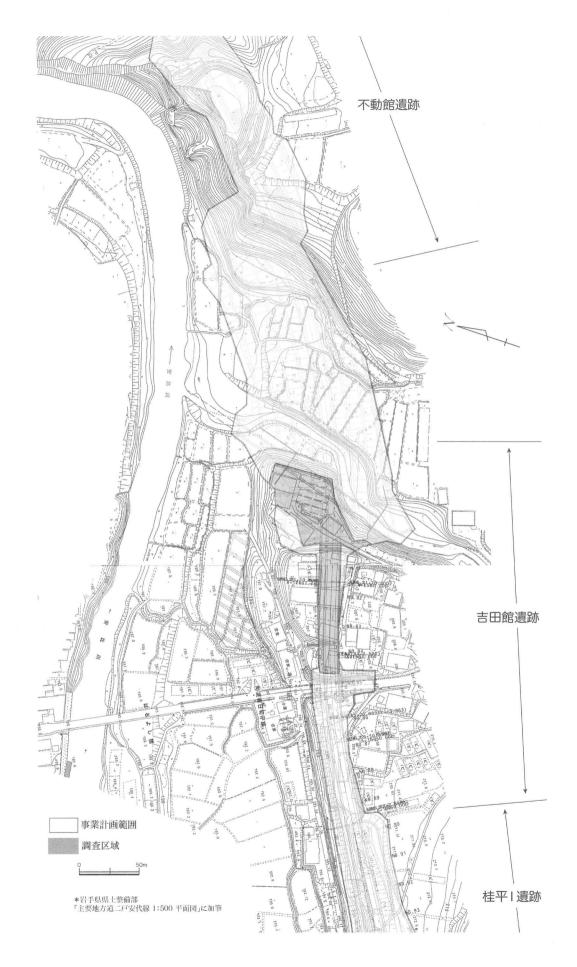
当事業の施行に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、二戸地方振興局土木部から平成17年4月26日付け二地土第123号「緊急地方道路整備事業実施計画における埋蔵文化財の試掘調査について(依頼)」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。依頼を受けた県教育委員会では、平成17年8月9日と同年8月18日に試掘調査を実施し、工事に着工するには吉田館遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成17年9月2日付け教生第848号「緊急地方道路整備事業実施計画における埋蔵文化財の試掘調査について(回答)」により当土木部へ回答してきた。

その結果を踏まえて当土木部は県教育委員会と協議し、平成18年度に財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結して発掘調査を実施することとなった。

(岩手県二戸地方振興局土木部)



第2図 浄法寺工区の計画路線と調査遺跡



第3図 事業計画範囲と調査区位置

Ⅱ遺跡の環境

1 遺跡の位置と環境

吉田館遺跡は岩手県二戸市浄法寺町大手地内に所在し、旧浄法寺町役場から東約0.5㎞、安比川右 岸の海抜198~208mの台地およびその周辺部分に立地する(巻頭図版1、第1図、写真図版1)。そ の位置は国土地理院発行の地形図1/25,000「浄法寺」NK-54-18-15-2図幅に含まれ、北緯40度10分 56秒、東経141度9分40秒付近である。遺跡は、西岳・七時雨山から続く山稜裾の舌状台地末端部に広が っている。遺跡の東側は安比川支流の吉田川「赤平沢」の形成した谷によって画される。現況では遺 跡中央部分を弧状に縦貫する市道春日筍平線が敷設されているが、この市道部分は東西の曲輪を画す る空堀跡だった可能性が高い。前述の谷と市道に挟まれた、複数段の平坦地をもつ小高い丘が城館跡 「吉田館」の中心部分にあたるものと推測される。一方、遺跡の西辺境界は現況地形では判然としな い。しかし本遺跡の西側に位置し、平成18年度に調査が行われた桂平 I 遺跡の調査区東端部で堀が検 出されており(川又2007)、当該堀跡が吉田館西側を区画する外堀と思われる。遺跡の上位平 坦面と安比川との比高は32~39mである。岩手県教育委員会が作成した遺跡データベース「平成18年 度版]によれば、遺跡総面積23,300㎡、遺跡範囲外周0.62kmである。現況では遺跡の大部分が宅 地となっており、一部は畑地として利用されている。今回の調査区は道路建設範囲に該当する、谷と 市道の間の丘陵部分を東西に横断する3,345㎡であり、遺跡全体の14.36%にあたる(第3図)。上 位平坦地は宅地造成により激しい撹乱を被っている。一方、下段平坦地は一部宅地化されていたが畑 地が多く、上段ほどの攪乱は受けていなかった。なお、以下の記載においては、調査区の西~中央部 の高位平坦面部分を「上段」、東部の低位平坦面部分を「下段」とする。また「下段」は僅かな段差 により2面に分たれるため、西側を「下段高位面」、東側を「下段低位面」と便宜的に呼称する。一 方、「上段」と「下段」を画する急斜面を「崖部」、現況で北側から「上段」へと登る小道部分を 「現道」とする。

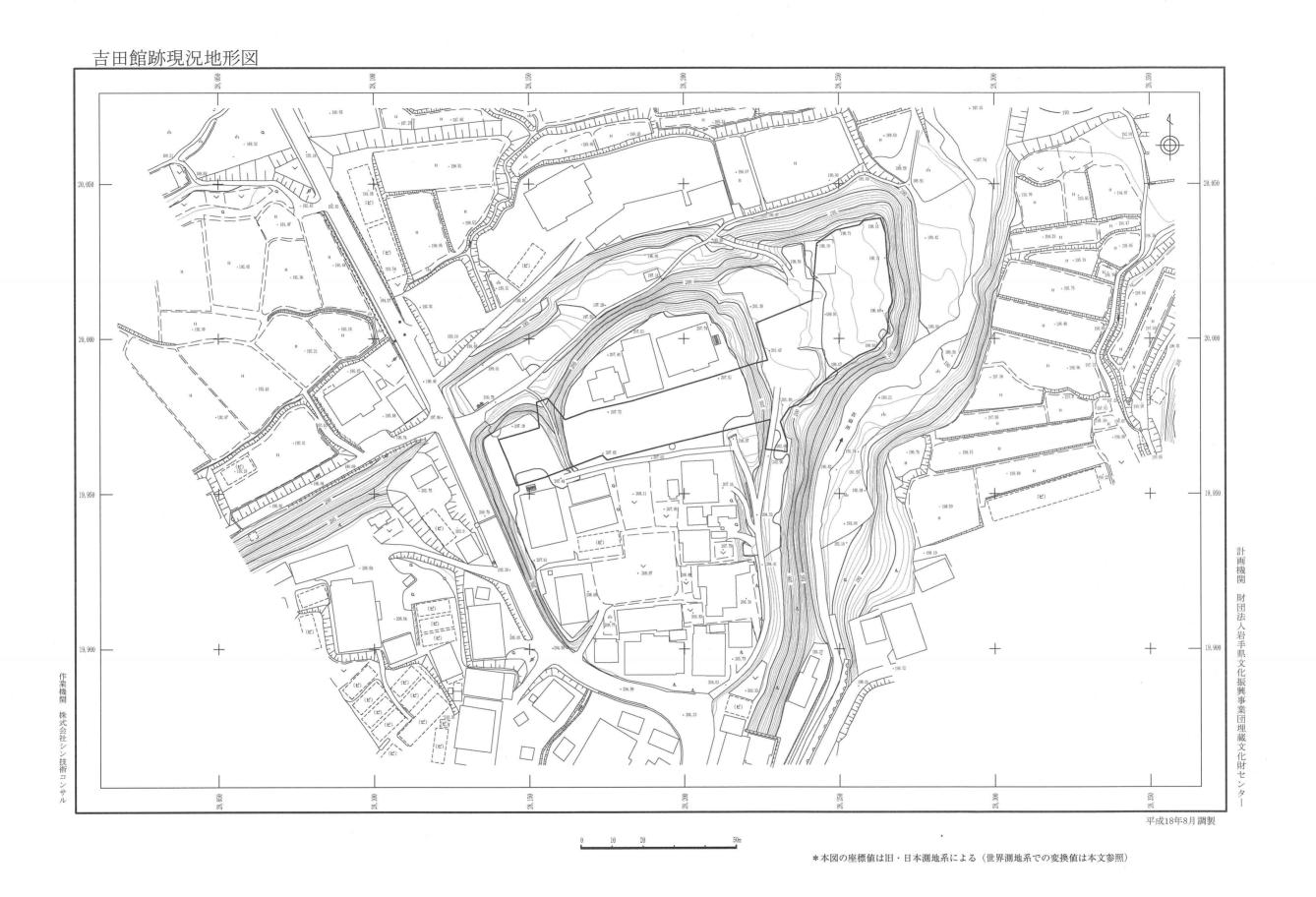
二戸市は岩手県の北部に位置し、平成18年1月に旧・二戸市と二戸郡浄法寺町の合併により成立した。市域総面積は420.31km、西に八幡平市、南に一戸町、東に九戸村・軽米町と境を接し、北は青

森県三戸町・南部町・田子町等との県境を接する。平成17年10月時点で総人口31,480人、人口密度74.9人/km²、岩手県北においては沿岸部の久慈市と並ぶ内陸部の中心市である。二戸市福岡付近では年平均気温10℃前後と県内でもかなり冷涼な地帯にあたり、年平均降水量は1000mm程で県平均よりもかなり少ない。

遺跡が所在する二戸市浄法寺町〔以下、単に「浄法寺町」と略す〕は二戸市西部にあたり、



第4図 調査区の呼称



第5図 吉田館遺跡現況地形測量図

旧行政区分における二戸郡浄法寺町である。旧・浄法寺町は明治22年に浄法寺、駒ヶ嶺、大清水、 漆沢、御山の5村合併の後、昭和15年に町制施行により成立した。これらの旧村名は二戸市との合 併までは大字として残っており、合併後の現在でも一部地名に名残を残している。遺跡はこのうち御 山に属している。鉄道路線は東の旧二戸市内をJR東北本線、西は八幡平市を花輪線がそれぞれ走る が、旧浄法寺町内は通っておらず、道路交通網に頼る状態である。主要な道路は県道二戸五日市線で あり、安代で国道282号、二戸で国道4号へ連結して盛岡市や秋田県鹿角市、青森県八戸市の各方面 へと続く。産業別就労人口で見ると農林業の比率が圧倒的に高い。また、山稜が大部分を占めて耕地 が少ないこと、気候が冷涼なこと等に起因するものであるが、耕種別生産額では米作よりも畑作物 の比重が高くなっている。とりわけ工芸作物の生産比率が50%弱と高率であるが、これは葉タバコ の生産等に起因するものである。昭和30年頃から、二戸・九戸地方での葉タバコ栽培が開始された が、以後作付面積は300~400haに増加し、全国有数の生産地となっている。現在、浄法寺町の第一 次産業所得に占める葉タバコの割合は60~70%に及び、町の基幹産業となっている。また、浄法寺の 漆生産はその起源が判然としないが、藩政時代以降、良質な漆の生産供給地となっている。浄法寺の 漆は世界的にも有数の良質なもので、鹿苑寺金閣の再建など重要文化財・国宝の復元・修理等にも用 いられている。この浄法寺漆を用いた漆器碗生産も行われ、「浅沢五郷」を主産地として生産・流通 されて「南部碗」などとも称された。また、遺跡の所在する御山地区には、八葉山天台寺がある。天 台寺は、『桂泉天台寺縁起』によれば、聖武天皇により陸奥へ遣わされた仏僧行基が神亀5 (728) 年に仏堂を建てたことが縁起であるとされている。実際の創建時期は、発掘調査の成果から平安時代 後期の10~11世紀頃と推測されている。

参考文献

川又 晋 2007 「桂平 I 遺跡第 1 次調査」(概報) 『平成 18 年度発掘調査報告書』第 505 集、岩手県埋文

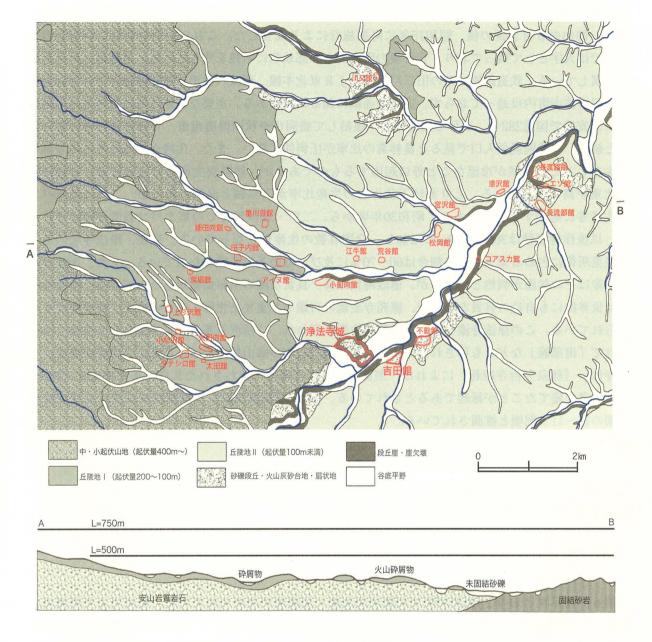
浄法寺町 1997 『浄法寺町史(上巻)』

净法寺町教委 1976 『浄法寺町史(資料編)』

2 地形的環境

第6図に示すとおり、浄法寺町の大部分は山地・丘陵地で占められている。安比川より西側は、稲庭岳 [1,078m] を頂点とする中・小起伏山地 [起伏量400m以下] 、それに続く丘陵地 [起伏量200m以下] が広く分布しており、東に向かって高度を下げている。稲庭岳は火成岩により構成される火山であるが、風化浸食によりその原型を殆ど残していない。一方、安比川の東・南側も様相は同じであり、西岳 [1,018m] や七時雨山 [1,060m] から続く丘陵地によって占められている。八幡平市に源流を持つ安比川が浄法寺町の中央を蛇行しつつ北東に流れ、東西双方から小河川が山地・丘陵を下刻しつつ安比川へと流れ込んでいる。安比川およびその支流の流域には谷底平野や台地 [段丘] が形成されている。高位から砂礫段丘 I・火山灰砂台地・砂礫段丘 II・砂礫段丘 IIの「台地」各面、扇状地・谷底平野の「低地」が分布しているが、しかしその分布は断続的かつ狭小であり発達は良好ではない。図ではこれらの台地が狭小であるため、台地各面と扇状地を一括して示した。浄法寺の中心部は、安比川沿いの狭い谷底平野に形成されている。本遺跡を含めた浄法寺の城館の多くは、平野を一望に見通せる高位の砂礫段丘面に立地する点で共通している。本遺跡の周辺は台地に分類され、安比川右岸の中位段丘面にあたる。

なお、近世に作成された絵図(註1)によれば、安比川の流路は現在とは違っており、段階的に流



第6図 地形分類と地質縦断図

路が変遷していたらしい。現在の安比川は谷底平野東縁をやや蛇行しつつ北東方向に流れ、本遺跡東 側の吉田川対岸に位置する不動館の載る段丘に突き当たり、それを侵食しつつ一旦北へと流れを変え ている。そのため、本遺跡の東側に隣接する不動館は安比川により北~西部分を抉り取られた状態と なっている。

註

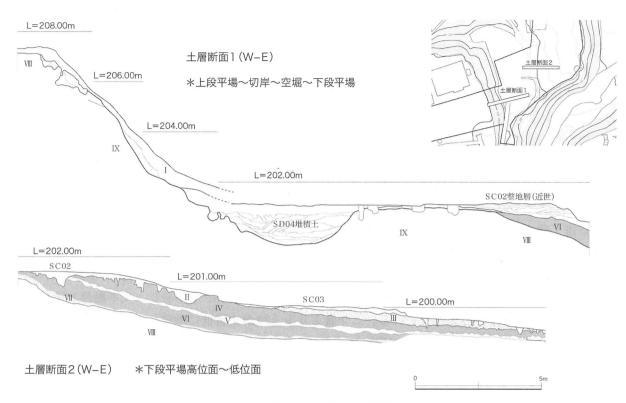
1) 元文4年の絵図『御旧領之内福岡通絵図』(盛岡市中央公民館・蔵) では、安比川は緩く弧を描いて流れているように描か れている。一方、制作年代不明の絵図『岩手県管轄陸奥国二戸郡御山村』では、安比川が現在と同様に蛇行している様が描き 込まれている。前者が描き手のデフォルメによるものという可能性はあるものの、安比川が頻繁に氾濫を繰り返す川であるこ とを考えれば、首肯できないことではない。両図は舘Ⅱ遺跡調査報告書(岩手県埋文2006)の巻頭図版に掲載されているので 参照されたい。

3 地質的環境と基本層序

「土地分類基本調査」(岩手県1979)によれば、浄法寺の表層地質は第6図の断面模式図に示すとおりである。東西の山稜部分は更新世の凝灰岩質岩石や固結砂岩を基底とし、その上位に完新世の火山砕屑物や安山岩質岩石が載っている。安比川およびそれに流れ込む小河川の下刻・堆積作用により細かな谷底地形が形成されて未固結の砂礫や砕屑物が堆積している。吉田館遺跡の所在する御山地区付近は、更新世の固結砂岩岩体の分布域にあたり、地質的には比較的古い様相を示している地域である。

二戸市・軽米町・九戸村などの県北内陸部では、ローム質火山灰・浮石凝灰岩・スコリア質火山灰などの火山砕屑物が層をなして堆積している。これらのテフラ群は十和田系の火山噴出物に起源をもち、一般的には上位から、十和田a火山灰[To-a]、十和田b火山灰[To-b]、中掫浮石[To-Cu]、南部浮石[To-Nb]、二ノ倉火山灰[To-Nk]、八戸火山灰[To-H]、大不動浮石流凝灰岩[To-Of]という層序が確認されている。二ノ倉よりも上位が完新世に堆積した火山灰である。本遺跡の調査区内では複数のテフラ層群が観察される。これらのテフラについては自然科学的分析を実施していないが、その特徴や近隣遺跡での成果から見て、中掫浮石、南部浮石、二ノ倉火山灰、八戸火山灰に相当するものと推定される(註1)。

中掫浮石"アワズナ"は調査区下段東縁辺付近でのみ見られる。粗粒の砂状パミスで、浮石純層およ び上下層への混在が観察される。降下年代は約5.400年B.P.と推測され、縄文時代前期中葉に相当す る。南部浮石"ゴロタ"は黄褐色~赤褐色を呈する粗粒浮石で、旧二戸市内では発泡の良い拳大の浮石 が場合によっては1mを超える厚い層をなしているが、浄法寺町では堆積は顕著ではない。本遺跡の 場合は径5mmほどのパミス粒が厚さ3~5cm程度の薄い層(V層)を形成していることが観察される にすぎず、その上下の黒色土層に疎らに混入する形で存在している。14℃年代は8,600 ± 250年とされ ており(生出・中川・蟹沢1989; p.147)、降下年代は縄文時代早期に相当する。一方、二ノ倉火山灰 は本遺跡の場合は赤褐色スコリア質パミス粒で、土壌化した八戸火山灰層の上位にごく薄い混入層が 見られる。降下年代は概ね10,000~12,000年B.P.と推測され、当テフラの直上には縄文時代早期中 葉の文化層が存在することから早期前葉~中葉に相当するものとされている。八戸火山灰は更新世の ローム質火山灰であり、AMS14C年代では14,500~17,000年B.P.とされ、噴出時期はおよそ15,000年 前と考えられている。本遺跡の場合、八戸火山灰は土質・色調の違いから上下2層に分かれている。 上層は黄褐色を呈し、その上位は土壌化して黒褐色化している。なお、上段調査区の遺構底面や壁で 確認したところでは、本層下位に不整合な細砂層が介在している。この細砂は一見して山砂で、中掫 浮石が如き火山性のものとは思われない。SF01切岸の法面などでは砂層の存在を確認できないこと から局所的に存在しているのかもしれず、当細砂層の起源・堆積メカニズムについては不明である。 一方、その下位には灰白色凝灰岩層が存在している。層中に炭化した樹幹や粒度の大きい軽石が混在 している。この灰白色凝灰岩層の様相は大不動浮石流凝灰岩(32,000年B.P.) に類似しており、 大不動である可能性もあるが、ここでは八戸火山灰の下層と捉えておく。本層は一見堅固な岩盤であ るがいわゆるシラス層であり、上層の黄褐色ロームに比して粘性・しまりに欠け、水分を含むと脆く 崩壊しやすい。実際、調査期間中の降雨の際、雨水の流出によりSD02やSF01の堅い法面に容易く 雨裂が生じる様がしばしば見られた。なお、SD04堀の法面の観察ではさらに下位の複数のローム層 が観察される。褐色~赤褐色の粘性に富むロームで高館火山灰や天狗岱火山灰に相当するものかもし



第7図 調査区の堆積土層断面

れないが、深掘りを行っていないため詳細は不明であり、基本層序としては把握していない。

本遺跡の調査区内に限ると、中世の普請の影響の多寡により各地点で土層堆積様相が異なるが、模式的な層序は次のとおりである。

I 層 表土、耕作土、盛土

Ⅱ層 暗褐色土

Ⅲ層 明黄褐色浮石 砂状浮石の純層。中掫浮石。

IV層 黒褐色土 上位に中

上位に中掫浮石、中~下位に南部浮石を含む

V層 黄褐色パミス

南部浮石を主体とし、マトリクスは暗褐色土。

VI層 黒色土

南部浮石含む。

Ⅲ層 暗褐色シルト

赤褐色パミス=二ノ倉火山灰を含む。

Ⅷ層 黄褐色ローム

八戸火山灰上層。遺構検出面。層厚2~3m。下位に不整合な細砂層?

IX層 灰白色凝灰岩

八戸火山灰下層。最終の遺構検出面。層厚不明。

Ⅱ~Ⅲ層は調査区東側の低位部分 [SC03平場相当部] でのみ観察される。それ以外の調査区西~中央部では I 層直下がⅢ層ないしはIX層となり、Ⅲ層以上が普請に伴う削剥により消失している。

註

1) 中掫浮石より上位のテフラは本遺跡では確認されていないが、本遺跡西側に隣接する桂平 I 遺跡では十和田 a テフラ [降下年代西暦 915 年頃] および白頭山苫小牧テフラ [B-Tm:降下年代10世紀中頃] が竪穴住居跡の覆土中に堆積している (川又 2006)。

参考文献

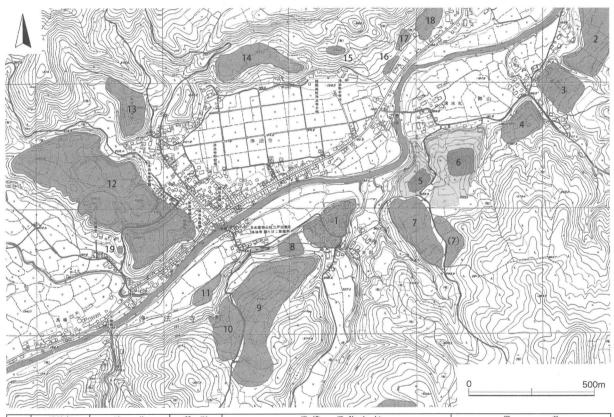
岩手県 1979 『北上山系開発地域 土地分類基本調査 浄法寺』

生出慶司・中川久夫・蟹沢聰史編 1989 『日本の地質2 東北地方』 共立出版 (東京)

大池昭二1972「十和田火山東麓における完新世テフラの編年」「第四紀研究」11 - 4町田洋・新井房夫2003『新編 火山灰アトラス - 日本列島とその周辺』 東京大学出版会

4 歷史的環境

平成18年時点で、二戸市内には603箇所の遺跡が周知されており、うち浄法寺町では縄文時代から近世までの429遺跡が登録されている(註1)。本遺跡の周辺には複数の遺跡が存在している(第8図)。図幅中では縄文時代~近世の遺跡が存在している。旧石器時代については確認されていない。そのうち、飛鳥台地 I、安比内 I、大久保 I、舘 II、桂平 I・II、沼久保 I、小池、浄法寺城、舘



	遺跡名	時 代	種 別	遺構・遺物など	備考
1	吉田館	中世 縄文·古代	城館跡 集落跡	曲輪、空堀、切岸、虎口、掘立柱建物、陶磁器、古銭、 竪穴住居跡(縄文)、土坑、縄文土器、土師器、須恵器他	報告遺跡。 浄法寺町教委調査。
2	飛鳥台地I	縄文~近世	集落跡	竪穴住居跡 (縄文・古代)、竪穴建物跡、土坑、陥し穴 他	岩手県埋文調査。
3	安比内 I	縄文・古代	集落跡	陥し穴、縄文土器	岩手県埋文調査。
4	舘 I	縄文	散布地	縄文土器	
5	不動館	縄文・中世	城館跡	曲輪、二重堀、土塁、縄文土器	岩手県教委試掘調査。
6	舘Ⅱ	縄文・古代・中世	城館跡	曲輪、堀、竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑、陥し穴 他	岩手県埋文調査。
7	大久保I	縄文・中世	集落跡	陥し穴、縄文土器 他	岩手県埋文調査。
8	桂平I	古代	散布地	土師器	岩手県埋文調査。
9	桂平Ⅱ	縄文	集落跡	竪穴住居跡、土坑、陥し穴 他	岩手県埋文調査。
10	沼久保 I	縄文~近世	集落跡	竪穴住居跡、土坑、陥し穴 他	岩手県埋文調査。
11	大坊	縄文	散布地	縄文土器	
12	浄法寺城	中世	城館跡	曲輪、堀、掘立柱建物跡、竪穴建物跡、青磁・白磁 他	净法寺町教委調査。
13	上外野	古代	集落跡	土師器	壊滅。
14	小池	古代	集落跡	土師器	旧「小池Ⅱ」。岩手県教委調査。
15	小池塚	不明	塚		
16	岩淵Ⅲ	縄文	散布地	縄文土器	
17	岩淵Ⅳ	縄文	散布地	縄文土器	
18	岩淵V	縄文・古代	散布地	縄文土器、土師器	
19	福蔵寺経塚	近世	経塚	経石	

第8図 周辺の遺跡

Ⅱ、太田向館について、当センター・県教委生文課および旧浄法寺町教委による発掘調査が行われており、遺跡の内容を知ることができる。

縄文時代:飛鳥台地I、安比内I、大久保I、舘I、桂平II、沼久保Iで遺構・遺物が検出されている。飛鳥台地Iでは早期2・前期6・後期3・晩期5棟の竪穴住居跡が検出され、押型文を特徴とする早期の日計式、前期の早稲田6類、後期初頭~前葉、晩期前葉の大洞B式の縄文土器が出土している。後期の竪穴住居跡は図幅中では桂平II・沼久保Iで検出された。

弥生時代:沼久保 I で竪穴住居跡 1 棟が検出され、弥生土器は桂平 Ⅱ でも出土した。

平安時代:飛鳥台地Ⅰ、大久保Ⅰ・桂平Ⅰ・Ⅱ、沼久保Ⅰで平安時代の集落跡が確認された。

中世:城館跡としては北東約0.5kmの吉田川対岸に不動館遺跡・舘Ⅱ遺跡(註2)、西約0.8kmの安比川対岸に浄法寺城跡が存在している。浄法寺城については平成9年以降、内容確認のための発掘調査が継続的に行われており、掘立柱建物跡や竪穴建物跡、空堀跡、多数の柱穴等が検出されている(浄法寺町教委1999~2005)。本遺跡東方に位置する舘Ⅱ遺跡は不動館の東郭にあたり、平成17年度に調査が行われた。空堀・大溝によって区画された複数の平場を調査し、掘立柱建物跡・竪穴建物跡等が検出され、館の縄張変遷の様相が確認された。また城館ではないが、飛鳥台地Ⅰと沼久保Ⅰでは中世の竪穴遺構が検出されている。該期の陶磁器類は安比内Ⅰ・桂平Ⅱ・沼久保Ⅰで出土した。

近世: 浄法寺城南西に隣接する福蔵寺経塚があるのみで、本遺跡周辺では希薄である。

註

- 1) 岩手県教委「岩手県遺跡情報検索システム」(平成18年版)のデータによる。また第8図は同システムで検索した画像データをもとに一部改変したものである。
- 2)岩手県教委の遺跡台帳および遺跡検索データベースにおいては不動館と舘Ⅱ遺跡は別個の遺跡として登録されており、舘Ⅱ遺跡は古代の遺物散布地となっている。平成17年度、本遺跡調査原因と同一事業にともなう試掘により舘Ⅱ遺跡の範囲は拡大され、当センターが当該部分の調査を行った。その結果、舘Ⅱ遺跡は中世城館跡であることが判明した(岩手埋文2006)。不動館と舘Ⅲ遺跡は現市道を挟んで東西に隣接する館跡であり、本来は一つの城館である可能性が高い。実際、岩手県教委がまとめた『岩手県中世城館跡分布調査報告書』(岩手県教委1986)では不動館について「4郭。北側2郭は空堀に囲まれ北から東にかけては2重堀」(同書:p.80)としており、「舘Ⅱ遺跡」とされている部分が不動館東郭に相当するものと解される。何故、分布調査において郭として確認された部分にもとづいて台帳の遺跡範囲を修正しなかったのかわからないが、このことが遺跡名やその範囲の混乱を招いたことは事実である。また、同様のことは吉田館についても云える。前掲『分布調査報告書』では吉田館に関して「東西2郭。中央に道。西に空堀跡」(同書:p.80)と記載している。前述のとおり、平成18年度、吉田館西側に位置する桂平Ⅰ遺跡第1次調査で大規模な薬研堀が検出された(川又前掲書)が、この堀が上述の「空堀跡」であろう。なお、平成19年度の桂平Ⅰ遺跡第2次調査では、この堀以東も桂平Ⅰ遺跡として調査が行われたものの、本来的には吉田館の遺跡範囲[西郭]とすべきであろう。

参考文献

岩手県教委 2006 「岩手県遺跡情報検索システム(平成18年版)」CD-ROM版

岩手県埋文 1986 a 『沼久保遺跡発掘調査報告書』第 109 集

岩手県埋文 1986 b 『桂平遺跡発掘調査報告書』第110集

岩手県埋文 1988 『飛鳥台地 I 遺跡発掘調査報告書』第 120 集

岩手県埋文 2006 『舘Ⅱ遺跡発掘調査報告書』第497集

净法寺町教委 1991 『岩手県二戸郡浄法寺町 遺跡詳細分布調査報告書 I (大字浄法寺地区)』

净法寺町教委 1996 『浄法寺町遺跡地図 (1995 年版)』

岩手県教委 1986 『岩手県中世城館跡分布調査報告書』岩手県文化財調査報告書第82集

Ⅲ 調査と整理の方法

1 野外調査の課題と経過

(1)調査の課題

吉田館遺跡は中世城館跡として周知されていた遺跡であり、館主は吉田氏であると伝承される。しかし吉田館についての文献記載は皆無であり、かつ館主=吉田氏と云う点についても不確かな伝承の域を出るものではない。当遺跡については沼館愛三氏、簗部善次郎氏らの現地形調査(縄張調査)が行われていた(沼館1981、簗部1971)。また岩手県教育委員会による全県的な中世城館分布調査が実施され、分布調査報告書では吉田館についての記述が見られる(岩手県教委1986)。平成17年には浄法寺町教育委員会[当時]により、今回の調査区西側隣接地[ボックスカルバート設置部分]について発掘調査が実施され、竪穴建物跡、柵跡、柱穴群が検出された(註1)。これらの縄張調査・分布調査および発掘調査では遺物が乏しいことや、発掘調査面積が限られた狭い範囲だったことから、館の構造や館主・存続期間等について推測を裏付ける資料を欠いたままであった。これらの点について幾許かの情報を得ることが、今回の調査の主たる課題であった。かかる課題の下、野外調査によって得られた情報のみならず、館全体の現地踏査にもとづく縄張の把握、周辺住民からの聞き取り、絵図・地籍図・航空写真の判読など、調査と併行して広範な情報を収集することを目指した。

(2)調査の経過

野外調査は平成18年5月16日に開始され、当初予定[8月10日まで]を超過した10月初旬までの延べ93日[作業日数86日・降雨による作業中止7日]を費やし、従事した作業員の延べ人数は1,259人であった。

5月:16日、調査機材搬入・現場設営を行い、8月10日までの約3ヶ月間の予定で調査を開始した。調査員2名、作業員16名。17日、二戸市埋蔵文化財センター・山口巌主事[旧浄法寺町教育委員会]、来跡。平成17年度に浄法寺町教委が行った発掘調査について、調査範囲と調査成果の教示をいただく。19日、シン技術コンサルに委託した現況地形図作成測量が行われた。22日、調査区中・下段全体へ計10箇所のトレンチをいれた(第10図:T1~10)。また並行して吉田川に面する東側崖面についてもトレンチを設定して掘り下げた。調査範囲外ではあるが、この崖が人工的な崖地形(=切岸)なのか、途中に犬走り等の遺構がないか等、確認するためである。トレンチの状況からはこの崖は自然地形であり、かつ遺構は確認されなかった。24日、重機による表土除去、粗掘りを開始。調査区への進入路が狭隘なことから、パワーショベル0.2、キャリアダンプ3tを使用した。29日、作業員1名増員[登録17名]。31日、下段中世面の精査開始。調査区上段で試掘を行い、表土下の八戸火山灰上層面で複数の柱穴を検出。

6月:5日、作業員2名増員[登録19名]。切岸の精査を開始。下段北半部の柱穴をほぼ完掘し、中段の遺構検出・精査へ移る。7日、作業員3名増員[登録22名]。9日、この日以降16日頃まで、天候不順となり降雨が続き、作業は捗らず。12日、作業員1名増員[登録23名]。23日、柱穴精査を終了した範囲から順次、平面実測を開始した。2名が専従し、必要に応じて最大8名が実測にあたった。26日、上段平場の表土除去を開始。過日のトレンチ内の落ち込みが竪穴ではなく、大溝状の遺構であることが判明。

7月:上段平場の柱穴検出・精査に着手した。予想に反して柱穴等の遺構が多数遺存していることが判明。試掘で一部確認していた遺構が空堀であり、北東部でL字状に屈曲していることが判明した [SD01堀]。一方、現況地形で虎口と推測される「現道」に法面にトレンチを設定して掘り下げた。結果、小道の西側法面は厚さ1.5m以上の盛土層であり、盛土下が堀状に深く落ち込むことがわかった [SD02堀と命名したが、後に虎口と判明→SD02虎口]。10日、作業員1名退職 [登録22名]。中旬、SD01堀と虎口に挟まれた部分 [SC01-b平場]の表土を除去したが、夥しい柱穴が存在していることが判明した。また、当該部分の南側調査区境において、SD01堀と土橋?を挟んで対になる堀を検出した [SD03堀]。一方、SD02の底面で大径の柱穴が複数検出された [SA01門跡]。27日、中世遺構について現地公開を開催(地元浄法寺や八幡平市の35名参加)。

8月:1日、下段平坦地部分の中世面調査について、二戸地方振興局土木部の立会のもと、県教育委員会生文課による部分終了確認を受ける。当初予定では8月10日終了予定であったが、当初予想よりも多数の遺構が検出されたこと、およびこの時点で未了である下段平坦地の縄文時代遺構精査に時間がかかることから、今後検出が予想される遺構の種別・数量、実際の調査進捗状況を踏まえて、調査を9月15日まで延長することとなった。8日、東邦航空による遺跡全体の航空写真撮影を実施した。17日、本遺跡西側に隣接する桂平 I 遺跡の調査を並行して進めることとなり、調査員1名・作業員11名体制へ。18日、盛岡市遺跡の学び館・室野秀文氏、来跡。縄張り、個々の遺構について教示をいただいた。下旬、上段の堀・竪穴遺構・柱穴の精査がほぼ終了し、下段平場面下層の遺構検出・精査に入った。31日、下段平坦地の縄文面 [IV層面] で竪穴住居跡を検出。

9月:縄文時代遺構の精査を進めた。11日、二戸地方振興局土木部の立会のもと、県教育委員会生文課による調査終了確認を受ける。当初の作業予定では埋め戻しは考慮されていなかったが、安全対策上の理由から調査区の埋め戻しを実施することとなり、埋め戻し終了時点で調査終了とすることとなった。以降、中掫浮石面以下の遺構精査を進めた。19日、調査区の埋め戻し作業開始。精査・実測の終了した部分から順次埋め戻した。作業員1名退職[登録10名]。25日、精査終了。上段の柱穴群の実測が未了だったことから実測要員4名のみを残し、作業員6名を桂平Ⅰ遺跡へ登録替え。26日、北上市立博物館の前館長・本堂寿一氏、来跡。28日、県教委生文課・菅常久文化財専門員、来跡。

10月:2日、実測作業終了により、作業員4名を桂平I遺跡へ登録替え。調査員1名が残留し、重機による埋め戻し作業を進め、6日に埋め戻し作業を終了。野外調査の一切を終了した。

註

1)調査成果は未報告であり詳細不明であるが、概要について二戸市教委の山口巌氏にご教示いただいた。なお、山口氏には参考として図面等の調査記録を提供していただいた。一部、掘立柱建物等の検討に町教委調査分の「柱穴」を使用したものもある。未報告資料という性格上、当該調査の「柱穴」は未だ柱穴として確定していないものであるが、千葉の判断で引用したものであり、誤謬ある場合は総て千葉の責任である。

参考文献

岩手県教委 1986 『岩手県中世城館跡分布調査報告書』岩手県文化財調査報告書第82集

沼館愛三 1981 『南部諸城の研究』伊吉書院(八戸)

築部善次郎 1971 『二戸郡·九戸郡古城館址考』東北民俗研究会 (二戸)

2 野外調査の方法

(1) グリッド設定

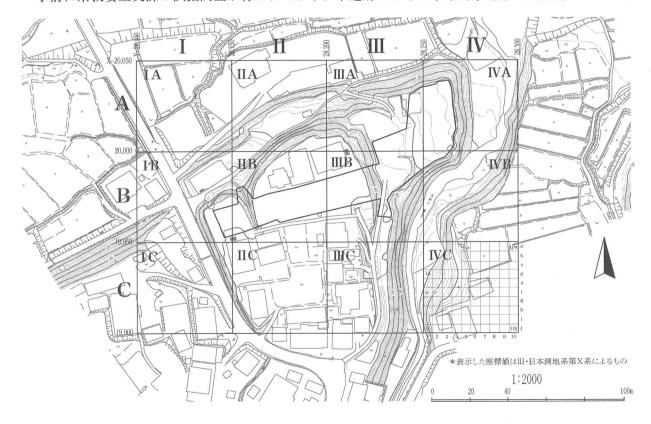
調査開始時点で委託者から示された事業計画図面は日本測地系によるものであり、かつ同一事業で前年度調査を行った舘 \blacksquare 遺跡が日本測地系にもとづくグリッド設定を行っていたため、今後図面の合成等を行う際の便宜を考慮し、旧・日本測地系第X系によるグリッドを設定した後、世界測地系 [日本測地系2000] に座標変換することとした。よって調査座標原点は端数を含む数値となっている。任意の基点 [日本測地系座標:X=20,050、 $Y=28,100 \to$ 世界測地系座標:X=20,401.2007、Y=27,818.0090] を調査座標原点として、旧・平面直角座標系に載り、この点で直交する東西・南北の軸線をそれぞれ設定し、それぞれの軸線を基点から50m刻みに分割、西から「I・II・II・II ・II ・II

調査区内に設置した基準点座標値は次のとおりである([]内は旧・日本測地系座標値)。

基点1	X=20,277.2589	Y=27,906.3742	H=207.264m	[X=19,970]	Y=28,205
基点2	X=20,317.2580	Y=27,941.3750	H=200.887m	[X=20,010]	Y=28,240
補点1	X=20,277.2594	Y=27,871.3744		[X=19,970]	Y=28,170
補点2	X=20,292.2586	Y=27,906.3746		[X=19,985]	Y=28,205
補点3	X=20,297.2580	Y=27,941.3748		[X=19,990]	Y=28,240
補点4	X=20,317.2576	Y=27,961.3752		[X=20,010]	Y=28,260

(2) 試 掘

事前に県教委生文課の試掘調査が行われており、本遺跡における事業対象部分に15箇所のトレンチ



第9図 調査グリッド配置

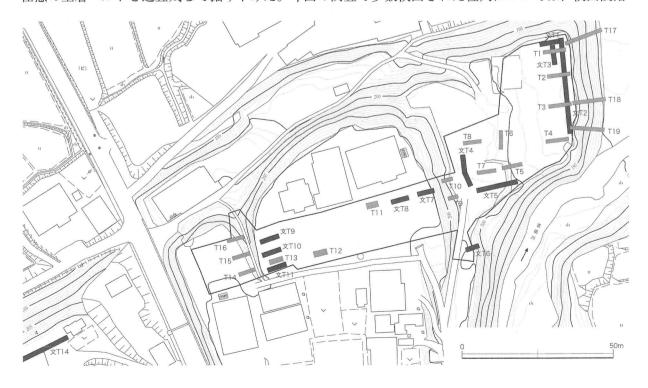
が設定され(第10図 文T 1~14)、柱穴・焼土が検出されている(註1)。調査開始時点では生文課の試掘トレンチは埋め戻されており位置も判然としなかったことから、新規にトレンチを設定して試掘することとした(第10図)。調査区下段に10(T1~10)、上段に 6(T11~16)、計16箇所で試掘を行った。またこれとは別に、本来調査範囲外であった調査区東端に隣接する崖部分について、普請の痕跡の有無を確認するために試掘を行っている(T17~19)。

(3) 粗掘りと遺構検出

調査区は基本的に表土が平均的には20cm程度と薄く、特に調査区西半部分(調査区上段)は表土直下が「地山」である八戸火山灰面であった。パワーショベルとキャリアダンプを用いて表土を大まかに除去した後、芝鋤鎌や両刃鎌で表面を削って人手により遺構検出を行った。調査区までの進入路が狭いため、パワーショベル0.2~0.3、キャリアダンプ3t、ダンプトラック2tと小型の重機しか使用できなかった。掘削に伴う残土は、当初は調査対象外の隣接部分への仮置きおよび調査区内での反転処理を想定していたが、予想よりも残土量が多くなったため、調査後半は隣接する桂平 I 遺跡の調査対象外部分へと排出・仮置きした。残土を長距離運搬しなければならないことや重機自体の規格が小さいこと等から、通常の場合に比して作業効率は良くなかった。検出は表土直下の中世面(II~V層面)で全面に行い、以後、層位的に掘り下げながら順次検出を行った。中近世の遺構識別は比較的易しいが、縄文時代の遺構は南部浮石や中掫浮石混じりの黒~黒褐色土面で検出するため「黒に黒」で識別しづらかった。検出した遺構に対しては、その種別に応じた略号と検出順の数字を組み合わせた遺構名を付した。なお整理段階で検討し、現場で命名した遺構名の変更・登録抹消を行った。

(4) 遺構の精査

遺構は種別・規模に応じた方法で精査を行った。竪穴住居跡・竪穴建物跡・竪穴状遺構は状況により4分法と2分法を選択して行った。また、土坑・焼土遺構は2分法により、堀跡・溝跡・切岸等は任意の土層ベルトを適宜残して掘り下げた。今回の調査で多数検出された柱穴については、検出段階



第10図 試掘トレンチ位置

で5~10cmほど段下げを行って柱痕跡を確認して、柱痕跡が無いものについては段階的に底面まで掘り下げた。従って柱穴断面は図化を一切行っていない。柱穴の平面的なプラン・重複関係の把握を意図したものである(榊原2001)。しかし実際には堆積土が似ているものが大部分だったため平面で重複関係をはっきり捉えられたものは僅かであり、中途半端なものになってしまった。柱痕跡が段下げ段階で確認できなかったものでも、底面で柱アタリが確認できたものは平面図に記録した。柱穴堆積土は概ね地点により似通っており、特徴的なもののみ記録して、他は地点全体の傾向を把握するに止めた。中世遺跡調査に不慣れな調査者にとって、眼前に広がる多数の柱穴群をどのように調査すべきか迷うところであったが、結果として非常に雑な調査方法をとってしまった。また、個々の柱穴を掘ることに追われて建物の検討ができず、現場中には掘立柱建物を殆ど認識できなかった。

(5) 実 測

現場作業員には幸いにして実測経験者が多く含まれており、最大4班稼働した。6月中旬以降、終了間際まで常時1~2班が柱穴の平面実測に従事した。実測は簡易遣り方測量を主としたが、堀や切岸等、遣り方測量が困難ないしは煩雑な遺構の平面図については調査員が光波トランシットを用いた座標計測から作図を行った。

(6)写 真 撮 影

主に中判(6×7判)フィルムカメラを使用してモノクロフィルム撮影を行い、補助的に35mmフィルムカメラによるモノクロフィルム撮影を行った。従来撮影していた35mmリバーサルフィルムは使用せず、主にデジタル一眼レフカメラによるRAWモードでの撮影を行った(註2)。

(7)調 査 条 件

調査区上段部分に民家 2 件が隣接しており、かつそれぞれの進入路が調査区内にあった。この民家はもともと調査区内に建っていた民家を新築・移転したものである。民家の位置が上段北側(台地縁側)にあたり他に進入路がなく、道の付け替えの必要が生じた。また、安全性確保および民家侵入の便宜を図らざるを得なかったため、民家に隣接する部分についてはその都度埋め戻さなければならない。従って上段については分断した形で調査せざるを得ず、遺構の分布を面的に把握することができづらい状況であった。また調査区内に、前述の民家へ続く新しい上下水道管等が埋設されていた。特に上段から下段を経て吉田川まで続く下水管は、SF01切岸やSC02平場などの調査で支障物件となった。一方、現況で上段への出入りに使われていた小道部分はやや強い雨が降ると付近の雨水が集まって流れ込み、下方へと流れて簡易排水溝へと導かれて落ちる形となっていた。調査により表土を剥いだ後は雨裂に弱いシラス面が露出したため、流水の勢いが増して民家まで溢れる危険性が懸念されたため、土嚢・ブルーシートにより流路を補強して民家への被害を防止する作業を行った。

(8)情報の公開

調査の開始以降、二戸市教育委員会を通じて浄法寺地区の学校を対象に情報の提供を行うとともに、理解と協力を求める意味で調査区近隣の住民へも随時情報を提供した。また、前述のとおり調査中盤の7月27日、現地公開を行った。この時点では中世面の精査が中心であり、該期の遺構・遺物についての調査結果を公開したものである。公開以降、縄文面の精査が進んで、竪穴住居跡・剥片埋納遺構等、該期の良好な遺構も検出されたが、日程的な要因等から開催を見送った。

註

- 1) 第10図の生文課試掘トレンチの位置は岩手県教委2007による。なお試掘報告では西郭部分についても「吉田館」として調査が行われているが、本調査段階で西郭部分が桂平I遺跡の範囲となったことは既に述べたとおりである。
- 2) この「デジタル化」試行の対象は遺構写真で、フィルムからデジタルデータへと保存形態/媒体の転換を企図したものである。それにともなって報告書作成ワークフローの一部変更は生じるものの、必ずしもそれを主眼とするものではない。なお、今回は遺構写真図版についてはデジタルデータ化することが前提であったが、調査員の独自の判断の下に、他の部分を含めた全体をデジタルデータとして作成することを試みた。

参考文献

岩手県教委 2007 『岩手県内遺跡発掘調査報告書(平成17年度)』岩手県文化財調査報告書第124集 佐々木浩一 2001 「柱穴群から建物跡へ」東北中世考古学会編『掘立と竪穴-中世遺構論の課題-』高志書院 榊原滋高 2001 「柱穴の調査方法を考える」東北中世考古学会編『掘立と竪穴-中世遺構論の課題-』高志書院

3 室内整理の経過と方法

(1) 整理期間と体制

平成18年11月1日~同19年3月31日の5ヶ月間に調査記録および出土遺物の整理作業を行った。 整理作業は調査員1名が担当し、11月は3名、12月~3月には4名の期限付職員が遺物接合・実 測・トレース等に従事し、遺物写真撮影については期限付職員1名が随時行った。

(2) 遺構の整理

遺構の実測図を遺構毎に分類・整理した後、各遺構の平面と断面を合成して第二原図を作成。調査 区全域の柱穴群の合成、遺構配置全体図の作成等を併せて進めた。第二原図を縮小したものをA4版 スキャナで読み込んで画像データを作成した後、ドロー系ソフトウェアでトレースした。

(3) 掘立柱建物の検討

柱穴が予想以上に多数検出されたため、実測・平面図作成が追いつかず、現場で建物を検討できなかった。掘立柱建物については、殆どが整理段階において図面上の検討で建てたものである。当初は調査員が独自に検討して40棟弱を抽出したが、担当者が中世の建物について知識・経験が乏しいため、抽出した建物に妥当性あるものか、確信が持てなかった。そこで、八戸市教育委員会の佐々木浩一氏に依頼し、建物について指導・助言をいただいた。結論的にはそれまで抽出した建物の殆どが怪しいものであり、再検討が必要であることが判明した。再検討の結果、抽出した建物跡は78棟となり、遺構図の組み直しを行った。

(4) 遺物の整理

調査員が11月前半まで野外調査に従事していたため、約半月は調査員不在となっていたが、遺物の水洗と大まかな仕分は野外調査期間で終了していたことから、この期間に土器の注記・接合作業を進めた。土器については、現場で取り上げた袋毎に付した袋番号を注記し、袋毎の重量計測を併せて行った。前述のとおりの出土状況を反映して接合状態が思わしくなく、立体として実測できる個体は少なかった。土器以外の遺物については選別個体毎に袋を分けて登録することとし、個々の注記は行っていない。接合作業を11月下旬まで行った後、実測・採拓する土器を段階的に選別し、他の遺物

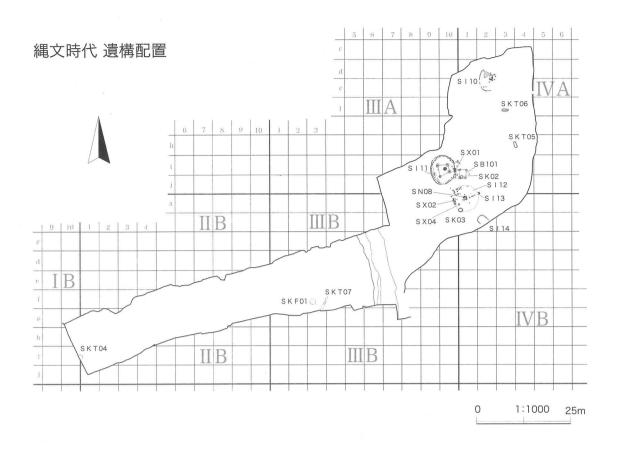
と併せて登録を行った。12月からは遺物実測・採拓・トレースを行った。実測図は原寸で作成し、一部を除いて原寸でトレースした。出来上がったトレース図を遺構同様にスキャナで読み込んで画像データを作成し、グラフィックソフトウェアにより画像解像度やコントラスト等を適宜調整した。

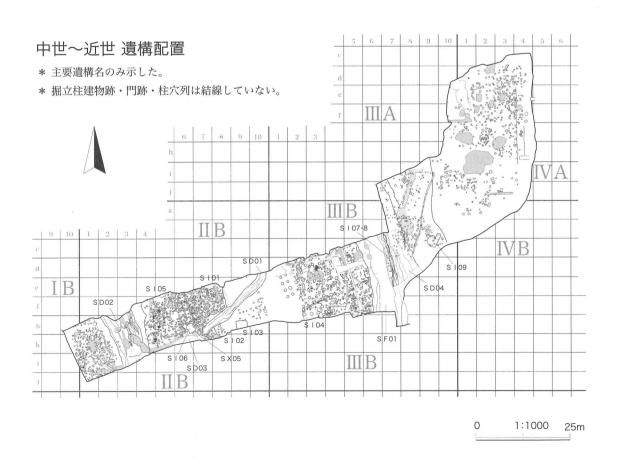
(5) 写真の撮影・整理

遺物写真は1月からデジタル一眼レフを使用して断続的に撮影を行った。撮影した画像データは遺構・遺物ともに据置型の大容量ハードディスクに保存・収納するとともに、作業用にポータブル型ハードディスクへも保存して写真図版作成を行った。

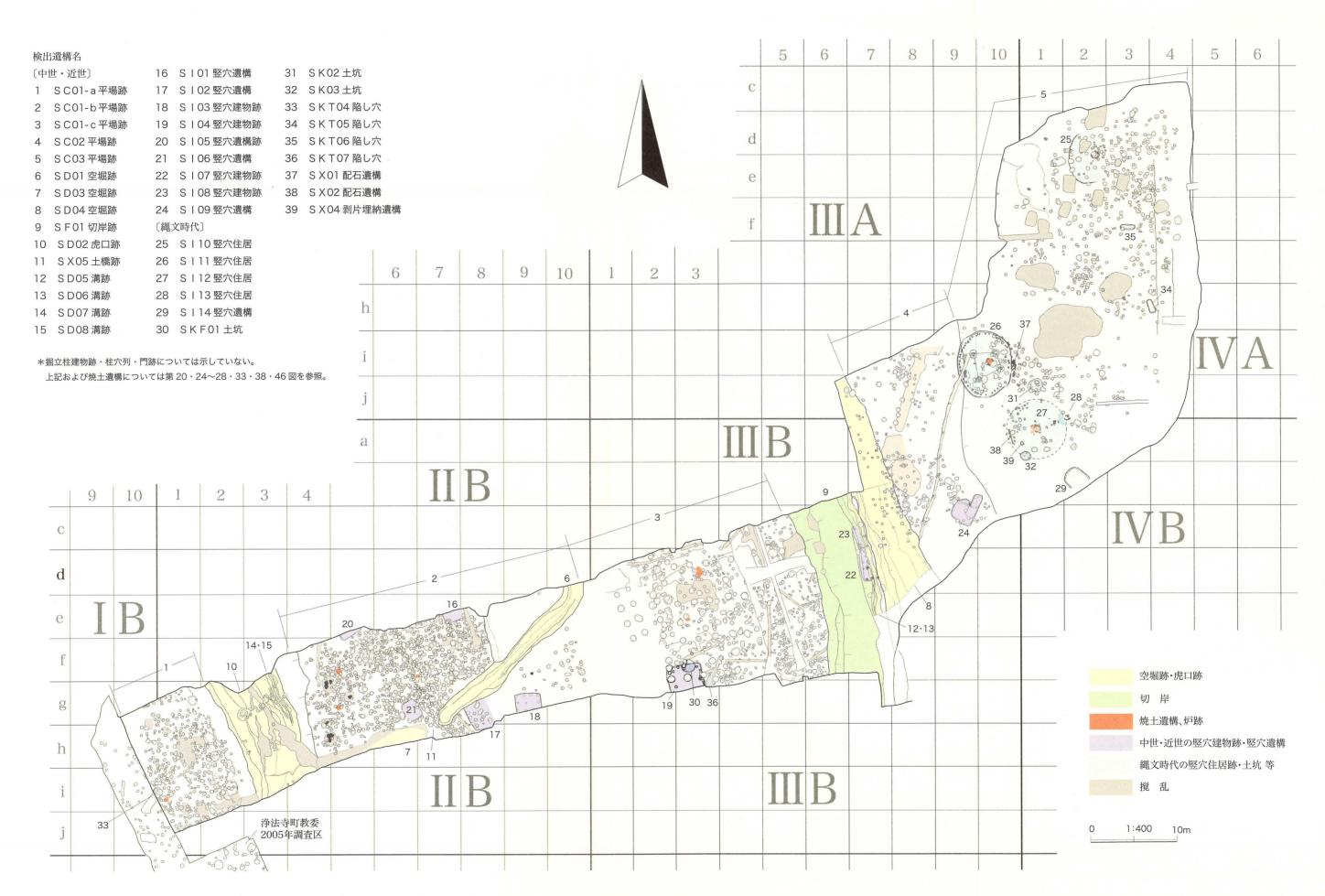
(6)割 付

割付はレイアウトソフトウェアを使用し、本文テキストファイルの流し込み、遺構・遺物の画像データ配置、キャプションの打ち込み等を行って印刷用組版データを作成した。





第11図 時代別遺構配置図



第12図 遺構配置全体図

Ⅳ遺構

1 概 要

縄文時代、中世~近世、近代以降の遺構を検出した。

縄文時代:主として東側の調査区「下段」部分で確認された。上段部分でも該期遺構は検出されたものの、中世の普請にともなう削剥により少ない。種別は、竪穴住居跡4棟(炉のみの1棟含む)、竪穴遺構1棟、掘立柱建物跡1棟、土坑2基、フラスコピット1基、陥し穴4基、焼土遺構1基、配石遺構2基、剥片埋納遺構1基である。

中世~近世:調査区全域に分布する。大部分が館跡に関わる遺構と推測される。普請に係る遺構は、平場3面、空堀跡2条、切岸1箇所、虎口跡1箇所、土橋1箇所である。また、作事に係るものは、竪穴建物跡・竪穴遺構9棟、掘立柱建物跡67棟、門跡3棟、柱穴列3条、溝跡4条、焼土遺構7基である。ただし、これらの遺構は出土遺物を欠くものが多く、具体の時期を確定できない。出土遺物には舶載磁器や美濃大窯産陶器など16世紀代に比定される陶磁器、北宋銭・明銭や模鋳銭がある一方、肥前系陶磁器や寛永通寳など近世以降へ下る遺物も出土している。共伴する遺物から判断することが難しく両者を分離しかねるため、近世以降の遺構が含まれている可能性がある。

近代以降:調査区「下段」部分で掘立柱建物跡1棟、土蔵跡1棟を検出した。

2 縄 文 時 代

(1) 竪穴住居跡・竪穴遺構

SI 10 竪穴住居跡

遺構(第13図) 〔位置・検出状況〕調査区北東部のWAId~leグリッドにおいて、暗褐色シルトの広がりとして検出した。本住居跡付近は削剥を被っており、表土直下で地山ロームが露出する状況であった。かかる状居ゆえ本住居も大部分が削平されており、斜面上方である西側で壁を確認できたに過ぎない。〔重複関係〕柱穴群、北側の倒木痕が当住居を截っている。〔形状・規模〕遺存状態が悪いため全体の形状が不明であるが、残存部分から推測すれば円形 [または楕円形]を基調とするようである。〔堆積土〕確認できた部分では上位は炭化物を含んだ暗褐色シルト、下位はパミス混じりの灰褐色シルトで構成される。〔壁・床面〕壁は全体の1/3程度しか残存していない。残存する西側では壁高12cm程である。床面には攪乱によるものか、やや凹凸がある。〔炉〕石囲炉を確認したが、新期の柱穴により著しく破壊されており遺存状態が悪く、焼土も殆ど残っていない。検出時点では礫4個が残存するのみであったが、南~東側で礫が設置されていた痕跡が確認できた。一方、北西側では攪乱により礫設置の痕跡も確認できなかった。本遺跡における他住居跡の石囲炉の形態を見ると、北西部で炉石を欠く馬蹄形の石囲炉だった可能性もある。〔柱穴〕炉周辺を中心に12個を検出したが、小径かつ浅いもので主柱穴とは思われない。

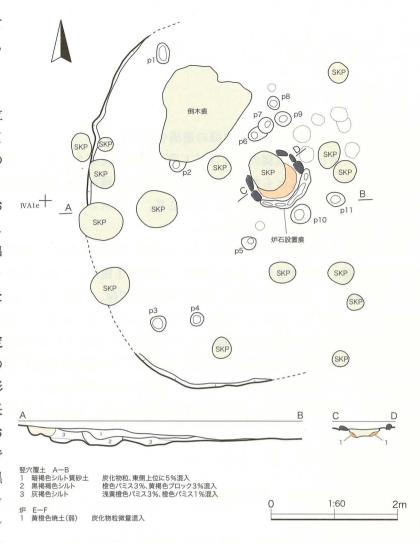
遺物 (第18 図) 〔土器〕 堆積土から口縁部破片 1 点、胴部破片 8 点、合計約 0.2kg 分が出土した。 1・3 は後期、2 は前期に比定される。〔石製品〕砥石 1 点(213)。

時期 削剥により残存状況が悪く、確実な共伴遺物は殆どない。時期決定の根拠としては弱いが、

少量の後期土器片が出土していることから、後期に属する可能性があると思われる。

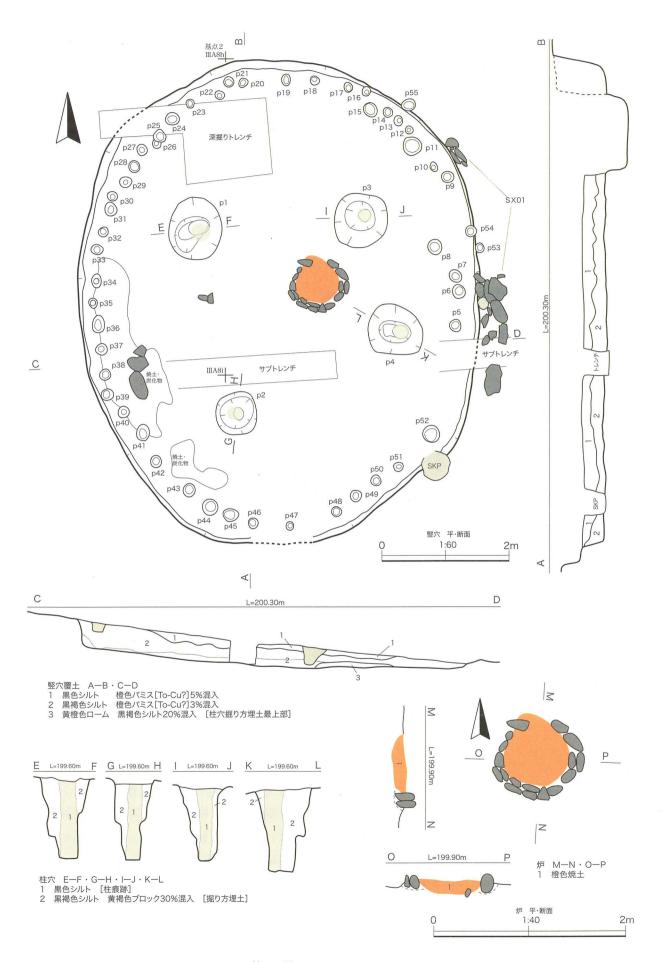
S І 11 竪穴住居跡

遺構 (第14・15図) 〔位 置・検出状況〕東側調査区Ⅱ A 9 i ~10 i グリッド付近の Ⅳ層面で検出した。当該グリ ッドにおいてSX01配石お よび柱穴の精査していたとこ ろ、柱穴底面で石囲炉を検出 した。そこで、炉を中心にト レンチを設定して掘り下げた 結果、西側で壁の立ち上がり を確認し、竪穴住居跡と認定 した。〔重複関係〕中近世の 柱穴群に截られている。〔形 状・規模〕平面形は南北に長 径をもつ楕円形を呈してお り、長径7.6m、短径6.2mで ある。〔堆積土〕上位層は黒 色シルト、下位層は黒褐色シ ルトで構成され、全体にオレ ンジパミスが微量混入してい る。精査段階では分層したも

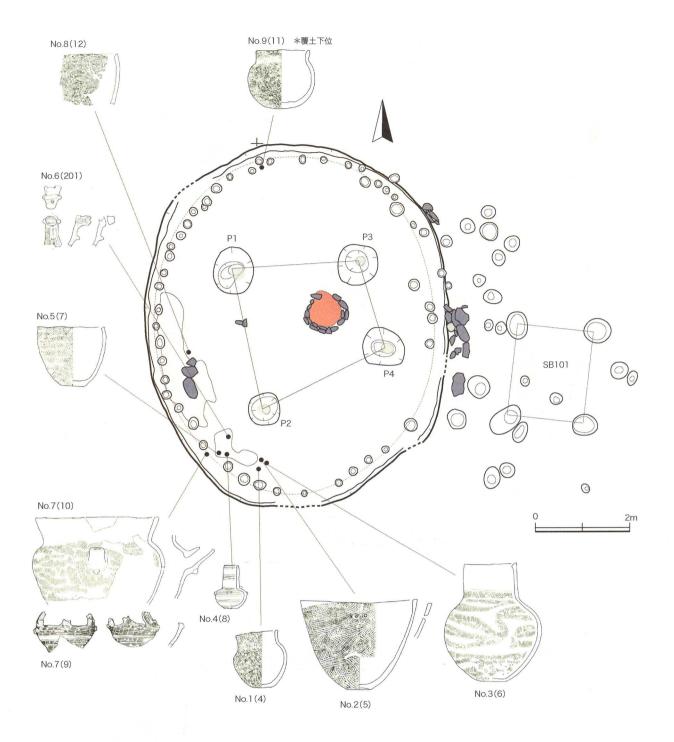


第13図 S I 10

のの、上層と下層はきわめて似ており、図では一括した。堆積土と地山 [N層:南部浮石混じりの黒色土]の区別がつきづらかったため、炉周辺の床面は下げ過ぎており、また南側の壁や南半部の床面は掘りすぎているかもしれない。また、3層は主柱穴pit2の掘り方埋土である。 [壁・床面] 壁は床面から外傾して立ち上っており、最も残りの良い西壁では70cm、斜面下方の東壁では15cmである。床面は南北方向ではほぼフラットであるが、東西方向では西から東へと緩く傾斜している。原地形の傾斜に制約されたものと思われる。また西壁際の床面において、焼土・炭化物細粒の集積層および礫3個の纏まりを検出した。集積層の厚さは約1cmと薄いが、その周辺床面で完形・準完形の壺・鉢4個体、潰れた状態の一括土器2個体、動物形土製品1点が出土している。 [炉] 床面中央よりやや東へ寄ったpit3・4西側の床面に位置する。礫を円形基調に配した石囲炉であり、礫の並びは南西側では二重となっているが、北側では礫が無く、全体として馬蹄形状である。焼土は石囲内に最大14cmの厚さで形成されている。 [柱穴] 床面および壁で55個を検出した。主柱穴と推定されるものはpit1~4である。これら4個のpitは他の柱穴に比して大径かつ深いものであり、緩斜面下方である東側へ寄った台形状に配置される。開口部は65~95cmで、深さは1.1~1.3mである。掘り方埋土は地山ロームの黄褐色土ブロックを含んでおり、床面で円環状に確認できた。4個ともに断面でも柱痕跡がわかり、底面には硬化した柱アタリ部分が確認できた。pit4では平面・断面ともに確認した柱



第14図 SI11、SX01



第15図 SI11、SX01、SB101

痕跡は1つのみであったが、底面の柱アタリは2箇所あり、建て替えされている可能性が高い。他の3個では建て替えの痕跡は確認できなかった。主柱穴の4個以外に、壁に沿って巡る小径で浅い柱穴、壁にかかる柱穴を51個確認した。前者($pit5\sim52$)はいわゆる壁柱穴であり、壁立あるいは土留めのための施設と思われる。後者($pit53\sim55$)は本住居に属さない別個のpitかもしれない。〔附属施設〕東側壁のすぐ外側にはSX01配石が位置しており、検出当初は別個の遺構と考えた。礫の配置状況がほぼ本住居のプランと合致していることから、壁の補強や土留め等、何らかの用途を有する附属施設だった可能性が高い。また、斜面下方である東側でpit群を検出した。前述のSX01は一

部途切れる部分があり、当該箇所に出入口施設が設けられていた可能性を考えたが、柱穴の明確な 配置を確認できなかった。

遺物(第18図)〔土器〕堆積土中より約5.4kg分の縄文土器が出土した。遺構の項で述べたように、南西壁寄りの床面で完形・準完形の個体が出土しているが、その他は破片であり器形を復原できたものは少ない。24点を掲載した〔4~27〕。4~10は床面で一括出土した個体であり、後期後葉[十腰内Ⅳ式]に属するものである。13~27は堆積土から出土したものである。19は堆積土最上位からの出土で、晩期の鉢形土器である。27は胎土に繊維を含む、前期前葉の深鉢の口縁部である。他は後期後葉に属するものと思われる。〔土製品〕床面で動物形土製品1点(201)。〔石器〕石鏃(172)、敲磨器類(189・191~193)。〔石製品〕軽石製装身具1点(205)。

時期 床面および堆積土から出土した土器、特にも床面の土器は当住居跡の時期を反映するものと 考えられる。出土土器の様相から、当住居の所属時期は後期後葉[十腰内IV式期]と捉えておく。

S І 12 竪穴住居跡

遺構(第15図)〔位置・検出状況〕ⅢB10 a グリッドにおいてS X 02配石を検出・精査した後、円形の礫配置を検出したが、S X 02の一部と認識した。しかし当該礫を外す段階で僅かに焼土が伴うことに気付き、竪穴住居の炉跡と認定した。〔重複関係〕直接の截り合い関係は確認できないが、S I 54と隣接することから同住居との重複関係があるものと思われる。新旧関係は不明である。〔形状・規模〕壁はほとんど残っていないため平面形は不明であるが、S I 52と同様にS X 02が当住居の附属施設である場合、北西~西の配置状況から円形基調となると思われる。〔堆積土〕S X 02の精査過程で掘削してしまったため不明である。〔壁・床面〕壁はほとんど残っていない。〔炉〕石囲炉1基を検出した。礫は西側が開いた馬蹄形に配置されている。焼土の形成は弱いが、その範囲は炉の全域および開口した西側炉外に張り出している。〔柱穴〕炉周辺および配石付近で15個を検出した。明らかに主柱穴と思われるものはない。〔附属施設〕西側にS X 02が位置する。明確ではないが、当住居の西側壁際に配置されていたものである可能性が考えられる。

遺物 (第18図) 削剥および上述の精査過程のため、確認できた出土遺物は少ない。〔土器〕縄文土器 (28)。 〔石器〕削掻器 (180) がpit 2 から出土。

時期
少量ながら後期の土器片が出土しており、後期に属するものと思われる。

S 1 13 竪穴住居跡

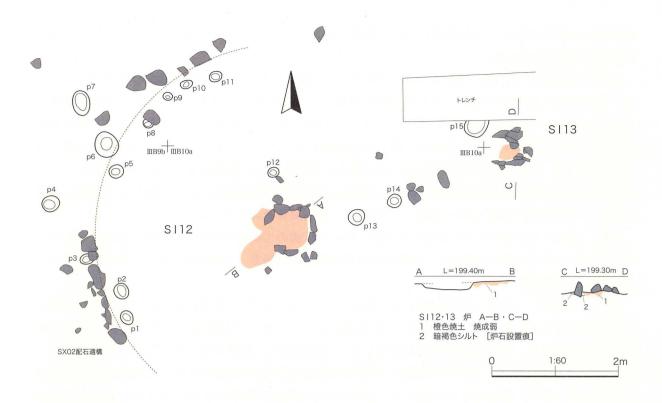
遺構(第 16 図)〔位置・検出状況〕IVB1 a グリッドにおいて、表土直下のIVB上面において炉跡状組石を検出した。竪穴住居の石囲炉跡と判断し住居跡として認定した。残存状況は良くない。〔重複関係〕新旧明確ではないが、位置関係から見てSI 53 と重複しているものと思われる。〔形状・規模〕壁は確認できなかったため不明である。〔堆積土〕不明である。表土除去後に炉が検出されたことから、削剥により消失したものと思われる。〔壁・床面〕壁は確認できなかった。床面範囲が判然としないが、炉周辺の床面はIVBに相当する。特別に硬化した面は確認されていない。〔炉〕石囲炉である。礫を東西方向平行ぎみに配置している。ごく弱い焼土が形成されている。東側は礫の並びから見て本来閉じていたものかもしれない。西側は開いていた可能性がある。〔柱穴〕当住居に属する柱穴は確認されていないが、SI 53 の柱穴中に当住居の柱穴が混じっているかもしれない。

遺物 本住居に伴う遺物は確認できなかった。

時期 周辺の出土土器から後期の可能性が考えられるが、時期の詳細は不明である。

S | 14 竪穴遺構

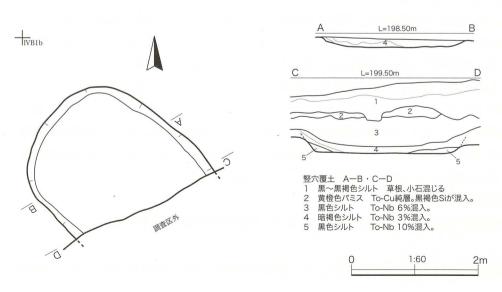
遺構(第17図)〔位置・検出状況〕IVB1bグリッド、調査区境界付近のV層面で検出した。〔重関



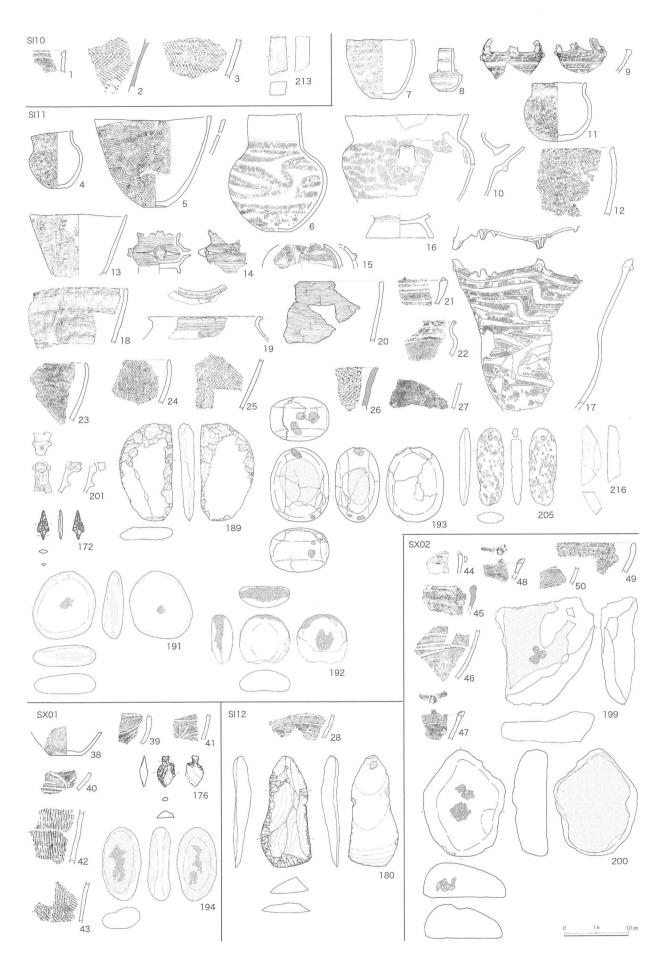
第16図 SI12·13、SX02

係〕重複する遺構はなく、単独で検出された。〔形状・規模〕北側の一部を検出したのみであり全体形状は不明であるが、やや丸みを帯びた隅丸方形を基調とするようである。検出部分では直軸2.5m以上、短軸2.1mである。〔堆積土〕黒~暗褐色シルトが主体である。層中には中掫浮石および南部浮石が混在して含まれている。調査区境の断面で確認したところ、中掫浮石純層〔Ⅲ層〕直下のⅣ層に被覆されている。〔壁・床面〕掘り込みは浅く、壁は床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。断面で見ると浅皿状を呈している。床面はⅥ層に相当し、僅かに凹凸あるもののほぼ平坦である。〔炉〕確認した範囲では検出されていない。〔柱穴〕検出されていない。

遺物出土しなかった。



第17図 S I 14



第18図 遺構別出土遺物(1)

(2) 土 坑

7基検出した。フラスコピット(SKF)、陥し穴(SKT)が含まれる(番号は連番)。

S K F01 土坑

遺構(第19図)〔位置・検出状況〕ⅢB2gグリッドに位置する。SI04竪穴建物跡の精査中、床面および壁面の一部で黒色土の広がりを検出した。〔重複関係〕SI04により南側1/2程度を、民家基礎埋設痕により北側1/4程度をそれぞれ破壊されている。また、南西壁際で柱穴により底面下まで破壊されている。〔形状・規模〕本来の開口部は削剥・攪乱により破壊され、残存する「開口部」は大きく開いており、径1.5mの円形基調の平面形である。底面も約1.7mの円形を呈している。底面付近まで破壊されているため断面形の詳細は不明であるが、フラスコ形を呈するものと推測される。残存する壁高は最大46cmである。〔堆積土〕 3層に大別される。上位の1層は黒色土、下位の2・3層は流入層と壁崩落層が互層しており、自然堆積層と思われる。

遺物 出土していない

時期 時期の詳細は不明であるが、形態から見て縄文時代と推測される。

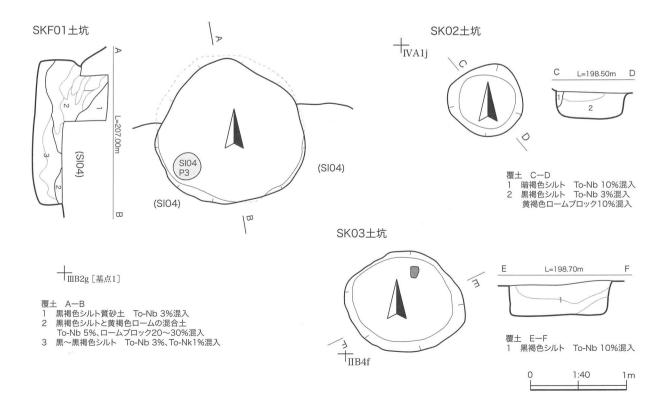
SK 02 土坑

遺構(第19図)〔位置・検出状況〕ⅣA1jグリッドの四層上面で検出した。〔形状・規模〕開口部の平面形は76×82cmの不整円形を基調としている。底面はほぼ平坦で、壁は直立している。深さは26~28cmほどである。〔堆積土〕一部混入があるが、ロームブロックを含んだ黒褐色シルトが主体である。人為的堆積土か。

遺物 出土していない。

時期 検出層位から縄文時代の遺構と推測されるが、出土遺物を欠き、具体の時期は不明である。 SK 03 土坑

遺構(第19図)〔位置・検出状況〕IVB4fグリッドのVI層上面で検出した。〔形状・規模〕開口



第19図 SKF01、SK02·03

部は128×132cmの楕円形である。断面形は逆台形状で、深さは最大36cm、底面も VI 層中に止まっている。「堆積土」南部浮石を含んだ黒褐色土である。

遺物 出土していない。

時期 検出層位から縄文時代の遺構と推測されるが、具体の時期は不明である。

SKT 04 陥し穴

遺構(第20図)〔位置・検出状況〕 I B10hグリッドの個層面で検出した。当遺構の西側部分(全体の3/4程度)は調査区外(ボックスカルバート設置部分=浄法寺町教委調査済)に延びている。〔重複関係〕中世以降の柱穴により截られている。〔形状・規模〕いわゆる溝形の陥し穴の末端部分である。今回確認できたのは全体の1/4程度、長さ約1.1mほどである。やや不整ながら開口部幅は1.0~1.1mほどである。底面は幅15~20cmほどと狭く、短軸側ではラッパ形の断面形状を呈している。通常の溝形陥し穴に比して、やや開口部が広い。〔堆積土〕黒褐色土の単層である。

遺物 出土していない。

時期 縄文時代の陥し穴遺構と推定される。時期判断の根拠に乏しいが、形態から判断すればこれまでの調査事例に照らして中期以降のものと思われる。

SKT 05 陥し穴

遺構(第20図)〔位置・検出状況〕Ⅲ B10 b・Ⅳ B1 b グリッドに跨がっている。 Ш層面で検出した。〔形状・規模〕平面はやや隅丸の長方形を呈する。壁は底面から直立しており、断面は箱形である。〔堆積土〕 黄褐色ロームブロックを含む黒褐色土を主体としている。西側壁寄りに暗褐色土が流入するが、後世の攪乱か。

遺物 出土していない。

時期 縄文時代の陥し穴遺構と思われる。具体の時期は不明である。

SKT 06 陥し穴

遺構(第20図)〔位置・検出状況〕IV A 2 g グリッドのIX 層面(八戸火山灰上層)で検出した。 〔重複関係〕新期の柱穴に截られている。〔形状・規模〕開口部の平面は長楕円形で、1.2×0.6mと 細長い。底面が開口部よりやや狭く、短軸側の断面は逆台形状である。〔堆積土〕主体はロームブロックを含む黒褐色土で、底面付近には地山崩落土層が堆積する。概ねレンズ状の自然堆積的様相を示している。

遺物 出土していない。

時期 縄文時代の陥し穴遺構と思われる。具体の時期は不明である。

SKT 07 陥し穴

遺構(第20図)〔位置・検出状況〕ⅢB2h・gグリッドのⅢ層面で検出した。検出時点では他の溝・柱穴等との重複もあって単独の陥し穴とは気づかず、完掘した後に陥し穴と判明し遺構認定した。〔重複関係〕現代の水道管設置溝、中・近世以降の柱穴と重複し、それらに截られている。〔形状・規模〕細長い溝状の平面形で、長軸約4.1m、短軸36~74cmである。〔堆積土〕上述の精査経過だったため、堆積土の記録を欠いている。調査者の記憶では検出時点では周辺の柱穴と大差ない黒~黒褐色土プランだったと思われるが、詳細は不明である。

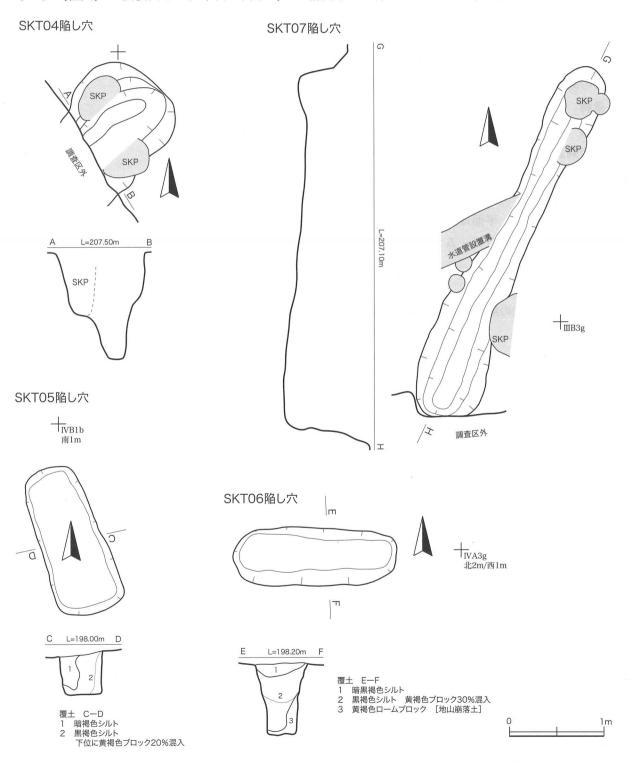
遺物 出土していない。

時期 縄文時代の陥し穴遺構である。直截的な時期判断の根拠に乏しく、詳細な記録を欠いている ものの、形態的から判断すればこれまでの調査事例に照らして中期以降のものと思われる。

(3) その他の遺構

SB 101 掘立柱建物跡

遺構(第15図) 〔位置〕下段低位面 \square A 9 i ~ 9 j グリッド、S I 11の東側に位置する。同住居東側の他の柱穴に含めて精査したが、現場段階では建物とは気付かなかった。後に整理段階で大径の柱穴が並んでいることに気付き、建物跡とした。〔規模〕 1 間四方(総長1.60m×1.96m)の建物である。 〔柱穴〕 4 個検出した。平面は円形および楕円形で、深さ40~55cmである。



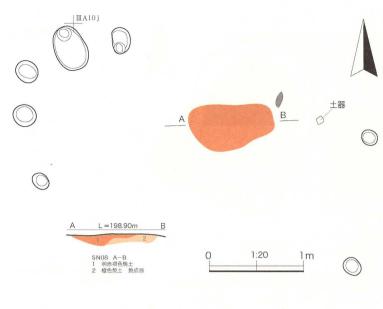
第20図 SKT04~07

遺物出土しなかった。

時期 検出層位からは縄文時代 前期より新期の遺構(後期?)と 推測される。SI11に隣接してい ることから、関連性をもつものか もしれない。

SN 08 焼土

遺構(第21図)〔位置・検出状況〕ⅢB10aグリッドのⅣ層下位面で検出した。 〔重複関係〕他遺構との直接の截り合いはないが、本焼土の上層にSI12が構築されている。検出当初はSI12と関係するものである可能性も考えたものの、その構築面にあまりに高低



第21図 SN08

差があることから別個の遺構とした。〔形状・規模〕焼土は26cm×44cm程の長楕円形の範囲に形成されている。焼土の層厚は6~8cm程である。〔堆積土〕Ⅳ層・黒褐色土を掘削した結果として検出したもので、同層に被覆されていたと思われるが、詳細は不明である。〔付属施設〕周辺で柱穴7個を検出したが、これらが本焼土に伴うのであれば、消失した竪穴住居跡の残骸だった可能性も考えられる。ただし、焼土周辺では床と思われる締まった面は確認できなかった。

遺物 本焼土に伴う遺物は出土しなかったが、周辺から前期の縄文土器が出土している。

時期 遺物を伴わないが、中掫浮石純層より下位で検出されたことから、縄文時代早期後半~前期 前葉にあたるものと推測される。

S X 01 配石遺構

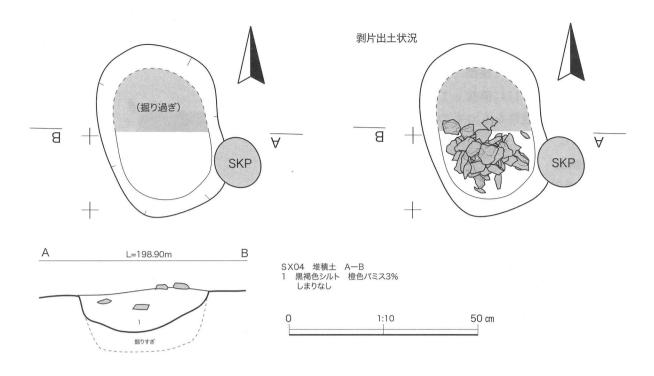
遺構(第14図)〔位置・検出状況〕 \square A 9 i グリッドの基本層序 \square 層面で検出した。 S C 03遺構面の粗掘りの際に数個の礫が集中していることが分かり、単独の配石遺構と想定した。後に S I 11が検出され、本遺構が同住居に伴う可能性が高いことが判明した。〔重複関係〕 S I 11の壁際に位置しており、前述のとおり同住居に付随する施設と推測される。〔形状・規模〕16個の礫を配置している。 礫の並びは 2 つの部分に別れている。主体は南側の礫群で礫12個が帯状に配されている。約1.5 m離れて北側にも 4 個が設置されているが少ない。南北の礫群の間には礫が設置された形跡はなく、前述のとおりこの部分が S I 11出入口である可能性あることから、もともと礫がなかったものと思われる。〔堆積土〕礫検出時点で堆積土の殆どを掘削してしまっていたので、詳細不明である。

遺物 (第18図) 〔土器〕堆積土および礫周辺から縄文土器70点弱・0.97kg分が出土した (38~43)。38~41は後期後葉、42・43は前期の土器である。 〔石器〕石匙 (176)、敲磨器 (194)。

時期 S I 11に付随する遺構である可能性が高いことから縄文時代後期後葉と推測される。

S X 02 配石遺構

遺構(第16図) 〔位置・検出状況〕 $S \times 01$ と同じく $\Pi A 9$ $j \sim \Pi B 9$ a グリッドの \mathbb{N} 層面で検出した。〔重複関係〕 $S \setminus 112$ との位置関係から見て、同住居に関連するものと思われるが、明確ではない。〔形状・規模〕磔20個を配置している。南北 2 つのブロックに分かれており、南側の磔13個は弧状に配された纏まりとして認識できるが、北側の礫は散在的である。北側は原位置を保っていないも



第22図 S X 04

遺物(第18図) 〔土器〕縄文土器80点弱・0.95kgが出土した(44~50)。45・49は前期、他は後期の土器である。 〔石器〕配石使用礫に石皿(199)、磨石(200)が含まれていた。

時期 S I 12に付随する遺構である可能性が高いことから縄文時代後期後葉と推測される。

S X 04 剥片埋納遺構

遺構(第22図) [位置・検出状況] IVB1 a グリッドのV層面で複数の剥片の纏まりが検出され、周辺を清浄したところ土坑状のプランを検出した。 [重複関係] 南東壁際で柱穴1個と重複しており、これに截られている。 [形状・規模] 平面形は概ね32×45cmの楕円形を呈しているが、やや歪んでいる。セクションを参照すると断面形は深さ11cmの皿状である。壁はV層に相当するが、底面はその下層のVI層(南部浮石を含む黒色土)にあたっており堆積土(IV層由来の黒褐色土)と殆ど区別がつかなかった。そのため、断面を切る際に北半部分は掘り過ぎてしまい、底面北半部の状態は不詳である。残存する南半部では平坦な底面である。なお、堆積土と「地山」の区別がつきづらかったこと、剥片の分布が北半部で希薄なこと等を踏まえると、土坑自体がもっと小さいものだった(検出時点で平面形を誤認し掘りすぎて広がった)可能性もある(*検出状況は写真図版8を参照)。 [堆積土] IV層を起源とする黒褐色土である。

遺物(第85・86図) 〔石器〕 堆積土から石器素材となる剥片54点が出土、18点に接合関係が認められ、接合資料 8 点が得られた。これらについては V 章で述べる。

時期 土器は共伴していないが、検出層位から見て、縄文時代早期後半~前期前葉の遺構である可能性が高い。

3 中世·近世

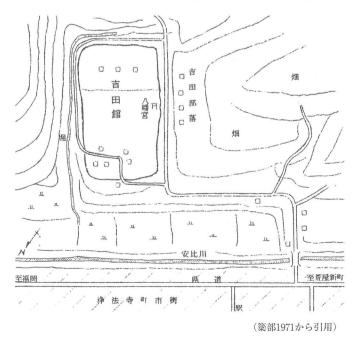
(1) 「吉田館」の縄張と地籍

<縄張> 第Ⅱ章で述べたとおり、吉田館は別称「カイ館」と呼ばれ、中世城館跡として従前から周知されていた。吉田館の縄張りについては、梁部善次郎、沼館愛三らが現地踏査にもとづいた報告を行っている。沼館愛三『南部諸城の研究』(沼館1981、前掲)では、吉田館について現地踏査にもとづく記載があるが、残念ながら図は割愛されている。また、『岩手県中世城館跡分布調査報告書』(岩手県教委1986、前掲)においても吉田館については一覧表での記載はあるが、その詳細については言及されていない。唯一、簗部善次郎『二戸郡・九戸郡内古城館址考』(梁部1971、前掲)においてまとまった記載と図が掲載されている。第23図が同書に掲載された当館跡の概略図である。図示された館範囲は内堀跡と思われる現市道春日筍平線以東の東郭部分であり、西郭については括られておらず、外堀も見えない。図でいう「吉田部落」・「畑」と記されている部分が西郭にあたる。また下段平場SCO2・03部分もまた範囲外とされ、図の表現もデフォルメされて狭く描かれている。図示されている「八幡宮」は現状では図の場所には無く、調査区上段北側に隣接する民家の脇に移設されていた。図中には主郭内の中心エリアではないかと推測される上段平場の南側段差も表現されている。

吉田館の縄張についてその概要を見る(第24図)。館は全体として東西二郭で構成されており、今回調査範囲は東郭部分である。東西の郭は大規模な空堀により分かたれる。西郭は外郭(副郭)と思われ、西一南側縁辺部に堀切がなされて段丘基部から切り離されている。なお、この堀は西隣の桂平 I 遺跡の調査において薬研堀であることが確認された(岩手県埋文;2008年度本報告予定)。東郭部分は上段の主曲輪と思われる平場、およびそれを取巻く数段の狭い帯状曲輪群から成る。上段平場北側の「現道」西脇で虎口・門が確認されており、当館の大手は北側だったと思われる。東側には比高約6mの崖(切岸)を経て、吉田川に面する下段の平場が存在する。ある程度の広さをもつものであるが、内部は現況では低い段差により二分されている。この下段平場の東縁は崖で、自然地形を利用した切岸となっている。なお現況では構成の整地により平坦化して識別不可能であるが、今回調

査によって切岸に沿う箱堀の存在が明らかとなった。東郭北側には、腰曲輪や犬走と推測される狭い平場面が複数見られる。一方、南東一南側にも吉田川に落ち込む崖沿いに、現況で通路として利用されている小道があるが、この部分が搦手でははないかと推測される。全体の構成を見ると、山陵に面した南側の防禦が手薄で、搦手からの攻撃を想定していないような印象を受けるが、当地域の館には往々にしてある傾向だったようである。

『岩手県管轄地誌』の「御山村」の記述の中に、御山村清水尻の「舘」は吉田 某の館跡であるという一節がある。舘Ⅱ 遺跡の報告書(岩手県埋文2006)に掲載され



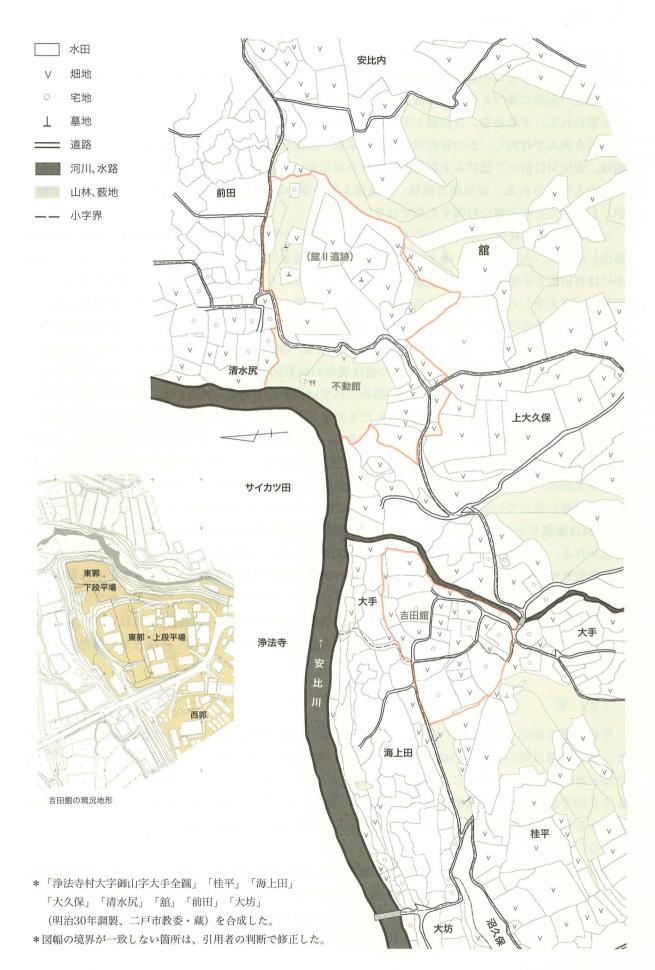
第23図 吉田館概略図



縮尺 1:2000

原図:室野秀文氏作成

第24図 縄張図



第25図 地籍図

ている絵図「岩手県管轄陸奥国二戸郡御山村」では舘 I 遺跡該当部分に「古館」との表記が見られることから、「舘」とは不動館東郭部分=舘 II 遺跡のことであろう。両史料ともに明治時代のものであり、後世の伝承に基づくものではあるが、不動館の館主が吉田一族であった可能性はきわめて高いものと思われる。すなわち、吉田館と不動館とは吉田氏により普請された一対の城館と捉えられよう。吉田川を挟んで対向し、かつ安比川を挟んで宗家・畠山氏の本城である浄法寺城に正対するこれらの館は、安比川に沿って延びる主街道、および吉田川沿いの脇街道を監視・防備する役割を担ったものだったと推測される。吉田館と同様、不動館も搦手側の防禦はあまり考えられていないようであるが、おそらくその役割に起因するのではないか。

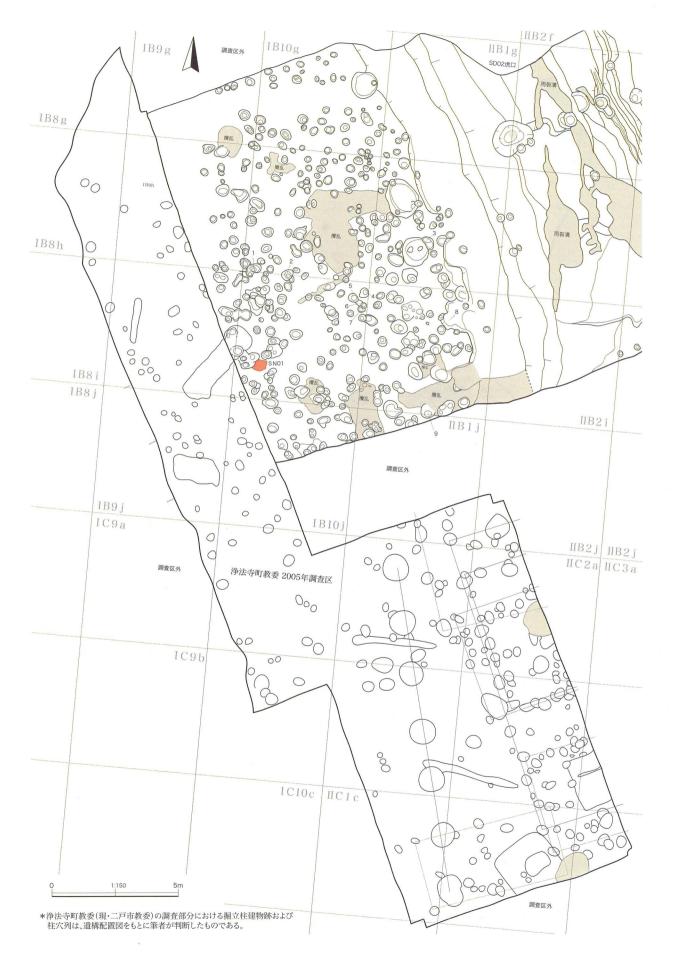
<地籍> 二戸市教委には明治30年に作成された地籍図が保管されている。第25図は「浄法寺村大字 御山」のうち、大手・桂平・海上田・大坊・大久保・清水尻・舘・前田を合成したものである。図幅 中には吉田館と不動館の二つの城館が含まれている。このうち、吉田館に相当する部分を見ると、吉 田館は「字大手」と「字桂平」に跨がっている。「大手」という字名から城の大手口の存在が想起さ れるが、字大手の字界は吉田館東郭を挟んで南北両側に細長く延びており、大手口の存在は南北いず れなのか判然としない。大坊・海上田から崖沿いに東へ延び、クランク状に屈曲して館上段曲輪(主 郭)へと続いている道が確認できる。この道は現在の地形図と照合すると現在使用されている小道と 同一のものと思われ、後述の虎口は既に埋められていたものと考えられる。上段曲輪の南側は細かい 地割がなされているが、具体に何を反映したものか不明である。この部分は低い段差を経て一段高く なっており、上段曲輪の中心部分の可能性がある。館の東郭と西郭を分ける内堀は既に道として利用 されている。館の西側縁辺部には細長く狭い地割りがあるが、この部分が桂平 I 遺跡第1次調査(前 掲、川又2007)で確認された空堀で、吉田館の外堀にあたるものである。また吉田川に沿って、宅地 および畑地となっている狭い帯状の地割が見られる。この部分は帯曲輪であろうか。SD01・03およ びSD04は地割りからは確認できず、この時点で既に埋没(整地?)により平坦化してしまっているもの と思われる。本館跡は地籍図の作成された明治30年時点で主に畑地として利用されているが、既にあ る程度宅地化が進んでいたことがわかる。今回の調査で近世の遺物も出土していることから館破却後 も何者かが館跡に居住していた可能性があり、近世以降、現代まで連綿として利用されていたことが 推測される。ともあれ、明治30年の地籍図と昭和30年の航空写真(写真図版扉に掲載)とを見較べる と殆ど変わりなく、少なくとも近世当時の景観が大きく改変されることなく、現在まで保たれていた ことがわかる。

(2) 平 場

平場3面を検出した。大別すると、SF01切岸とSD04堀により区切られた西側高位面の曲輪と、SD04堀以東の低位面の曲輪の二つである。前者をSC01平場とした。後者については、比高差30~50mほどの低い段差によりさらに高低2面に分けられることから、高位をSC02平場、低位をSC03平場とした。平場面は厚さ30~40cmの攪拌された表土・盛土層に覆われ、その直下で遺構面である畑~IX層が露出する。表土・盛土層からは縄文土器や土師器の破片が出土した。

SС 01 平場

遺構 吉田館の最上位にあたる平坦面である。本平場は遺構配置から見て、その内部に性格の異なる区画を有するものと考えられることから、SD02 ED02 ED03 ED



第26図 SC01-a



第27図 SC01-b

激しい。

SC01-a平場(第26図) SC01平場の西側部分、SD02虎口の西側面に取り付く平坦地である。当平場西端部分については浄法寺町教委が2005年に調査を行っており、今回の調査時点では既にボックスカルバート設置工事が行われ削剥されていた。町教委調査時の現況写真や地形図によれば、本来は現市道(春日筍平線)脇まで延びていたことがわかる。第Ⅱ章で既述したように、現市





第29図 SC02



第30図 SC03

道部分は主郭を区画・防禦する堀[内堀]である可能性が高いことから、堀と虎口に挟まれ、やや張り出した形状の平場と解される。当平場面では焼土1基(SN01)、柱穴349個を検出し、それらの柱穴から掘立柱建物跡12棟(SB001~012)を想定した。主屋的な大型建物を作事するには手狭であり、かつ虎口に対する位置関係から、いわゆる「横矢掛り」の平場としての性格を帯びたものと推測される。構築面はШ層八戸火山灰上層である。なお、浄法寺町教委が調査した当平場西端部(ボックスカルバート設置部分)および南側隣接地(民家宅地部分)では、竪穴建物跡2棟、土坑2基、柱穴多数が検出されている。柱穴の中には、大径のもの7個が直線的に並ぶ柱穴列(建物跡:柵跡:)と思われるものがあり、平面図から拾った限りでは掘立柱建物6棟程度が想定できそうである。

SCO1-b平場(第27図) SD02虎口以東、ⅡB10ライン付近までの範囲である。当平場面は、上段平場中で最も遺構密度が高く、竪穴建物跡・竪穴遺構5棟(SI01~03・05・06)、空堀跡2条(SD01・02)、焼土4基(SN02・03・06・07)および柱穴926個が検出された。柱穴群から掘立柱建物跡42棟(SB013~054)、門跡1棟(SA02)、柱穴列1条(SA03)を想定した。SX05土橋を挟んで対向するSD01・02の空堀2条が北東-南西方向に当平場を区切っている。また、当平場の東端部分は20~30㎝ほどの段差があり、東側の低位面では遺構が極端に疎らとなる。この段差が現代の造成によるものか、中世ないしは近世段階のものなのか、判然とはしないが、遺構の遺存状態から見て館破却後の近世以降の削剥によるものと考えられる。構築面はШ層である。

SС01-c平場(第28図) 概ねⅢB1ライン以東のSС01平場東側部分で、東端はSF01切岸に接している。当平場面では、竪穴建物跡 1 棟(SI04)、焼土 2 基(SN04・05)、柱穴529個が検出され、掘立柱建物跡11棟(SB055~65)、柱穴列 2 条(SA04・05)を想定した。西隣のSС01-b平場に比して遺構密度は高くないものの、大径の柱穴が多く、それらから比較的大形の建物が想定された。構築面は大部分がⅢ層、東側切岸側の一部が区層八戸火山灰下層である。遺物は遺構堆積土である表土層から出土したものである。

遺物 遺構を覆う表土層から出土しているが、狭義には「遺構内」遺物ではない。〔土器〕縄文土器 (70・71)、土師器甕 (130~132)、須恵器甕 (136)。 [陶磁器〕磁器青花碗 (142)・青磁皿 (170)、陶器碗 (154)・擂鉢 (162)、土師質土器 (164)、瓦質土器 (167)。 [石製品〕碁石 (208)。 [金属製品] 円環状製品 (223)、古銭 (239・247・261)。

時期館に伴う遺構であり、構築時期は中世と推測される。

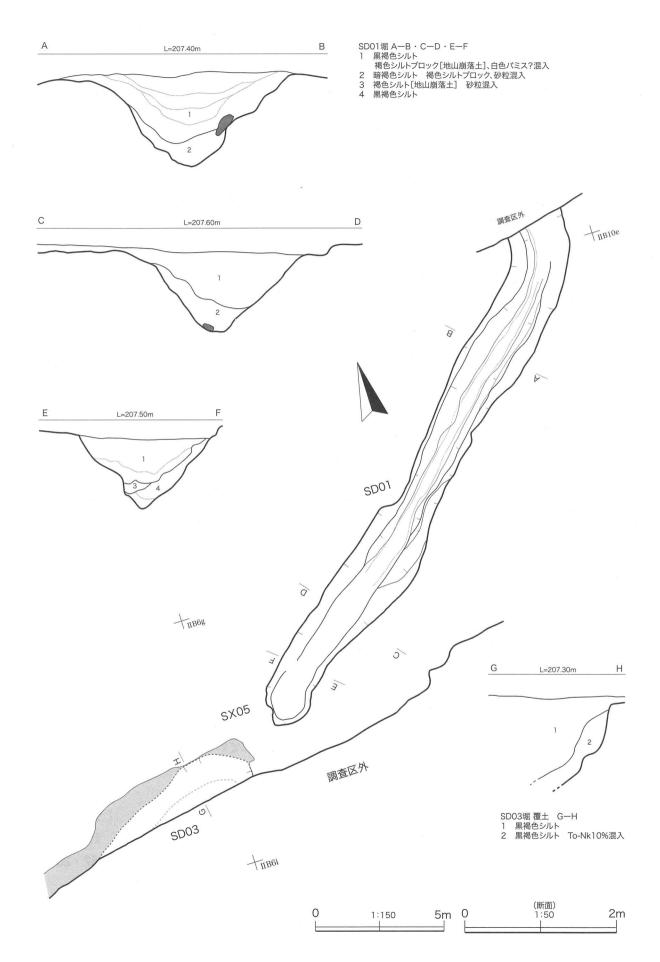
SС 02 平場

遺構(第29図) 平坦面下段西側のSD04に沿った中位の平場である。幅10~12mの狭い帯状の平場で、西側はSD04に接し、東は緩く僅かな段差でSC03へと連続している。遺構面は概ね基本層序IX層のシラスが露出するが、東側縁辺部分は皿層八戸火山灰上層に相当している。平場遺構面はSD04堆積土上面から続く整地層(近世の地業)により被覆されている。本平場面では、空堀1条(SD04)、竪穴建物跡・竪穴遺構3棟(SI07~09)、柱穴276個が検出され、掘立柱建物跡4棟(SB66~69)を想定した。

遺物 遺構を覆う表土層から出土しているが、狭義には「遺構内」遺物ではない。〔土器〕縄文 土器 (72~81)。 〔陶磁器〕磁器青花皿 (145)、陶器鉢 (155)・擂鉢 (160・162)、土師質土器 (164)。 〔石器〕削掻器 (181)。 〔金属製品〕刀子 (220)、古銭 (241・249・253~257・259・ 263)。

時期館に伴って普請された遺構であり、構築時期は中世と推測される。

SС 03 平場



第31図 SD01·03、SX05

遺構(第30図) 下段低位面の平場である。本平場はごく緩い傾斜面であり、東の吉田川に面する崖へと緩く下っている。平場面は基本層序Ⅱ~Ⅲ層へと、緩傾斜に従って段階的に漸移している。本平場面では、柱穴571個が検出され、掘立柱建物跡10棟(SB70~79)を想定した。

遺物 S C 01・02と同様。〔土器〕縄文土器(82~119)。〔陶磁器〕磁器皿(143)、陶器皿(149~151・158)・碗(156)・擂鉢(163)。〔石器〕石鏃(171)、尖頭器(174)、石匙(178)、磨製石斧(182・184~187)、敲磨器(190・196・197)。〔石製品〕軽石製装身具(206)、碁石(209)、砥石(218)、石臼(219)。〔金属製品〕古銭(258)。

時期館に伴う遺構であり、構築時期は中世と推測される。

(3)空堀跡

3条検出した。SC01平場面で2条[SD01・03]、SF01裾部で1条[SD04]である。上位平場面の2条は平場内の区画を企図するものと思われる。一方、SD04は切岸と一体となっており、主郭である上位平場に対する区画および防禦的な性格を有するものであり、現況では判然としないが、館の縄張から見ると「内堀」(現市道部分)と連動している可能性が高い。

S D 01 空堀跡

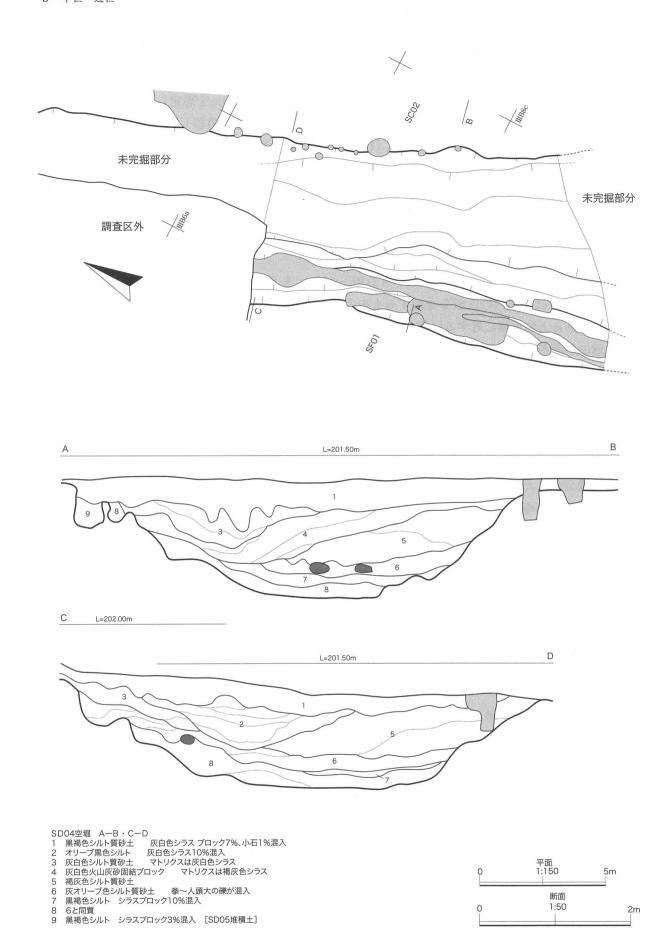
遺構(第31図)〔位置・検出状況〕試掘トレンチT12において黒色土の落ち込みを検出した。黒色土層中から須恵器片が出土したことから、その時点では古代の竪穴住居跡の可能性を考えていた。しかし上段平場の表土除去に際して帯状に延びる黒色プランを検出、先に検出した黒色土の落ち込みが大溝状の遺構であることが判明した。なお、精査時点でその規模・形状から大溝ではなく空堀跡として遺構登録した。〔重複関係〕SI02竪穴遺構と重複している。堆積土断面では明確ではないが、SD01堆積土中にSI02床面らしき痕跡は認められなかったことから、当空堀の方が新期と捉えた。〔規模・形態・方向〕調査区内では主に南西―北東方向に直線的に延びているが、調査区北側境界付近で屈曲している。調査区境のため判然としないが、概ね北西方向へと方向転換しているようであり、全体としてL字状となる可能性がある。検出部分の総長は約12.5mである。法面は八戸火山灰上層、底面は下層シラスにあたる。ただし南西端部は八戸上層の不整合砂層が露出し、精査過程で崩れてしまった。セクション図で見ると、断面形はV字形を呈し、いわゆる薬研堀である。堀幅1.7~2.6m、垂直塁壁高1.2m、実効法高1.8mである。〔堆積土〕主に地山崩落ブロックを含んだ黒褐色シルトである。自然堆積的様相であり自然に埋没したものと解釈される。

遺物 (第35図) 〔土器〕堆積土から縄文土器 (32~36)、土師器 (122~126)、須恵器 (134)が出土している。〔土製品〕羽口 (203)。〔石器〕敲磨器 (195)。

時期 SD03と対になって上段平場の一部を区画するための堀である。出土遺物は縄文・平安時代のものであるが、館跡に付随する遺構と捉えられることから、中世に属するものと推定される。

SD 03 空堀跡

遺構(第31図)〔位置・検出状況〕 II B 5 h \sim II B 4 h \not J \not J \not J \not J \not N \not N \not II B 5 h \sim II B 4 h \not J \not J \not N \not J \not N \not



第32図 S D 04

2m

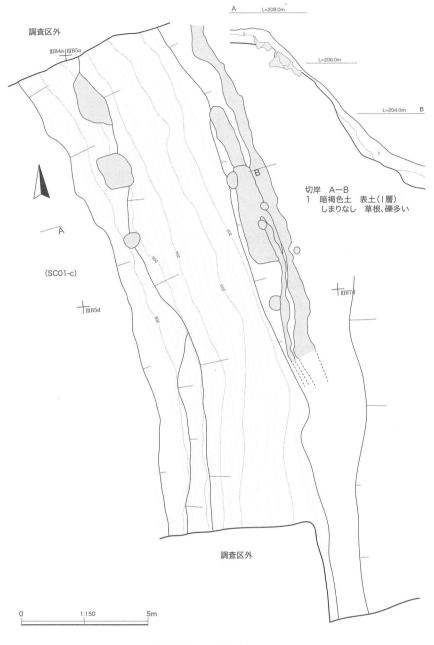
る。〔堆積土〕SD01と同様 に黒褐色シルトの単層で、自 然堆積と捉えられる。

遺物(第35図)〔土器〕 不掲載であるが須恵器壺 が出土。〔土製品〕羽口 (204)。

時期 対向するSD01と並存して、上段平場の一部を区画するものと思われる。須恵器が出土したが、館跡に付随する遺構と捉えられることから、中世に属するものと推定される。

遺構 (第32図) 〔位置・

S D 04 空堀跡



第33図 SF01

整地層を掘り込む多数の柱穴(近世以降)に截られている。〔規模・形態・方向〕検出部分の全長は約24.5m(精査部分約13m)である。南端部は吉田川に面する崖面で開口していると推測される(未完掘)。また北側は下段平場に沿う崖部分(切岸?)まで達して開口している可能性があるものの、現況では確認できない。断面形は概ね逆台形を呈しており、箱堀である。西側は底面の40~50cm程の段差を経て、外傾して切岸裾部へ接続する。一方、東側法面は底面から直に外傾して立ち上がる。堀幅3.6~4.2m、垂直高1.5m、実効法高1.8mである。堀の大凡の軸線はN-20°-Wである。底面にはレベル差が殆どなく概ね平坦である。〔堆積土〕 3層に大別される。最上位(1層)は埋め戻しによる整地層である。版築ではなく全体が八戸火山灰上層ロームとにぶい黄褐色土の混合層で、堅く締まる。この整地層はSC02にも及ぶが、当層を掘り込む柱穴から寛永通寳(古寛永)が出土していることから、この地業の下限は17世紀前半と考えられる。中~下位層はIX層起源のシラスブロック

が多量に混入する人為的埋め戻し層である。セクション図に示すとおり、中位層が下位層を截っている。精査時点では堀の掘り返しとも考えたが、本来の堆積土である下位層が雨裂により抉れたものかもしれない。

遺物 (第35図) 主として最上位の整地層から出土した。 〔陶磁器〕 瓦質土器火鉢 (166) 。 〔石製品〕 石剣 (207) 。

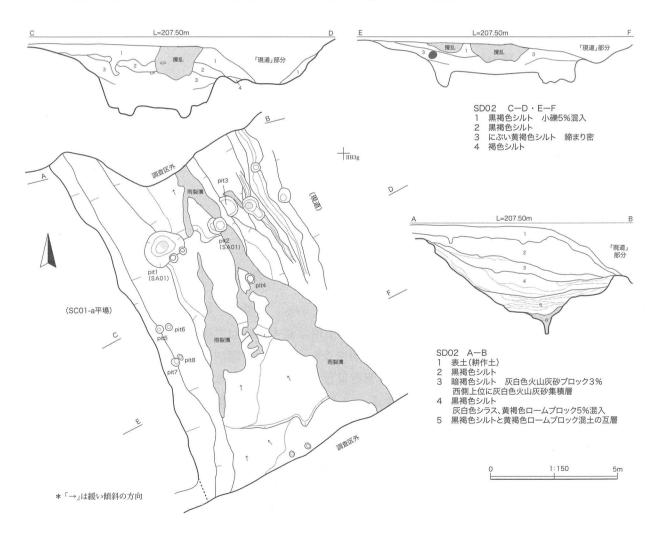
時期 館跡に付随する遺構と捉えられることから、中世に属するものと推定される。

(4) 切岸・虎口・土橋

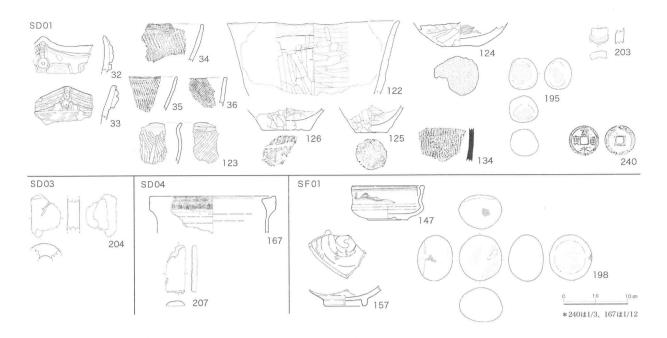
S F01 切岸

遺構 (第33図)

〔位置・検出状況〕上段平場と下段平場の間に位置する。現況でも急斜面となっており、調査当初から切岸として認識できた。〔重複関係〕東側下方でSIO7・08およびSD05・06が裾部分を截っている。また、同じく裾部分がSD04と接しており空堀がより新しいものと思われるが、重複というよりは一体化しているものと捉えられる。〔形状・規模〕地山を削剥して構築しており、切岸遺構面では上位が八戸火山灰上層、中~下位は同下層が露出している。検出部分の全長は約24.5m、セクションを参照すると垂直塁壁高5.5m、実効法高8.0mである。削剥の角度は上位で緩く約50°、中下位で約60°と急角度で落ち込んでいる。〔堆積土〕主に上段から流入した表土層である。



第34図 S D 02



第35図 遺構別出土遺物(2)

遺物 (第35図) [陶磁器] 磁器 (147) ・陶器 (157) 。 [石器] 磨石 (198) 。 時期 館跡に付随する遺構と捉えられることから、中世に属するものと推定される。

S D 02 虎口跡

遺構 (第34図) 「位置・検出状況」S C 01 - a 平場の精査過程で、同平場東側1/3ほどで黒褐色土 の広がりを検出した。トレンチを設定して掘り下げた結果、この部分が堀状に落ち込んでいることが わかり、「SD02空堀跡」とした。なお、精査過程で当遺構が空堀ではなく虎口であることが判明し たが、遺構略号は変更していない。現況では平坦に整地されており、当虎口の存在を全く予想できな かった。「重複関係」直接の重複関係ではないが、当虎口東側に隣接して現状の上段への登り口であ る小道が開削されている。〔形状・規模〕全体として堀状の落ち込みとなっている。西側は法面の立 ち上がりを経てSC01-aに連続し、東側は低い塁壁状の高まりを介して現況の小道に接する。東側 を中心に深い雨裂溝により破壊されており、詳細が不明な部分も多い。底面の平坦面はpit1~3以南 でやや膨らんでおり、底面全体が北側に向かって緩く傾斜している。南側は一段高くなっているが、 やはり緩く北側へと傾斜している。〔堆積土〕1層は耕作土、2~4層は人為堆積の埋め戻し層であ り、主として西側のSC01-a方向から纏まった単位で流入している。3層はシラスが主体であり、 不自然な堆積様相を示す。一方、5層はブロック状のシラスが混入する複数の細分層で構成され、主 として東側からの流入と捉えられる。5層についても人為によるものと思われるが、法面の崩落によ る可能性もあり、はっきりしない。 6層は雨裂溝の堆積土であり人為か(補修の痕跡?)。〔壁・ 底面〕两壁は傾斜角40°で外傾してSC01-a面へと連続し、下方側のセクションA-Bで見ると、 実効法高4.5m、垂直塁壁高3mを測る。東壁は外傾して高さ1mほど立ち上がって段をなした後、東 脇の土塁状の高まりへと続く。底面東縁を中心として雨裂による深い抉れが見られる。底面は北側 1/2が一段低く、かつ北側へ緩く傾斜している。この段差は中央付近でやや膨らんで幅が広がってい る。「附属施設」底面で4個、法面で5個、南側上段部分で2個の柱穴を検出した。底面で検出した pit1・2は本遺構に付随する門跡を構成するものと推測される(SA01)。また、底面からの登り口

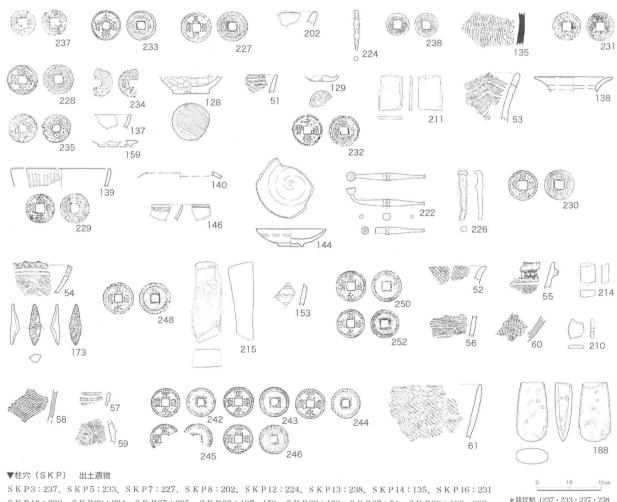
が付設されていた可能性が考えられるが、雨裂による撹乱が激しいため明らかではない。

遺物 当遺構を覆う表土層から陶磁器 (147・157)、磨石 (198) が出土しているが、確実に伴うもとは云えない。

時期 門を伴った上段平場(主郭)への出入り施設である。堆積土の様相から(少なくとも上位層については)意図的に埋め戻されたと判断できるが、これは館の廃絶にともなう所産と思われる。なお、当虎口が埋め戻された後に、SC01-b西側縁辺を削って新たに真直ぐな登り口〔現道〕を開削したものと思われる。遺物を伴わないため、本虎口が構築され機能した時期を直截的には判断できない。ただし、館全体に係る年代観から見て、機能時期は中世に収まるものと推測される。館の廃絶時期は浄法寺城廃絶とほぼ同時期と推測されることから、本遺構の所属時期の下限は16世紀末頃と思われる。

S X05 土橋

遺構(第27・31図)〔位置・検出状況〕二つの空堀 $SD01 \cdot SD03$ のプラン検出時点で、それらが連結せずにその間に掘り残し部分があることがわかり、当該部分を土橋と解釈した。 IIB6g グリッド南西隅付近にあたる。〔重複関係〕多数の柱穴が重複しているが、直接的には新旧関係不明であ



 $\begin{array}{l} \text{S K P 3}: 237, \quad \text{S K P 5}: 233, \quad \text{S K P 7}: 227, \quad \text{S K P 8}: 202, \quad \text{S K P 12}: 224, \quad \text{S K P 13}: 238, \quad \text{S K P 14}: 135, \quad \text{S K P 16}: 231, \\ \text{S K P 19}: 228, \quad \text{S K P 20}: 234, \quad \text{S K P 27}: 235, \quad \text{S K P 30}: 137 \cdot 159, \quad \text{S K P 32}: 128, \quad \text{S K P 37}: 51, \quad \text{S K P 38}: 129 \cdot 232, \\ \text{S K P 39}: 211, \quad \text{S K P 44}: 53, \quad \text{S K P 46}: 138, \quad \text{S K P 50}: 139 \cdot 229, \quad \text{S K P 53}: 140, \quad \text{S K P 58}: 146, \quad \text{S K P 59}: 144, \\ \text{S K P 60}: 222, \quad \text{S K P 66}: 226, \quad \text{S K P 66}: 230, \quad \text{S K P 70}: 54 \cdot 173, \quad \text{S K P 76}: 248, \quad \text{S K P 78}: 215, \quad \text{S K P 84}: 153, \\ \text{S K P 85}: 250 \cdot 252, \quad \text{S K P 129}: 52, \quad \text{S K P 104}: 55, \quad \text{S K P 109}: 214, \quad \text{S K P 115}: 56, \quad \text{S K P 116}: 60, \quad \text{S K P 126}: 210, \\ \text{S K P 128}: 58, \quad \text{S K P 140}: 57, \quad \text{S K P 142}: 59, \quad \text{S K P 144}: 242 \sim 246, \quad \text{S K P 146}: 61, \quad \text{S K P 153}: 188. \\ \end{array}$

· 231 · 228 · 234 · 235 · 232 · 229 · 230 · 248 · 250 · 252 · 242~246) は1/3、173は1/4

第36図 遺構別出土遺物(3)

る。〔形状・規模〕空堀掘削時に地山ローム(八戸火山灰上層)を掘り残したものである。後世に削平されている可能性はあるものの、確認した部分ではほぼ平坦な面をなしている。その幅は最短部分で1.5mである。〔堆積土〕堆積土断面の記録を欠くが、表土直下で検出したことから、表土層(I層)に被覆されていたと思われる。

遺物 当遺構に伴う遺物は確認されていない。

時期中世に属するものと推定される。

(5) 柱穴群・掘立柱建物跡・門跡・柱穴列

調査区の全域で多数の柱穴が検出された。SC01-bのSD01・03による区画内部において、特に密な分布を示している。総数2,651個である。柱穴としたものの中には柱痕・柱アタリが確認できない小径なものが多く、本当に柱穴なのか確信の持てないものが多くある。逆に、小規模な土坑とも解釈できるものもあるが、柱痕・柱アタリが無いものが多いことも相俟って、「大きな柱穴」と「小さな土坑」の分類基準が曖昧で煩雑となるため便宜的に一括して「柱穴」とした。これらの柱穴から建物等の構築物を抽出した結果、掘立柱建物跡76棟、門跡2棟、柱穴列[塀跡]4条が確認された。なお、前述のとおりの調査経過だったため、これらの建物跡・柱穴列は野外段階ではごく一部しか確認できず、その殆どが室内整理段階において平面図上で検討し組み立てたものである。

柱穴群

遺構(第26~30図) 検出した柱穴の総数は2,651個 [SC01-aで349個、同bで926個、同cで529個、SC02で276個、SC03で571個]であり、そのうち717個 (27.1%)が掘立柱建物跡・柱穴列・門跡に関わるものである。残りの1,934個 (72.9%)は建物を想定できなかった。なお、調査では遺物が出土した柱穴にのみ番号を付した(SC01:SKP01~86、SC02:SKP141~144、SC03:SKP103~140・145~153)。開口部径15~90cmと幅があるが、主体は径30cm程度のものである。柱痕跡・柱アタリは径15cm=約5寸程の円形のものが主である。大径のものはSC01-cに多く、他の柱穴よりも新しい傾向がある。それらについては近世以降のものか。深さは15~70cmである。

遺物 (第36図) 〔土器〕堆積土から縄文土器・土師器・須恵器が出土している。掲載分の概略のみ触れる。縄文土器はSKP37・44・70・104・115・116・126・128・129・140・142・146で出土。SKP32・38で土師器、14・26で須恵器が出土。SKP38では中国銭と共伴している。〔陶磁器〕SKP30・32・34・46・50・53・61で青磁、SKP50では中国銭と共伴している。SKP58で漳州窯系青花。SKP30から美濃大窯産陶器が出土した。〔石器〕SKP70で石錐?、153で磨製石斧。〔石製品〕SKP39・78・109・129で出土。〔金属製品〕SKP12・65で角釘、60で延べ煙管。〔古銭〕SKP3・5・7・13・16・19・20・27・38・50・66で中国銭および鐚銭、SKP76・85・144では寛永通寶。SKP144柱痕部で古寛永5点が一括出土した。

掘立柱建物跡

柱穴群から抽出・想定できた掘立柱建物跡は78棟である。うち1棟は近代以降と推測されることからここでは除外する(SB078)。柱穴からの出土遺物には、縄文時代・古代・中世・近世の各時代のものがあるが、建物の形態等から見て、想定した掘立柱建物跡の殆どが中世以降に属するものと思われる。柱穴からの出土遺物は少なく、かつすべての出土遺物が一義的にその建物の時期を決定する

ものとは云えないが、中世以降の遺物についてはその建物の時期を反映するものと敢えて捉えた。さもなくば、殆どの建物が「時期不明」となるからである。中・近世と推測される掘立柱建物跡77棟の分布状況を見ると、SC01の a 地区12棟、同b地区42棟、同c地区11棟、SC02平場 4 棟、SC03平場 9 棟である(第37・41・42・50・54・88図)。柱穴分布の多寡に照応して、SC01 - b地区に建物跡が密集している。前述のとおり、各建物を構成する柱穴には柱痕跡・柱アタリが確認されないものが多い。そのため、建物の柱間寸法計測にあたっては計測ポイントを柱穴の範囲内で寸法がm単位で小数点以下 2 桁が「0」または「5」となるよう任意に設定した(故に図示した、 1 尺=0.303 mとした場合の換算値には端数が生じている)。なお、以下の記載においては、建物を構成する柱穴の直接の截り合いについて主に言及し、建物範囲の重複および間接的な截り合いについては極力記載を省いた。特に SC01 - bにおいて顕著であるが、これらを列挙することによる煩雑さを避けるためである。ただし時期判断に際してはその限りではない。建物と他遺構との重複関係、および推測される所属時期については第60図に示した。

SB 001 掘立柱建物跡

遺構(第38図)〔位置〕 S C 01 - a 平場の北西隅に位置している。他の建物との直接の截り合いはない。〔規模〕北側が調査区外へと延びている。また西側の浄法寺町教委調査部分に対応する柱穴が存在することから西側へも延びているものと捉えられた。北側の様相が不明なため全体規模は不明であるが、検出部分では梁行2間(総長4.15m)×桁行4間(総長7.85m)の総柱建物と推測される。主軸方向はN-71°-Eである。〔柱穴〕11個検出した。また浄法寺町教委調査区において、本建物を構成すると思われる柱穴1個が検出されている。平面形は略円形・楕円形、一部不整形のものを含む。柱痕は確認されていない。

遺物 出土していない。

時期 古代以降と思われるが、詳細な時期は不明である。

SB 002 掘立柱建物跡

遺構(第38図) 〔位置〕 SC01-a 平場中央北寄りに位置する。他の建物との直接的截り合いはない。 〔規模〕梁行 2 間(総長4.35m)×桁行 3 間(総長5.75m)の総柱建物である。主軸方向は $N-70^{\circ}$ - Eである。 〔柱穴〕 12 個検出した。平面形は円形・楕円形である。柱痕は確認されなかった。

遺物 出土していない。

時期 古代以降と思われるが、詳細な時期は不明である。

SB 003 掘立柱建物跡

遺構(第38図)〔位置〕 S C 01 - a 平場中央部に位置する。 S B 009と柱穴の截り合いがあると思われるが(柱穴 B 4)、明確には捉えられず、新旧不明である。 〔規模〕梁行 2 間(総長4.35 m) × 桁行 3 間(総長6.20 m)の総柱建物である。主軸方向は N - 29° - W をとる。 〔柱穴〕 12個検出した。平面形は楕円形である。柱痕は検出されなかった。

遺物 出土していない。

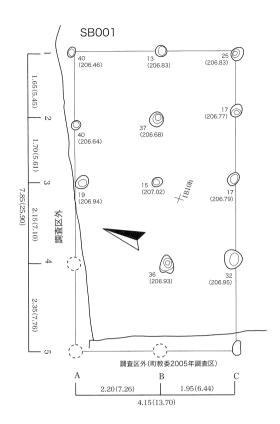
時期 時期不明である。

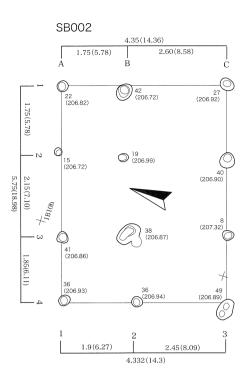
SB 004 掘立柱建物跡

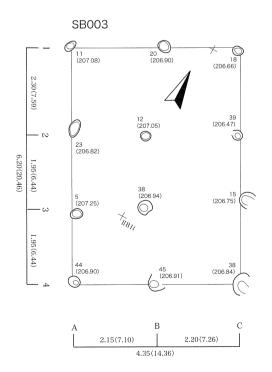
遺構(38図)〔位置〕 S C 01 - a 平場中央部西寄りに位置する。西側の一部が浄法寺町教委調査部分へと延びており、町教委の調査で本建物を構成すると思われる柱穴が検出されている。 S B 008 に截られている。 S K T 01と重複し、これを截っている。 〔規模〕梁行2間(総長3.95m)×桁行3間(総長5.95m)の総柱建物である。主軸方向はN - 31°-Wである。 〔柱穴〕調査区内では10個

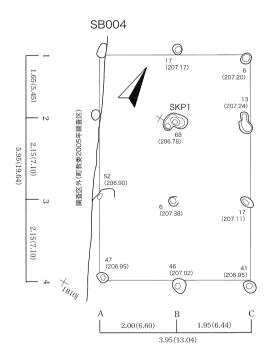


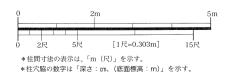
第37図 掘立柱建物跡配置・建物跡集成(1)











第38図 SB001~004

検出した。また町教委調査区でも対応する柱穴2個が確認されており、使用した柱穴は合計12個である。平面形は円・楕円形が主であるが、不整形なものもある。柱痕は確認されなかった。

遺物 柱穴2B(SKP1)で縄文土器が出土した。

時期 時期不明である。

SB 005 掘立柱建物跡

遺構(第39図) 〔位置〕 SC01-a 平場中央~南部に占地する。 SB012を截る。また柱穴痕跡が不明瞭であるが SKT01を截っている。 〔規模〕 梁行 2 間(総長4.10m)×桁行 3 間(総長7.50m)である。主軸方向は $N-25^\circ-W$ である。 〔間取り〕 1 間× 3 間の 2 室で構成されている。 〔柱穴〕 10 個検出した。平面形は楕円および不整形である。柱痕は確認されていない。

遺物 (第36図) 柱穴 2B (SKP5) で永楽通寶 (233) が出土。

時期 出土遺物から見て中世(15世紀以降)である。

SB 006 掘立柱建物跡

遺構(第39図)〔位置〕 SC01-a 平場南部に位置する。南側のD列が調査区境に接し、かつ東側が「現道」により掘り込まれており、建物がさらに南または東側に延びていた可能性もある。 $SB010\cdot011$ を截っている。〔規模〕上記のとおり全体の形状が不明確であるが、検出部分では梁行3間(総長6.90m)×桁行3間(総長6.60m)の建物として把握された。主軸を南北方向と考えれば、軸線は $N-22^\circ-W$ である。〔間取り〕 1 間×3 間、2 間×2 間、1 間×2 間の各 1 室で構成される。

〔柱穴〕13個検出した。平面形は主に楕円形である。柱痕は確認されていない。 遺物 柱穴1D(SKP3)で輪銭(237)、4C(SKP9)で縄文土器が出土した。

時期 出土遺物およびSB010を截ることから、中世の建物跡と推測される。

SB 007 掘立柱建物跡

遺構(第39図) 〔位置〕 SC01-a 平場中央部西寄りに位置する。 SB009に截られ、 SB010 および SKT01を截っている。 〔規模〕梁行 1 間(総長1.55m)×桁行 2 間(総長4.10m)を測る、小形の建物である。主軸方向は $N-68^\circ$ -Eである。 〔柱穴〕 6 個検出した。平面形は主に楕円形で、柱痕は確認されない。

遺物 出土していない。

時期 SB010より新しい建物であり、中世以降である。

SB 008 掘立柱建物跡

遺構(第39図) 〔位置〕 S C 01 - a 平場中央部西寄りに占地する。 S B 004を截る。 〔規模〕梁行 1 間(総長3.90m)×桁行 3 間(総長7.70m)の建物である。主軸方向はN-18°-Wである。 〔柱 穴〕 8 個検出した。平面形は楕円形である。柱痕は未確認である。

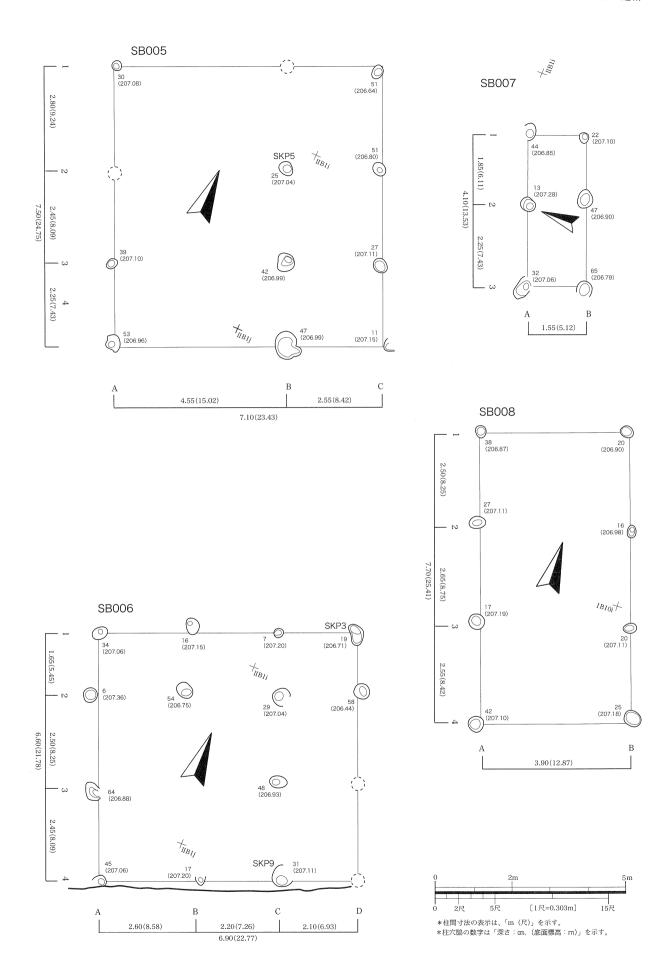
遺物 出土していない。

時期 古代以降であるが、具体の時期は不明である。

SB 009 掘立柱建物跡

遺構(第40図) 〔位置〕 SC01-a 平場南半部に占地する。南側 D列が調査区境に接しており、さらに南側へと延びているかもしれない。 SB007を截っている。 〔規模〕調査区外へと延びる可能性あるが、検出部分では梁行 3 間(総長6.15m)×桁行 3 間(総長6.75m)の建物である。主軸方向は $N-18^\circ-E$ である。 〔間取り〕 2 間× 3 間、1 間× 3 間の各 1 室からなる。 〔柱穴〕 13 個検出した。平面形は楕円形、柱痕は確認されない。

遺物 出土していない。

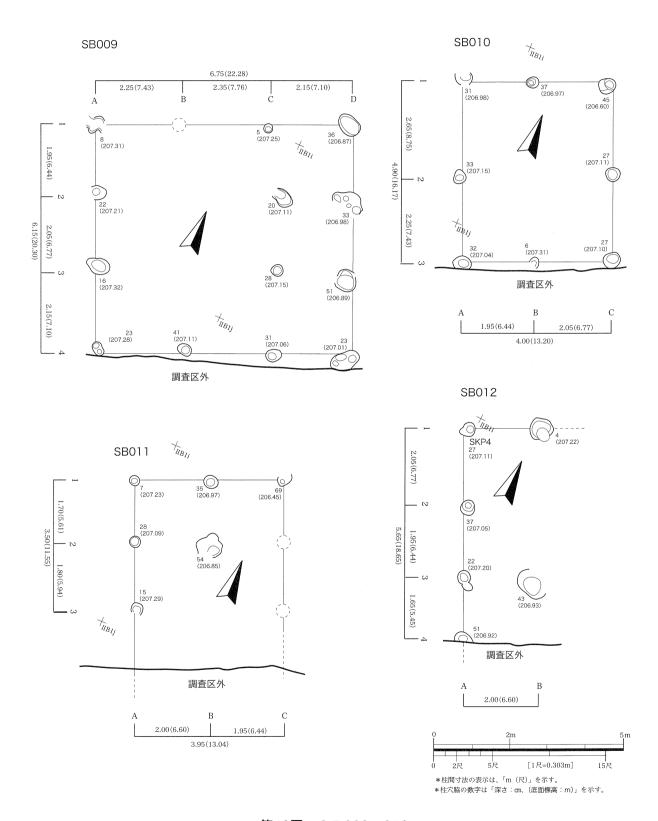


第39図 SB005~008

時期 SB007およびSB010との重複関係から、中世以降の建物である。

SB 010 掘立柱建物跡

遺構(第40図) 〔位置〕 SC01-a 平場南東部に位置する。 $SB006\cdot007\cdot012$ と重複し、それらに截られる。 $SB003\cdot004\cdot005\cdot008\cdot009$ と重複しているが、柱穴の截り合い無く、新旧関係は不明である。 〔規模〕梁行 2 間(総長4.00m)×桁行 2 間(総長4.90m)である。主軸方向はN-



第40図 SB009~012

22°-Wである。〔柱穴〕8個検出した。平面形は略円形である。柱痕は確認されない。

遺物 出土していない。

時期 SB012との重複関係から、中世と推測される。

SB 011 掘立柱建物跡

遺構(第40図)〔位置〕 SC01-a 平場南東部に位置する。南側は調査区外へと延びていると捉えられる。また東側もSD02虎口の掘り込みに接することから、もともと東側にも延びていた可能性も残る。 $SB003\cdot005\cdot006\cdot008\sim010\cdot012$ と重複する。SB006に截られており、本建物がより古い。他の6 棟は本建物柱穴との重複関係が観察されず、新旧関係は不明である。〔規模〕上記のとおり全体の規模は不明であるが、検出部分では梁行 2 間(総長3.95m)×桁行 2 間(総長3.5m)である。主軸方向は $N-23^\circ-W$ である。〔柱穴〕6 個検出した。平面形はほぼ円形で、柱痕は確認されていない。

遺物 出土していない。

時期 SB006との重複関係からみて、中世と推測される。

SB 012 掘立柱建物跡

遺構(第40図) 〔位置〕 SC01-a 南東部、SD02虎口の掘り込み部分に接している。東側へと延びていたと思われるが、SD02の掘り込みにより消失したものと思われる。 $SD02\cdot SB005$ に截られ、SB010を截る。また $SB003\cdot 006\cdot 009\cdot 011$ と重複するが、新旧関係不明である。〔規模〕検出部分では、梁行1間(総長2.00m)×桁行3間(総長5.65m)で、主軸方向はN-27°-Wである。〔柱穴〕 6 個検出した。平面形はほぼ円形、柱痕は未確認である。

遺物 柱穴1A(SKP04)で縄文土器2点出土。

時期 SB005との重複関係から中世以前である。

SB 013 掘立柱建物跡

遺構(第43図) 〔位置〕 SC01-b 北東部に位置する。北東隅でSI01と重複していた可能性が高く、SI01堆積土中に柱穴が確認できなかったことから、より古いものと推測される。SN07を截る。 〔規模〕梁行 2 間、桁行 4 間の総柱建物である。梁間総長5.70m、桁行総長9.20mを測る。主軸方向はN-13° - Wである。 〔柱穴〕 13個を検出した。一部不整なものもあるが、概ね楕円形である。

遺物 出土していない。

時期 S I 01との重複関係から見て、中世以前である。

SB 014 掘立柱建物跡

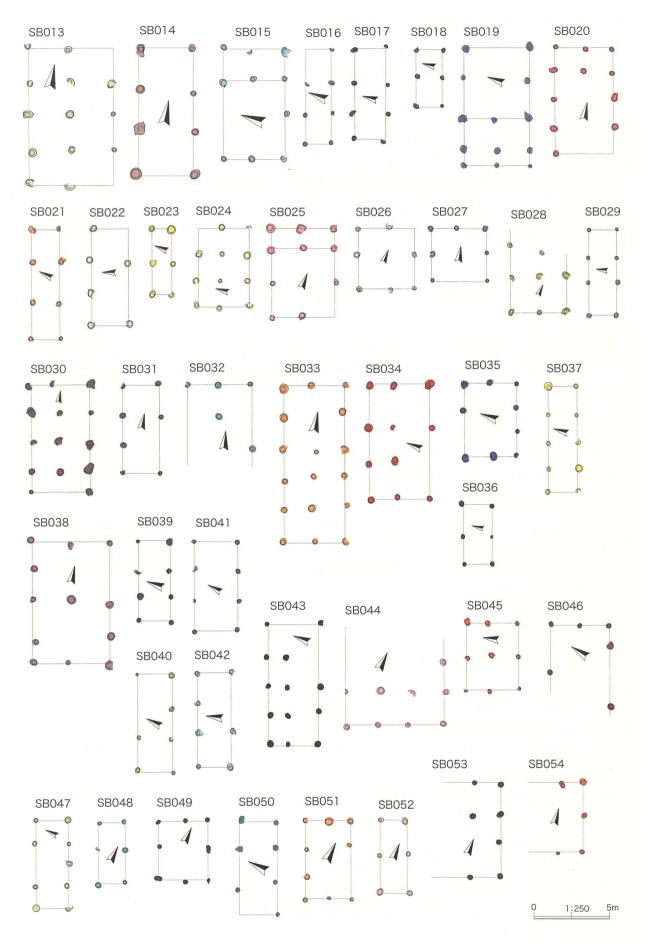
遺構(第43図) 〔位置〕 SC01-b 北東部に位置する。 $SB021\cdot024$ 、 SI01を截り、 SB018に 截られる。 〔規模〕梁行 1 間(総長3.75m)×桁行 3 間(総長8.65m)で、主軸方向は $N-12^\circ-W$ である。 〔柱穴〕 8 個検出した。平面形は楕円形が主で、一部不整形を含む。いずれも柱痕はない。

遺物 出土していない。

時期 本建物を截るSB018は中世に属するSB015・020より古い。よって本建物は重複関係から中世以前に属するものである。

SB 015 掘立柱建物跡

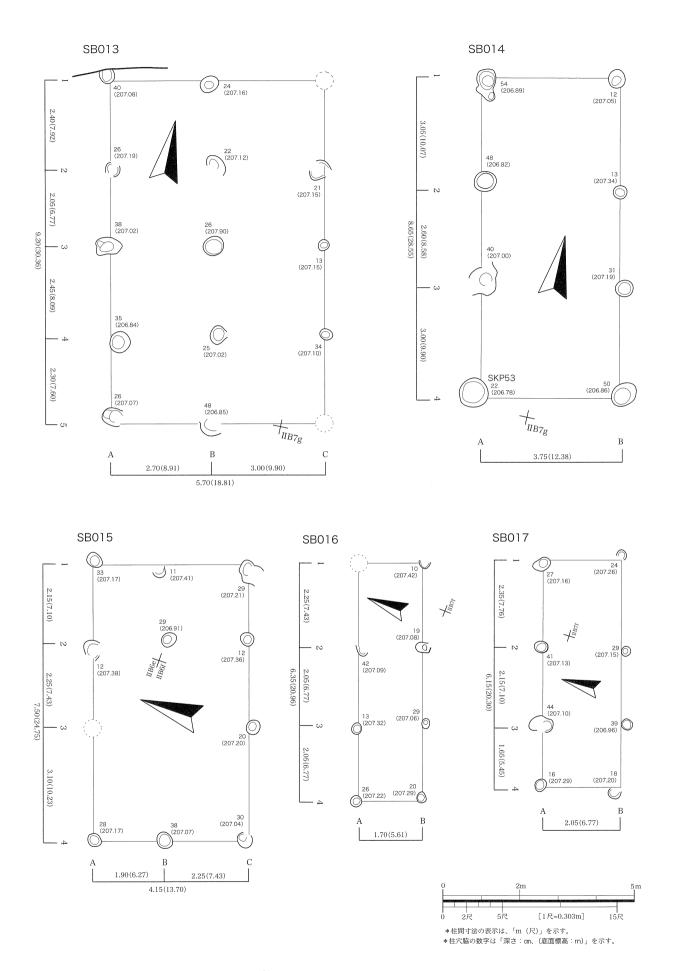
遺構(第43図)〔位置〕 SC01-b 北東部に占地する。 SA03に截られ、 SB019を截っている。 〔規模〕梁行 2 間(総長4.15m)×桁行 3 間(総長7.50m)、主軸方向は N-71°-Eと大きく東へと振れている。〔柱穴〕 10個検出した。平面形は概ね円形で、柱痕は確認されていない。



第41図 建物跡集成(2)



第42図 掘立柱建物跡配置(2)



第43図 SB013~017

遺物(第35図) 柱穴4A(SKP53)から青磁破片(140)が出土。

時期 出土遺物から見て、中世16世紀代である。

SB 016 掘立柱建物跡

遺構(第43図) 〔位置〕 SC01-b 北東隅に位置する。 SB020に截られる。 SI01にも截られていると思われるが、不確実である。 〔規模〕梁行1間(総長1.70m)×桁行3間(総長6.35m)。 主軸方向は $N-69^\circ-E$ である。 〔柱穴〕 7個を検出した。楕円形平面の小径なものばかりである。 柱痕は確認できない。

遺物 出土していない。

時期 中国産青磁が出土したSB020より古いことから、中世以前の建物である。

SB 017 掘立柱建物跡

遺構(第43図)〔位置〕 S C 01 - b 北東に位置する。 S B 013を截り、 S B 024に截られる。〔規模〕梁行1間(総長2.05m)×桁行3間(総長6.15m)、主軸方向はN - 74° - E である。〔柱穴〕 8 個検出した。平面形は不整な楕円形である。柱痕はない。

遺物 出土していない。

時期 建物相互の重複関係から、中世16世紀以前である。

SB 018 掘立柱建物跡

遺構(第44図) 〔位置〕 SC01-b 東側に位置する。 SB019に截られる。また SB014と重複し、はっきりしないが截っていると思われる。 〔規模〕梁行 1 間(総長1.80m)×桁行 2 間(総長4.00m)で、主軸方向は $N-75^\circ-E$ である。 〔柱穴〕楕円形平面の 6 個を検出した。柱痕は確認されない。

遺物 出土していない。

時期 本建物を截るSB019が中世のSB015・020より古いことから、中世以前である。

SB 019 掘立柱建物跡

遺構(第44図) 〔位置〕 SC01-b 東側に位置する。 SB018と重複し截っている。 SB015に截られる。また $SB020\cdot014$ と重複し截られているようであるが、はっきりしない。 〔規模〕梁行2間(総長4.40m)×桁行4間(総長7.85m)で、主軸方向は $N-73^\circ-E$ である。 〔間取り〕 2 間×3間の 1 室、およびその南面に 1 間の庇が取り付く。 〔柱穴〕 13 個検出した。平面形は楕円形および不整形で、柱痕は確認されていない。

遺物 柱穴 2 C (SKP54) で土師器、4 B (SKP48)・5 A (SKP41) で縄文土器が出土 している。

時期 中世に属するSB015・020に截られていることから、本建物も中世以前に属する。

SB 020 掘立柱建物跡

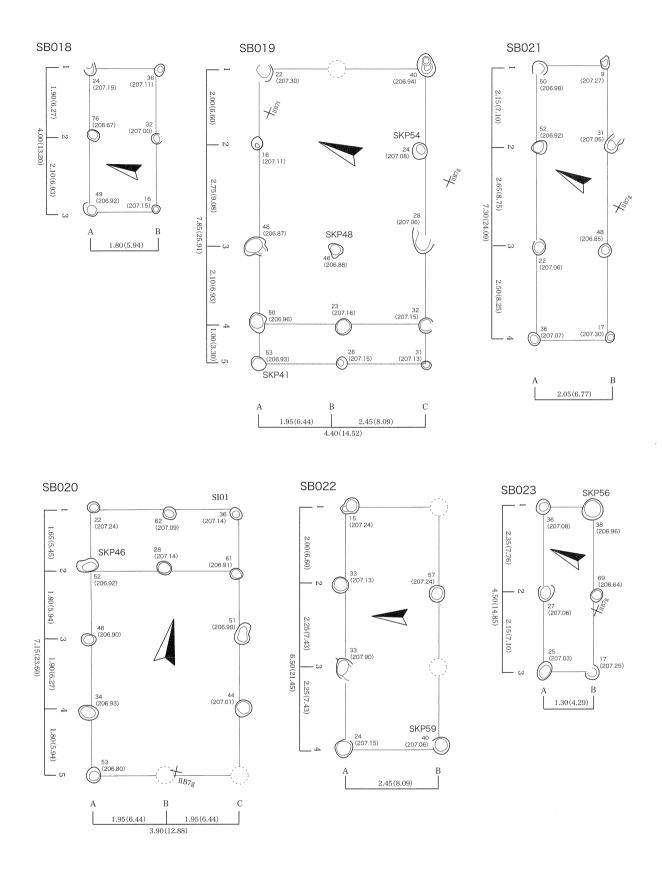
遺構(第44図) 〔位置〕 SC01-b 東側に占地する。 $SB016\cdot019$ および SI01を截っている。 〔規模〕梁行 2 間(総長3.90m)×桁行 4 間(総長7.15m)で、主軸方向は $N-13^\circ-W$ である。 〔間取り〕 2 間× 3 間の 1 室、北面に 1 間の庇?が付随している。 〔柱穴〕 11 個検出した。平面形は不整な楕円である。柱痕はない。

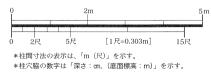
遺物 (第36図) 柱穴 2 A (SKP46) で青磁皿片 (138) が出土した。

時期 出土遺物から見て中世16世紀代に属するものと推定される。

SB 021 掘立柱建物跡

遺構(第44図) 〔位置〕 S C 01 - b 東側に位置する。 S B 013を截り、 S B 014により截られる。





第44図 SB018~023

〔規模〕梁行1間(総長2.05m)×桁行3間(総長7.30m)である。主軸方向はN-64°-Eをとる。

[柱穴] 8個検出した。平面形は円形および楕円形である。柱痕は確認されていない。

遺物 出土していない。

時期建物相互の重複関係から、中世以前である。

S B 022 掘立柱建物跡

遺構(第44図) 〔位置〕 SC01-b 南東寄りに占地する。SI06およびSD01と重複して、明確ではないが、それらにより截られているものと思われる。〔規模〕梁行1間(総長2.45m)×桁行3間(総長6.50m)で、主軸方向はN-89°-Eである。〔柱穴〕 6 個検出した。平面形は略円形で、いずれも柱痕はない。

遺物(第36図)柱穴4B(SKP59)で白磁皿が出土。

時期 SD01より古い可能性もあり、出土遺物を加味すると、中世~近世と推測される。

S B 023 掘立柱建物跡

遺構(第44図) 〔位置〕 SC01-b 東側に位置している。 SB013と重複し、それより古い。 〔規模〕梁行1間(総長1.30m)×桁行2間(総長4.50m)の小形建物で、主軸方向は $N-66^{\circ}-E$ である。 〔柱穴〕略円形の6個を検出した。柱痕は確認されていない。

遺物 柱穴1B(SKP56)で縄文土器が出土。

時期建物相互の重複関係から中世以前である。

SB 024 掘立柱建物跡

遺構(第45図) 〔位置〕 S C 01 - b 中央付近に位置している。 S B 014・017・026と截り合い関係にあり、 S B 014に截られ、後2者を截っている。 〔規模〕梁行2間(総長3.55m)×桁行3間(総長5.35m)である。北東隅柱を欠くが、総柱建物と思われる。主軸方向はN-74°-Eである。 〔柱穴〕11個検出した。平面形は楕円形基調である。柱痕はない。

遺物 出土していない。

時期 建物相互の重複関係から中世以前である。

SB 025 掘立柱建物跡

遺構(第45図) 〔位置〕 S C 01 - b 中央東寄りに占地する。 S B 028を截る。 〔規模〕梁行2間(総長4.30m)×桁行3間(総長5.90m)、主軸方向はN-23°-Wである。 〔間取り〕2間×2間の建物北面に、1間の庇が付随する。 〔柱穴〕10個検出した。平面形は略円形で、柱痕はない。

遺物 柱穴2A(SKP40)で縄文土器が出土した。

時期 16世紀代のSB028より新しく、同じく中世と推測されるSB020より古いことから、中世の範疇に収まる建物である。

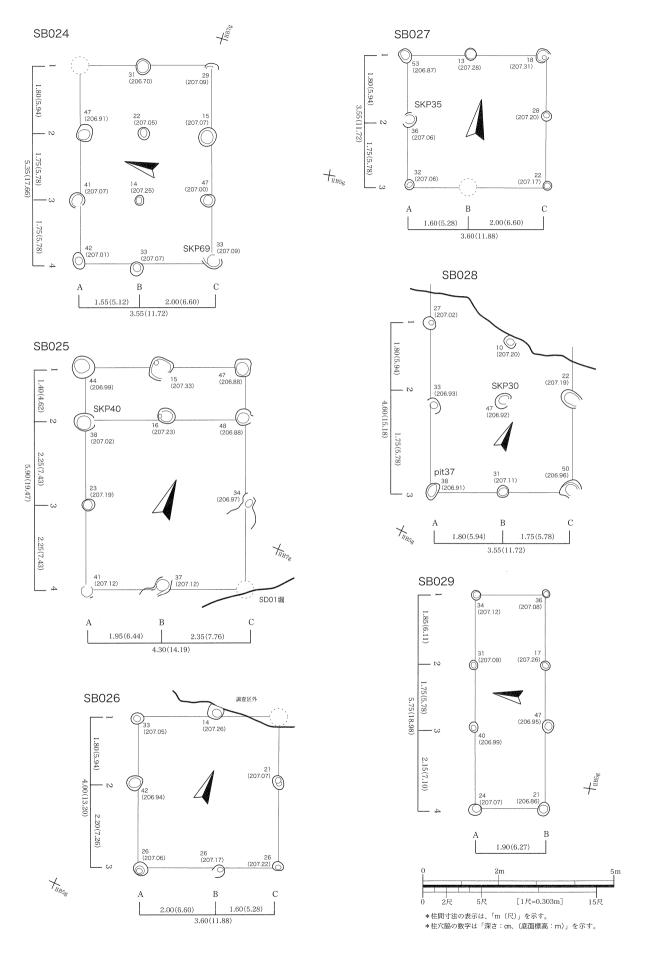
SB 026 掘立柱建物跡

遺構(第45図)〔位置〕 SC01-b 中央部北寄りに位置する。 $SB033\cdot025$ を截っている(後者については不確実)一方、SB024に截られている。〔規模〕南東隅は調査区境界付近にあたるが、確認部分では2間(総長3.60m)×2間(総長4.00m)の方形平面の建物と思われる。南 - 北を主軸線とすれば、 $N-24^\circ-W$ と西に偏する。〔柱穴〕 7個検出した。平面形は円形基調である。柱痕は確認されていない。

遺物 出土していない。

時期建物相互の重複関係から中世である。

SB 027 掘立柱建物跡



第45図 SB024~029

遺構(第45図) 〔位置〕 SC01-b 中央付近に位置する。 SB028が重複し、本建物が截られる。 〔規模〕 2 間(総長3.60m) \times 2 間(総長3.55m)のほぼ方形平面の建物である。南 - 北を主軸線とすれば、軸は $N-10^{\circ}$ - Wである。 〔柱穴〕 7 個検出した。平面形は円形基調で、柱痕はない。

遺物 柱穴2A(SKP35)で土師器が出土した。

時期 本建物を截るSB028は16世紀代であり、それより古期の建物である。

SB 028 掘立柱建物跡

遺構(第45図) 〔位置〕 SC01-b 中央北側に占地する。 SB039を截る。また $SB019\cdot025$ により截られる。 〔規模〕北側は調査区外へと延びているものと見られる。調査範囲では、梁行 2 間(総長4.60m)以上、である。主軸方向は $N-27^\circ-W$ である。総柱の建物かもしれない。 〔柱穴〕 楕円形の柱穴 8 個を検出した。柱痕はない。

遺物 (第36図) 柱穴 3 A (SKP37) で縄文土器 (51)、2 B (SKP30) で青磁皿 (137)・ 陶器皿 (159) が出土した。137は龍泉窯産、159は美濃大窯の灰釉丸皿で、16世紀代のものである。

時期 出土遺物から見て、中世(16世紀代)と推定される。

SB 029 掘立柱建物跡

遺構(第45図) 〔位置〕 SC01-b 中央付近に位置する。 SB039と重複し、これを截っている。 〔規模〕梁行1間(総長1.90m)×桁行3間(総長5.75m)と東西方向に細長い建物である。主軸方向は $N-81^\circ-E$ で、ほぼ東西方向に沿う。 〔柱穴〕 8個検出した。平面形は円形で、柱痕は確認されていない。

遺物 出土していない。

時期 不明である。

SB 030 掘立柱建物跡

遺構 (第46図) 〔位置〕 S C 01 - b 中央南側、S D 01沿いに位置する。 S B 024および S N 06を截り、S B 019・031・035・038により截られる。〔規模〕梁行 2 間(総長4.00m)×桁行 4 間(総長7.20m)、主軸方向はN - 11° - W である。柱穴 5 B を欠くが、総柱の建物か。〔柱穴〕14個検出した。平面形は殆どが不整形である。柱穴 2 A、3 C、4 C で径10~25cmの円形柱痕が確認された。

遺物 (第36図) 柱穴 3 A (SKP61) で中国産青磁 (169) が出土した。柱穴 3 C (SKP44) で縄文土器片 (53) が出土した。他に 1 A (SKP29) 、 4 B (SKP64) 、 1 C (SKP43) で縄文土器が出土している。

時期 青磁片が出土しており、中世16世紀代に属するものと思われる。

SB 031 掘立柱建物跡

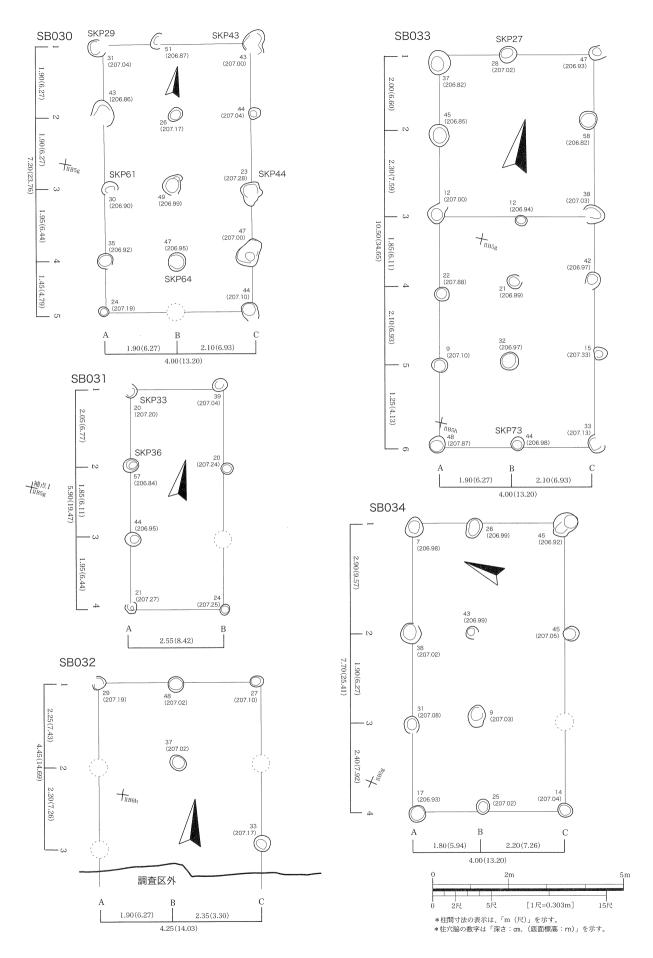
遺構(第46図) 〔位置〕 SC01-b 中央部分に占地している。 $SBSB033\cdot037\cdot042$ と截り合い関係にあり、 SB033を截り、後2者により截られる。 〔規模〕梁行1間(総長2.55m)×桁行3間(総長5.90m)で、主軸方向は $N-13^\circ-W$ である。 〔柱穴〕 7個検出した。平面形は略円形である。柱痕はない。

遺物 柱穴1A(SKP33)、2A(SKP36)で縄文土器が出土した。

時期 近世のSB042より古く、近世以前である。

SB 032 掘立柱建物跡

遺構(第46図) 〔位置〕 S C 01 - b 南側空堀寄りに位置する。 S D 01と重複して截られるが、他の建物との重複は見られない。 〔規模〕南部は調査区外へと延びているものと思われる。確認部分で



第46図 SB030~034

は、梁行 2 間(総長4.25 m)、桁行は不明確であるが 2 間(総長4.45 m)以上、と推測される。主軸 方向は N-8°-Wである。〔柱穴〕 5 個検出した。平面形はほぼ円形である。柱痕はない。

遺物 出土していない。

時期 SD01より古い建物であり、中世以前と推測される。

SB 033 掘立柱建物跡

遺構(第46図) 〔位置〕 SC01-b 中央部を縦貫して占地している。 SB038および SB031・026と截り合い関係で、前者を截り、後2者によって截られる。 〔規模〕梁行2間(総長4.00m)×桁行5間(総長10.50m)である。主軸方向は $N-12^\circ-W$ である。 〔間取り〕2間×2間の方形平面 1室、2間×3間の総柱部分1室である。 〔柱穴〕17個検出した。平面形は略円形である。柱痕は確認されていない。

遺物 (第36図) 柱穴1B (SKP27) で無文銭 (235)、6B (SKP73) で縄文土器が出土。 時期 無文銭が出土しており、中世に属する可能性がある。

SB 034 掘立柱建物跡

遺構 (第46図) 〔位置〕 S C 01 - b 中央南寄りに位置する。 S B 030・043を截って、 S B S B 038に截られる。 〔規模〕梁行 2 間 (総長4.00 m) ×桁行 3 間 (総長7.70 m)、主軸方向は N - 67° - E である。 〔柱穴〕 11 個検出した。平面形は円形および楕円形で、柱痕は確認されていない。 遺物 出土していない。

時期 建物相互の截り合い関係から、中世16世紀代である。

SB 035 掘立柱建物跡

遺構(第47図) 〔位置〕 SC01-b 北西側に占地する。 SB030を截り、 SB037に截られている。 〔規模〕梁行2間(総長3.50m)×桁行3間(総長4.90m)で、主軸方向は $N-69^\circ-E$ と大きく東へ偏する。 〔柱穴〕 9個検出した。平面形はほぼ円形、柱痕はない。

遺物 柱穴4B(SKP21)で縄文土器2点が出土した。

時期 16世紀代のSB030を截ることから、本建物は中世に属すると思われる。

SB 036 掘立柱建物跡

遺構(第47図)〔位置〕 S C 01 - b 北西隅付近に位置する。他の建物との直接的な截り合いはない。〔規模〕梁行1間(総長1.85m)×桁行2間(総長4.10m)、小形の建物である。主軸方向はN-77°-Eである。〔柱穴〕6個検出した。平面形は略円形である。柱痕は検出されていない。

遺物 柱穴1A(SKP28)で土師器、3B(SKP24)で縄文土器が出土。

時期 不明である。

SB 037 掘立柱建物跡

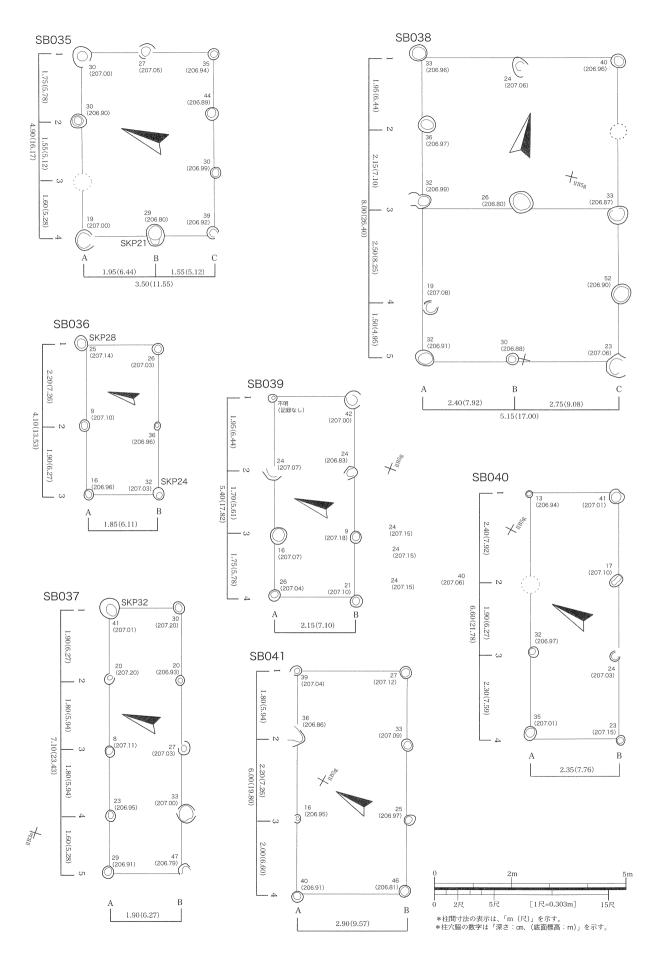
遺構(第47図)〔位置〕 SC01-b 北西部、調査区境界に沿う形で占地する。 SB035を截っている。〔規模〕梁行1間(総長1.90m)×桁行4間(総長7.10m)、東西に細長い建物である。主軸方向はN-72° -Eである。〔柱穴〕ほぼ円形の10個検出した。柱痕はない。

遺物(第36図) 柱穴1A(SKP32)で土師器(128)が出土。砂底の甕である。

時期 出土遺物から見ると古代以降であるが、平面形は古代の建物とは考えづらく、中世以降か。

SB 038 掘立柱建物跡

遺構(第47図)〔位置〕 SC01-b 西側に占地する。 $SB025\cdot030\cdot034\cdot044$ を截り、 $SB033\cdot048$ により截られている。〔規模〕梁行2間(総長5.15m)×桁行4間(総長8.00m)、主軸方向は $N-14^\circ-W$ である。〔間取り〕2間×2間2室に間仕切られている。〔柱穴〕12個検出した。



第47図 SB035~041

平面形は略円形である。柱痕はない。

遺物 出土していない。

時期 16世紀代のSB030を截り、中世のSB033に截られていることから、中世に属するものであろう。

SB 039 掘立柱建物跡

遺構(第47図) [位置] S C 01 - b 西側に位置する。 S B 044を截り、 S B 029により截られている。 [規模] 梁行1間(総長2.15m)×桁行3間(総長5.40m)で、主軸方向はN-71°-Eである。 [柱穴] 円形の8個を検出した。柱痕はない。

遺物 出土していない。

時期 重複関係から中世以降である。

SB 040 掘立柱建物跡

遺構(第47図)〔位置〕 SC01-b 南西寄りに占地している。 SN02を截る。 SB038により截られているようであるが、不明確である。 〔規模〕梁行1間(総長2.35m)×桁行3間(総長6.60 m)、主軸方向は $N-62^\circ-E$ である。 〔柱穴〕 7個検出した。平面形は円形および楕円形である。 柱痕はない。

遺物 出土していない。

時期 中世のSB033より古く、中世に属するものである。

SB 041 掘立柱建物跡

遺構(第47図)〔位置〕SС01-b中央部西寄りに位置し、SB028と重複して截られている。

〔規模〕梁行1間(総長2.90m)×桁行3間(総長6.00m)である。主軸方向はN-61°-Eをとる。

〔柱穴〕8個検出した。平面形は円形で、柱痕は検出されていない。

遺物 出土していない。

時期 16世紀代のSB028に截られていることから中世・16世紀以前である。

SB 042 掘立柱建物跡

遺構(第48図)〔位置〕 SC01-b 南側中央、SD03沿いに占地する。SB031を截っている。 〔規模〕梁行1間(総長2.30m)×桁行3間(総長6.30m)である。主軸方向は $N-82^\circ-E$ 、ほぼ東西方向を主軸としている。〔柱穴〕楕円形基調の7個を検出した。柱痕はない。

遺物 (第36図) 3 A (SKP60) で延べ煙管 (222) が出土した。また柱穴 2 A (SKP63) で縄文土器が出土。

時期 出土した煙管の年代観から、近世の可能性が高い。

SB 043 掘立柱建物跡

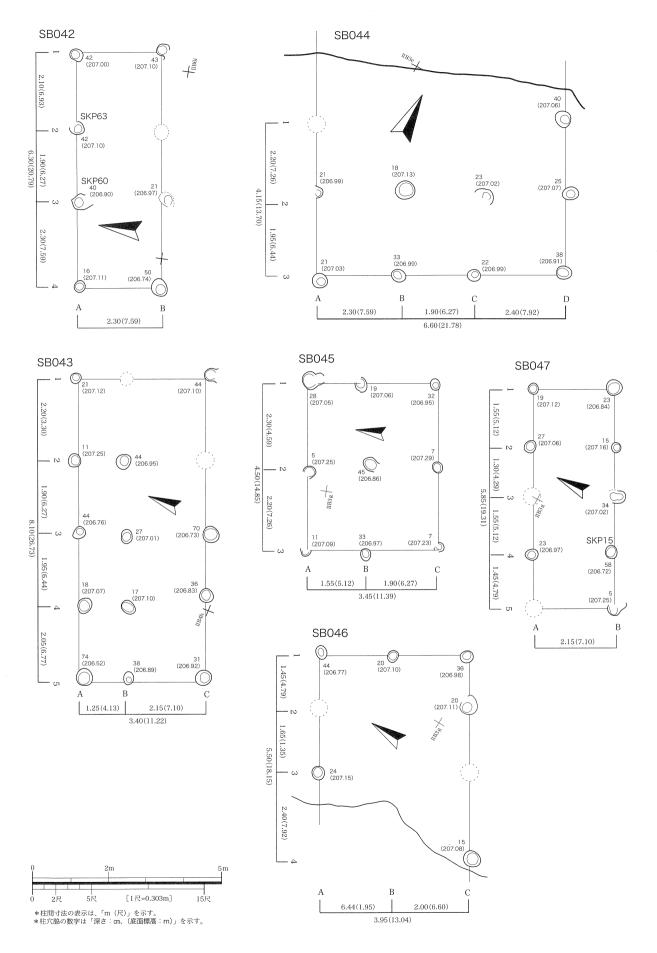
遺構(第48図)〔位置〕 SC01-b 南西部に位置する。 $SB033\cdot034\cdot038$ と截り合い関係にあり、それらによって截られている。〔規模〕梁行 2 間(総長3.40m)×桁行 4 間(総長8.10m)、主軸方向は $N-68^\circ-E$ である。〔間取り〕 1 間× 4 間の棟北西面に 1 間の庇が付いているものと思われる。〔柱穴〕 13 個検出した。平面形は略円形で、柱痕はない。

遺物 出土していない。

時期 SB033(中世)より古いことから、中世以前である。

SB 044 掘立柱建物跡

遺構(第48図)〔位置〕 S C 01 - b 北西調査区境界部分に位置している。 S B 033・038・039により截られる。〔規模〕北側が調査区外へと延びているものと思われるが、検出部分では梁行 3 間(総



第48図 SB042~047

長6.60m)×桁行 2間(総長4.15m)以上である。南北方向を主軸と捉えると、主軸は $N-29^{\circ}-W$ である。 [柱穴] 9個検出した。平面形は楕円形で、柱痕はない。

遺物 出土していない。

時期 SB033(中世)より古いことから、中世以前である。

SB 045 掘立柱建物跡

遺構(第48図) 〔位置〕 S C 01 - b 西側に占地する。 S B 050を截り、 S B 049により截られる。 〔規模〕梁行2間(総長3.45m)×桁行2間(総長4.50m)、主軸方向はN - 81°-E、総柱建物である。 〔柱穴〕楕円形の柱穴9個を検出した。柱痕はない。

遺物 出土していない。

時期 建物相互の截り合い関係から見て中世に属すると思われる。

SB 046 掘立柱建物跡

遺構(第48図)〔位置〕 S C 01 - b 北西隅に位置する。他の建物との直接の截り合いはない。〔規模〕西側が平場西縁側へと延びていたと思われるが、当該部分が撹乱により崩落しているため、詳細不明である。検出部分は梁行2間(総長3.95m)×桁行2間(総長5.50m)以上で、主軸方向はN - 57°-Eである。〔柱穴〕 5 個検出した。平面形は略円形である。柱痕は検出されなかった。

遺物 出土していない。

時期

SB 047 掘立柱建物跡

遺構(第48図)〔位置〕 SC01-b 西部に占地している。 SN03を截り、 $SB050\cdot054$ により截られている。 〔規模〕梁行1間(総長2.15m)×桁行4間(総長5.85m)、主軸方向は $N-63^\circ-E$ である。 〔柱穴〕 8 個検出した。平面形は一部不整なものを含むが、円形基調である。柱痕はない。

遺物 柱穴4B(SKP15)で縄文土器2点が出土した。

時期 SB054 (中世) より古く、中世以前である。

SB 048 掘立柱建物跡

遺構(第49図)〔位置〕 SC01-b 西側に位置する。 SB051と重複し、截られている。〔規模〕 梁行 1 間(総長1.80m)×桁行 2 間(総長4.10m)、主軸方向は $N-28^\circ-W$ である。〔柱穴〕 6 個検出した。平面は円形で、柱痕はない。

遺物 柱穴3A(SKP17)で縄文土器が出土した。

時期 建物相互の截り合い関係から見て、中世である。

SB 049 掘立柱建物跡

遺構(第49図) 〔位置〕 S C 01 - b 西側に占地する。 S B 045を截り、 S B 038に截られている。

〔規模〕梁行2間(総長3.30m)×桁行2間(総長3.85m)である。主軸方向はN-27°-Wである。

〔柱穴〕8個検出した。平面形は円形および楕円形であり、柱痕は確認されていない。

遺物 出土していない。

時期建物相互の截り合い関係から見て、中世である。

SB 050 掘立柱建物跡

遺構(第49図)〔位置〕 SC01-b 西側中央付近に位置する。 $SB045\cdot047$ を截っている。〔規模〕梁行1間(総長2.55m)×桁行3間(総長6.15m)、主軸方向は $N-62^\circ-E$ である。〔柱穴〕 7個検出した。平面形は円形および楕円形である。柱痕は検出できなかった。

遺物 出土していない。



第49図 SB048~054

時期 建物相互の截り合い関係から見て、中世の可能性がある。

SB 051 掘立柱建物跡

遺構(第49図) 〔位置〕 SC01-b 南西寄りに占地している。 SB048を載っている。 〔規模〕梁行2間(総長3.10m)×桁行3間(総長5.15m)で、主軸方向はN-29°-Wである。 〔柱穴〕 9個検出した。平面形は略円形である。柱痕はない。

遺物 出土していない。

時期 不明である。

SB 052 掘立柱建物跡

遺構(第49図) 〔位置〕 SC01-b 南西部に位置する。 $SB054\cdot047$ を載る。 〔規模〕梁行1間(総長1.85m)×桁行2間(総長4.90m)、主軸方向は $N-24^\circ-W$ である。 〔柱穴〕楕円形の柱穴6個を検出した。柱痕はない。

遺物 出土していない。

時期 中世のSB054より新しいことから、中世以降の建物である。

SB 053 掘立柱建物跡

遺構(第49図)〔位置〕 SC01-b 北西部に占地している。他の建物との直接の截り合いがない。〔規模〕西側の平場西縁側へと延びていたものと思われるが、当該部分の平場縁辺の崩落により消失したものと思われる。確認部分では、南北を軸線と仮定した場合、梁行1間(総長2.05m)以上×桁行3間(総長6.35m)で、主軸方向は $N-24^\circ-W$ である。〔柱穴〕7個検出した。平面形は概ね円形である。柱痕は確認されていない。

遺物 柱穴2A (SKP18)、1B (SKP25)から縄文土器が出土。

時期 不明である。

SB 054 掘立柱建物跡

遺構(第49図) 〔位置〕 S C 01 - b 北西部分に占地している。 S B 047および S N 03を截り、 S B 052に截られる。 〔規模〕 S B 053同様、本来西側へと延びていた可能性がある。検出部分では、梁行1間(総長1.75m)以上×桁行2間(総長4.70m)、主軸方向はN-17°-Wである。 〔柱穴〕 5 個検出した。平面形は楕円形および不整形で、柱痕はない。

遺物 (第36図) 柱穴 3 B (SKP19) で古銭 (228)。北宋・熈寧元寶の鐚銭である。

時期出土遺物から中世に属するものと推測される。

SB 055 掘立柱建物跡

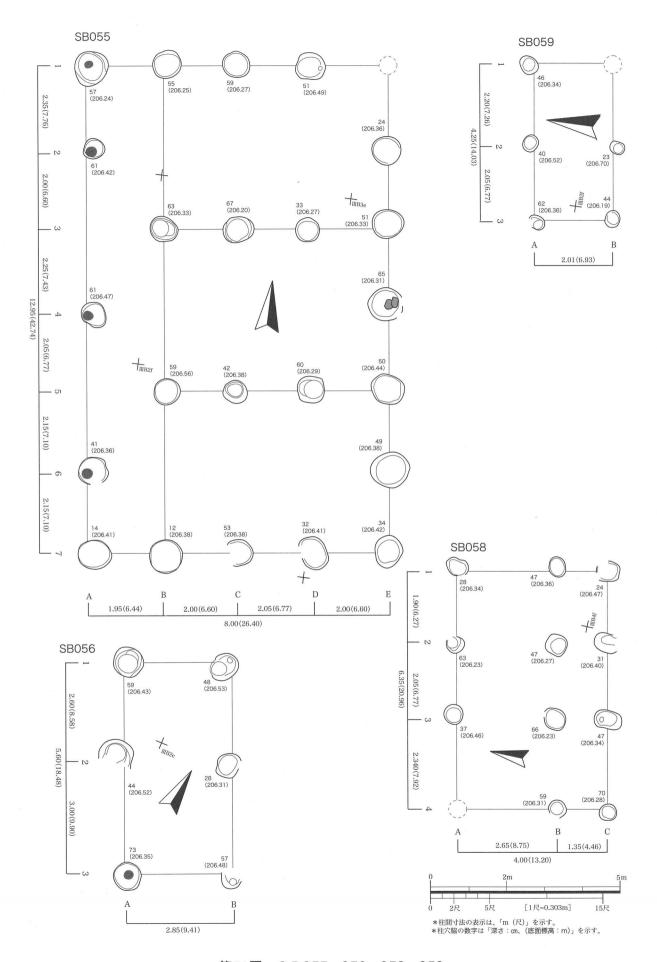
遺構(第51図)〔位置〕 SC01-c 中央部に占地する。 $SB058\cdot060\cdot061$ 、 SI04と重複し、これらを截っている。また $SB056\cdot057\cdot059\cdot065$ 、 SA05と重複しているが、截り合い関係に無く、新旧関係不明である。〔規模〕梁行 3 間(総長8.00m)×桁行 6 間(総長12.95m)、西面に庇が付く建物である。庇を含めた梁行総長7.90mである。庇を含めて梁側の間尺は概ね6.5尺と整正である。主軸方向はほぼ南北方向、 $N-7^\circ-W$ である。〔間取り〕 3 間× 2 間の 3 室から構成され、西面に庇または廊下と思われる 1 間× 6 間の空間が付随する。〔柱穴〕 23 個検出した。平面形は略円形で、開口部規模は $70\sim85$ cm と比較的大径である。庇側 $A1\cdot2\cdot4\cdot6$ で径 $20\sim25$ cm の円形柱痕が確認された。また 20 と 20 に 20

遺物 (第36図) 柱穴 6 A (SKP84) で陶器鉢 (153)、3 C (SKP83) で土師器が出土した。他に5 B (SKP80)、7 D (SKP79)、4 E (SKP82) から縄文土器、陶器片が出土。

時期 重複関係から他の掘立柱建物跡および竪穴建物跡を截っており、より新しい時期の遺構であ



第50図 掘立柱建物跡配置・建物跡集成(3)



第51図 SB055·056·058·059

る。出土遺物から近世に属する可能性がある。

SB 056 掘立柱建物跡

遺構(第51図)〔位置〕 SC01-c 北西部に占地する。 $SB055\cdot057\cdot060$ と重複している。 SB055に截られる。〔規模〕梁行1間(総長2.85m)×桁行2間(総長5.60m)である。主軸方向は $N-33^\circ-W$ である。〔柱穴〕円形・楕円形の6個を検出した。A3で径25cmの円形柱痕を確認した。

遺物 出土していない。

時期建物相互の截り合い関係から見て、近世以前の建物である。

SB 057 掘立柱建物跡

遺構(第52図)〔位置〕 SC01-c 西側に位置する。 SB056、 SI04を截る。 $SB055\cdot060$ と重複するが、新旧関係は不明である。〔規模〕梁行1間(総長4.85m)×桁行6間(総長12.95m)で、主軸方向は $N-10^\circ-W$ である。〔柱穴〕12個検出した。平面形は円形基調である。 $A3\cdot4\cdot6$ で柱痕(径25~35cmの円形)、B3では底面で柱アタリを確認した。

遺物 (第36図) 柱穴 6 A (SKP85) で寛永通寶 2 点 (250・252)。ともに「新寛永」である。4 B (SKP81) から縄文土器。

時期 出土遺物から見て近世、18世紀後半以降である。

SB 058 掘立柱建物跡

遺構(第51図) 〔位置〕 SC01-c 中央部付近に占地する。 SA05を截り、 SB55に截られる。 〔規模〕梁行 2 間(総長4.00 m)×桁 3 行間(総長6.35 m)で、総柱の建物である。主軸方向は N $-78^\circ-E$ である。 〔柱穴〕 11個を検出した。平面形は楕円形を基調とする。柱痕は確認できなかった。

遺物 出土していない。

時期 建物相互の截り合い関係から見て、近世以前である。

SB 059 掘立柱建物跡

遺構(第51図) 〔位置〕 SC01-c 中央部に位置する。 $SB055\cdot058\cdot060$ 、 SA05と重複する。柱穴の截り合いがないため、他の建物との新旧関係は不明である。 〔規模〕梁行1間(総長2.10 m)×桁行2間(総長4.25m)の小形建物である。主軸方向は大きく西に振れており、 $N-82^{\circ}-E$ をとる。 〔柱穴〕楕円形の5個を検出した。柱痕は確認されていない。

遺物 出土していない。

時期 不明である。

SB 060 掘立柱建物跡

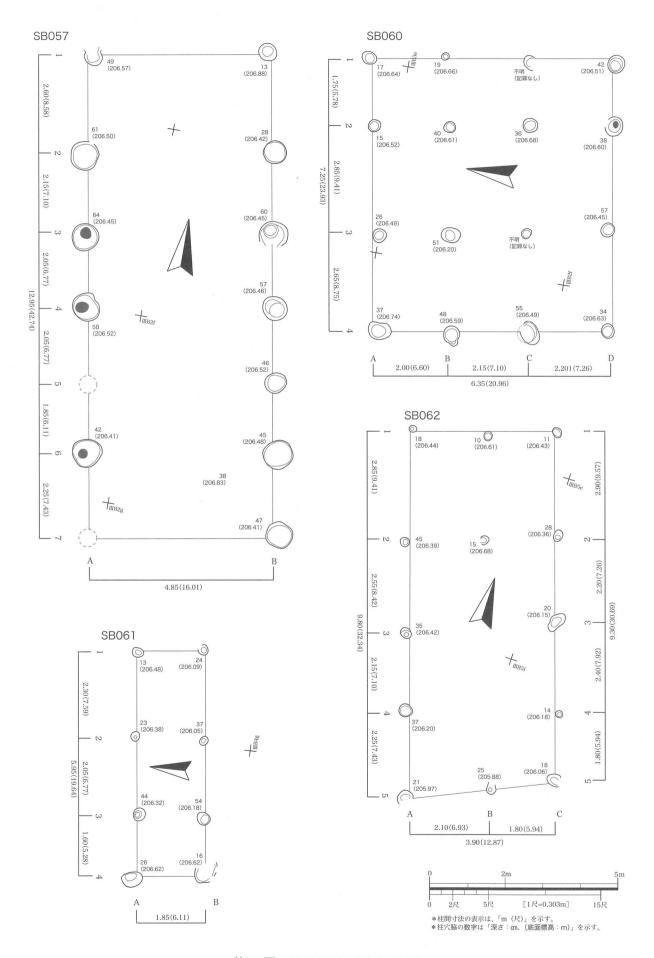
遺構(第52図) 〔位置〕 S C 01 - c 中央西寄りに占地する。 S B 055・057に截られている。 〔規模〕南面 3 間(総長6.35m)×西面 3 間(総長7.25m)の総柱建物である。主軸方向はN - 80° - E と大きく東へ振れる。 〔柱穴〕 16個検出した。平面形は円形および楕円形で、柱穴 2 D で径20cmの円形の柱痕を確認した。

遺物 出土していない。

時期 SB055よりも古いことから見て、近世以前の建物である。

SB 061 掘立柱建物跡

遺構(第52図)〔位置〕 S C 01 - c 中央南側、調査区境界付近に位置している。 S B 055に截られる。〔規模〕梁行1間(総長1.85m)×桁行3間(総長5.95m)、主軸方向はN - 83° - Eである。 〔柱穴〕楕円形平面の8個を検出した。柱痕は確認されていない。



第52図 SB057·060~062

遺物 出土していない。

時期 SB055よりも古いことから見て、近世以前の建物である。

SB 062 掘立柱建物跡

遺構(第52図) 〔位置〕 SC01-c 東縁辺、SF01切岸寄りに位置する。〔規模〕梁行2間(総長 3.90m)×桁行4間であるが、桁側は東面総長9.30m・西面総長9.80mと異なり歪んでいる。主軸方向は $N-18^\circ-W$ である。〔柱穴〕13個検出した。平面形は円形と不整形のものがある。柱痕はない。

遺物 出土していない。

時期 不明である。

SB 063 掘立柱建物跡

遺構(第53図) 〔位置〕 SC01-c 南東部、SF01切岸寄りに位置し、南端の柱穴 A4 が調査区境にかかる。さらに南側へと延びる可能性もある。 SB62と重複するが、新旧関係は不明である。 〔規模〕梁行 1 間(総長2.70m)×桁行 3 間(総長8.10m)、主軸方向は $N-19^\circ-W$ をとる。 〔柱穴〕 8 個検出した。平面形は楕円形基調で、柱痕は確認されていない。

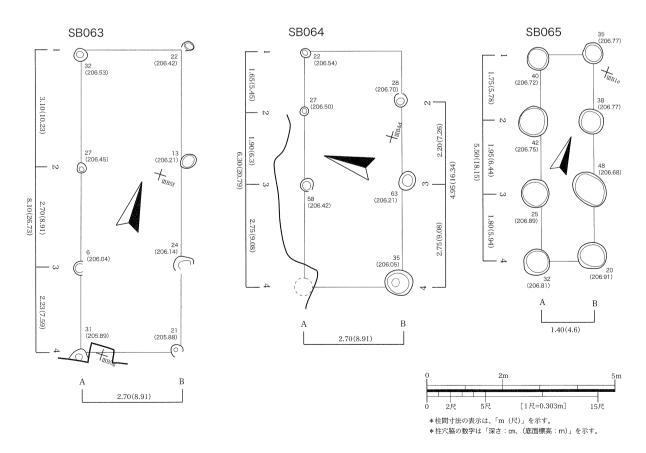
遺物 出土していない。

時期 不明である。

SB 064 掘立柱建物跡

遺構(第53図) 〔位置〕 SC01-c 北東部に占地している。調査区境界に近く、北側調査区外へと延びる可能性ある。他の遺構との重複はない。〔規模〕南東隅柱を欠くが、梁行1間(総長2.70m) ×桁行3間(総長6.30m)、主軸方向は $N-73^\circ-E$ と推測される。〔柱穴〕円形平面の6個を検出した。B4底面において径20cm円形の柱アタリが確認できた。

遺物 出土していない。



第53図 SB063~065

時期 不明である。

SB 065 掘立柱建物跡

遺構(第53図)〔位置〕 SC01-c 北西部に位置する。他の遺構との重複はない。〔規模〕梁行1間(総長1.40m)×桁行3間(総長5.50m)、細長い平面形を呈している。主軸方向は $N-22^\circ-W$ である。〔柱穴〕径60~100cmと大径な8個を検出した。平面形は円形および楕円形である。柱痕は確認されなかった。

遺物 出土していない。

時期 不明である。なお、柱穴掘り方の大きさや他の柱穴との様相の違いから見て、単なる植栽痕 の可能性もある。

SB 066 掘立柱建物跡

遺構(第57図)〔位置〕SC02北側に位置する。SC02の遺構面(八戸火山灰下層;区層)で検出した。北西隅が調査区外に延びている。重複する遺構はないが、中央部を撹乱されている。〔規模〕北西の隅柱が調査区外にあり、梁行1間(総長3.70m)×桁行3間?(総長6.70m)を呈するものと推測される。主軸方向はN-82°-Wである。〔柱穴〕 5個検出した。平面形は円形および楕円形である。柱痕は確認されていない。

遺物 出土していない。

時期 検出面から見て少なくとも中世以降だが、詳細は不明である。

SB 067 掘立柱建物跡

遺構(第57図) 〔位置〕 S C 02中央付近の IX 層面で検出した。 S B 068・S D 04と重複しており、本建物が新しい。 〔規模〕梁行1間(総長2.20m)×桁2行間(総長3.95m)で、主軸方向は IV -16°-Wである。 〔柱穴〕 6 個検出した。平面形は円形である。柱痕は柱穴2 A で確認され、柱痕部分から古銭5 点が一括出土している。地鎮的な意味で埋納したものと理解される。

遺物 (第37図) 柱穴 2 A (SKP144) 柱痕部堆積土で寛永通寶 5 点 (242~246) が出土した。いずれも「古寛永」である。

時期 古銭の出土状況から見て、近世17世紀前半に属するものと推定される。

SB 068 掘立柱建物跡

遺構(第57図) 〔位置〕 SC02中央部のI区層面に位置する。柱穴 2Aが SB067の柱穴 2Aと重複し、截られている。 SD04の堆積土を截っている。 〔規模〕梁行 1 間(総長1.30m)×桁行 2 間(総長3.65m)で、主軸方向はI0 -200 - W0 をとる。 〔柱穴〕 5 個検出した。平面形は円形で、柱痕は確認されていない。

遺物 出土していない。

時期 SB067より古く、SD01より新しいことから考えると、近世に属するもので下限は17世 紀前半である。

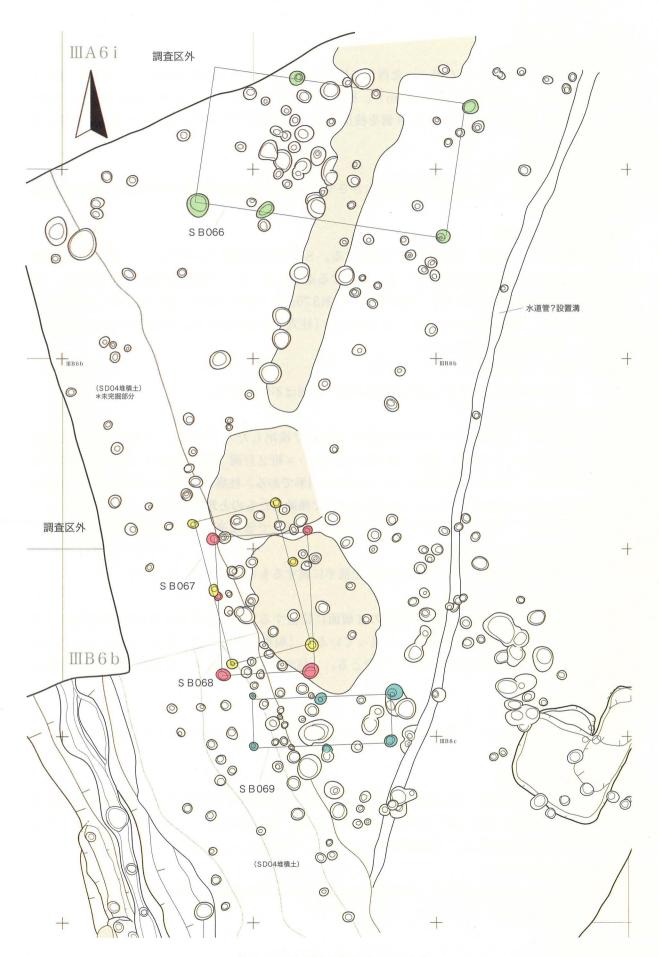
SB 069 掘立柱建物跡

遺構(第57図)〔位置〕SС02中央付近、主にⅢB7Ьグリッドに占地する。SD04の堆積土を 截っている。〔規模〕梁行1間(総長1.3m)×桁行2間(総長3.65m)、主軸方向はN-88°-Wで ある。〔柱穴〕6個検出した。平面形は円形を呈する。柱痕はない。

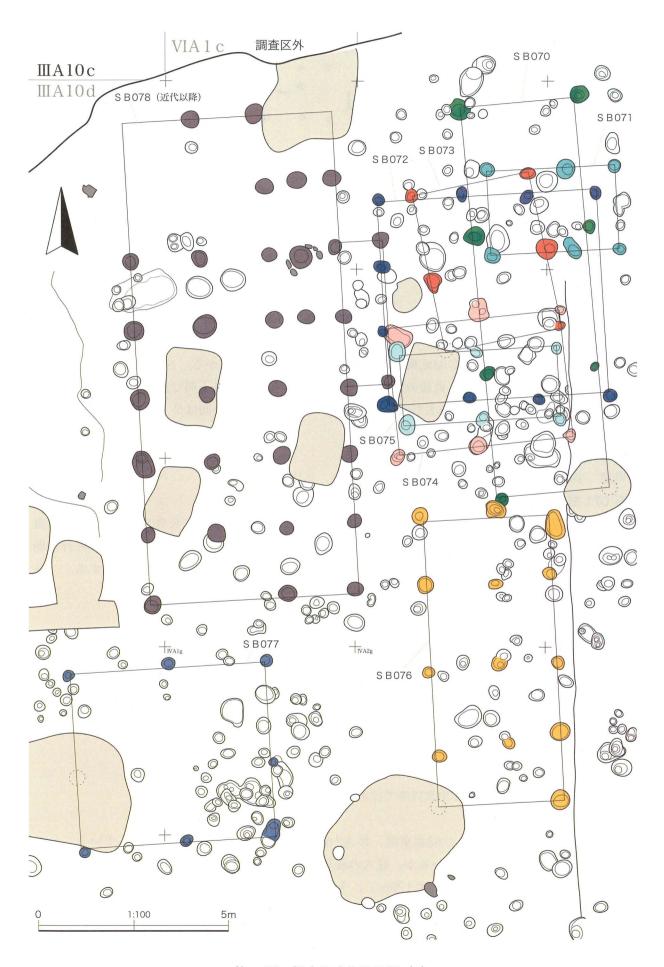
遺物 出土していない。

時期 SD04との関係から見て、同堀埋没後に構築された中世以降の建物である。

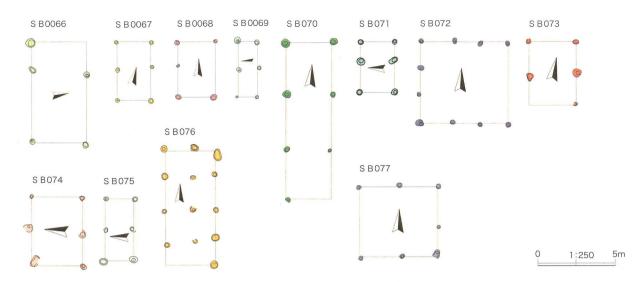
SB 070 掘立柱建物跡



第54図 掘立柱建物跡配置(4)



第55図 掘立柱建物跡配置(5)



第56図 建物跡集成(4)

遺構(第57図)〔位置〕 SC03北東隅、 $WA2d\sim f$ グリッドに広がる。 SB076に截られる。 $SB071\sim075$ と重複するものの、直接の截り合いがないため新旧関係は不明である。〔規模〕梁行1間(総長2.95m)×桁行3間(総長10.55m)の細長い建物で、主軸方向は $N-5^\circ-W$ である。〔柱穴〕不整円形の7個を検出した。柱痕はない。

遺物 出土していない。

時期 平場普請以降の建物で中世以降ではあるが、具体は不明である。

SB 071 掘立柱建物跡

遺構(第57図) 〔位置〕 SC03北東隅、NA2e グリッドに位置する。 $SB070\cdot072\cdot073$ と重複するが、截り合いは認められず、新旧不明である。 〔規模〕梁行1間(総長2.20m)×桁行2間(総長3.4m)、小型の建物である。主軸方向は $N-87^\circ-E$ で、ほぼ東西方向に軸を有する。 〔柱穴〕 6個検出した。平面形は円形・楕円形を基調とする。柱痕は確認されていない。

遺物 出土していない。

時期 平場普請以降の建物で中世以降ではあるが、具体は不明である。

SB 072 掘立柱建物跡

遺構(第57図) 〔位置〕 SC03北東隅、 $WA2d \cdot e$ グリッドに位置する。 SB074を截る。他に $SB070 \cdot 071 \cdot 073 \cdot 075$ と重複するが、直接の截り合いは見られない。 〔規模〕 3 間四方(総長 $5.50m \times 5.80m$)のほぼ方形平面の建物である。主軸方向は $N-4^\circ-W$ をとる。 〔柱穴〕 10 個検出した。平面形は楕円形を基調としている。柱痕は確認されてない。

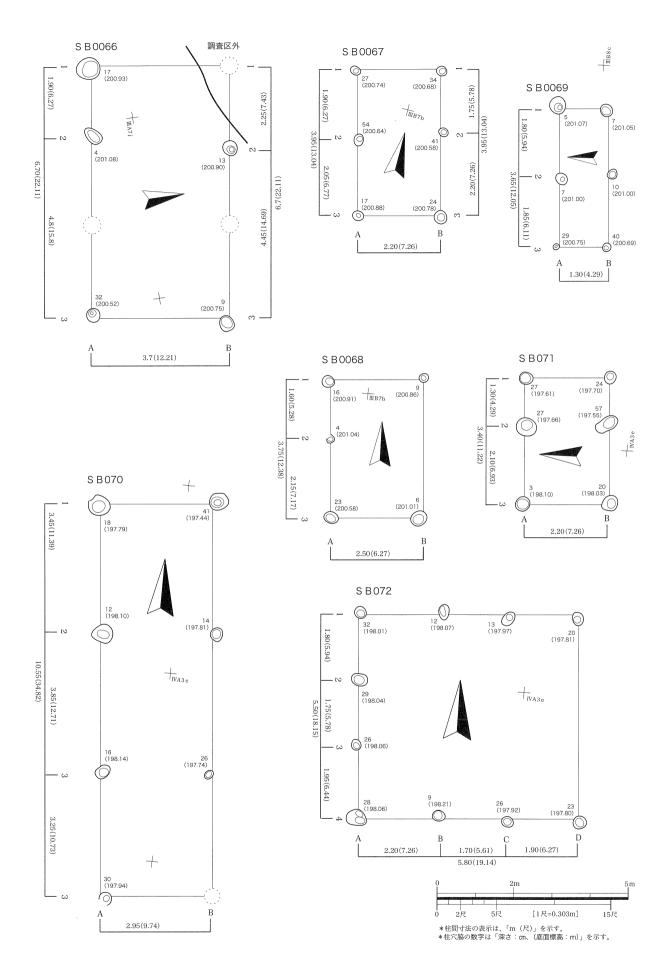
遺物 出土していない。

時期平場普請以降の建物で中世以降ではあるが、具体は不明である。

SB 073 掘立柱建物跡

遺構(第58図) 〔位置〕 SC03北東隅、 $WA2d\cdot 2e$ グリッドに跨がって占地している。 $SB070\sim072\cdot074\cdot075$ と重複しているが、柱穴の截り合いが無いため新旧不明である。 〔規模〕梁行1間(総長3.15m)×桁行2間(総長4.20m)、主軸方向は $N-12^\circ-W$ である。 〔柱穴〕 5 個検出した。平面形は楕円形および不整形である。柱痕は確認されていない。

遺物出土していない。



第57図 SB066~072

時期 平場普請以降の建物で中世以降ではあるが、具体は不明である。

SB 074 掘立柱建物跡

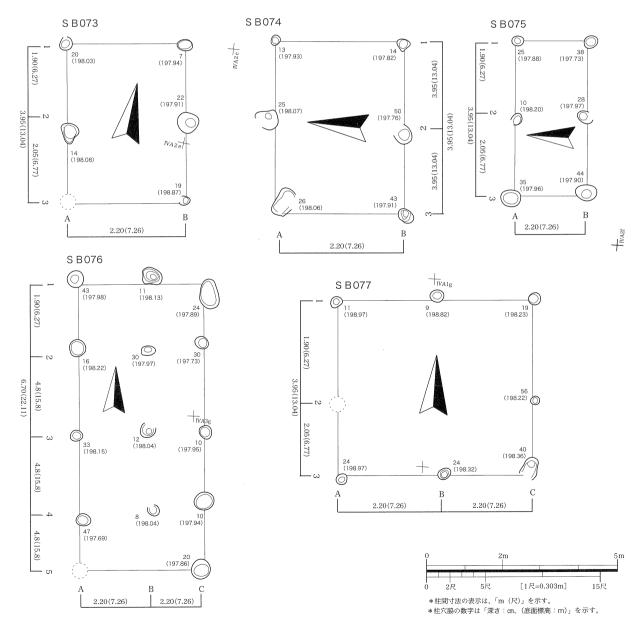
遺構(第58図) 〔位置〕 SC03北東隅、WA2e グリッドに位置する。 SB075に截られている。 $SB070\cdot072\cdot073$ とも重複するが、新旧関係不明である。 〔規模〕梁行1間(総長3.3m)×桁行2間(総長m)、主軸方向は $N-83^\circ-W$ である。 〔柱穴〕不整な楕円形平面の6 個検出した。柱痕は確認されない。

遺物 出土していない。

時期 平場普請以降の建物で中世以降ではあるが、具体は不明である。

SB 075 掘立柱建物跡

遺構(第58図) 〔位置〕 SC03北東隅、NA2e グリッドに位置する。 $SB070\cdot072\cdot073\cdot074$ と重複するが、直接の截り合いはない。 〔規模〕梁行1間(総長1.85m)×桁行2間(総長4.15m)の建物である。主軸方向は $N-86^\circ-W$ で、ほぼ東西軸をとる。 〔柱穴〕 6 個検出した。平面形は円



第58図 SB073~077

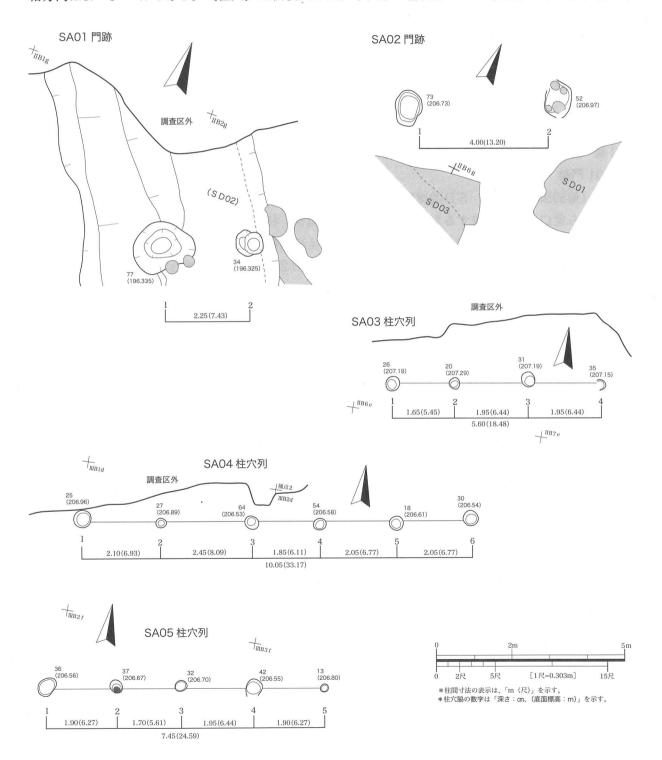
形・楕円形で、柱痕はない。

遺物 出土していない。

時期 平場普請以降の建物で中世以降ではあるが、具体は不明である。

SB 076 掘立柱建物跡

遺構(第58図) 〔位置〕 SC03北側、 $WA2f \cdot g$ グリッドに跨がって位置する。僅かに SB040 を截っている。 〔規模〕梁行 2 間(総長3.20m)×桁行 4 間(総長7.65m)の総柱? 建物である。主軸方向は $N-3^\circ-W$ である。 〔柱穴〕 13 個検出した。平面形は楕円形および不整形である。柱痕は確



第59図 SA01~05

認されていない。

遺物 3A(SKP114)で縄文土器が出土している。

時期 平場普請以降の建物で中世以降ではあるが、具体は不明である。

SB 077 掘立柱建物跡

遺構(第58図)〔位置〕 SC03北側、 $MA10g \sim NA1g$ グリッドに跨がって占地する。他の建物との重複はない。〔規模〕 2 間四方(総長 $5.25m \times 4.70m$)の方形平面の建物である。主軸方向は $N-4^\circ-W$ である。〔柱穴〕 7 個検出した。平面形は円形を基調とするが不整形のものを含む。柱痕は確認されていない。

遺物(第36図) 〔土器〕柱穴3 C (SKP116) から縄文土器の尖底部(60) が出土した。

時期 出土遺物から縄文時代前期より新しい。平面型式から見て縄文時代の遺構とは考えづらく、 中世以降と推測される。

門跡

2個一対の柱穴2組であり、その位置を加味して「門跡」と判断した。

S A 01 門跡

遺構(第59図)〔位置〕 S D02虎口跡の底面、虎口東側の塁壁上で大径柱穴を検出し、その規模と位置から虎口の門を構成するものと判断した。〔規模〕柱穴 2 個一対で構成される。柱間寸法は約2.3mである。なお、pit 2 では不明瞭ながら建て替えの痕跡があった。Pit 1 には見られないことから、pit 1 を再利用する形で門の立て替えが行われ、新旧 2 時期の変遷を辿った可能性がある。〔柱穴〕楕円形平面で、規模はそれぞれ1.6m×1.2m、 $0.7m\times0.8m$ である。 2 個ともに径25~30cmの円形柱痕が確認された。深さは大きく異なるが、底面水準高はほぼ同じである。

遺物 出土していない。

性格 虎口に伴う門跡である。柱穴の構成から冠木門と推測される。なお、この門以南は虎口内の 法幅がやや広がっており、いわゆる「内桝形」の虎口となっている。

時期 虎口に伴う施設であり、中世に属するものである。

S A 02 門跡

遺構(第59図)〔位置〕 SC01-b 平場南側、 $SD01\cdot03$ 空堀および SX05 土橋の北側に位置している。柱穴の規模(径が大きい)および空堀・土橋との位置関係等から門跡と考えた。SI06を截っている。〔規模〕大径の柱穴 2 個で構成される。柱間寸法は約4.0mである。〔柱穴〕 2 個ともに楕円形平面である。柱穴規模はそれぞれ1.0m×0.7m、1.0m×0.6mと似通っている。柱痕は検出されなかった。

遺物 出土していない。

性格 SD01・03による区画エリアへの出入り口に設けられた門跡である。柱穴の構成から冠木門と推測される。

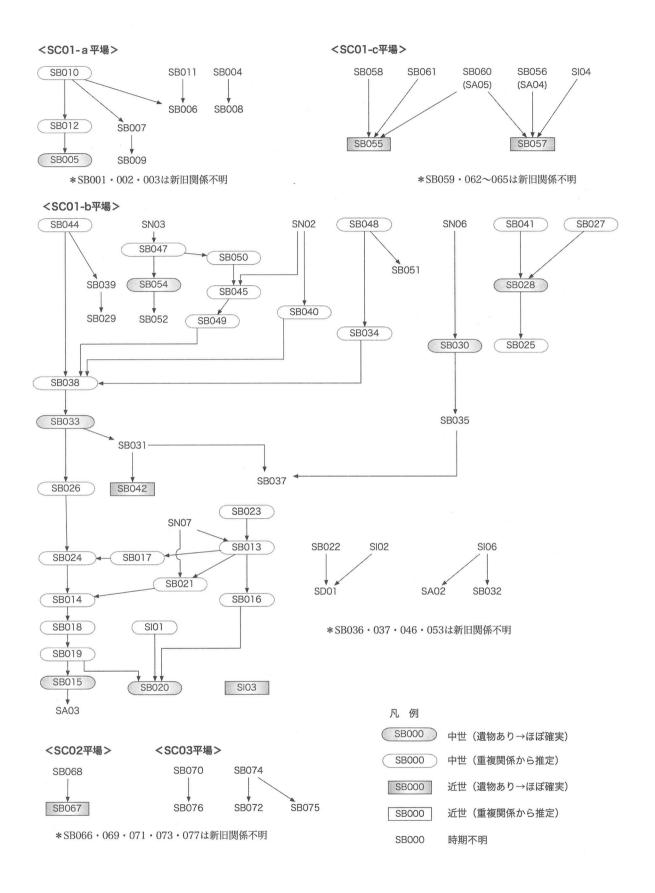
時期館に伴う施設と推測されることから、構築時期は中世である。

柱穴列

概ね直線的に配列する複数個の柱穴であり、3条を抽出した。

S A 03 柱穴列

遺構 (第59図) 〔位置〕 S C 01 - b 北東部分、 II B 6 e グリッドに位置する。 S B 015を截る。



第60図 検出遺構重複関係

〔規模〕柱穴 4 個で構成され、総長5.5m、柱間寸法1.8~2.0m、軸方向はN-80° -Eである。〔柱穴〕平面形は径20~40cmの円形および楕円形である。柱痕は確認できなかった。

遺物 出土していない。

時期 柱穴からの出土遺物がなく時期判断の材料を欠く。青磁破片 (肥前産?) が出土した S B 015より新しいことから近世以降であるが、時期詳細は不明である。

S A 04 柱穴列

遺構(第59図)〔位置〕 SC01-c 中央部北縁付近に位置する。〔規模〕柱穴 6 個で構成されており、総長約10.5m、柱間寸法は1.8~2.5m、軸方向はN-81°-Eである。〔柱穴〕平面形は円形で、径25~40cmと小径である。柱痕はない。

遺物 出土していない。

性格 本柱穴列の南側にはSB056が占地しており、位置関係や軸線から見て同建物に付随する塀を構成するものだった可能性がある。

時期 直接的な時期判断材料を欠いており、時期不明である。なお、SB056に伴う場合は近世以前に属するものとなる。

S A 05 柱穴列

遺構(第59図)〔位置〕 SC01-c 中央南寄り、IIB2fグリッド付近に位置する。〔規模〕柱穴5個で構成されている。総長約7.5m、柱間寸法は $1.8\sim2.0$ mである。軸方向は $N-80^\circ-E$ である。〔柱穴〕平面形は径 $20\sim40$ cmの略円形である。柱穴2で径20cmの円形の柱痕が検出された。

遺物 柱穴1 (SKP86) で縄文土器が出土した。

性格 本柱穴列の北側にSB060が占地している。その位置関係や軸線から、同建物跡に付随する 塀跡だった可能性がある。

時期 時期判断の根拠が薄く、時期不明である。SB060に伴う場合は近世以前である。

(6) 溝 跡

SD 05 溝跡

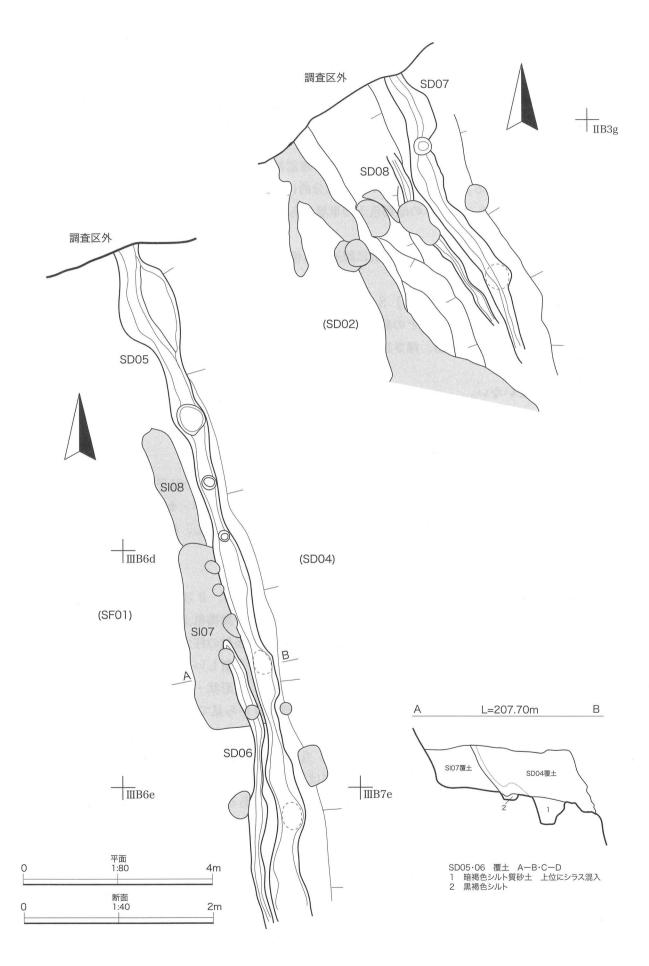
遺構(第61図)〔位置・検出状況〕SD04空堀とSF01切岸の間に位置する。SD04の精査に際して、堀縁辺部に沿って筋状に延びる暗褐色土のブランを検出した。〔重複関係〕SI07・08と重複しており、それらを截っている。〔規模・形態・方向〕SD04に沿って南北方向に延びている。南側は吉田川沿いの崖まで達して開口しているものと思われるが、当該部分については安全対策上、調査を行っていないため不詳である。確認した部分は延長約15mである。断面は逆台形で、深さは28cmである。堆積土上面では確認できなかったが、底面には柱穴状の凹みが不明瞭ながらも複数見られる。空堀と切岸の間という位置関係を考えれば、防禦性を高めるための布掘りの柵跡である可能性が高い。〔堆積土〕シラスブロックを僅かに含む暗褐色土の単層である。

遺物 (第65図) 縄文土器 (37) 。土師器甕 (127) 。

時期 SD04空堀に付随する柵跡と推測されることから、中世に属するものと考えられる。

SD 06 溝跡

遺構(第61図)〔位置・検出状況〕SD05とともに検出した。SD05と同様にSD04とSF01の間に位置している。〔重複関係〕SI07と重複し、それを截っている。〔規模・形態・方向〕SD05と平行しているが、北側では本溝は消失している。確認した部分の延長は約6.2mである。断面逆台形であるが深さ約8cmと浅く、底面では柱穴状の凹みは確認されていない。〔堆積土〕シラスブロッ



第61図 SD05~08

クを僅かに含む暗褐色土の単層である。

遺物 出土していない。

時期 遺物を欠き、判断材料に乏しい。堀との関連性から中世に属する可能性がある。

SD 07 溝跡

遺構(第61図)〔位置・検出状況〕SD02東側の土塁状の高まり部分に位置する。〔重複関係〕他遺構との截り合いはない。〔規模・形態・方向〕確認部分は北西ー南東方向へと延びている。総長6.8m、深さ15cm程である。はっきりしないが、部分的に柱穴状の痕跡があり、布掘りの柵跡の可能性がある。〔堆積土〕シラス混じりの暗褐色土の単層である。

遺物 出土していない。

時期 具体の時期は不明である。SD02に関連する柵跡とすれば、中世に属する可能性がある。

SD 08 溝跡

遺構(第61図)〔位置・検出状況〕SD02東側の土塁状の高まり部分に位置する。〔重複関係〕新期のpitと重複している。他遺構との截り合いはない。〔規模・形態・方向〕確認部分は北西ー南東方向へと延びている。総長6.8m、深さ15cm程である。〔堆積土〕シラス混じりの暗褐色土の単層である。

遺物 出土していない。

時期 具体の時期は不明である。SD02に関連するものとすれば、中世に属する可能性がある。

(7)竪穴建物跡・竪穴遺構

竪穴遺構は9棟 [竪穴建物跡4棟、竪穴遺構5棟]を検出した。SС01平場面に6棟、SF01切岸裾部分に2棟、SС02平場面に1棟が分布する。これらの竪穴には炉・カマドは一切付設されていない。両者の平面形は類似しているが、床面の柱穴の有無により分離し、柱穴を伴うものを「竪穴建物跡」、柱穴のないものを「竪穴遺構」とした。

S I 01 竪穴遺構

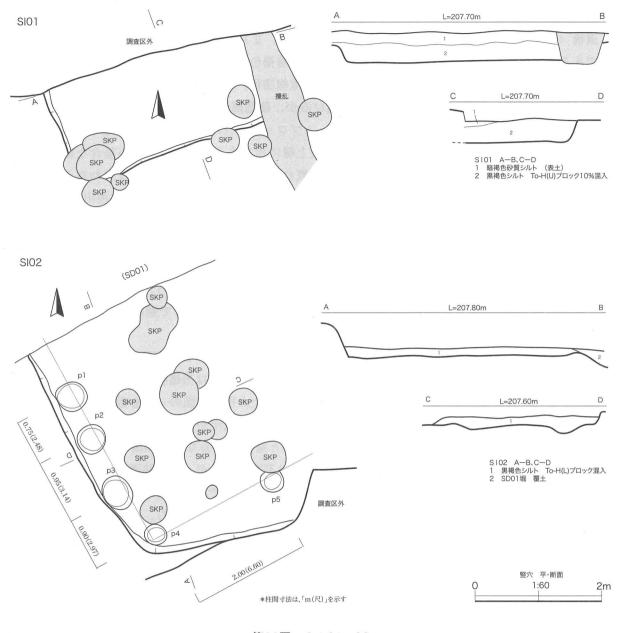
遺構(第62図)〔位置・検出状況〕上段平場SС01-b中央北側、ⅡB6e~ⅡB7eグリッドに位置する。表土を除去した際、地山ロームブロックを多量に含む黒褐色土のプランを検出した。〔重複関係〕東壁付近が水道管設置溝により破壊されている。また多数の柱穴と重複している。当遺構プラン検出時点で柱穴を識別できなかったことから、それらよりも新しいものと捉えられる。ただし、柱穴と堆積土が似ているため、見落としている可能性もある。〔形状・規模〕北側が調査区外へと延びていることから全体の形状は明らかではないが、確認部分から見て、方形基調であると推測される。規模は検出部分で南北1.7m・東西2.9mを測る。〔堆積土〕堆積土の主体は、地山ロームをブロック状に含んだ黒褐色土である。人為堆積であり、当遺構は一気に埋め戻されたものと解釈される。〔壁・床面〕壁は八戸火山灰上層に相当し、壁高は20~30cm。床面も壁同様八戸火山灰上層に相当するが砂層で、この砂は八戸火山灰上層中に介在するものである(第Ⅱ章3で既に述べた)。〔柱穴〕検出されていない。ただし床面が砂層だったため、見落とした可能性も否定できない。

遺物 出土していない。

時期判断根拠に乏しいが、構造や堆積土の様相から中世〜近世に属するものと思われる。

SI 02 竪穴遺構

遺構(第62図) 〔位置・検出状況〕 $IIB7g \cdot h$ グリッド、SC01-b 平場の遺構面(八戸火山灰上層)において検出した。当該グリッドでSD01プランが不整に広がっていることから、竪穴との



第62図 SI01・02

重複として把握した。〔重複関係〕北側でSD01と重複し截られている。また床面で検出された柱穴群については、これを截っているものと思われるが、堆積土が似ていることから見落とした可能性もあり、不確実である。〔形状・規模〕西側については削剥のため、北側はSD01による破壊で、それぞれ壁・床面ともに消失している。残存する部分を参照すると、方形を基調とする平面形状だったものと思われる。検出部分の規模は、南北3.8m・東西2.5mである。〔堆積土〕削平により全体に薄く残るのみであるが、白みがかったパミス粒を含む黒褐色土である。〔壁・床面〕壁は八戸火山灰上層相当で外傾し、壁高10~15cmである。床面には八戸火山灰上層に不整合に混入する細砂層が露出している。〔柱穴〕床面で検出された柱穴状ピットのうち、壁に沿って配された5個が本遺構に伴うものと思われる。

遺物 出土していない。

時期 時期判断の根拠に乏しいが、中世~近世に属する可能性あるものと捉えておく。

S I 03 竪穴建物跡

遺構(第63図)〔位置・検出状況〕SC01-b 南東側、II B2fグリッド南東隅付近に位置する。地山である黄褐色ロームの小ブロックが多量に混入する暗褐色土の広がりを検出。当初は撹乱とも思えたが、精査の結果、竪穴であることが判明した。〔重複関係〕他遺構との重複なく、単独の遺構である。〔形状・規模〕南側が僅かに調査区外に延びるが、確認部分から見て東西3.1m・南北2.2mの方形を呈するものと思われる。〔堆積土〕地山ロームブロックを含んだ暗褐色土の単層で、人為堆積の埋め戻し土である。〔壁・床面〕壁は八戸火山灰上層に相当するが、南壁では不整合な細砂層が露出する。壁高35~40cm、直立気味である。床面は概ね八戸火山灰上層の範疇とは思われるが、やや下層のシラスに近い。南壁寄りの床面では細砂層が露出する。〔柱穴〕床面で10個検出した。p1~5、p7~10は壁に沿って配置されており、p6は床面の中央西寄りに位置している。

遺物(第65図)〔金属製品〕古銭1点(260)のみである。いわゆる雁首銭で、近世に属するものである。

時期 堆積土 (=埋め戻し土) から近世の雁首銭が出土していることから、廃絶時期は近世まで下るであろうが、具体の年代を推測する根拠が薄い。構築・機能期は中世まで遡る可能性もある。

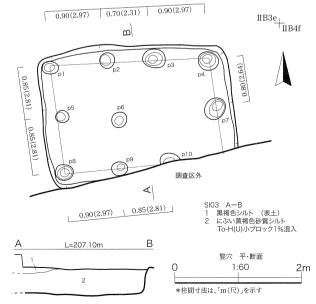
S I 04 竪穴建物跡

遺物 (第67図) 〔土器〕縄文土器 (29)。早期/物見台式か。〔陶磁器〕 陶器碗 (152)。近世肥前産の腰錆碗で ある。

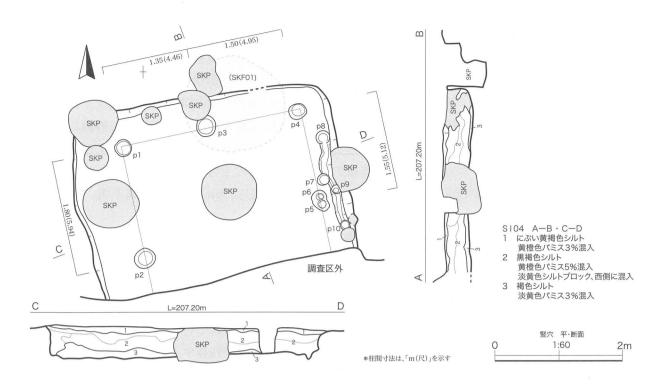
時期 近世陶器片が出土しており、埋没時期は近世と推測される。

S I 05 竪穴遺構

遺構(第65図) 〔位置・検出状況〕 S C 01- b 平場北西部の調査区境、 II B 4 g ~ II B 4 f グリッドに跨って位置する。 〔重複関係〕重複する遺構はない。 〔形状・規模〕南側のごく一部を検出したに過ぎない。確認した部分から考える



第63図 S I 03



第64図 S I 04

と、方形基調であろうが、全体の形状・規模は不明である。規模は東西2.7m以上×南北0.8m以上で、 壁高35cm、地表面から床面までは深さ70cmである。〔堆積土〕細分したがあまり違いはなく、全体と して黒褐色土の単層に近い。自然堆積であろう。〔壁・床面〕壁・床面ともに八戸火山灰上層に相当 する。西壁はやや外傾、南壁は直立ぎみで、床面はほぼ平坦である。〔柱穴〕検出されていない。

遺物(第67図)〔土器〕須恵器壺(133)。同一個体と思われる須恵器・長頸壺片4点がまとまって出土したが、結果的に接合しなかったため口縁部破片1点のみ図示した。

時期 他の竪穴遺構と同じく、中世〜近世初と捉えたいが、堆積土から須恵器が出土しており、古代の竪穴住居跡である可能性もある(その場合、竈は北壁側か)。

S I 06 竪穴遺構

遺構(第65図)〔位置・検出状況〕SC01- b 平場中央付近、ⅢB5gグリッド南東隅に位置し、 橙色パミス(二ノ倉火山灰?)を疎らに含んだ暗褐色土の小型方形プランを検出した。〔重複関係〕 SA02およびその他の柱穴と重複している。〔形状・規模〕南北2.3m×東西1.8mの方形を基調とす る。若干の歪み、不整な部分が見られるが、壁の崩落によるものと思われる。〔堆積土〕壁際に地山 崩落土が、その上位には暗褐色土が堆積している。自然堆積である。〔壁・床面〕壁は八戸火山灰上 層に相当する。上位はロームであるが、中~下位は砂層が露出している。壁高は最大52cm。床面に は砂層が露出し、特に堅く締まるわけでもなく、本来の床面の状態は不明である。〔柱穴〕検出され ていない。床面が砂だったことで認識できなかったかもしれない。

遺物(第67図) 〔土器〕縄文土器(30・31)、土師器甕(121)。

時期 出土遺物は異時期混入と思われ、具体の時期を推測する資料を欠く。形態から見て他の竪穴 遺構と同様のものと看做し、ここでは中世〜近世としておく。

S I 07 竪穴建物跡

遺構(第66図)〔位置・検出状況〕調査初期の試掘の際、SF01裾部分に設定したT10において壁

の立ち上がりの一部を確認した。 $SF01 \cdot SD04$ の精査において、SF01裾を截るプランを確認し竪穴遺構として認定した。〔重複関係〕SF01および $SD04 \sim 06$ と重複し、前者を截り、後者に截られている。また北に隣接するSI08の南側部分を壊している。〔形状・規模〕東側がSD04に截られて、西側の僅かしか残っていない。残存部は南北3.95m、東西1.2mである。〔堆積土〕にぶい黄褐色土の単層である。〔壁・床面〕残存する西壁は、SF01法面を截りつつ床面から外傾して立ち上がる。壁高は35cmである。床面はSD04側へとやや傾斜している。〔柱穴〕床面および想定建物範囲内で10個検出した。これらには隣接・重複するSI08の柱穴を含むものである。当建物跡に付随する柱穴は、配置から見てpit $1 \sim 7$ であろう(pit 4 は不確実)。pit $8 \cdot 9$ は帰属不明。

遺物出土しなかった。

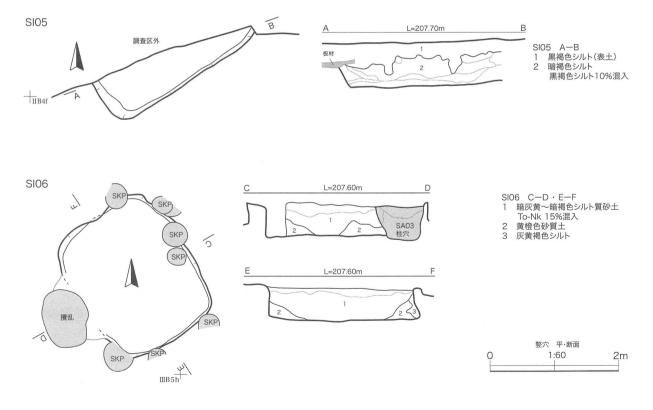
時期 重複関係からSD04より古く、中世に属するものと推測される。

S I 08 竪穴建物跡

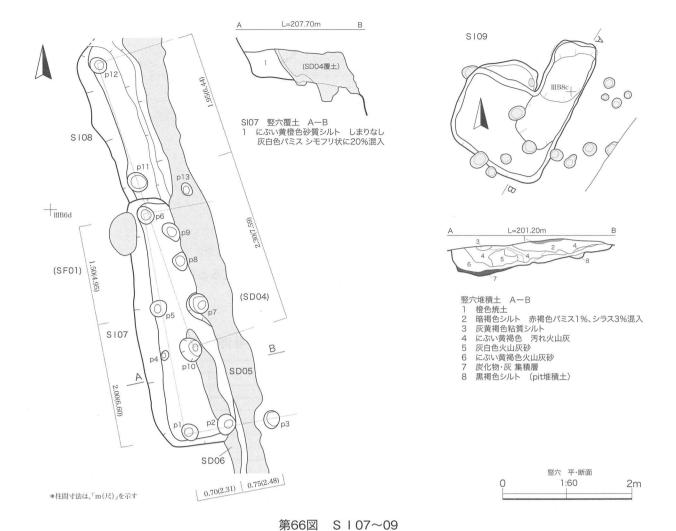
遺構(第66図)〔位置・検出状況〕SF01 裾部分で、SI07 とともに検出した。当初は SI07 と同一のものと考えたが、精査の結果、それとは別の竪穴であることがわかり、SI08 として認定した。〔重複関係〕SF01 および SD04 と重複しており、前者を截り、後者に截られている。また南側は SI07 により截られている。〔形状・規模〕SD04 による破壊で西側 2.5m ほどが残存するのみである。〔堆積土〕上述の調査過程だったため堆積土の記録がなく、詳細は不明である。〔壁・床面〕床面は SI07 より高く、約 10cm の段差をなしている。ほぼ平坦である。壁は SI07 と同様に緩く外傾しており、壁高は約20cm である。〔柱穴〕床面で pit11・12 の 2 個を検出した。また、SI07 床面の pit10 は位置関係から見て本建物の柱穴と解釈した。

遺物出土しなかった。

時期 重複関係から中世と捉えられる。

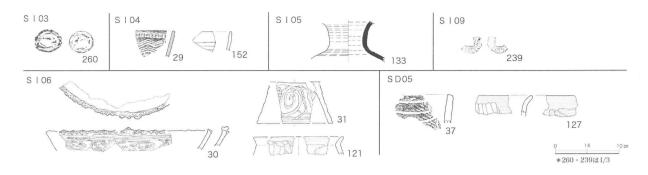


第65図 SI05・06



S I 09 竪穴遺構

遺構(第66図) [位置・検出状況] 調査区下段高位面、ⅢB9 c~ⅢB9 d グリッドに位置する。SC02の近世整地層を除去した際、焼土を含んだ黒褐色土の溝状プランを検出し、カマド状遺構に類するものと考えた。しかし精査の過程で掘り広がり、結果的に方形の小型竪穴状掘り込みが付随することがわかった。調査時は他の竪穴遺構と様相が異なっていたため性格不明遺構としていたが、整理段階で竪穴遺構として一括することとした。 [重複関係] 近世と思われる柱穴に截られている。 [形状・規模] 溝状の掘り込み部分と、それに付随する方形の竪穴状掘り込みからなる。異なる遺構の重複の可能性も考えたが、断面で見る限りでは判然とせず、一体のものと判断した。竪穴部分は1.7m×1.5mの方形平面であるが、北側に張出し様の浅い掘り込みが付く。溝状部分は長さ1.1m・幅0.65mで、竪穴部東隅付近から北東方向へと張出している。 [堆積土] 最初に検出した溝状の張出し部分の断面のみ記録したため、竪穴状掘り込み部分の堆積土については詳細不明である。溝状掘り込み部分の最上位(検出面)には厚さ5cmの焼土層が形成されている。 [壁・床面] 竪穴状部分の床面には凹凸があって中央付近が盛り上がっている。壁は床面から緩く立ち上がった後、外傾する。溝状部分の床面(底面)は北東方向へと傾斜し、先端部分で最も深くなる。先端部分では底面が広がって壁は内彎している。 [柱穴] 床面 5 個、周辺で 9 個が検出されたが本遺構より新期のものであり、本遺構に伴うものではない。



第67図 遺構別出土遺物(4)

遺物 (第67図) 〔金属製品〕堆積土から無文銭 1 点 (236) が出土した。 時期 近世の整地層に被覆されていること、および出土遺物から見ると中世の遺構である。

(8) 焼 土 遺 構

調査区上段において7基検出した。検出層位は、いずれも平場遺構面の八戸火山灰上層である。

遺構名	位置	平面形	層厚	備考
S N 0 1	S C 01- a / 1 A 10 h グリッド	不整形 40×30cm	6 cm	
S N 02	S C 01- b / II B 4 g グリッド	楕円形 64×60cm	16cm	
S N 03	S C 01- b / II B 4 f グリッド	三角形 70×64cm	12cm	
S N 0 4	S C 01- c / Ⅲ B 2 d グリッド	不整形 116×68cm	10cm	
S N 05	S C 01- c / Ⅲ B 2 e グリッド	楕円形 44×26cm	6cm	
S N 06	S C 01- b / II B 6 f グリッド	精円形 50×32cm	8cm	
S N 0 7	S C 01- b / II B 6 g グリッド	不整形 30×25cm	1cm	焼成弱

これらに伴う遺物はなく、時期を特定する資料を欠く。すべて柱穴に截られており、平場普請前に 存在していたより古い遺構の炉や竈の痕跡という可能性もあるが明らかではない。

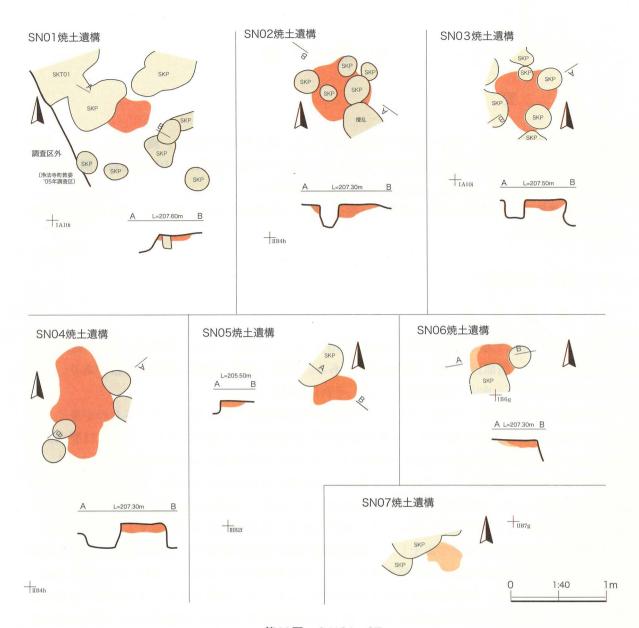
4 近代以降

SB 078 掘立柱建物跡

遺構(第55図)〔位置〕下段平場面北側、表土直下で検出した。〔規模〕梁行3間×桁行7間、21間の建物である。〔柱穴〕略円形の柱穴32個で構成される。開口部径60~70cm、深さ15~25cmである。このうち29個に砕石が埋め込まれていた。 遺物 なし。 時期 柱穴堆積土の様相から見て、近代以降に建てられた家屋跡(母屋?)である。

土蔵跡

調査区下段高位面段際に設定した試掘トレンチT-5において、表土直下で石組遺構を検出した(写真図版9)。上方に平坦面を揃えた礫が方形に配列されており、その内部に拳大~人頭大の礫が敷き詰められていた(一部は県教委生文課の試掘トレンチで破壊されている)。当初は近世以前の遺構の可能性を考えたが、近隣住民からの聞き取りにより倉の基礎・地下構造部分であることが判明した。この倉は明治時代に建てられ、戦後比較的最近まで現存していたもので、近代~現代の「遺構」である。図化は省略した。



第68図 SN01~07

V 遺物

1 概 要

縄文時代、古代、中世、近世~近代の遺物が出土した。縄文時代の遺物は、縄文土器、石器、石製品がある。古代の遺物は土師器、須恵器が出土した。中世~近世の遺物は、中国産磁器、国産陶器、瓦質土器、土師質土器、土製品、石製品、鉄製品、銭貨がある。

ここでは遺構内出土遺物を含めて種別で一括し、概要と特徴点について述べる。個々の遺物の詳細は観察表に記載した。

2 土器・陶磁器

(1) 縄 文 土 器

〔出土状況〕縄文土器は総量で約26.74kg分が出土した。内訳は、完形・準完形6個体、破片1,369点 [口縁部122点、胴部1,206点、底部41点]である。早期、前期、後期、晩期の土器があり、量的には後期後葉が多く、次いで前期前葉~中葉、それ以外は少ない。

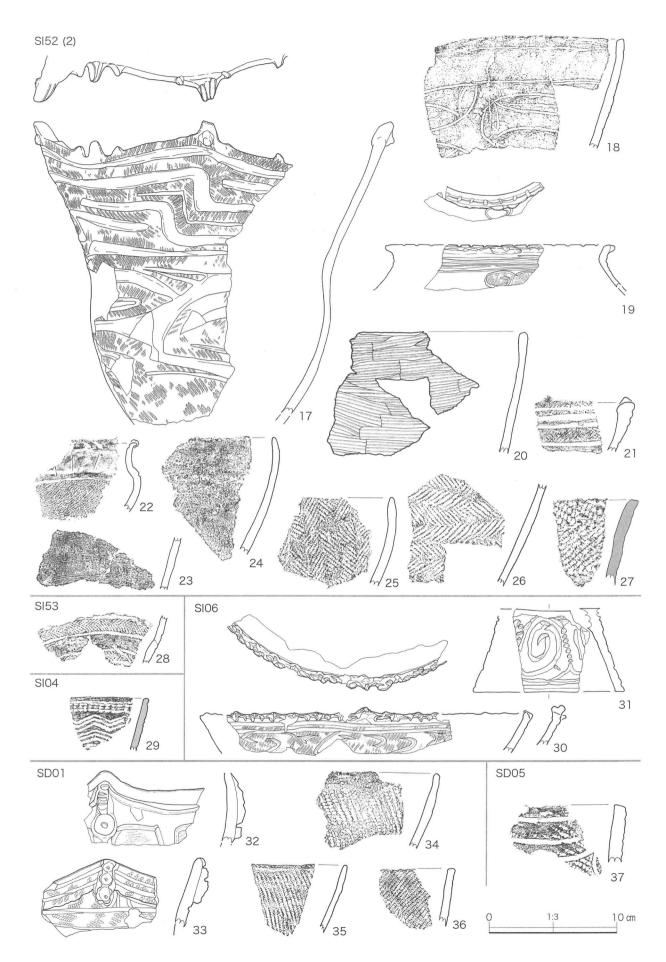
遺構内出土土器(第69~71図1~61) 中世以降の遺構堆積土から出土しているものが多く、S I52竪穴住居跡出土土器を除けば、本来的な意味での遺構内出土遺物は少ない。SI11竪穴住居 跡:床面で完形および準完形の土器4~10が出土しており、後期後葉の一括性の高い資料である。13 は器厚の薄い鉢形土器であり、内面にごく僅かの赤色顔料付着が認められる。堆積土からは4単位 波状口縁の深鉢(17)や香炉形土器(14)が出土した。床面、堆積土ともに瘤の貼付は注口土器と 思われるものを除くと殆ど見られない。SI06竪穴遺構:遺構自体は中世に属するものであるが、 30・31が堆積土に混入する形で出土した。30は晩期中葉の浅鉢口縁部で、口唇には食い違う2条の 突起列が付され、胴部には雲形文が描かれている。31は台付鉢の台部分で、棒状工具による沈線・ 刺突文が展開している。時期は明確ではないが後期ではないかと推測される。SD01堀:中世の遺 構であるが、堆積土から32~36が出土した。32・33は後期前葉の深鉢口縁部である。波状口縁の波 頂部から刻み・刺突をともなう貼付隆帯が貼付される。34~36は粗製深鉢の口縁部破片で、後期に 属するものと思われる。SD05溝:37が出土した。沈線文が施されており、後期に属するものであ る。SX01配石: 堆積土から38~43が出土。42・43が前期後葉、39~41は後期後葉、38が晩期で ある。SX02配石:堆積土からは $44\sim50$ が出土している。 $45\cdot49$?が前期、その他は後期中葉~後 葉である。柱穴堆積土:51~61が出土した。56は早期、51・52・55・58・60は前期、53・57・59 は後期、54が晩期に属するものである。

遺構外出土土器(第72・73図62~120) 調査区東側、 $SC02\cdot03$ 平場の遺構面以下の $IV\sim VI$ 層から、前期前葉~中葉および後期の土器が出土した。主にIVA1hグリッドからの出土が顕著であるが纏まった出土様相という訳ではなく、疎らで散発的に出土する状況であった。接合した資料は少なく、大部分が破片資料に止まる。実測個体では、 $62\sim64\cdot66\cdot68\cdot69$ は前期、65は後期、67は後~晩期の資料である。 $68\cdot69$ は底部内面にも地文が施されている。

〔時期・型式〕本遺跡の出土土器は量的には少ないものの、その所属時期は早期中葉・後葉、前期 前葉・中葉、後期前葉・中葉?・後葉、晩期中葉と時間幅が比較的広い。先に述べた出土土器を時期



第69図 出土遺物(1)縄文土器

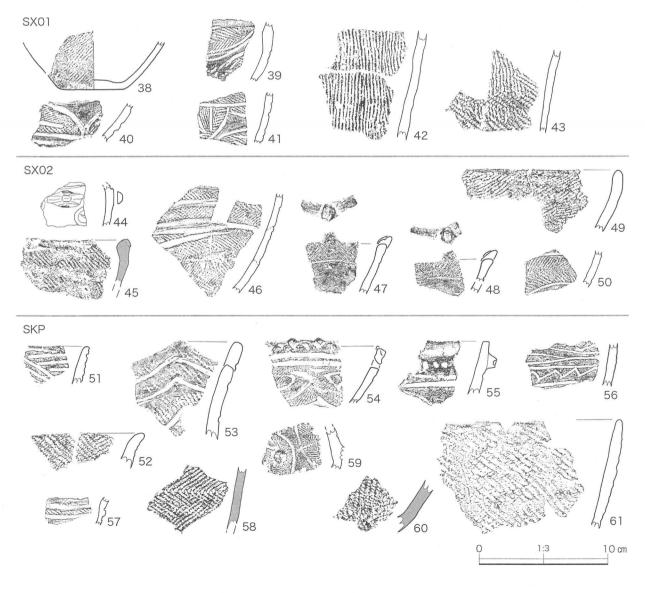


第70図 出土遺物(2)縄文土器

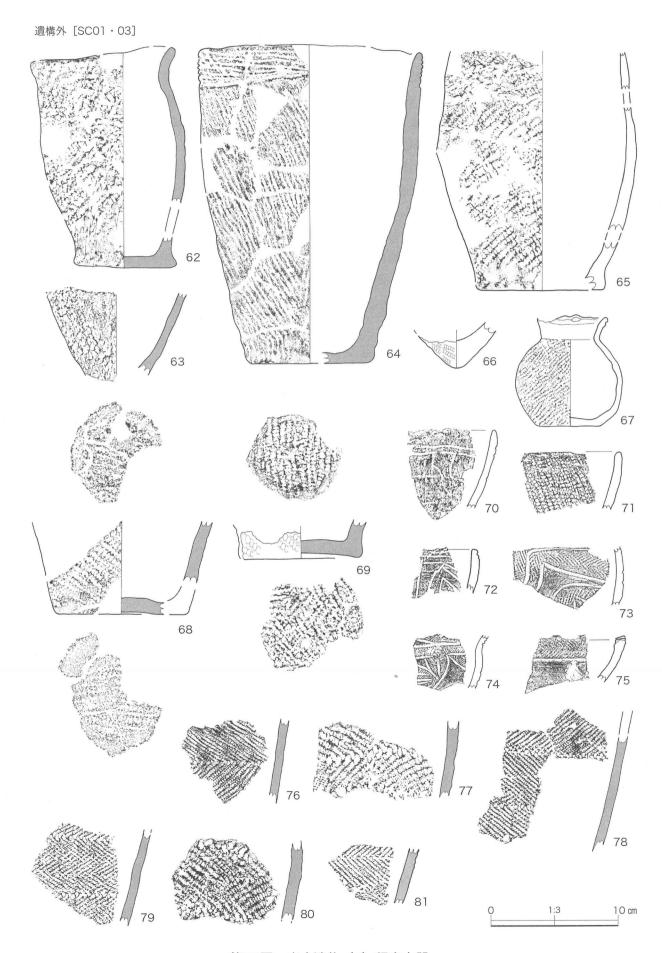
的・型式的に位置づけておく。

〈早期〉 前葉:大新町 a 式。南部浮石層より下位のⅥ層から出土した1点のみである(119)。 V字状モチーフに横沈線を付した押型文が施されている。この類の土器は盛岡市大新町遺跡で出土しており、日計式に後続する大新町 a 式とされている(盛岡市教委1998、神原2006)。後葉:貝殻腹縁圧痕と連続する鋸歯状沈線が施された56・72・106で、物見台式に相当する。

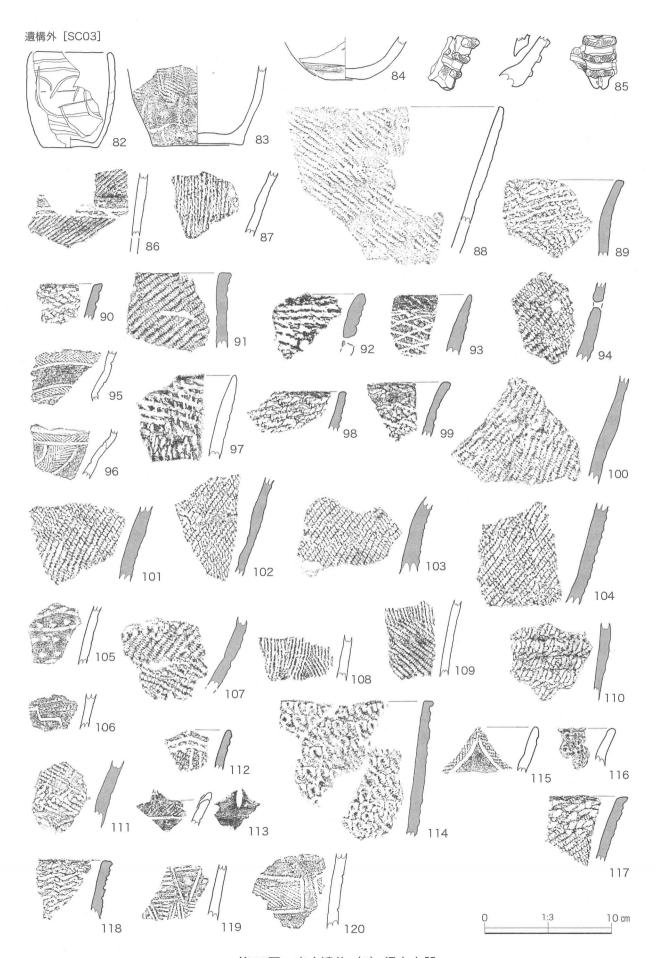
<前期> 前葉:胎土に多量の繊維を含む繊維土器である。そのうち、114および77・80は東北地方南部における大木1式に相当するものと思われる(註1)。114は口縁部から胴部にかけて重畳するループ文が施されている。左記以外の2・27・45・51・55・58・60・63・66・76・86・89・91・101・111・134?等は早稲田6類に相当するものと思われる。60・66は尖底部、63は胴部下半尖底部付近の破片である。なお、押し引き沈線の口縁部破片である29は、長七谷地3群土器か。中葉:口縁部に撚糸文を施す90・98・99等は大木2a式か。網目状撚糸文の93は大木2b式か。口縁部に隆帯が付される55については大木3式の可能性がある。円筒下層a式(28・29・30・33)。後葉:円筒下層c式(76・86)。小破片であるが、内面調整が丁寧な縦位ミガキであり、内面に凹凸の残る円筒下層a式とは趣が異なる。



第71図 出土遺物(3)縄文土器



第72図 出土遺物(4)縄文土器



第73図 出土遺物(5)縄文土器

<晩期> 中葉:大洞C₂式。SI52堆積土上位(19)、SI06堆積土(30)、柱穴堆積土(53)の 3点。

(2) 土師器・須恵器

今回の調査では明らかに古代に属すると判断できる遺構はなく、中世以降の平場・竪穴・堀・柱穴等の堆積土から出土したものばかりである。出土地点は主に高位調査区(SC01面)が多く、当該部分に古代の遺構が存在していたものの普請により消失した可能性が示唆される。

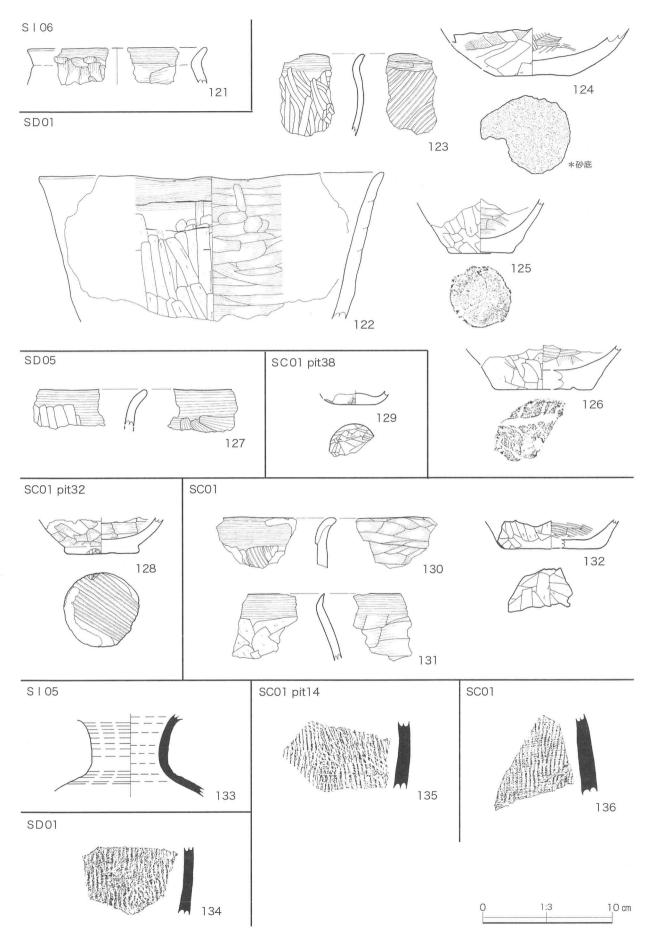
< 土師器> 出土した土師器は甕を主体とし、他に坏および堝(鍋)と思われるものがある。小破片ながら約130点出土しており、12点を掲載した。SI06竪穴遺構:中世の遺構であるが、堆積土から甕の口縁部破片121が出土した。SD01堀:堆積土から122~126が出土。122は口縁が外傾する器形から堝と捉えられる(松本1990)。他は長胴甕である。124は底面全体に砂粒が付着しており、いわゆる「砂底」の土師器である(註2)。125・126は木葉底で、126では底部についた木葉の主筋に沿って、工具による鋭角な切り込みが入れられている。SD05溝:甕の口縁127が出土。柱穴:128・129が出土。128の甕は底部外面にハケメ、体部は内外面ともにヘラナデ調整。129は底部外面に再調整のヘラケズリが入る。器形から見ると坏か。遺構外:SC01堆積土[盛土]から130~131が出土。132は底部再調整のヘラケズリ。これらは大雑把には平安時代に属する資料であることは確実だが、出土土師器に坏が殆ど含まれず、甕の口縁部破片も少ないため具体の年代ははっきりしない。坏が僅少な組成であることから平安時代後半期、かつ堝が伴うことからその下限は10世紀末頃と大まかには考えられるのではないか(註3)。

(3)陶磁器

中国産磁器、国産陶磁器が出土した。出土した資料は小破片が多く、産地・年代の同定が難しいものばかりである。可能な限り、産地等について一応の見解は記すが、情報が余りに少ないため不確定要素が多いことを付記しておく(註4)。また168~170は、小破片で図化が難しいことから写真掲載としたものである。

137~146は磁器である。青磁(137~143・168~170)、白磁(144)、青花〔染付〕(145・146)等がある。139・142・143・168・169は龍泉窯産青磁と推測される。139は染付の蓮弁文を施されており、15世紀末の年代観を与えられる。170については近世以降の国産品(肥前産?)か。144の白磁は時期・産地ともに不明である。青花(染付)のうち、146の丸皿は16世紀後半の漳州窯系と思われる。145の端反皿については確実ではないが、漳州窯系か。

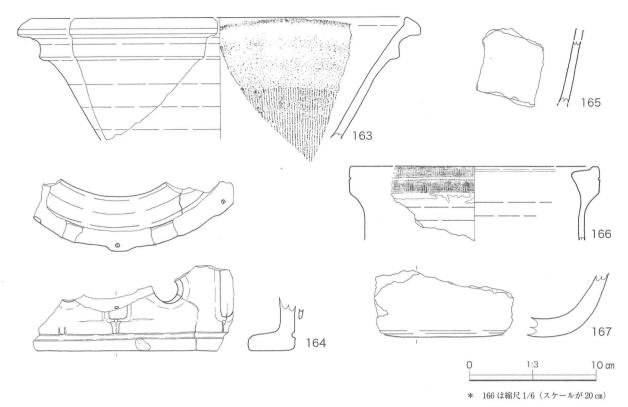
147~163は陶器で、いずれも国産品であろう。そのうち、147~151については美濃産の可能性



第74図 出土遺物(6)土師器・須恵器



第75図 出土遺物(7)陶磁器



第76図 出土遺物(8)陶磁器・土師質土器・瓦質土器

が高い。149・150は碗類の底部(畳付)破片で、美濃大窯後半期(皿~IV期:16世紀後半)に属する。151は土瓶類の蓋で、美濃登窯期のもので近世に属する。152~158は肥前産陶器か。152は腰錆碗の口縁部。154は碗の腰付近で、灰釉の流し掛け。158は皿で、内面には目跡2箇所(胎土目?)が残る。内面は釉の掛け分けで、内面中央は灰釉、周縁は鉄釉。櫛目状工具による掻き落としが見られる。外面は無釉露胎である。160~163は擂鉢である。160・161は出土状況・釉の様相から同一個体と思われる。肥前産か。162・163は産地不明である。

(4) 土 師 質 土 器

2点(164・165)が出土した。164は何らかの器種の台部分にあたるものである。円形の透かし 孔2箇所、細い縦位貫通孔(紐通穴?) 2箇所が見られる。全体形が類推できないので具体の器種は 不明である。165は器表面に煤が付着した薄手の破片で、碗形土器の破片か。

(5) 瓦 質 土 器

166・167の2点出土した。166は口縁部が凸帯状に肥厚し、口縁に沿って雷文帯2段が巡っている。167は底部破片で、底面は鍋底状に平坦である。166と167は接点がないものの、同一個体、もしくは同一器種の破片である。器種は明確ではないが、おそらく火鉢に類するものと思われる。産地・年代ともに不明であるが、166に類似する瓦質土器が花巻市笹間館跡で出土しており、15~16世紀代との年代観が与えられている(高橋1988)。

註

- (1) 東北地方北部における表館式においてもループ文の施文が認められることから、同式の可能性もある。
- (2)「砂底」土器は底部外面に砂粒を付着させた土師器・須恵器で、その分布圏は東北地方北部から北海道道南に限定される

(櫻田 1997)。器種は主に甕が多いが、坏・堝等の他器種でも見られる。岩手県内における「砂底」の出土例は安比川・馬淵川流域で特に多く、浄法寺町内では本遺跡に近い桂平 II 遺跡の他、飛鳥台地 I、広沖、五庵 I・II、田余内 I の各遺跡で「砂底」の土師器甕が出土している。なお、櫻田隆氏は「砂底」と土師器堝の分布圏が重なり合うことから、両者が関連性をもつことを示唆している(櫻田・前掲書)。

- (3) 松本建速氏によれば、当地域において堝は9世紀前半に出現し、 $11\sim12$ 世紀に鉄鍋が普及するとともに消滅したと指摘されている(松本 1990 ; 72 頁)。
- (4)瀬戸美濃系陶器および貿易陶磁器の一部については、瀬戸市埋蔵文化財センターの岡本直久氏、金子健一氏、河合君近氏に鑑定をいただいたが、上述のとおり情報の少なさゆえ各氏の見解が異なる点もあった。記載にあたってはこれらの見解を参考としたが、千葉が独自に判断したものもあり、本文記載に誤記ある場合は千葉にその責がある。

参考文献

今井 敦 1997 『青磁』中国の陶磁4、平凡社

神原雄一郎 2006 「盛岡における縄文時代早期前葉から中葉にかけての土器」『縄文時代早期中葉土器群の再検討 - 資料集 - 』 海峡土器編年研究会

九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』

熊谷常正 1983 「岩手県における縄文時代前期土器群の成立」『岩手県立博物館研究報告』第1号

櫻田 隆 1997 「底部に砂粒を付着させる土師器とその分布範囲について」『蝦夷・律令国家・日本海 – シンポジウムⅡ・資料集 – 』日本考古学協会 1997 年度秋田大会実行委員会

高桑弘美 2003 「5 瓦質土器」『中世奥羽の土器・陶磁器』東北中世考古学会編、高志書院

高橋與右衛門 1988 「瓦質土器」『笹間館跡発掘調査報告書』岩文振埋文調報 第124 集、岩手埋文

西田宏子・出川哲朗 1997 『明末清初の民窯』中国の陶磁 10、平凡社

長谷部楽爾・今井敦 1995 『日本出土の中国陶磁』中国の陶磁 12、平凡社

藤沢良祐 1993 『瀬戸市史 陶磁史編 四』

星雅之・茅野嘉雄 2006 「十和田中掫テフラからみた円筒下層 a 式土器成立期の土器様相」『植生史研究 特別第2号 - 三内 丸山遺跡の生態系史』日本植生史学会

本間 宏 1987 「縄文時代後期初頭土器群の研究(1)|「よねしろ考古」第3号

松本建速 1990 「東北北部の平安時代のなべ」『紀要XI』 岩手県埋蔵文化財センター

三浦謙一 2007 「北東北3県における縄文時代草創期・早期の様相 -その1-」『紀要XXⅥ』岩手県埋文

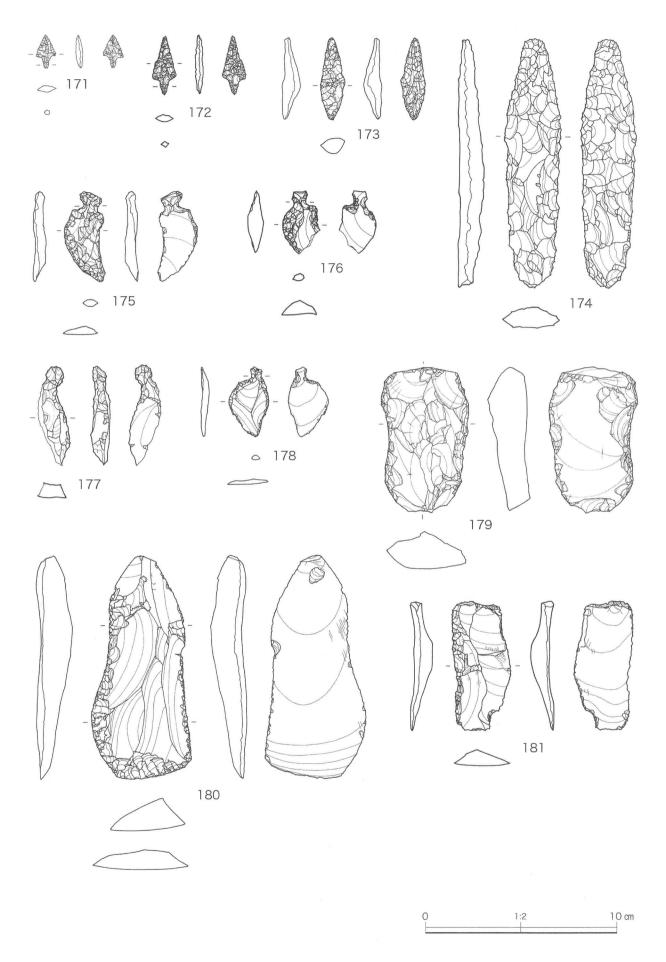
武藤康弘 1988 「東北地方北部の前期縄文土器群の編年学的研究」考古学雑誌 74-2

武藤康弘 1991 「東北地方北部の前期縄文土器群の編年学的研究Ⅱ」考古学雑誌 76-3

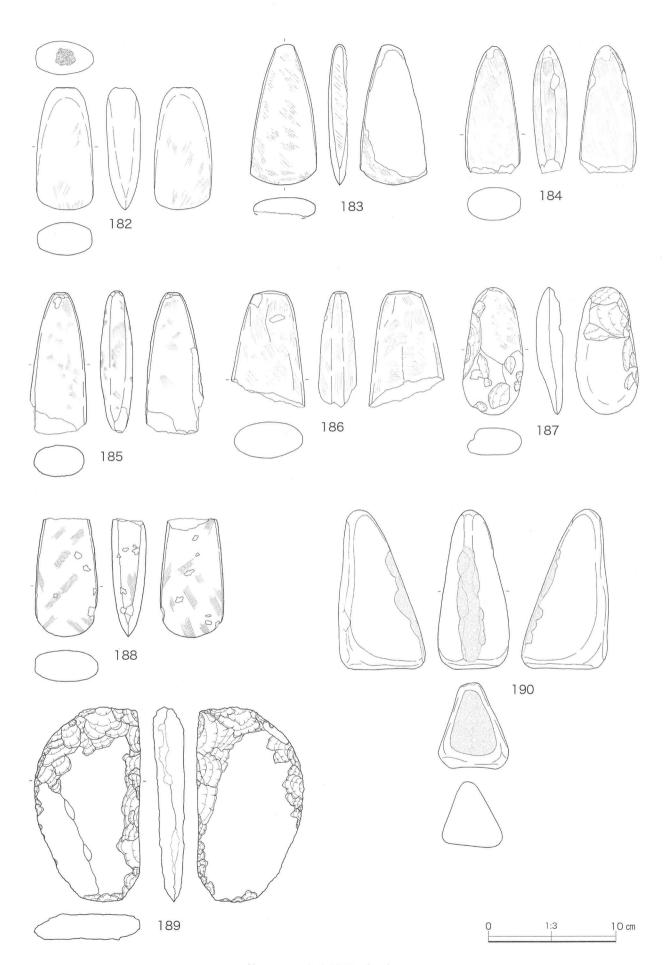
盛岡市教委 1998 『大館遺跡群 大館町遺跡・大新町遺跡 - 平成8年度・9年度発掘調査概報 - 』

3 石 器

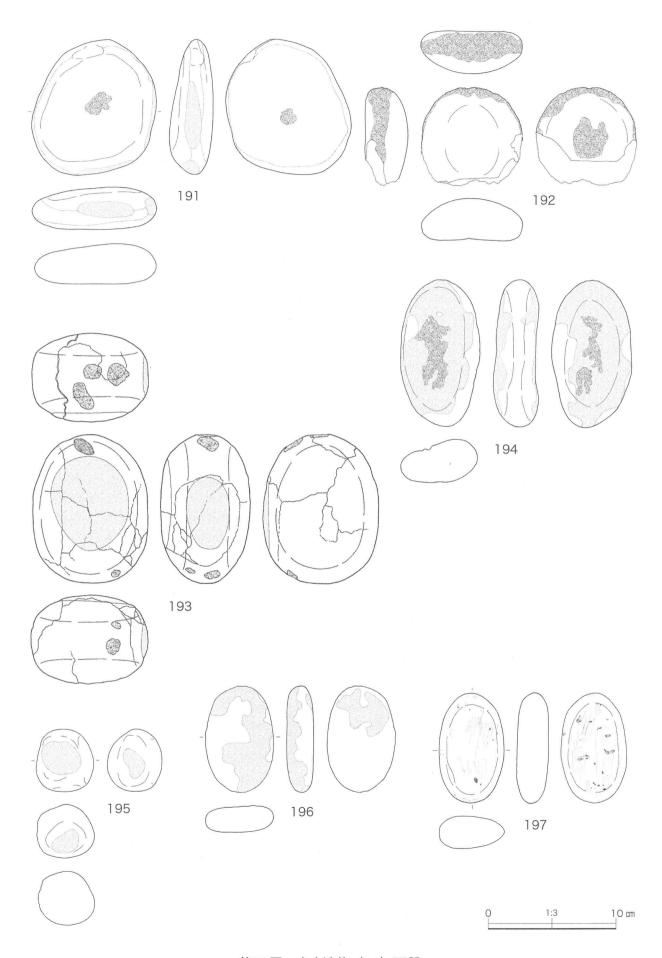
65点出土しており、30点を掲載した。また他に剥片約30点が出土している(SX04出土剥片を除く)。いずれも縄文時代のものと思われる。第77図(171~181)は剥片石器である。石鏃:171・172。小形の有茎鏃である。石錐:173で、石鏃の可能性もある。尖頭器:174。尖端がやや鈍いが、形状から尖頭器とした。石匙:175~178。いずれも縦形である。石箆:179。削器:180・181。第78~80図(182~200)は礫石器である。磨製石斧:182~188。183は裏面全体、184~186は刃部、188は基部を欠失している。187は敲打痕が残り、研磨も不充分なもので、製作工程での未完成品と見られる。敲磨器類:189~198。189はいわゆる半円状扁平打製石器である。扁平礫の片側縁に、



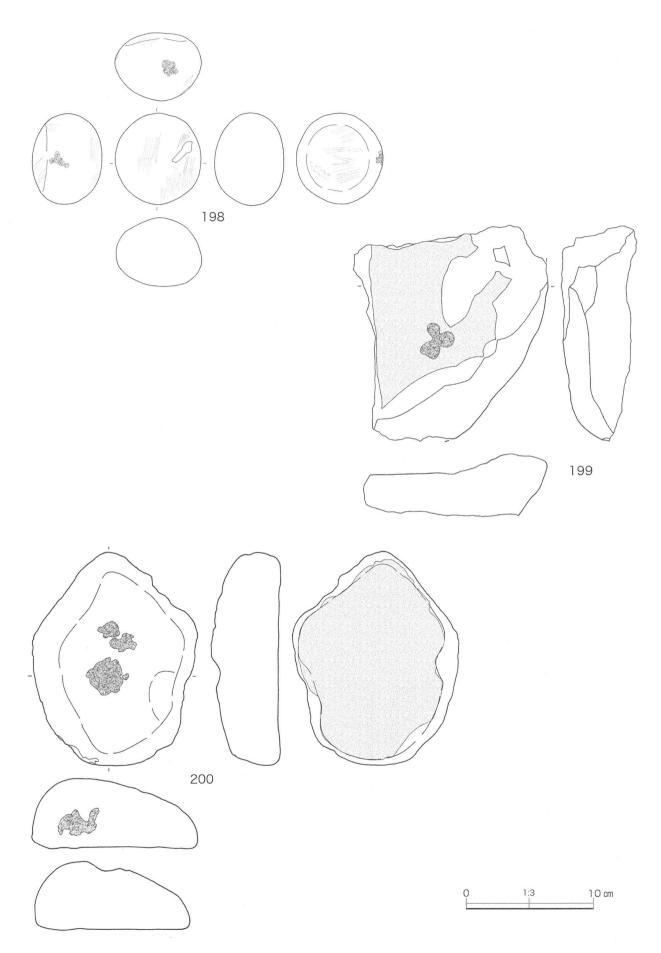
第77図 出土遺物 (9) 石器



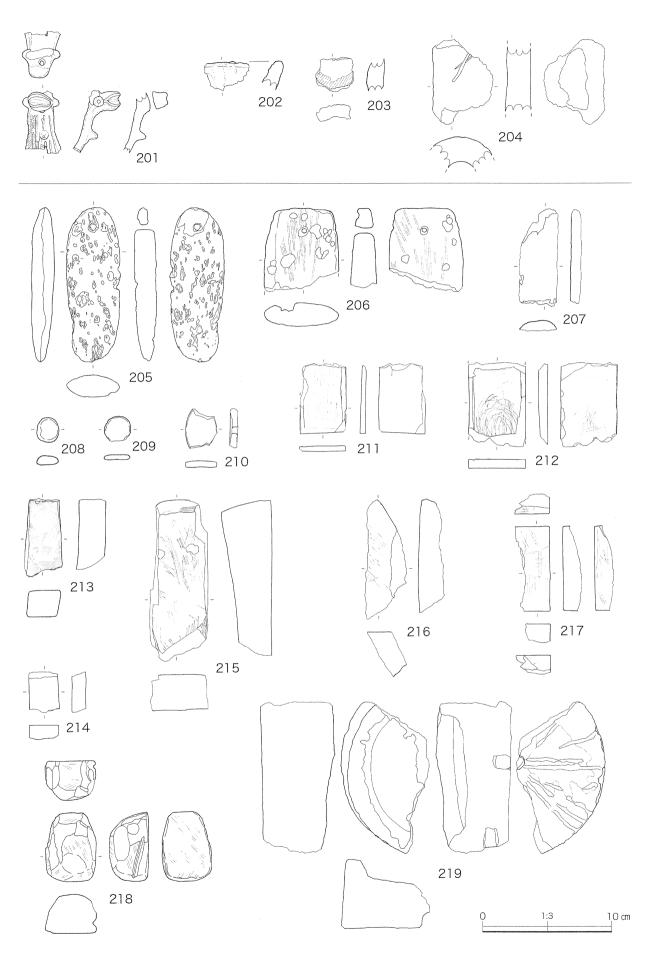
第78図 出土遺物(10)石器



第79図 出土遺物(11)石器



第80図 出土遺物(12)石器



第81図 出土遺物(13)土製品・石製品

剥離による幅狭い機能面(磨り面)を作り出している。当該器種は円筒土器文化圏に特有なものとされている。本遺跡でも円筒下層a式土器が出土していることから、それらに伴う石器であろう。190は三角錐状の礫の側縁を使用した磨石であり、いわゆる特殊磨石と呼称されるものである。191~198は円礫や楕円礫を使用したもので、磨り・敲き・凹み等の使用痕跡が見受けられる。石皿・台石:199は石皿、200は台石と便宜的に分けたが、形態的にはあまり違いがない。ともに磨りおよび敲き痕跡がある。

4 土 製 品

4点出土した(第81図201~204)。201はSI11竪穴住居跡の床面出土である。下半部を欠失しており全体形が不明であるが、目・口・耳と見える部分(=頭部?)があり、何らかの動物を象形した動物形土製品と解される。頭頂部?にも欠損した跡があり、角?があったとも思える。鹿を表現したものか。202は表面に金属質(銅?)の融着が見られる土製品破片である。胎土は陶質である。小破片で器種は明らかではないが、坩堝の可能性が高いものと捉えた。203・204は羽口の破片である。201は縄文時代、202~204は古代以降に属するものである。

5 石 製 品

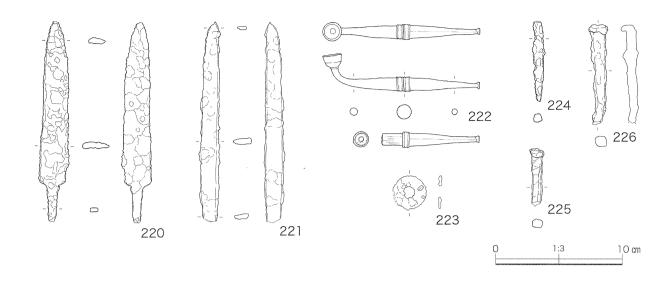
15点出土した(第81図205~219)。205・206は軽石製装身具である。205はほぼ完形、206は下側が欠損している。2点ともに、研磨により整形され、長軸片側に貫通孔1個が穿たれている。正面観は、205が長楕円形、206はやや角張っており、形状は異なる。207は石剣か。折損により上下、節理によって裏面全体が欠失している。残存部分は丁寧に研磨されている。器種は明らかではないが、石質を加味すると石剣類と思われる。208・209は小形扁平な黒色の石製品で、碁石と思われる。碁石状の製品は本遺跡周辺では浄法寺城跡で出土例があり(中村2003)、また土製品ではあるが舘 II遺跡でも出土している。210は中央に貫通孔を有する扁平な円形石製品である。211・212は板状石製品である。片面両側縁が段状となり、その間に調整によるものか無数の擦痕が見られる。213~218は砥石である。213~216は1面のみ、217は2面、218は全面に擦痕がある。219は石臼の上臼部である。欠損しており、全体の1/4程度しか残っていないが、中心付近に軸受孔、側面に挽木孔が確認できる。使用に伴う摩滅により、臼面の溝は不明瞭となっているが、一部痕跡が残る部分で見ると3本単位の溝が刻まれていたようである。205~207は縄文時代、208~219は中近世のものと考えられる。

参考文献

中村 裕 2003 「浄法寺城跡」『中世糠部世界と南部氏』七戸町教育委員会編、高志書院

6 金属製品

刀子、煙管、釘、鎌、和鋏など約50点出土しているが、大部分が表土層からの出土で、時期は明確ではないが中世以降、近現代までのものである。うち7点を掲載した(第82図)。220・221は刀子である。220は完形に近く、刀身に厚みがあるナイフ形を呈しており、刃渡り13cm、茎部長2.5cm程である。221は茎側が欠損しており、全長不明である。刀身は細身の平造りである。222は煙管で、ラウ



第82図 出土遺物(14)金属製品

を切断して雁首と吸口を溶着した「延べ煙管」である。全体の形状や補強帯の存在から見て、古泉弘氏の編年(古泉1987)における第4期=18世紀前半代に比定される。223は器種不明の鉄製品で、円環状を呈する。鐚銭に類似するが、明らかにそれとは印象が異なっている。224~226は釘である。224は角釘、225・226は折頭釘か。

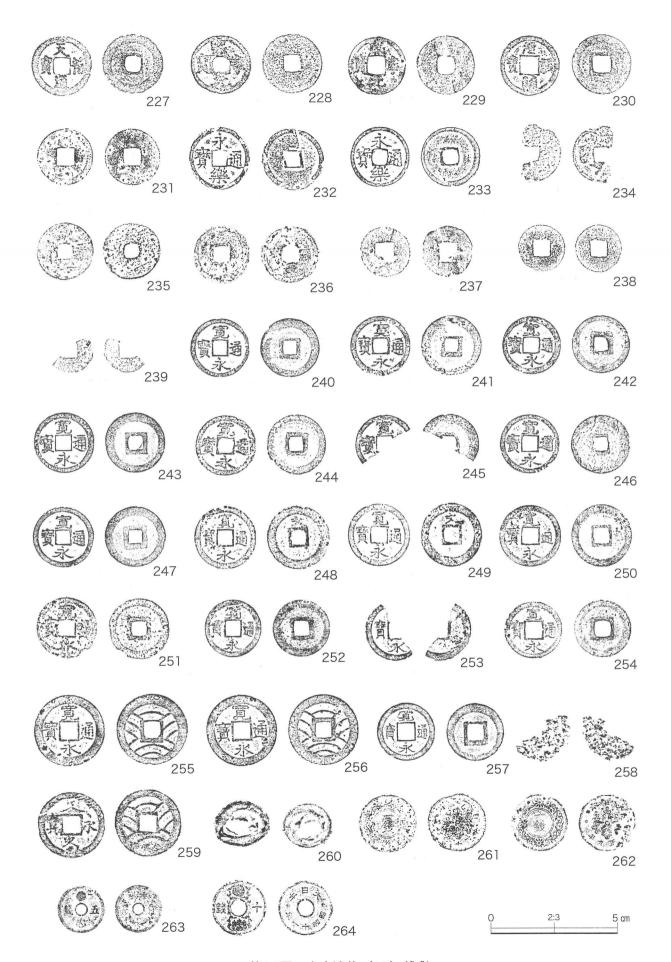
参考文献

古泉 弘 1987 『江戸の考古学』考古学ライブラリー 48、ニューサイエンス社 棟方武城 2004 『日本の甲冑・武具』東京美術

7 銭 貨

38点出土した(第83図)。中世に属すると思われるもの13点(227~239)、近世に属するもの21点(240~260)、近代 4点(261~264)である。中世の銭貨は主として S C O 1 平場の柱穴堆積土から出土している一方、近世の銭貨は下段平場から出土している。

227~234は中国の渡来銭、もしくはその鋳写銭である。227は天禧通寳(初鋳1017年)、228・229は熈寧元寳(初鋳1068年)、230は元祐通寳(初鋳1086年)で、いずれも北宋代の中国銭である。231は銘不明瞭ではあるが、字体から見て北宋銭「聖宋元寳」(初鋳1101年)の鋳写と思われる。232・233は本銭で明代の「永楽通寳」(初鋳1408年)である。234は小形・軽量、約半分が欠失しているが「永」の銘が見えることから永楽通寳の鋳写銭と思われる。235・236は無文銭、237~239は輪銭である。本銭は232・233、それ以外はいわゆる鐚銭である。236はS X 03堆積土、239はS C 01の撹乱層から出土し、その他はS C 01の柱穴堆積土から出土している。以上は中世~近世初頭に属するものと推測される。240~257は寛永通寳である。240~247は銅一文銭「古寛永」(寛永通寳1期;初鋳1636年)である。242~246の5点はS C 02pit44の柱痕部堆積土から一括出土している。地鎮的な儀礼によるものか。249~254は銅一文銭「新寛永」である。うち、248・249は背に文銘を有する2期「文銭」(初鋳1697年)、その他は3期(初鋳1767年)に属するものである。255・256は真鍮四文銭、257は鉄一文銭である。前者は11波の背紋から18世紀後半、後者は18世中頃に属するものである。258は鉄銭であるが錆化著しく、銘は読み取れない。寛永通寳鉄一文銭か。259は文久永



第83図 出土遺物(15)銭貨

寳四文銭(初鋳1863年)である。260はいわゆる雁首銭である。煙管の雁首を押し潰したもので、本来的な銭貨ではなく用途不明とされている。以下は近代に属するものである。261・262は一銭硬貨である。261は「大正11年」、262は「大正9年」の銘がそれぞれ記されている。263は五銭硬貨、264は十銭硬貨である。前者は銘不明瞭であるが、後者には「昭和11年」と記されている。

参考文献

永井久美男 2002 『新編 中世出土銭の分類図版』高志書院 兵庫埋蔵銭調査会 1998 『近世の出土銭Ⅱ-分類図版篇-』

8 接 合 剥 片

S X 04埋納遺構から石器素材剥片54点が出土した。これらの剥片の石質はすべて頁岩で、剥離面の色調や残存する自然面の様相が似ていることから同一母岩から剥離されたものと思われた。そこでこれら剥片について接合を試みたところ、接合ブロック 8 点が得られた(第84~86図)。なお、接合資料 7 の 2 点は剥離後の折損によるものである。接合した剥片数は、 3 点接合したもの 2 (接合資料 5 ・ 8)、その他は 2 点接合であり、当初の予想より接合状況は良好ではない。接合した剥片のみ図化し、その他の剥片については図化しなかった。

<接合資料1> №28・42が接合。 <接合資料2> №7・49が接合。

<接合資料3> No.26・39が接合。 <接合資料4> No.10・54が接合。

<接合資料5> No.29・40・50が接合。 <接合資料6> No.11・41が接合。

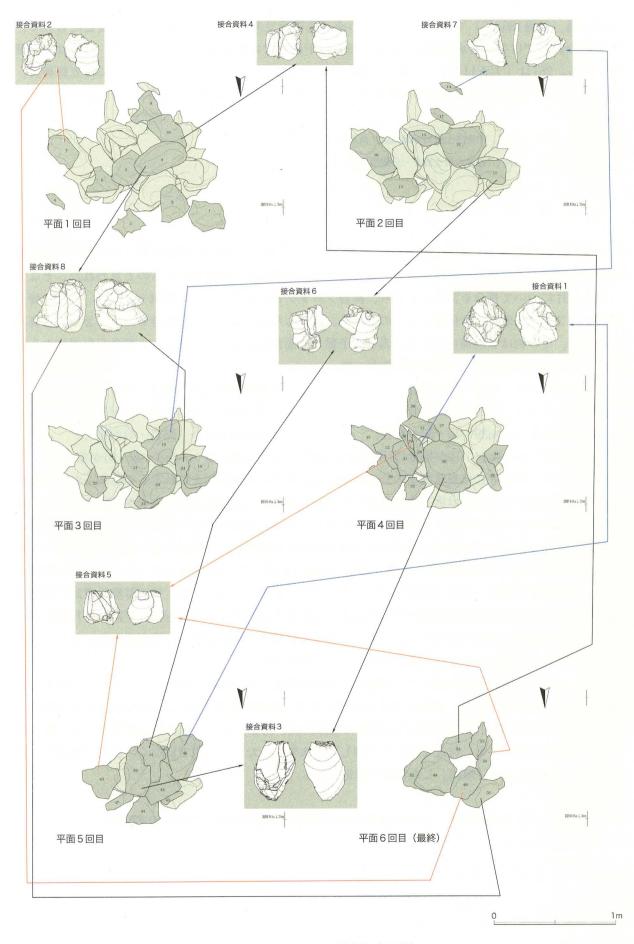
<接合資料7> №14·19が接合(折損によるもの)。 <接合資料8> №4·24·51が接合。

埋納されていた剥片には形状調整のための細かな連続する剥離が加えられるものもあるが、押圧剥離等の調整は見られず刃部は作り出されていない。一部剥片には擦痕らしきものが観察されるが、報告者の観察の限りでは使用痕とは判断できず不確実である。剥離の状況を見ると、接合資料1を除いて打面転換しているものはない(折損による接合資料7は除外)。ほぼ同じ面・方向から加撃している。接合資料1は、No.28を剥離した後、約45°打面を転換してNo.46を剥ぎ取っている。接合資料ではある程度剥片の形状・大きさが安定している。県内の接合資料としては、雫石町桜松遺跡、盛岡市湯沢遺跡、北上市石曽根遺跡の例が著名である。桜松例と湯沢例では打面転換せず同一の打面から安定した剥片剥ぎ取りが行われている。一方、石曽根例は頻繁な打面調整・転換が行われており、母岩の風化の度合いに起因するものと推測されている(酒井1992)。

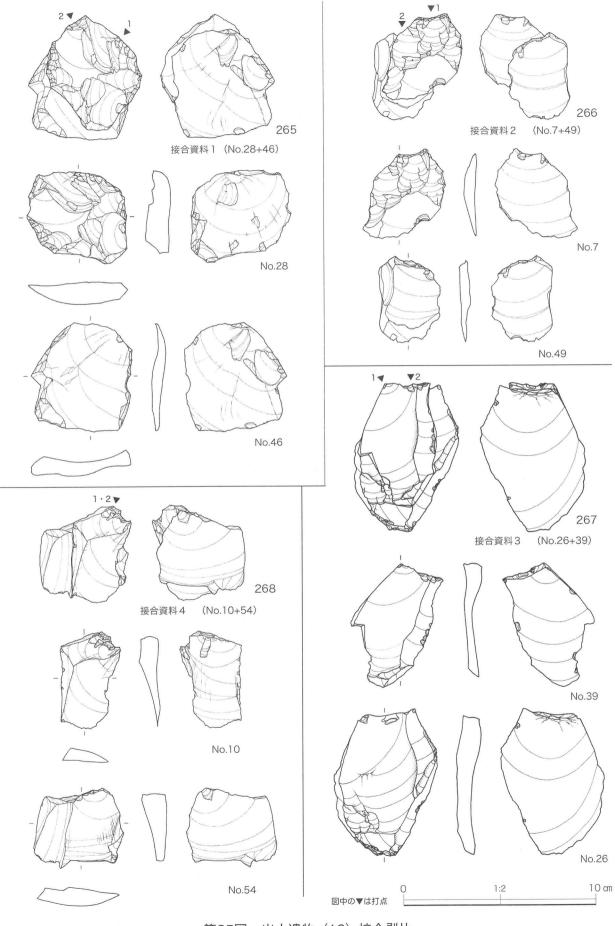
接合した剥片の位置関係を見ると、隣接する剥片が接合している訳ではなく、バラバラに置かれた剥片が接合したものである。極端な例は接合資料2で、比較的縁辺上位にあったNo.7と中央部最下位のNo.49が接合した。他の接合資料も程度の差はあれ、同様である。接合割合が低く、かつ接合剥片の位置関係に鑑みても、付近で原石を粗割して順次埋納したという訳ではなく、別所で粗割り・選別した後、持ち込んで「埋納」した状況が想定される。

参考文献

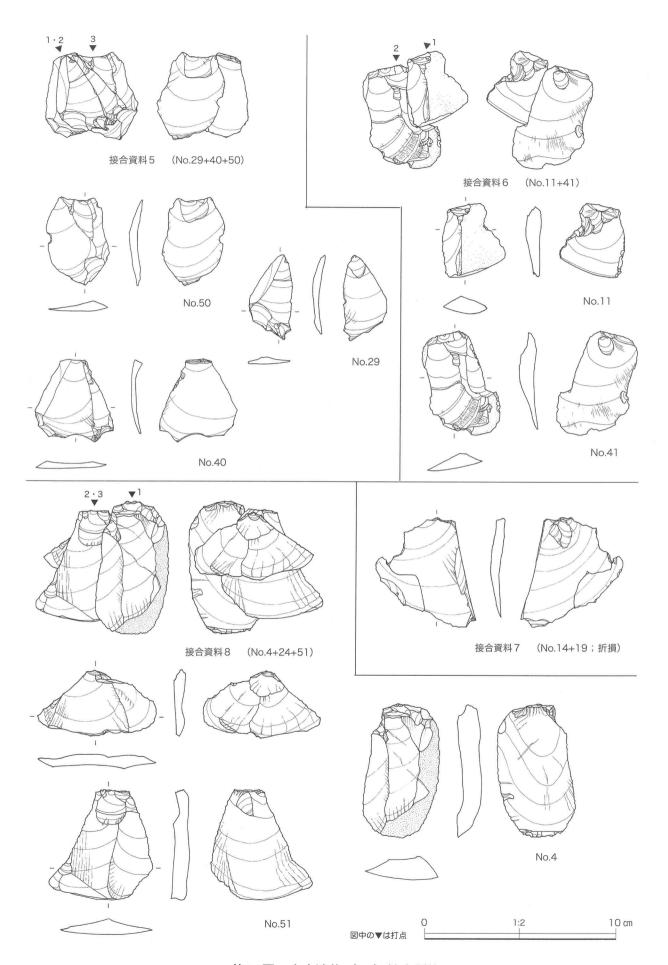
酒井宗孝 1992 「3.接合剥片資料」『石曽根遺跡発掘調査報告書』岩文振埋文調報 第165集、岩手県埋文



第84図 S X 04 剥片接合関係



第85図 出土遺物(16)接合剥片



第86図 出土遺物(17)接合剥片

第1表 遺物観察表(1)縄文土器

No.	出土地点	層位	器種	文様・特徴・施文原体 等	時期型式
1	S I 10	堆積土	壺	磨り消し縄文。内面は雑なナデ。0段多縄LR。	後期
	S I 10	堆積土	深鉢	結束羽状縄文。内面調整は雑で凹凸。0段多縄LR・RL。繊維含む。	前期/早稲田6類?
3	S I 10	堆積土	深鉢	L R.	
4	S I 11/土器No.1	床面	壺	非結束羽状縄文。LR、RL。	後期後葉/十腰内Ⅳ式
5	S I 11/土器No.2	床面	深鉢	非結束羽状縄文。施文単位短い。補修孔一対。口唇は内削ぎ。LR、RL。	後期後葉/十腰内Ⅳ式
6	S I 11/土器No.3	床面	長頸壺	口唇は内削ぎ、内側が肥厚。磨り消し縄文、帯内に崩れ気味の羽状縄文。やや摩滅。0段 多縄LR・RL。	後期後葉/十腰内Ⅳ式
7	S I 11/土器№5	床面	鉢	非結束羽状縄文。内面に焦げ付着。LR、RL。	後期後葉/十腰内Ⅳ式
8	S I 11/土器No.4	床面	壺	小形。丁寧なミガキ。多段沈線。二又の貼り瘤4単位×2段。	後期後葉/十腰内Ⅳ式
9	S I 11/土器No.7	床面	香炉形	透かしある把手状突起。二又貼り瘤。RL、0段多縄LR。 *接合した破片の色調は全く異なる(黄橙色と黒褐色)	後期後葉/十腰内Ⅳ式
10	S I 11/土器No.7 南東部、北東部	床面 堆積土	注口	注口部下に貼り瘤。LR。	後期後葉/十腰内Ⅳ式
11	S I 11/土器№9	床面直上	壺	外面ミガキ、無文。全体に黒色の付着物。	後期後葉/十腰内Ⅳ式
	S I 11/土器№8	床面直上	深鉢	口唇は内削ぎ。LR。	後期
13	S C 02/III A 3 h · i S I 11	盛土層 堆積土	深鉢	全面ナデ。薄手硬質だが脆い。内面に赤色付着物(顔料?)ごく微量残る。	後期後葉/十腰内V式
14	S I 11	堆積土	香炉形	沈線文。突起、透かし孔1対。	後期後葉/十腰内Ⅳ式
15	S I 11/北東	堆積土	注口?	二又貼り瘤。磨り消し帯縄文(襷掛け状)。	後期後葉/十腰内V式?
16	S I 11/南西	堆積土	台付鉢	0段多縄R。台部ミガキ。	後期後葉
17	S I 11/北西	堆積土	深鉢	波状口縁に突起+貼り瘤。磨り消し帯縄文(クランク形)に非結束羽状縄文を充填。0段 多縄LR・RL。	後期/十腰内Ⅳ式
18	S I 11/南東、北西	堆積土	深鉢	木葉状文の線描き。大きな黒斑。	後期/十腰内V式
19	S I 11/南西	堆積土	浅鉢		晩期中葉/大洞C1式
	S I 11/北東	堆積土	深鉢	器表全面に篦状工具によるハケメ。	後期
	S I 1/北西	堆積土	深鉢	口縁肥厚。尖った貼り瘤。帯状文。0段多縄LR。	後期/十腰内V式?
	S I 11/北西	堆積土		口唇肥厚。斜位刻み。貼り瘤(二又?)。0段多縄R。	後期
	S I 11/北西	堆積土	深鉢	百日元子。	後期前葉?
	S I 11/南東、北西	堆積土	深鉢	無文。表面にハジケ(被熱による?)。	後期
	S I 11/北側壁際	堆積土	深鉢	非結束羽状縄文、一部ナデ。LR、RL。	後期
26	S I 11/北西 S C 03/pit129	堆積土 堆積土	深鉢	非結束羽状縄文。LR、O段多縄R。	後期
27	S I 11/北西	堆積土	深鉢	非結束羽状縄文。口唇平坦。 R L 、0段多縄 L R 末端結節 ? 。繊維多量。	前期/早稲田6類
	S I 12	堆積土			
28	S C 03/IV A 2 j	遺構面	深鉢		後期/十腰内Ⅲ式?
29	S I 04/南東部	堆積土	深鉢	口唇に沿う細い押し引き沈線2条。重畳する山形沈線。	早期/物見台式
30	S I 06/南東 S C 01/pit70	堆積土 堆積土	浅鉢	口唇に小突起2列。雲形文。0段多縄RL。	晚期中葉
21	S I 06/北東	堆積土	台付鉢	 渦巻き状の沈線文。刺突列。	後期前葉?
	S D01/西端	堆積土			後期前葉/韮窪式
	S D017 E3710	堆積土			後期前葉/韮窪式
	S D01	堆積土	深鉢		後期
	S D 01 S D 01 西端部	堆積土	深鉢		後期
36	S D01	堆積土	深鉢		後期
	S D 05	堆積土			後期
	S X 01	堆積土	鉢		晚期?
	S X 01	堆積土	深鉢		^{呪刑:} 後期/十腰内Ⅳ式?
40	S X 01	堆積土	深鉢		
	S X 01	堆積土			後期/十腰内Ⅳ式? 後期/十腰内Ⅳ式?
	S X 01	堆積土			
42	S X 02	堆積土			後期?
	S X 01	堆積土	深鉢		後期?
	S X 02	堆積土			後期?
	S X 02	堆積土			前期/早稲田6類
	S X 02	堆積土			後期/十腰内Ⅲ式?
	S X 02	堆積土	深鉢		後期/十腰内V式?
48	S X 02	堆積土	深鉢	口縁部肥厚し、尖った貼り瘤(二又)。帯状文。0段多縄LR。	後期/十腰内V式?
49	S C 03/SKP131 S X 02	堆積土 堆積土	深鉢		後期
	S X 02	堆積土			後期/十腰内Ⅲ式?
	S C 01/SKP37	堆積土			前期/早稲田6類?
	S C 03/SKP129	堆積土			前期/大木2式
	S C 01/SKP44	堆積土	深鉢		後期前葉
	S C 01/SKP70	堆積土	鉢	口唇に瘤状突起列2条。浮き彫り状の雲形文。補修孔。0段多縄R。	晩期/大洞C1式?
-	S C 03/SKP10 4	堆積土	深鉢		前期/大木3式?
	S C 03/SKP115	堆積土	深鉢		早期/物見台式
	S C 03/SKP140	堆積土	深鉢	隆線状の区画帯。0段多縄R。	後期/十腰内Ⅲ式?
58	S C 03/SKP128	堆積土	深鉢	結束羽状縄文。LR、0段多縄RL。繊維多量に含む。	前期/早稲田6類?
59	S C 03/SKP142	堆積土	注口?	帯縄文。貼り瘤。LR、0段多縄L・R。	後期/十腰内Ⅲ式?
	S C 03/SKP116	堆積土	深鉢	尖底土器。尖底部がやや突出(乳房状?)。全面に地文。LR。繊維含む。	前期/早稲田6類
60		堆積土	深鉢	L R _o	後期
	S C 03/SKP146	PH-194			
61	S C03/SKP146 IV A 1 h	Ⅱ層上位		小型。内面調整は雑。0段多縄LR。繊維多量に含む。	前期/円筒下層 a 式
61 62			深鉢		前期/円筒下層 a 式 前期/早稲田 6 類

No.	出土地点	層位	器種	文様・特徴・施文原体 等	時期型式
65	NA1h	IV 層	深鉢	地文→横の綾繰文。LR、LR結節。	後期?
	NA1h	IV層	深鉢	失底土器。RL。繊維含む。	前期/早稲田6類
	S C 03/IV A 3 g	Ⅱ層	壺	O段多縄LR。	後期後葉
68	S C 03/W A 3 h · i W A 1 h	Ⅱ層上位	深鉢	底面の表裏に地文。ややあげ底。RL。繊維多量に含む。	前期/円筒下層 a 式
	NA1h	Ⅱ層上位	深鉢	底面の表裏に地文。ややあげ底。RL。繊維多量に含む。	前期/円筒下層 a 式
70	S C 01/東側攪乱 S C 03/撹乱	撹乱層	深鉢	粗いナデ→細い沈線文。	後期/十腰内V式?
71	S C 01 - b	表土~Ⅱ層上	深鉢	L R _o	後期
72	SC02/南端	遺構面(Ⅱ層)	深鉢	ごく細い沈線文。沈線間に貝殼腹縁圧痕。	早期
73	S C 02/ II A 3 h · i	盛土層	壺?	入組帯状文。帯内に異種原体による羽状縄文。0段多縄RL+0段多縄LR。	後期
	S C 02/ II A 3 h · i		深鉢	木葉状の磨り消し帯縄文。0段多縄R。	後期後葉
		堆積土 (表土)	深鉢	平口縁に二又の貼付突起が複数つく。口縁に沿って横位の非結束羽状縄文。RL、LR。	後期/十腰内 V 式?
	S C 02/中央付近	遺構面	深鉢	結束羽状縄文。RL+0段多縄LR。繊維多量に含む。	前期/早稲田6類?
	S C 02/東部	遺構面	深鉢	結束羽状縄文。内面焦げ。0段多縄RL+LR。繊維多量に含む。	前期/大木2 b式?
-	S C 02/中央付近	遺構面	深鉢	斜行縄文、横の結束羽状縄文。LR、RL+LR。繊維多量に含む。	前期/早稲田6類?
	S C02/中央付近	遺構面	深鉢	結束羽状縄文。0段多縄RL、0段多縄LR。繊維多量に含む。	前期/大木2 b式?
	SC02/南半部	遺構面	深鉢	結束羽状縄文。0段多縄RL・LR。繊維多量に含む。	前期/大木2 b式
	S C 02/中央付近	遺構面	深鉢	結束羽状縄文。RL+LR。	後期並兼
	SC03/撹乱	撹乱層	鉢	ごく細い沈線文。	後期前葉
	S C 03	表土~Ⅱ層上	深鉢	LR.	後期
	S C 03	表土~Ⅱ層上	浅鉢	ごく細い沈線文。0段多縄LR。	後期
	S C03/中央付近	遺構面	注口	瘤付の貼付隆帯3段。0段多縄LR。	後期後葉
	S C02/中央付近	遺構面	深鉢	横位の原体側圧×3条。0段多縄LR。	前期/早稲田6類?
	S C02/中央付近	遺構面	深鉢	撚糸文。単軸絡条体1類R。	後期
-	WA1 f	Ⅲ層上位	深鉢	O段多縄LR。	後期
	WA1h	Ⅱ層上位	深鉢	口緣に撚糸文4条。単軸絡条体1類、RL。	前期/早稲田6類
	IV A 1 h	Ⅱ層上位	深鉢	不整撚糸文。	前期/大木2式
	WA1i	IV層	深鉢	0段多縄LR。繊維多量に含む。	前期/早稲田6類 前期/大木2式
-	NA1h	IV R	深鉢	横位結節回転の「不整撚糸文」。繊維多量に含む。	
	NA1h	IV層	深鉢	網目状撚糸文。単軸絡条体R。繊維含む。	前期/早稲田6類
-	NA1h	Ⅱ層上位	深鉢	斜行縄文。補修孔。LR。繊維多量に含む。	前期前葉?
95	IV B 1 a	Ⅱ層上位	深鉢	磨り消し帯縄文。帯内に羽状縄文充填(崩れている)。LR、RL。 横位の帯状文。区画内に合わせて、異種原体非結束羽状縄文を充填→磨り消し。LR、R	後期/十腰内Ⅲ式?
L	NB1a	Ⅱ層上位	深鉢	L.	
	NA2 i	IV層	深鉢	摩滅著しい。縦位撚糸文→口縁に横位撚糸文。単軸絡条体R→単軸絡条体L。	前期/早稲田6類
	S C 03/W A 2 j	Ⅱ層直上	深鉢	不整撚糸文。繊維含む。	前期/大木2式
	S C 03/W A 2 j	Ⅱ層直上	深鉢	不整撚糸文。繊維含む。	前期/大木2式
	NA2 i	IV層	深鉢	LR。繊維多量に含む。	前期前葉/早稲田6類
<u></u>	NA2 i	IV層	深鉢	LR。繊維多量に含む。	前期前葉/早稲田6類
	S C03/W A 2 j	Ⅱ層直上	深鉢	LR。繊維多量に含む。	前期前葉/早稲田6類前期前葉/早稲田6類
-	S C03/W A 2 j	遺構面	深鉢	L R o	前期前葉/早稲田6類
	S C03/WA2 j	遺構面	深鉢	LR。 棒状工具の刺突文。内面に焦げ多量に付着。前々段半撚りLRr、末端結節。繊維含む。	前期/早稲田6類
	S C 03/IV A 3 h	IV層	深鉢	棒状工具の刺突又。内側に無け多重に行着。則々按手撚りしR下、木塡結即。 繊維含む。 幅狭い幾何学的沈線文。貝殼腹縁圧痕。	早期/物見台式
	S C 03/IV A 3 h	IV層	深鉢	曜狭い幾何字的沈線又。貝殻腹縁圧退。 羽状縄文(非結束?)。内面媒付着。尖底か。RL、0段多縄LR。繊維多量に含む。	前期/早稲田6類
	S C 03/IV A 3 h	IV ME	深鉢深鉢		後期?
	S I 11南東脇	Ⅱ層	深鉢	燃糸文。単軸絡条体1類L。 下半に縦位撚糸文→上半に斜行縄文。単軸絡条体L→RL。	後期?
	S I 11南東脇			下干に就位拡示又→上干に新行権又。単軸給栄浄し→RL。 重層末端ループ文? 0段多縄L。繊維多量に含む。	前期/大木1式
	S C 03/北側	遺構面	深鉢	里暦末端ルーノ文: O収多純L。繊維多単に含む。 横位の結束羽状縄文。LR・RL。	前期/早稲田6類?
	S C 03/北側	遺構面	深鉢深鉢	関位の結束羽状縄又。LR・RL。 緩い波状口縁。箆状工具による平坦幅広な沈線文。繊維含む。	前期?
-	S C 03/北側	遺構面 検出	深鉢	版い液状口縁。竟状工具による平坦幅広な比線文。繊維音む。 口縁部肥厚、尖った貼り瘤(二又)。帯状文。0段多縄LR。	制約: 後期/十腰内V式?
	S C 03/南側 S C 03	遺構面	深鉢	回縁部化学、大つた始り畑(二人)。市が入。UKA夕縄した。 重層末端ループ文。 O段多縄RL。繊維多量に含む。	前期/大木1式
		返博田 IV層	深鉢	里層末端ルーノス。 O 収多縄 R L 。 繊維多重に含む。 口縁部突起。口唇に沿う沈線区画の縄文帯。以下、磨り消し。 O 段多縄 R L 。	後期前葉
	S N 08周辺 S C 03	IV 唐 撹乱層	深鉢	「形の刺突文。胎土不良、外傾接合。	中期末~後期初?
	S C 03	規乱層 撹乱層	深鉢	がおの利矢又。加上不良、外関接合。 緩い波状口縁。胴部地文→末端結節部の横回転。LR末端結節。繊維含む。	前期/大木2式
	S C 03	表土~Ⅱ層上	深鉢	版い仮外口形。胴面起义一不適相即即の傾回転。LR不過相即。機能占む。 不整撚糸文。葺瓦状?繊維含む。	前期/大木2式?
	S C03	表工~ II 層工 撹乱層	深鉢	小笠然示文。 耳凡が:	早期前葉/大新町 a 式
				勝門 直線+ 起花線の神型叉。 幾何学的沈線区画へ縄文充填→沈線引き直し。内面には煤付着。LR。	後期/十腰内1式?
120	撹乱	撹乱層	深鉢	残門子町仏藤位門、神叉兀県→仏藤灯き直し。 竹園には藤竹有。LK。	[[久州/ 版刊] 八.

第2表 遺物観察表(2) 土師器・須恵器

No.	出土地点	層位	器種	器面調整
121	S I 06/北西部	堆積土	土師器・甕	外面:ナデ。内面:ナデ。
122	S D01	堆積土	土師器・堝	外面:ケズリ、ヨコナデ。内面:ナデ。輪積痕跡。
123	S D01	堆積土	土師器・甕	外面:ミガキ、ヨコナデ。内面:ハケメ、ナデ。
124	S D01	堆積土	土師器・甕	外面:ナデ、砂底。内面:ハケメ。
125	S D01	堆積土	土師器・甕	外面:ケズリ、木業底。内面:ナデ。
126	S D01/西端	堆積土	土師器・甕	外面:ケズリ、木葉底+刻み。内面:ナデ、ハケメ。
127	S D 05	堆積土	土師器・甕	外面:ナデ。内面:ナデ。
128	S C 01/SKP32	堆積土	土師器・甕	外面:ナデ、ハケメ。内面:ナデ。
129	S C 01/SKP38	堆積土	土師器・坏?	外面:ケズリ。内面:ナデ。
130	S C 01 - c	堆積土 (表土)	土師器・甕	外面:ハケメ、ヨコナデ。内面:ナデ。
131	S C 01 - c	堆積土 (表土)	土師器・甕	外面:ケズリ、ヨコナデ。内面:ナデ。
132	SC01/試掘T-12	表土?(SD01堆積土?)	土師器・甕	外面:ケズリ。内面:ハケメ。
133	S I 05	堆積土	須恵器・壺	外面:ロクロナデ。内面:ロクロナデ。
134	S D01	堆積土上面	須恵器・甕	外面:タタキメ。内面:ナデ。
135	S C 01/SKP14	堆積土	須恵器・甕	外面:タタキメ。内面:ナデ。
136	S C 01 - c	排土	須恵器・甕	外面:タタキメ。内面:ナデ。

第3表 遺物観察表(3)陶磁器

No.	出土地点	層位	器種	釉、絵付	時期
107	S C 01/SKP30	堆積土	磁器・青磁皿	青磁。中国龍泉窯。	中世/15世紀末?
				育傚。中国能承羔。	中世/10世紀末 : 不明
		堆積土	磁器・青磁皿	77.11.1	
		堆積土	磁器・青磁碗	青磁。染付。中国龍泉窯。	中世/15世紀末
		堆積土	磁器・青磁壺?		不明
		近世盛土層	磁器・青磁皿	青磁。肥前系。	近世
		表土層	磁器・青磁碗		中世/15世紀末
		表土層	磁器・青磁皿?		中世/15世紀末
_		堆積土	磁器・白磁皿		近世?
		表土層			中世/16世紀後半?
146		堆積土	磁器・青花碗		中世/16世紀後半
147	S F 01	表土層	陶器・染付鉢	染付、呉須絵。高台畳付に砂粒付着。肥前産。	
148	S C 02	盛土層(新)	磁器・鉢	国産品。産地詳細不明。	
149	S C 03	表土層	陶器・皿	透明釉。見込み釉変色。高台内は露胎、融着痕跡(トチン跡?)。瀬戸大 窯 4 期。	中世/16世紀後半
150	S C 03	表土	陶器・皿	灰釉。見込みの釉ひび割れ。美濃大窯後半期。	中世/16世紀後半
151	S C 03 南	表土層	陶器・蓋	外面鉄釉「瀬戸黒」。内面無釉、露胎。美濃登窯Ⅰ期。	近世/17世紀初
152	S I 04 南東	堆積土	陶器・碗	□縁は灰釉、胴部は鉄釉。腰錆碗。肥前Ⅳ期。	近世/17末~18世紀後半
153	S C 01 - b/SKP84	堆積土	陶器・鉢?	灰釉。内面は露胎。	不明
154	S C 01- c	表土層	陶器・碗	灰白釉。肥前系?。	近世以降
155	S C 02	盛土層	陶器・鉢?	鉄釉。産地不明。	不明
156	S C 03 南	Ⅱ層	陶器・碗	鉄釉。肥前産?	近世以降
157	S F 01	堆積土	陶器・鉢	鉄釉。肥前産。	近世
158		撹乱層 堆積土	陶器・皿	見込みは透明釉、白化粧、掻き落とし、火襷。目跡2箇所(胎土目)。外 面無釉、露胎。肥前産。	近世
159	S C 01/SKP30	堆積土	陶器・皿		中世/16世紀後半
160	S C 02	撹乱層	陶器・擂鉢	鉄釉。肥前産。	近世/17世紀
		撹乱層	陶器・擂鉢		近世/17世紀
		表土層			不明
	S C 03 南東部	Ⅱ層上位	陶器・擂鉢		近世以降
		表土層			中世以降
		堆積土			中世以降
			瓦質土器・火鉢		中世以降
		D	瓦質土器・火鉢		中世以降
		堆積土	磁器・器種不明		中世/15世紀末?
		堆積土			中世/15世紀末?
	試掘T10	表十層			近世 近世
110	BEASULT TO	12人上/自	BYX ARL . HI AXX TITE	月1840 川田庄: * 子共国职()	KL IE

第4表 遺物観察表(4)石器

No.	出土地点	層位	器種	特徵	石質	石材産地
171	S N 08北脇	IV層	石鏃	小形、有茎。長さ1.8cm、幅1.0cm、厚さ0.3cm。重量0.31g。	珪質頁岩	新生代新第三紀/奥羽山脈
172	S I 11 南西部	床面	石鏃	有茎。片側縁で節理欠失。長さ3.1cm、幅1.2cm、厚さ0.4cm。重量1.04g。	珪質頁岩	新生代新第三紀/奥羽山脈
173	S C 01/SKP70	堆積土	石鏃?	石錐? 黒色付着物。長さ4.2cm、幅1.3cm、厚さ0.9cm。重量3.83g。	珪質頁岩	新生代新第三紀/奥羽山脈
174	S C 03 北側	遺構面	尖頭器?	先端鈍く、削器か。長さ13.2cm、幅3.1cm、厚さ1.3cm。重量52.48 g。	頁岩	新生代新第三紀/奥羽山脈
175	S C 03/SKP117	堆積土	石匙	縦型。長さ4.8cm、幅2.1cm、厚さ0.5cm。重量4.85g。	頁岩	新生代新第三紀/奥羽山脈
176	S X 01	堆積土	石匙	縦型。刃部欠損。長さ3.4cm、幅1.8cm、厚さ0.7cm。重量3.47g。	頁岩	新生代新第三紀/奥羽山脈
177	S X 02 北西部	堆積土	石匙	縦型。刃部欠損。長さ5.3cm、幅1.5cm、厚さ0.7cm。重量6.34g。	珪質頁岩	新生代新第三紀/奥羽山脈
178	S C 03 南東部	II層	石匙	縦型。長さ3.7cm、幅2.1cm、厚さ0.4cm。重量1.73g。	頁岩	新生代新第三紀/奥羽山脈
179	SC03 中央東	黒色土層	削掻器	掻器。右側縁に刃潰し。長さ7.7cm、幅4.6cm、厚さ2.2cm。重量75.04g。	頁岩	新生代新第三紀/奥羽山脈
180	S I 12/pit2	堆積土	削掻器	長さ11.8cm、幅5.3cm、厚さ1.9cm。重量85.43g。	頁岩	新生代新第三紀/奥羽山脈
181	SC02 南端	遺構面(IV層)	削掻器	長さ6.8cm、幅3.2cm、厚さ1.2cm。重量15.34g。	頁岩	新生代新第三紀/奥羽山脈
182	IV A3h∼3i	IV層	磨製石斧	刃部摩滅。長さ9.7cm、幅4.6cm、厚さ2.6cm。重量202.59 g。	玢岩	中生代白亜紀/北上山地
183	S X 01	堆積土	磨製石斧	裏面剥落。節理による大きなひび割れ。重量121.84g。	粘板岩	古~中生代/北上山地
184	SC03 東側	IV層	磨製石斧	刃部欠失。基部に敲打痕。長さ(11.5)cm、幅(4.3)cm、厚さ(2.6)cm。 重量192g。	玢岩	中生代白亜紀/北上山地
185	IV A3h∼3i	IV層	磨製石斧	刃部欠失。長さ(11.3)cm、幅4.5cm、厚さ2.5cm。重量182.06 g。	玢岩	中生代白亜紀/北上山地
186	II B 10a	IV層	磨製石斧	刃部欠失。長さ(9.3)cm、幅5.9cm、厚さ2.9cm。重量199.26g。	粘板岩	古~中生代/北上山地
187	S C 03	表土~ II 層上位	磨製石斧	粗い剥離、研磨痕。長さ10.1cm、幅4.9cm、厚さ2.2cm。重量137.32g。	玢岩	中生代白亜紀/北上山地
188	S C 03/SKP153	掘り形埋土	磨製石斧	基部欠失。長さ(9.4)cm、幅(5.0)cm、厚さ(2.5)cm。重量208.45g。	玢岩	中生代白亜紀/北上山地
189	S I 11 ?	(排土)	敲磨器	半円状扁平打製石器。長さ15.5cm、幅8.5cm、厚さ2.1cm。重量391.51 g。	安山岩	新生代新第三紀/奥羽山脈
190	SC03 東側	Ⅱ~Ⅲ層	敲磨器	特殊磨石。長さ12.8cm、幅6.8cm、厚さ4.7cm。重量515.99g。	玢岩	中生代白亜紀/北上山地
191	SI11 炉脇	床面	敲磨器	両面に弱い磨り痕と敵き痕。重量527.93g。	安山岩	新生代新第三紀/奥羽山脈
192	S I 11	堆積土	敲磨器	長さ7.8cm、幅8.0cm、厚さ3.4cm。重量303.66g。	安山岩	新生代新第三紀/奥羽山脈
193	S I 11 炉周辺	堆積土	敲磨器	被熱、破砕?磨痕。長さ11.2cm、幅9.0cm、厚さ6.9cm。重量1,072.85g。	安山岩	新生代新第三紀/奥羽山脈
194	S X 01	堆積土	敲磨器	両面に痘痕状敵き痕と溝状擦痕。長さ11.7cm、幅6.3cm、厚さ3.4cm。 重量314.74g。	安山岩	新生代新第三紀/奥羽山脈
195	S D 01	堆積土	敲磨器	長さ5.0cm、幅4.6cm、厚さ4.3cm。重量143.79g。	安山岩	新生代新第三紀/奥羽山脈
196	S C 03	堆積土(IV層)	敲磨器	楕円形扁平礫。長さ8.4cm、幅5.5cm、厚さ2.2cm。重量137.41g。	安山岩	新生代新第三紀/奥羽山脈
197	SC03 南側	Ⅲ層	敲磨器	楕円形扁平。黒色付着物。長さ8.7cm、幅5.1cm、厚さ2.5cm。重量187.28g。	安山岩	新生代新第三紀/奥羽山脈
198	試掘T10	表土	敲磨器	弱い磨り痕。敲き痕。長さ7.3cm、幅6.7cm、厚さ5.5cm。重量380.34g。	デイサイト	新生代新第三紀/奥羽山脈
199	S X 02	配石構成礫	石皿	磨り、一部敵き?痕跡。長さ(17.0)cm、幅(15.4)cm、厚さ(5.8)cm。 重量1,245.30g。	安山岩	新生代第四紀/奥羽山脈
200	S X 02	配石構成礫 9	敲磨器	磨り、敲き?長さ18.0、幅12.9、厚さ5.6cm。重量1,419.28g。	デイサイト	新生代新第三紀/奥羽山脈
		堆積土 №28	剥片	接合資料1。取り上げ4回目。重量34.40g。	頁岩	新生代新第三紀/奥羽山脈
265	S X 04	堆積土 No.46	剥片	接合資料1。取り上げ5回目。重量32.87g。	頁岩	新生代新第三紀/奥羽山脈
200	S X 04	堆積土 No.49	剥片	接合資料2。取り上げ6回目。重量8.79g。	頁岩	新生代新第三紀/奥羽山脈
200	S X 04	堆積土 No.7	剥片	接合資料2。取り上げ1回目。重量10.14g。	頁岩	新生代新第三紀/奥羽山脈
207	S X 04	堆積土 No.26	剥片	接合資料3。取り上げ4回目。重量47.96g。	頁岩	新生代新第三紀/奥羽山脈
207	S A 04	堆積土 No.39	剥片	接合資料3。取り上げ5回目。重量17.09g。	頁岩	新生代新第三紀/奥羽山脈
260	S X 04	堆積土 No.10	剥片	接合資料4。取り上げ1回目。重量13.02g。	頁岩	新生代新第三紀/奥羽山脈
200	S A 04	堆積土 №54	剥片	接合資料4。取り上げ6回目。重量21.51g。	頁岩	新生代新第三紀/奥羽山脈
		堆積土 No.29	剥片	接合資料5。取り上げ4回目。重量4.09g。	頁岩	新生代新第三紀/奥羽山脈
269	S X 04	堆積土 No.40	剥片	接合資料5。取り上げ5回目。重量6.96g。	頁岩	新生代新第三紀/奥羽山脈
		堆積土 №50	剥片	接合資料5。取り上げ6回目。重量6.58g。	頁岩	新生代新第三紀/奥羽山脈
270	S X 04	堆積土 No.11	剥片	接合資料 6 。取り上げ 2 回目。重量9.16 g 。	頁岩	新生代新第三紀/奥羽山脈
210	S A 04	堆積土 No.41	剥片	接合資料6。取り上げ5回目。重量12.92g。	頁岩	新生代新第三紀/奥羽山脈
271	S X 04	堆積土 No.14	剥片	接合資料7。取り上げ2回目。折損。重量15.74g(No.19含む)。	頁岩	新生代新第三紀/奥羽山脈
2/1	U A. U4	堆積土 No.19	剥片	接合資料7。取り上げ3回目。折損。	頁岩	新生代新第三紀/奥羽山脈
		堆積土 No.24	剥片	接合資料8。取り上げ3回目。重量13.00g。	頁岩	新生代新第三紀/奥羽山脈
272	S X 04	堆積土 No.4	剥片	接合資料8。取り上げ1回目。重量38.84g。	頁岩	新生代新第三紀/奥羽山脈
		堆積土 No.51	剥片	接合資料8。取り上げ6回目。重量21.57g。	頁岩	新生代新第三紀/奥羽山脈

第5表 遺物観察表(5) 土製品

No.	出土地点	層位	器種	特徵	時期
201	S I 11/遺物No.6	堆積土	動物形土製品	鹿?を模したもの。頭部に縦の貫通孔、胴部前面に貼り瘤、RL・LR横。重量16.12g。	縄文後期
202	S C 01/SKP 8	堆積土	坩堝?	表面に融着物(淡緑色、赤褐色)。胎土は陶質。重量7.9g。	古代以降
203	S D01	堆積土	羽口	重量10.89g。	古代以降
204	S D 03	堆積土	羽口	重量66.8 g。	古代以降

第6表 遺物観察表(6)石製品

No.	出土地点	層位	器種	特徴	石質	産地	時期
205	S I 11 南西	堆積土.	軽石製装身具	貫通孔 1 箇所。全面研磨痕。重量25.01 g。	軽石	新生代第四紀/奥羽山脈	縄文後期
206	S C 03 南部	南部浮石直下黒土	軽石製装身具	貫通孔 1 箇所。全面研磨痕。欠損。重量19.10g。	軽石	新生代第四紀/奥羽山脈	縄文後期?
207	S D04	堆積土最上位	石剣	研磨痕。節理により裏面欠損。重量28.77g。	頁岩	古~中生代/北上山地	古代以降
208	S C 01 II B 6g	Ⅱ層黒色土	碁石	扁平、小型円礫。重量2.99g。	頁岩	古~中生代/北上山地	古代以降
209	試掘T-4	表土層	碁石	扁平、小型円礫。一部欠損? 重量3.01g。	頁岩	古~中生代/北上山地	古代以降
210	S C 03/SKP126	堆積土	板状装身具	円環状? 欠損。擦痕。重量2.84g。	凝灰岩	新生代第三紀/奥羽山脈	古代以降
211	S C 01/SKP39	堆積土	石版状石製品	両側縁に段あり。両面に擦痕。重量17.14g。	粘板岩	古~中生代/北上山地	古代以降
212	S I 01付近	表土層	石版状石製品	両側縁に段あり。両面に擦痕。重量43.29 g。	粘板岩	古~中生代/北上山地	古代以降
213	S I 10	堆積土	砥石	擦痕。重量44.14g。	凝灰岩	新生代第三紀/奥羽山脈	縄文後期?
214	S C 03/SKP 9	堆積土	砥石	擦痕。重量15.65 g 。	凝灰岩	新生代第三紀/奥羽山脈	古代以降
215	S C 01- b / SKP78	堆積土	砥石	擦痕。使用面が摩滅、やや窪む。重量300.07g。	頁岩	新生代第三紀/奥羽山脈	古代以降
216	S I 11 南西	堆積土	砥石	擦痕。重量73.52 g 。	頁岩	新生代第三紀/奥羽山脈	縄文後期?
217	S I 01付近	表土層	砥石	擦痕。重量34.80 g 。	頁岩	新生代第三紀/奥羽山脈	古代以降
218	S C 03	不明 (排土)	砥石	全面に擦痕。重量97.90g。	安山岩	新生代第四紀/奥羽山脈	古代以降
219	S C 03 北側	攪乱層		穀挽臼の上臼。欠損。使用面摩滅。挽木孔、軸受 孔。臼面径11.8cm、高さ10.9cm。重量2.981kg。	安山岩	新生代第四紀/奥羽山脈	古代以降

第7表 遺物観察表(7)金属製品

No.	出土地点	層位	器種	特徵	時期
:0	試掘T7	盛土層	刀子	先端部欠損。長さ(15.9)cm、幅2.4cm、厚さ0.5cm。	不明
1	SI11床面 攪乱	攪乱層	刀子	細身の刀身。基部(茎)欠損。長さ(15.9)cm、幅1.7cm、厚さ0.5cm。	不明
22	S C 01/SKP60	堆積土	煙管	銅製「延べ煙管」。火皿やや傾く。雁首と吸口の肩部分に補強帯。 長さ12.5cm、幅1.2cm、吸口径3mm、接合部径12mm。重量13.67g。	近世/18世紀前半
:3	S C 01- c 東端部	表土層	円環状製品	鉄製。表面に何らかの溶着痕跡。長さ2.6cm。重量3.67 g。	不明
4	S C 01/SKP12	堆積土	釘	鉄製角釘か。重量7.41g。	不明
25	S C 02 東側	表土	釘	折頭の鉄製角釘。重量20.88g。	不明
6	S C 01/SKP65	堆積土	釘	折頭の鉄製角釘。重量8.49g。	不明
27	S C 01/SKP7	堆積土	古銭	銅銭。天禧通寶(中国・北宋銭)。初鋳1017年。鐚銭。重量2.62g。	中世~近世初
8	S C 01/SKP19	堆積土	古銭	銅銭。熈寧元寶(中国·北宋銭)。初鋳1068年。鐚銭。重量2.85 g。	中世~近世初
29	S C 01/SKP50	堆積土	古銭	銅銭。熈寧元寶(中国・北宋銭)。初鋳1068年。鐚銭。重量2.22g。	中世~近世初
0	S C 01/SKP66	堆積土	古銭	銅銭。元祐通寶(中国·北宋銭)。初鋳1086年。鐚銭。重量2.84 g。	中世~近世初
1	S C 01/SKP16	堆積土	古銭	銅銭。銘「○○元寶」→聖宋元寶(北宋銭、初鋳1101年)。鐚銭。重量1.70g。	中世~近世初
32	S C 01/SKP38	堆積土	古銭	銅銭。永楽通寶(中国・明銭)。初鋳1408年。本銭。重量2.44 g。	中世~近世初
3	S C 01/SKP5	堆積土	古銭	銅銭。永楽通寶(中国·明銭)。初鋳1408年。本銭。重量2.81g。	中世~近世初
4	S C 01/SKP20	堆積土	古銭	銅銭。銘「永」「通」→永楽通寶の鋳写し鐚銭か。重量0.84 g。	中世~近世初
5	S C 01/SKP27	堆積土	古銭	銅銭。無文銭。重量2.74g。	中世~近世初
6	S I 09	堆積土上位	古銭	銅銭。無文銭。重量1.72g。	中世~近世初
7	S C 01/SKP3	堆積土	古銭	銅銭。輪銭。重量0.99g。	中世~近世初
8	S C 01/SKP13	堆積土	古銭	銅銭。輪銭。重量0.91 g。	中世~近世初
9	S C 01	撹乱層	古銭	銅銭。輪銭。重量0.36g。	中世~近世初
0	S D01	堆積土	古銭	寬永通寶。銅一文銭 1 期「古寬永」。初鋳1636年。重量2.85 g。	近世/17世紀
1	M A 9 i ∼ j	近世盛土層	古銭	寛永通寶。銅一文銭1期「古寛永」。初鋳1637年。重量3.15g。	近世/17世紀
2	S C 02/SKP144	柱痕部堆積土	古銭	寬永通寶。銅一文銭 1 期「古寬永」。初鋳1638年。 5 点一括出土。重量2.57 g。	近世/17世紀
3	S C 02/SKP144	柱痕部堆積土	古銭	寛永通寶。銅一文銭1期「古寛永」。初鋳1638年。5点一括出土。重量2.57g。	近世/17世紀
14	S C 02/SKP144	柱痕部堆積土	古銭	寬永通寶。銅一文銭1期「古寬永」。初鋳1638年。5点一括出土。重量2.88g。	近世/17世紀
5	S C 02/SKP144	柱痕部堆積土	古銭	寬永通寶。銅一文銭1期「古寬永」。初鋳1638年。5点一括出土。重量1.02g。	近世/17世紀
6	S C 02/SKP144	柱痕部堆積土	古銭	寛永通寶。銅一文銭1期「古寛永」。初鋳1638年。5点一括出土。重量2.46g。	近世/17世紀
7	S C 01- c 東端部	堆積土 (表土)	古銭	寛永通寶。銅一文銭1期「古寛永」。初鋳1636年。重量3.52g。	近世/17世紀
18	S C 01- b / SKP76	堆積土	古銭	寛永通寶。銅一文銭2期「新寛永・文銭」。初鋳1697年。重量3.26g。	近世/17世紀
9	S C 02	撹乱層	古銭	寛永通寶。銅一文銭2期「新寛永・文銭」。初鋳1697年。重量2.65g。	近世/17世紀
50	S C 01- b / SKP85	掘り形埋土	古銭	寛永通寶。銅一文銭 3 期「新寛永」。初鋳1767年。重量1.95 g。	近世/18世紀
1	S C 01/SKP74	堆積土	古銭	寛永通寶。銅一文銭3期「新寛永」。初鋳1767年。重量3.26g。	近世/18世紀
52	S C 01- b / SKP85	掘り形埋土	古銭	寬永通寶。銅一文銭 3 期「新寬永」。初鋳1767年。重量2.37 g。	近世/18世紀
53	S C 02 Ⅲ A 9 i ~ j 付近	近世盛土層	古銭	宽永通寶。銅一文銭3期「新寛永」。初鋳1767年。重量1.60g。	近世/18世紀
4	S C 02	撹乱層	古銭	寬永通寶。銅一文銭3期「新寬永」。初鋳1767年。重量243g。	近世/18世紀
5	S C 02	搅乱層	古銭	寬永通寶。真鍮四文銭。背紋11波。初鋳1769年。重量4.29 g。	近世/18世紀
6	9 i ~ j 付近	近世盛土層	古銭	寬永通寶。真鍮四文銭。背紋11波。初鋳1769年。重量4.15g。	近世/18世紀
7	試掘T9(SC02)	表土層	古銭	寬永通寶。鉄一文銭。初鋳1739年。重量2.39g。	近世/18世紀
8	S C 03北半部	遺構面〔鋤簾〕	古銭	鉄銭。錆により銘不明。寛永通寶鉄一文銭か。重量1.43 g。	近世
9	S C 02	近世盛土層	文久永寶	銅銭。四文銭。初鋳1863年。重量3.95g。	近世/19世紀
50	S I 03 南東部	堆積土上位	雁首銭	押し潰した煙管雁首。重量2.05g。	近世
1	S C 01- c 東端部	表土層	一銭硬貨	銅貨。銘「大正11年」。重量2.73g。	近代
2	S C 02 南東部	盛土層	一銭硬貨	銅貨。銘「大正9年」。重量3.49g。	近代
53	S C 02	撹乱層	五銭硬貨	銅貨。銘「大日本・・・十四・・・・・」。重量2.81 g。	近代
54	S C 02 南東部	盛土層	十銭硬貨	銅貨。銘「昭和11年」。重量3.67 g。	近代

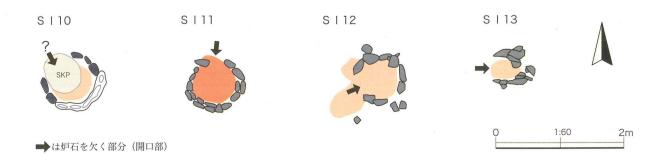
VI総括と考察

1 縄 文 時 代

(1)遺 構

検出した遺構は竪穴住居跡・竪穴遺構 5 棟、掘立柱建物跡 1 棟、土坑 7 基、配石遺構 2 基、剥片埋納遺構 1 基である。このうち竪穴住居跡・竪穴遺構については後期 4 棟、早期~前期前半 1 棟である。後期の竪穴住居跡 2 棟は壁が確認できず、かつうち 1 棟については炉跡を確認したに過ぎない。そこで全体形状がある程度わかる 2 棟(S I 10・11)を中心として、後期の竪穴住居跡の各属性について見る。

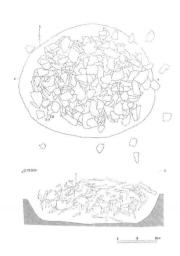
平面形: S I 11は南北に拉げた楕円形状である。 S I 10は壁が全周しないが、残存部分の様相か ら見て、SI11同様に楕円形基調だったと思われる。柱穴:SI11で主柱穴4個を確認した。主柱 穴4個は炉を囲んで台形状に配置されており、うち一個については建て替えの可能性も考えられる (掘り方の形状、底面の柱アタリの状況から)。その他の3棟では柱穴自体はっきりしない。炉:検 出した4棟ともに石囲炉である(第87図)。SI11・12は炉石を円形に配している〔SI11では一 部で二重の囲いになっている〕が、ともに一端が開いた馬蹄形である。SI11では北側が、SI12で は西側が開いており、この開いた部分では炉の外側まで焼土範囲が延びている。炉石を欠くこの部 分が炉の焚き口のような使われ方をしたのではないかと推測される。一方、S I 10は炉石の残存状 況が良くなかったが、炉石設置痕からみてやはり円形基調の炉石配置である。ただし、炉の北西部分 が新期の柱穴により破壊されており、この部分に炉石があったのか確認できなかった。SI11・12 同様に馬蹄形だったものかもしれない。SI13の炉は残存部で見ると楕円形というよりも、東西に 長軸をとる方形ぎみの炉石配置である。ただし、この炉も西側で炉石が途切れて開き、馬蹄形と云え なくもない。以上のとおり、後期の4棟の炉はいずれも馬蹄形の炉石配置だった、もしくはその可能 性がある、ということになる。これらの4棟のうちSⅠ11は床面一括出土土器から見て十腰内Ⅳ式 期に位置づけられる。SI10・12についても出土遺物が少ないが、少なくとも後期、SI11とそれ ほど時期差がないものと思われ、調査者は3棟が後期後葉ではないかと推測している。岩手県北部に おける縄文時代後期後葉の住居跡の炉は、一般的は炉石を設置しない地床炉が多く見られる。岩手県 北部における後期後葉/十腰内Ⅳ・Ⅴ式期における石囲炉の類例としては、九戸郡軽米町大日向Ⅱ遺 跡で石囲炉をもつ該期竪穴住居跡8棟が検出されている。出入口施設:後期中葉~末葉の竪穴住居 跡でよく見られる「出入口状遺構」については、いずれの住居跡でも明らかではなかった。配石遺 構: SI11とSI12の2棟には配石が伴う。SI11では斜面下方側の壁に沿って配石がなされてい



第87図 竪穴住居跡 炉跡集成

る(SX01)。一方、壁が不明瞭なSI12は不確実ではあるが、配石が斜面上方側の壁に沿っていたものと思われる(SX02)。配石の役割については、住居壁に沿うことから、土留めの可能性も考えられるが、確証は得られなかった。また、SX01には一部途切れる箇所があり、上記の「出入口」に関連して考えればこの部分が「出入口」に相当するかもしれない。

また、SX04剥片埋納遺構は楕円形土坑に剥片54点を収めたもので、検出層位から見て早期後葉~前期前葉に属する。阿部勝則氏の論考(阿部2003)によれば、県内における「剥片集中遺構」は105例あり、時期は早期後葉~晩期と時期幅は広いが、中期64例・後期13例と中期~後期が多く、本遺構と同時期の早期~前期は10例と少ない。また土坑での出土例は廃棄されたものが多く、土坑への埋納という形態は雫石町桜松遺跡(中川1982)のJ-10ピットがあるのみである。J-



第88図 桜松遺跡のデポ

10ピットでは 0.72×0.61 mの楕円形土坑に剥片877点と石器10点が埋納されていた。田中英司氏によれば、全国的に見ても確実な土坑への埋納例は、他に秋田県北の林 II 遺跡例が挙げられるのみである(田中1995)。

(2) 遺物

縄文土器、石器、土製品があるが、総量少なく、主体は縄文土器である。

縄文土器はSI11堆積土および中世の普請の影響が少なかった調査区「下段」中央~南東側のⅡ・Ⅳ層から主に出土している。破片資料が多いため断言できない面もあるが、次の型式に相当するものである。早期:大新町a式(押)、物見台式。前期前葉:早稲田6類〔深郷田式〕、大木1式、(表館式?)。前期中葉:大木2式、円筒下層a式、(大木3式?)。前期後葉:円筒下層c式。後期前葉:韮窪式。後期中葉:十腰内Ⅲ式?。後期後葉:十腰内Ⅳ式。晩期中葉:大洞C₂式。時期幅は広く、早・前・後・晩期のものが含まれている。このうち一定の纏まりをもつのは前期の早稲田6類と後期後葉の十腰内Ⅳ式である。前者は中掫浮石層直下の黒色土層(Ⅳ層)から出土しており、胎土に繊維を多量に含む土器群である。また、押型文を特徴とする大新町a式(押)は撹乱層から1点出土したのみであるが、盛岡市周辺に分布する同式土器が県北部安比川水系まで伝播していたことを示す事例となった。なお、本遺跡の北約1.2kmの飛鳥台地Ⅰ遺跡では大新町a式に先行する日計式土器が出土している。

参考文献

阿部勝則 2003 「岩手県における縄文時代中期の剥片集中遺構について」『紀要 X XI』岩手県埋文

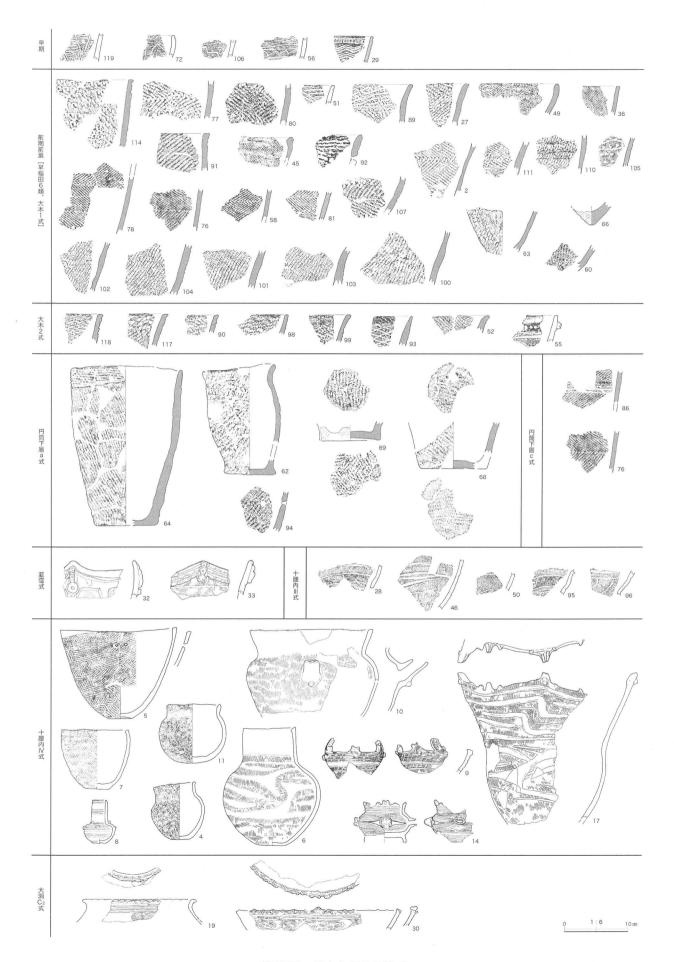
中川重紀 1982 「桜松遺跡」『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書』岩埋文調報第 29 集、岩手県埋文

田中英司 1995 「日本先史時代のデポ」考古学雑誌、80-2

岩手県埋文 1988 『飛鳥台地 I 遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 120 集

2 古 代

調査では中世の堀跡・竪穴遺構の覆土から平安時代の土師器・須恵器が出土したが、該期遺構は検出されず、あくまで遺物散布地の域を出ない。ただし、遺構に伴わない形で該期土器が「散布」され



第89図 縄文土器分類集成

ているとは考えづらい。本遺跡の西側には桂平 I 遺跡が隣接している。平成18年度に行われた調査では、覆土に十和田 a テフラおよび白頭山苫小牧テフラを含む竪穴住居跡16棟が検出されており、10世紀代の集落跡であることが判明している(川又2007)。本遺跡の西半部高位面は桂平 I 遺跡と同一地形面であることに鑑みても、中世の普請による削平以前に桂平 I 遺跡と連続あるいは別個の集落遺跡が存在していた可能性は高いものと考えられる(註1)。

(1) 調査区南側隣接地の横浜健太郎氏によれば、上段平場で須恵器破片が採取されてたとのことであった。現物を実見したところ長頸壺と思われる底部破片であった。現物は他の遺物とともに当センターで保管している。

3 中世・近世

(1)遺 構

註

中世城館にともなう遺構が検出された。普請:平場、空堀、切岸、虎口、土橋。作事:掘立柱建物中世城館にともなう遺構が検出された。普請:平場、空堀、切岸、虎口、土橋。作事:掘立柱建物跡、竪穴建物跡・竪穴遺構、柱穴列(柵跡)、門跡、溝跡(塀跡)。ここでは特徴点や問題点について要点を指摘しておく。

平場は、大きくは上下2段3面である。上段のSC01は本館跡の中心曲輪にあたる部分であり、その 内部は空堀・掘立柱建物・竪穴建物の配置等に鑑みて、さらに細分された空間分節が行われているも のと推測される。特にもb地区における、2条の空堀と土橋により区画された部分には掘立柱建物の 過密な分布が見られる。それらすべてが中世・城館期のものとは云えないものの、尋常ではない場の 使われ方が際立っている。この部分は上段平場の中でも居住空間に相当するかもしれないが、それを 跡付ける陶磁器類等の遺物が出土しないため、確証はない。なお、空堀区画の開口部にあたる土橋部 分には冠木門が設置されている。a地区は虎口と内堀に挟まれ、虎口に対して側面をとる位置である ことから、虎口防禦のための、いわゆる「横矢掛け」の平場であると解される。一方、下段平場は高 位・低位の2面に分かれているが、段差は低く不明瞭なもので、ほとんど一体化している。上段に比 して、建物等の遺構は圧倒的に少ない。ともにSD04空堀の東側(→外側)であり、下段平場は館の 外郭部分にあたると思われる。低位面のSC03ではそもそも普請による削平の痕跡はあるものの、平 場面は東に向かって緩く傾斜し、普請が不充分な状態であることは明白である。館の規模拡張に伴う 急拵えで未完成の「平場」だったものかもしれない。同様の状況は東隣の舘Ⅱ遺跡(不動館)の「陣 場」でも見られる。あるいは、始めからそれほどしっかりとした平場を作る必要がなかった、という 可能性もある。なお、第24図に示すとおり「吉田館」は大きくは西郭(仮に曲輪Aとする)と東郭で 構成され、さらに東郭がSF01・SD04を境として上段(曲輪B;SC01)・下段(曲輪C;SC02・03) の2面の曲輪に分かれており、都合3つの曲輪で構成される。佐々木浩一氏によれば、中世後期の東北 北部における城館のほとんどが「曲輪を並べる」タイプに帰属する(佐々木2002)。「吉田館」の場 合も小規模な曲輪を東西方向に並べる配置であり、佐々木分類における「A-3」型に相当するもの である。3つの曲輪のうち、曲輪A・Cにより挟み込まれている曲輪Bが主曲輪に相当するものと思わ れる。

空堀は3条検出された。土橋を挟んで対向するSD01・03は上段平場面を区画する役割をもつものと推測される。一方、下段のSD04は箱堀で、上段曲輪面の防禦を担うものであろう。SD04はSF01切岸と一体化しており、切岸との間には布掘りの柵の可能性があるSD05溝が設けられており、切岸+柵+

空堀というセットによる強固な防禦線が想定される。また、虎口は1箇所で、冠木門が設置されている。ところで、空堀・虎口については、現況では全く確認できないほど埋没していた。これは人為的な埋め戻しの所産で、空堀・虎口の埋め戻し・整地およびその後の通路付け替えが行われた可能性が高い。これは、館の防禦性を喪失させる行為である。八戸市根城跡では、本丸虎口が単純な構造へと大規模改変されている事例がある(栗村・佐々木2001)。城館を葉却する際の具体的な方法としては、城館の防禦の要であり、かつ象徴である施設の破壊―空堀の埋め戻し、虎口や門の破壊等―が行われるようである。本遺跡の場合も館としての機能を喪失せしめる破却行為「城破り」の様相を示しているものと捉えられる。

掘立柱建物跡は78棟である。そのうち、上段平場SC01面の建物については平面形態から4類型に分類可能である。

- ①身舍の梁行が2間以上で間仕切柱があるもの(6棟)=SB015・019・033・038・055・062、
- ②身舍の梁行が2間以上で間仕切柱がないもの(11棟)=SB006・009・010・020・025~027・035・046・049・051
- ③身舍の梁行が2間以上で総柱のもの(15棟)=SB001~004・011・013・024・028・030・032・034・043~045・060
- ④身舍の梁行が1間の側柱建物(30棟)=SB005・007・008・014・016~018・021~023・029・031・036・037・039~042・047・048・050・052・056~059・061・063~065

これらの建物群は概ね中世〜近世に属するものと推測されるが、当然ながら個々の建物間には時期 差がある。本来は同時期に存在した建物のグルーピングと変遷の各フェイズを解明せねばならない が、今回はそれに至らなかった。

竪穴建物跡・竪穴遺構は9棟検出された。平面形はいずれも方形基調であるが、SI03・06は比較的小型であり、規模に差異がある。床面に柱穴が配置されるもの5棟、ないもの4棟であるが、柱穴の有無と規模の間には相関性はない。これらの竪穴建物・竪穴遺構の堆積土はロームやシラスのブロックを含む場合が多く、人為堆積・埋め戻しと捉えられる。

(2)遺物

中世に属する遺物は中国産磁器、国産陶器、銭貨がある。中国産磁器には龍泉窯産青磁碗・皿、漳州窯産青花碗などがある。国産陶器は大窯後半期の美濃産皿と思われる底部破片が出土している。これら陶磁器は小破片かつ少量ではあるが、大きくは16世紀代に位置づけられるものである。また、中国銭および模鋳銭と思われる銭貨13点が出土した。中国銭は北宋銭3種4点(天禧通寳・熈寧元寳・元祐通寳)と明銭1種2点(永楽通寳)があるが、永楽銭以外は鐚銭である。他に無文銭、輪銭が出土している。

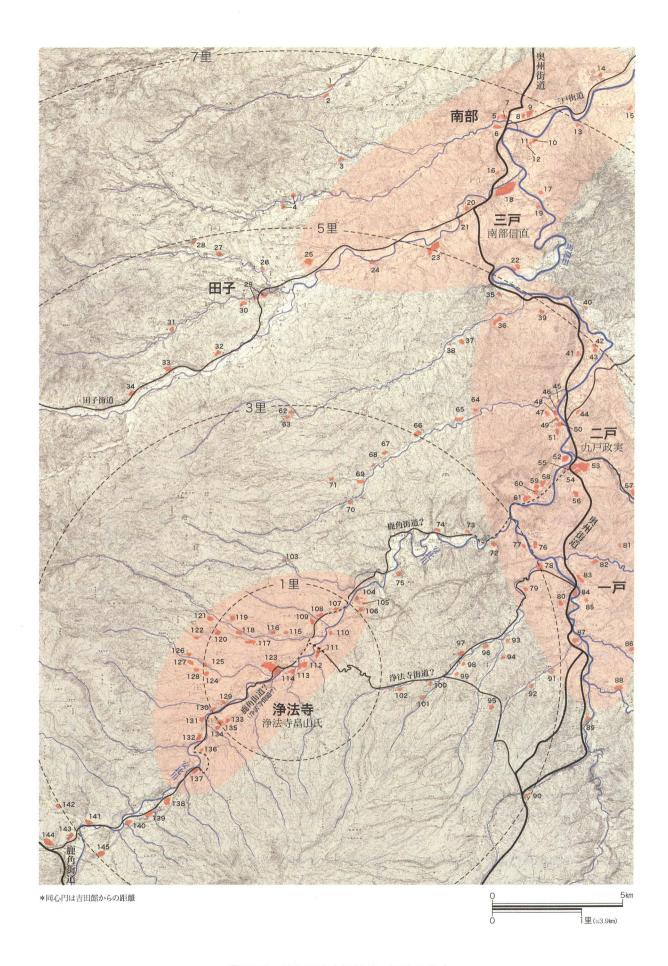
本遺跡に近い浄法寺城跡は内容確認調査が数次にわたって行われており、中国産青磁・白磁の碗・皿、瀬戸大窯期の端反皿・腰折皿・内湾皿・折縁菊皿などの陶磁器類、銭貨(唐銭・宋銭・明銭)などの14世紀~17世紀初頭と捉えられる遺物が出土した。本遺跡と浄法寺城は少なくとも16世紀代には安比川を挟んで存在していたはずである。今回の調査には主郭のうち主殿エリア(上段平場南側?)が含まれないことを加味しても、本遺跡の該期遺物量が浄法寺城に比して絶対的に少ないことは、糠部郡中の中規模領主である宗家・浄法寺畠山氏とその庶流である吉田氏の勢力関係を如実に示しているものと思われる。

(3) 遺跡

現在の岩手県二戸郡から青森県三戸郡にかけての中世城館分布を見ると、旧街道や河川沿いに実に多くの館跡が存在している。第90図に当地域における144箇所の城館跡および中世遺跡を示した(註1)。当地域には馬淵川が南から北へと貫流し、その支流である安比川・十文字川・白鳥川・海上川・熊原川等が合流している。平野の少ない当地域ではこれらの川筋に沿って街道が敷かれている(註2)。盛岡方面から奥州街道(奥州道中)が北へと延び、それに脇街道が連結しており、図幅内に示したものでは三戸街道(八戸~三戸)、田子街道(鹿角街道?;三戸~田子~鹿角)、八戸街道(二戸~軽米~八戸)、「鹿角街道」〔浄法寺街道?;二戸~浄法寺~曲田:鹿角街道(盛岡~鹿角)に連結〕、「浄法寺街道」(一戸~浄法寺)などがある(註3)。

図示したとおり、中世城館の分布には「南部・三戸」、「二戸・一戸」、「浄法寺」という三つ の中心地域がある。16世紀後葉における三戸の南部信直と二戸の九戸政実ら反信直勢の対立情況の 中、安比川流域を支配地としていた浄法寺氏は地理的には九戸勢力圏の側面を衝く位置にあり、三戸 南部の対九戸戦略の前線として重要な地域だったとも考えられる。かかる軍事的緊張状況を背景とす るためか浄法寺町内には館跡が多く、27箇所の城館が確認されている。そのうち、現時点で調査が 行われたものは浄法寺氏居城である浄法寺城(123)、支城である舘Ⅱ遺跡(112;不動館)・太田 向館(125)および本遺跡「吉田館」(114)のみで、詳細は不明である(註4)。浄法寺の館は安 比川沿いの谷底平野が眺望できる高位の段丘面に点在している。浄法寺には二戸・一戸方面と花輪・ 鹿角方面を結ぶ「鹿角街道 | が通り、さらに天台寺南側を通過し、山中を抜けて出ル町を経由して 一戸城へと至る「浄法寺街道」もある。浄法寺城(121)を中心とする館はその街道沿いに配置され ていたようである。二戸・一戸方面と鹿角方面との交通の要衝である安比川流域を支配していく中 で、街道の抑えとして浄法寺氏が一族・郎党を配したものだったのであろう。浄法寺の狭い河谷は長 渡路・八幡館・滝見橋・大清水付近でその幅が極端に狭まり天険要害をなし、その要所へ街道や河 川を挟み込むように対向して館が置かれており(註5)、全体として難攻易守の形勢となっている(註 6)。吉田館の場合は主たる街道ではないが、東の不動館との連携の下、鹿角街道へと連結する脇街 道を防備・監視する役割を負うものだったと推測される。ところで、天正20(1592)年、豊臣秀吉の 命により南部領内の48城中36城が「破却」され、浄法寺城も廃城となった。町内に分布する館の多く はこの時点で「破却」されたものと思われ、吉田館は少なくともこの時点で「破却」されたであろ う。

今回の調査では、吉田館の館主とされる吉田氏に関して何らの情報も得られなかった。ここで吉田氏に関して若干の補足を加えておく。菅野文夫氏によれば、天正10(1582)年の三戸南部の跡目相続に関する重臣会議(註7)の際、この評定に参加した三戸南部の一族・重臣はおよそ3つのグループに大別される(菅野2006)。東政勝・南長義・北信愛および石亀・毛馬内・楢山の諸氏らの「御一族」、次に後世 "甲州御譜第"と称されることとなる石井・桜庭氏ら「譜代の家臣」、そして、下級家臣としての中規模領主庶子や小領主のグループで構成されており、吉田氏はこの第3グループに属していたと考えられる。すなわち、吉田氏は浄法寺氏の庶流として吉田館に依拠した小領主であるとともに、三戸南部家臣団中に組み込まれて南部氏の下級家臣という別の一面を併せ持っていた、ということになる。浄法寺氏は九戸の乱では三戸南部方に立ってはいるがあくまで外様であり、必ずしも利害が完全に一致している訳ではない。南部氏と浄法寺氏の狭間に立って、吉田氏の立場はきわめて微妙なものだったのではないか。天正18(1590)年の九戸の乱において、吉田兵部は九戸勢に組し



第90図 糠部郡の中世城館・遺跡の分布

第8表 糠部郡の中世城館跡①

Nα	館名・遺跡名	所在地	備考 (城主、遺構など)
1	天王沢館	新郷村	
2	蝦館	新鄉村	
3	蛇沼館	三戸町	館主:蛇沼惣左衛門。
4	貝守館・横館	三戸町	館主:貝守弥七郎。横館は出城。
5	小向館	南部町	天正年間、館主:小向小四郎。
6	馬場館	南部町	天正6(1578)年、南部信直が築城。 館主:馬場市右衛門。
7	聖寿寺館 (本三戸城)	南部町	南部11代信直~24代晴政、居城。 天文8年家臣の放火により焼失。
8	佐藤館	南部町	館主:佐藤氏。
9	ひらがさき 平良ヶ崎城	南部町	建久 3 (1192)年、南部光行が築城。
10	大向館	南部町	南部氏居館。
11	蝦夷館	南部町	南部氏居館。
12	中山構	南部町	南部氏居館。
13	赤石館	南部町	天正年間(1573~92年)。 館主:桜庭安房の居館。
14	相内館	南部町	建久 2 (1191)年。南部光行の仮陣 屋。「一夜堀」の伝承あり。
15	上名久井館	南部町	館主:名久井(工藤)氏 → 東氏(南部一門)?
16	川守田館	三戸町	館主:川守田正応。平場、堀。
17	泉山館	三戸町	館主:泉山古康(南部信直の舅)。 堀。
18	三戸城	三戸町	南部26代信直が完成。 16世紀後半以降、南部宗家の居城。
19	梅内館	三戸町	館主:梅内氏(北氏一族)。
20	金堀館	三戸町	館主:石沢善三郎。
21	京兆館	三戸町	館主:岩館右京?
22	目時館	三戸町	館主:目時筑前。
23	豊川館	三戸町	館主:豊川又右衛門。
24	斗内館	三戸町	館主: 斗内氏。
25	日ノ沢館	田子町	館主:日ノ沢弥左衛門?平場、堀。
26	たかこ 種子館	田子町	館主:種子陣左衛門。
27	馬場館	田子町	館主:佐々木氏?
28	清水頭館	田子町	
29	田子館	田子町	館主:佐々木惣左衛門。南部信直、 宗家継承前の居所。
30	蝦夷館	田子町	
31	相米館	田子町	館主:相米氏。
32	原館 (工藤館)	田子町	館主:原氏。
33	石亀館	田子町	館主:石亀氏。
34	茂市館	田子町	館主:茂市惣七。
35	釜沢館	二戸市	館主:小笠原(釜沢)氏。九戸の乱 で落城。岩埋文調報455・490集。
36	海上館	二戸市	堀切。
37	月折館	二戸市	堀切、平場、空堀。
38	荒谷館	二戸市	堀切。
39	野々上館	二戸市	堀切。

No.	館名・遺跡名	所在地	備考 (城主、遺構など)				
40	下山井館	二戸市					
41	四戸館 (金田一城)	二戸市	堀、曲輪、土塁。上・中・下館の3 館。四戸氏、切田氏、金田一氏。				
42	沖 I	二戸市	竪穴建物跡 1 。岩埋文調報152集。				
43	八ツ長Ⅱ	二戸市	竪穴建物跡7。岩埋文調報168集。				
44	堀野館 (小四郎館)	二戸市	空堀、平場。館主:堀野氏。				
45	長瀬D	二戸市	竪穴建物跡1。岩埋文調報22集。				
46	長瀬C	二戸市	竪穴建物跡。岩埋文調報22·51集。				
47	佐々木館 (米沢館)	二戸市	館主:佐々木氏。堀。				
48	沢内B	二戸市	竪穴建物跡 4 。岩埋文調報7集。				
49	家の上	二戸市	竪穴建物跡1。岩埋文調報35集。				
50	*いぎゃ 米沢(エンダテ)	二戸市	岩埋文調報376・402集。				
51	下村	二戸市	竪穴建物跡3、掘立柱建物(中・近世)。岩埋文調報323集。				
52	中曽根	二戸市	二戸市教委調査。				
53	九戸城	二戸市	九戸氏居城。曲輪、堀、土塁、建物 跡など。二戸市教委調査。				
54	在府小路	二戸市	掘立柱建物跡、溝跡、陶磁器。 九戸城関連。二戸市教委調査。				
55	橋場	二戸市	土塁(損壊;九戸城土塁の一部)。 二戸市教委調査。				
56	村松館	二戸市					
57	坂本館 (白鳥館)	二戸市	曲輪、塀。				
58	諏訪前	二戸市	鎌倉時代の居館跡。堀、塀、橋。岩 埋文調報394集、二戸市教委調査。				
59	石切所館	二戸市	平場、堀。				
60	上里	二戸市	竪穴建物跡1、堀。岩埋文調報55 集。石切所館と関連か。				
61	蒼前館	二戸市	堀。				
62	根森館	二戸市	堀、平場。四戸氏家臣の根森氏。				
63	根森松屋敷館	二戸市	堀、平場。				
64	下斗米館	二戸市	曲輪、堀。館主:下斗米氏。				
65	上斗米古館	二戸市					
66	田中館	二戸市	館主:田中館正孝。曲輪、堀。				
67	上斗米館	二戸市	館主:上斗米氏。				
68	前田館	二戸市					
69	米田館	二戸市	曲輪、堀。				
70	足沢館	二戸市	館主:足沢氏(四戸一門)→九戸の 乱直前、浅野家臣・浅野重吉居館。				
71	本田館	二戸市					
72	楢館	二戸市	堀、平場。				
73	似鳥館	二戸市	館主:似鳥左近。九戸方。				
74	大向館	二戸市					
75	福田館	二戸市	館主:福田掃部。九戸方。				
76	鳥越館	一戸町					
77	八木沢館	一戸町	曲輪。				
78	樋ノ口館	一戸町	複郭。				

第9表 糠部郡の中世城館跡②

No.	館名・遺跡名	所在地	備考(城主、遺構など)
79	小滝館	一戸町	曲輪、腰曲輪、堀。
80	西法寺館 (マ館)	一戸町	館主:西法寺氏。九戸方。複郭、 堀。
81	松嶺館	一戸町	
82	楢山館	一戸町	館主:楢山氏。九戸方。曲輪、堀。
83	いちのへ 一戸城	一戸町	北館、八幡館、神明館、常念館の総 称。館主:一戸氏。一戸町教委調 査。
84	野田館	一戸町	
85	上野	一戸町	带曲輪、竪穴建物跡。岩埋文調報 359集。一戸町教委調査。
86	根反館	一戸町	館主:根反弥左衛門。平場、堀。
87	老ヶ館	一戸町	曲輪、腰曲輪、竪堀。
88	姉帯城	一戸町	館主:姉帯兼政(九戸氏一族)。 天正19年落城。一戸町教委調査。
89	五月館	一戸町	館主:小鳥谷摂津(九戸の乱で姉帯城 に篭城)。岩埋文調報424集。
90	新舘林館Ⅱ	一戸町	
91	女鹿館	一戸町	館主:女鹿長俊。曲輪、腰曲輪、 堀。
92	女鹿沢内館	一戸町	
93	中里館	一戸町	館主:中里大弼。複郭、堀。
94	小友館	一戸町	曲輪、堀。館主:月舘氏。浄法寺氏 一族の居館とも云われている。
95	半在家館	一戸町	
96	月館館	一戸町	館主:月館隠岐左兵衛。 複郭、二重堀。
97	植投館	一戸町	単郭、平場、堀
98	月館中坪Ⅱ	一戸町	陶磁器、単郭、堀、土塁。
99	内ノ沢館	一戸町	
100	家向館	一戸町	
101	岩清水館	一戸町	単郭、三重堀
102	出ル町館	一戸町	館主:出町与次郎。曲輪、堀。
103	川又館	二戸市 旧浄法寺町	館主:川又主殿。3郭?。空堀。
104	長渡路館	二戸市 旧浄法寺町	2郭。空堀。
105	エゾ館	二戸市 旧浄法寺町	丘陵先端の単郭。空堀。
106	長流部館	二戸市 旧浄法寺町	単郭。空堀(二重堀)。
107	漆沢館	二戸市 旧浄法寺町	館主:漆沢弾正。単郭、空堀。
108	宮沢館	二戸市 旧浄法寺町	方形館。全周する空堀。
109	松岡館	二戸市 旧浄法寺町	方形複郭、空堀。 館主:松岡尾張(浄法寺一族)。
110	コアスカ館	二戸市 旧浄法寺町	天台寺範囲内。浄法寺町教委調査。 堀? (未報告のため詳細不明)。
111	飛鳥台地 I	二戸市 旧浄法寺町	竪穴建物 3 。岩埋文調報120集。
112	舘Ⅱ	二戸市 旧浄法寺町	曲輪、堀・大溝、土塁、竪穴建物 跡、掘立柱建物跡など。不動館の東 郭部分に相当。岩埋文調報497集。

No.	館名・遺跡名	所在地	備考(城主、遺構など)
113	不動館	二戸市 旧浄法寺町	4 郭(館Ⅱ遺跡含む)。空堀、 塁。
114	吉田館(カイ館)	二戸市 旧浄法寺町	館主:吉田兵部。浄法寺町教委 査。報告遺跡。
115	荒谷館 (メカケ館)	二戸市 旧浄法寺町	館主:荒谷孫右衛門。方形館。: 堀。
116	六 25t 江牛館	二戸市 旧浄法寺町	「フン館」。
117	小船向館	二戸市 旧浄法寺町	
118	アイヌ館	二戸市 旧浄法寺町	
119	里川目館	二戸市 旧浄法寺町	単郭。空堀。
120	田子内館	二戸市 旧浄法寺町	単郭。空堀。
121	細田向館	二戸市 旧浄法寺町	
122	深堀館	二戸市 旧浄法寺町	館主「セキヨジエモンタメノ」 ケ」。
123	净法寺城	二戸市 旧浄法寺町	浄法寺氏の居城。曲輪、堀、掘立 建物など。町教委調査。
124	太田館	二戸市 旧浄法寺町	館主:太田氏(浄法寺一族)。 堀。
125	太田向館	二戸市 旧浄法寺町	方形館。浄法寺町教委調査。掘立れ 建物、竪穴建物、空堀など。
126	上杉沢館	二戸市 旧浄法寺町	方形館。空堀、土塁。
127	小杉沢館	二戸市 旧浄法寺町	2郭。空堀。
128	タテシロ館	二戸市 旧浄法寺町	
129	大森館	二戸市 旧浄法寺町	館主:大森氏。平場、腰曲輪、 堀。梁部1971・文化庁1984等に記 あるが、県遺跡台帳には登録されていない。
130	小泉館	二戸市 旧浄法寺町	5
131	下谷地館	二戸市 旧浄法寺町	
132	大清水館	二戸市 旧浄法寺町	館主:大清水氏。3郭。空堀。
133	五庵Ⅱ	二戸市 旧浄法寺町	竪穴建物20、住居状2、掘立柱建物 1。岩埋文調報94集。
134	五庵I	二戸市 旧浄法寺町	竪穴建物跡。岩埋文調報97集。
135	駒ヶ嶺館	二戸市 旧浄法寺町	連郭。堀。駒ヶ嶺氏(浄法寺- 族)。
136	柿ノ木平館	二戸市 旧浄法寺町	単郭。空堀。
137	下藤館	二戸市 旧浄法寺町	丘陵先端の単郭。腰郭、空堀。
138	下ノ田館	八幡平市 旧・安代町	
139	北ノ城館	八幡平市 旧·安代町	堀。岩埋文調報438集。
140	八幡館	八幡平市 旧·安代町	
141	五日市館	八幡平市 旧·安代町	
142	目名市館	八幡平市 旧・安代町	
143	まりでの 有矢野館	八幡平市 旧·安代町	竪穴建物跡。岩埋文調報303集。
144	上の山館	八幡平市 旧·安代町	竪穴建物跡。岩埋文調報40集。
145	小屋畑館	八幡平市 旧·安代町	

て行動したことは史料にあり、史実らしい。先の評定の際に吉田氏がどういう立場に立ったのかわからないが、信直の三戸南部家督相続後何れかの時点で九戸方へと転向したものと思われるが、はたして宗家である浄法寺畠山氏の意図が働いたものだったのであろうか。浄法寺氏は九戸の乱では信直派に立ったが、終始一貫信直を積極的に支援した訳ではなく、南部と九戸を天秤にかけて不透明な情勢

の中で生き残りを図る日和見的姿勢も垣間見える。ともあれ吉田兵部は九戸城籠城者のリストには見当たらず、乱後の吉田氏の動向については具体の資料を欠くため詳らかではない。三戸南部の下級家臣でありながら信直に造反したことから、おそらくは領地没収・断絶となったものと推測できる。今回の調査では館破却(城割り)について、SD02・04の埋没状況等にそれらしき痕跡が見られるものの明確ではない。なお、近世以降も本遺跡が生活の場として利用されていたことは出土遺物から跡付けられるが、はたして吉田氏ないしはその末裔が居住していたものか定かではない。

註

- 1) 抽出に際して複数の文献を参照したが、文献による記載の有無があるもの、名称のみで内容不詳なものもあるが、その「館」も便宜的に一括して示している。
- 2) 街道の道筋は、『岩手県「歴史の道」調査報告』(岩手県教委 1979・1980・1981)、『奥州街道』(2002)、『北奥路程記』 (岩手県文化財愛護協会 2002)、『二戸郡誌』(1977) 等を参照し、一部については推定の上、作図した。
- 3) 街道の名称についてはそれぞれの地域で異なっており、一定していない。「鹿角街道」や「浄法寺街道」についても具体にどの街道を指すのか、史料により異同がある。『二戸郡誌』(1977)によれば、「浄法寺街道」とは、一戸と浄法寺を結ぶ街道で、一戸・鳥海から浄法寺御山へ越えて浄法寺宮沢で鹿角街道(現・県道二戸五日市線)へ合流するものである。全長三里二十九町(約14.86 km)、幅二~四間(約2.6~7.3 m)の大道で、菅江真澄が一戸へと辿った道である。一方、『北奥路程記』では、二戸福岡から荒屋曲田(現八幡平市)へ至る、全長8里34町(34.91 km)、幅員2間(2.6 m)の道、現在の県道を「浄法寺街道」と称している(岩手県教委1981)。ここでは、江戸時代の絵図の記載等を参照して、前者の説を採って便宜的に浄法寺街道と呼ぶこととする。なお、この「浄法寺街道」沿いには、月舘館(96)、岩清水館(99)、中里館(93)、小友館(94)など多くの城館が配置されており、浄法寺を経由して鹿角方面と一戸・二戸方面を結ぶ当街道の重要性が窺い知れる。
- 4) 太田向館は旧太田小学校校舎建設に先立って平成2年に調査が行われた。調査成果については未報告であるが、分布調査報告書中の記述を参照すると丘陵基部を堀切した連郭式城館であり、掘立柱建物・竪穴遺構・堀などが検出されたらしい(浄法寺町教委1991)。掲載されている航空写真を見る限りにおいては、複数条の堀と柱穴多数が確認できる。また、「館」といえるのか不確かではあるが、天台寺別当桂寿院屋敷跡と伝えられるコアスカ館が旧浄法寺町教委により調査されており、縄文時代草創期の爪形文土器が出土したことは広く知られる。(中村2000)。しかし、中世?を含む調査の詳細は未報告であり不明である。伝聞によれば、堀が検出されているとのことである。
- 5) 浄法寺城 吉田館 不動館、松岡館 宮沢館などで見られる。
- 6) 沼舘、前掲書、197~198頁。
- 7) 浄法寺氏がこの評定に参列したとする史料があることから、筆者は舘Ⅱ遺跡報文(岩手県埋文 2006)において浄法寺氏がこの評定に参加していたと述べたが、正しくない。ここで訂正する。南部氏下級家臣であった吉田氏とは異なり、浄法寺氏は三戸南部の一族でも家臣でもないことから参列した可能性は低く、上記史料は後世の脚色である可能性が高い。

参考文献

*紙幅の関係で参照した調査報告書の大部分は割愛した。

青森県 2000 『青森県史 資料編 考古4』

青森県教委 1983 「青森県の中世城館」『北海道・東北地方の中世城館①北海道・青森・秋田』東洋書林、所収

一戸町教委 2007 『奥州街道調査報告書』一戸町文化財調査報告書第59集

岩手県 1961 『岩手県史 第3巻』

岩手県教委 1979 『奥州道中』、『鹿角街道』岩手県「歴史の道」調査報告

岩手県教委 1981 『浄法寺・八戸街道』岩手県「歴史の道」調査報告

岩手県教委 1986 『岩手県中世城館跡分布調査報告書』岩手県文化財調査報告書第82集

岩手県埋文 2006 『舘Ⅱ遺跡発掘調査報告書』第497集

菅野文夫 2006 「中世糠部の一断面」 細井計・編『東北史を読み直す』吉川弘文館

栗村知弘・佐々木浩一 2001 「根城跡」 藤木・伊藤編『城破りの考古学』吉川弘文館

佐々木浩一 2001 「柱穴群から建物跡へ」『掘立と竪穴 中世遺構論の課題』東北中世考古学会編、高志書院

佐々木浩一 2002 「扇の要」『海と考古学とロマン』市川金丸先生古希記念献呈論文集

浄法寺町 1997 『浄法寺町史(上巻)』

净法寺町教委 1976 『浄法寺町史(資料編)』

净法寺町教委 1991 『岩手県二戸郡浄法寺町 遺跡詳細分布調査報告 I (大字浄法寺地区)』

净法寺町教委 1996 『浄法寺町遺跡地図 (1995 年版)』

净法寺町教委 1998 『净法寺城跡 平成9年度町内遺跡詳細分布調査概報』

中村 裕 2000 「コアスカ館」『岩手未来への遺産 遺跡は語る 旧石器~古墳時代』岩手日報社

二戸市 2000 『二戸市史 第1巻』

二戸郡誌編集委員会 1977 『二戸郡誌〔縮刷版〕』名著出版会

八戸市教委 1996 『根城 本丸の発掘調査』八戸市埋蔵文化財調査報告書 54 集

4 ま と め

調査成果は次のとおりである。

- ①吉田館遺跡は縄文時代、古代、中・近世の複合遺跡である。
- ②縄文時代においては、後期の竪穴住居跡を複数棟検出し、それにともなう後期後葉の遺物が出土 したことから、該期の集落跡であることが確認された。また、早期~前期前半と推測される住居跡状 の竪穴遺構を検出するとともに、少量ながら早・前期の遺物が出土しており、該期の集落跡である可 能性がある。
- ③中掫浮石層より下位で石器素材剥片の埋納遺構(デポ)を検出し、出土剥片から接合資料 8 点が得られた。層位から縄文時代早期~前期前半に属するものと推定される。掘り込みを伴うデポは類例の少ない遺構であり、貴重な資料を追加できた。
- ④古代については遺構が検出されず、少量の土師器・須恵器が出土したのみであるが、本来は該期 の遺構が存在していた可能性は高い。
- ⑤城館にともなう普請・作事の遺構が検出され、ごく少量ではあるが中世の陶磁器・古銭が出土したことで、当遺跡が16世紀代を中心とする中世城館跡であることが確認された。2段3面の平場で検出された遺構は、空堀、切岸、虎口、土橋 [以上は普請]、掘立柱建物跡、竪穴建物跡・竪穴遺構、柱穴列(柵跡)、門跡、溝跡(塀跡)、柱穴群 [以上は作事]がある。
- ⑥上段平場の夥しい柱穴は、吉田館が長期に亘る城館であったことを示唆している。上段平場では 多数の掘立柱建物が重複しており、数段階の縄張変遷が存在していることは確実であるが、今回は詳 細を明らかにできなかった。
- ⑦空堀や虎口についてはその堆積土の様相から、人為的な埋め戻し行為が想定される。これは館の 破却、いわゆる「城破り」が行われた所産ではないかと推測される。
 - ⑧本遺跡の城館「吉田館」の館主が吉田氏であることを積極的に裏付ける確証は得られなかった。

写 真 図 版



吉田館遺跡周辺航空写真(上が北;昭和30年撮影)



吉田館遺跡 俯瞰(北西から)

*↓は不動館遺跡



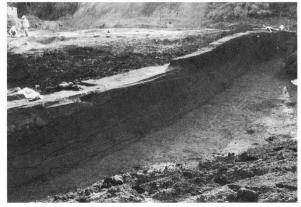
遺跡近景(東/吉田川対岸から)



堆積土層断面(下段東側;北西から)



調査区下段 調査前(南から)

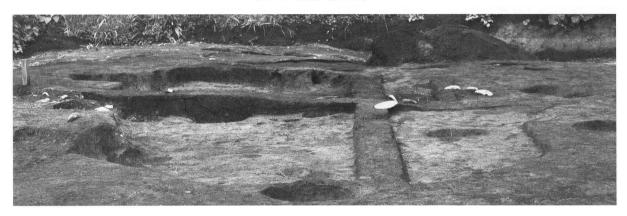


堆積土層断面(下段東側;北東から)

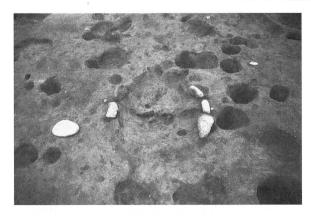
写真図版1 遺跡俯瞰・近景ほか



S I 10 全景(東から)



SI10 堆積土断面(南から)

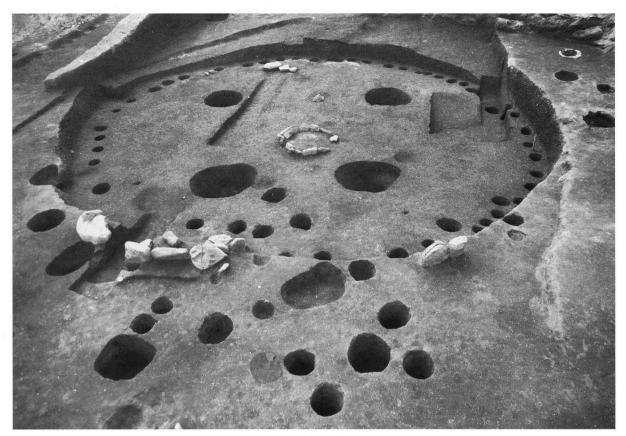


S I 10 炉(南東から)



SI10 炉断面(南東から)

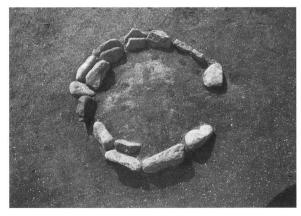
写真図版2 SI10



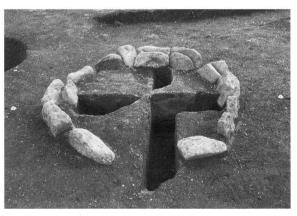
S | 11 全景 (東から)



SI11 堆積土断面(南から)

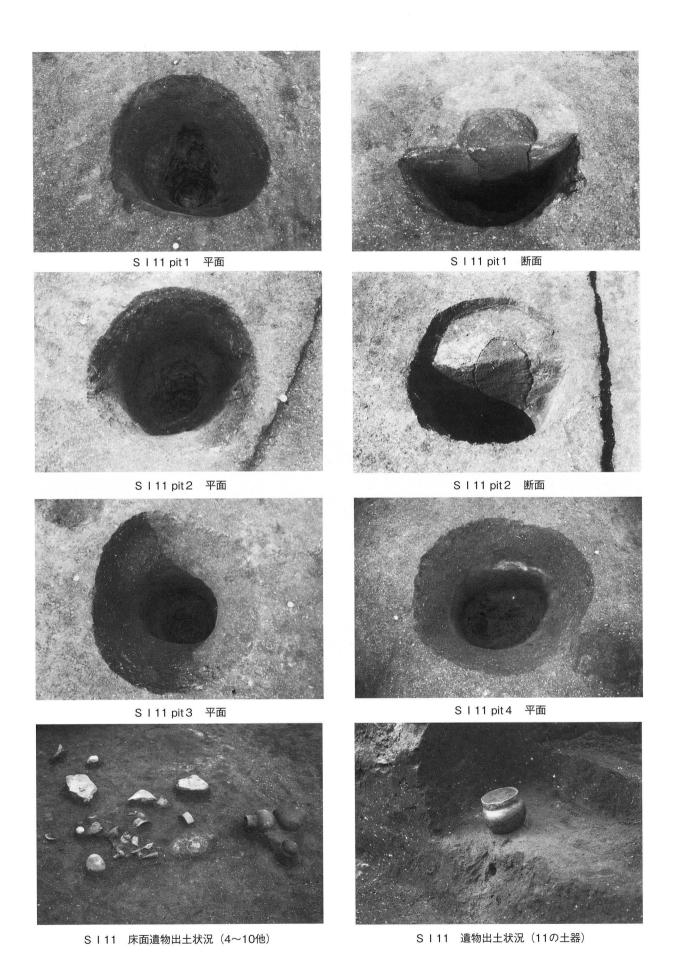


SI11炉(東から)



S | 11炉 断面(北から)

写真図版3 S I 11



写真図版 4 S I 11



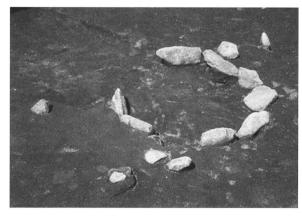
SI11 遺物出土状況(14の土器)



S X 01 全景 (東から)



S I 12・S X 02 全景 (東から)

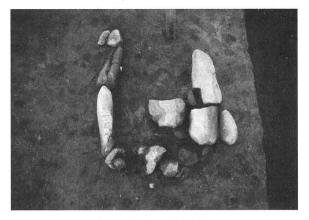


S I 12 炉(南東から)



精査状況

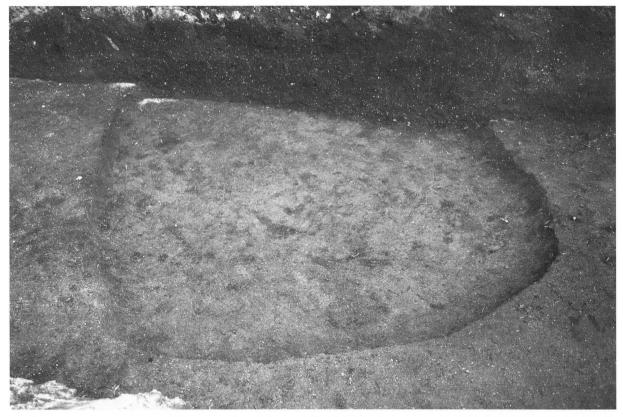
写真図版 5 S I 11 · 12、S X 01 · 02



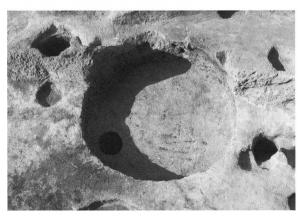
SI13 平面(上が西)



S | 13 断面 (東から)



S | 14 全景 (北から)

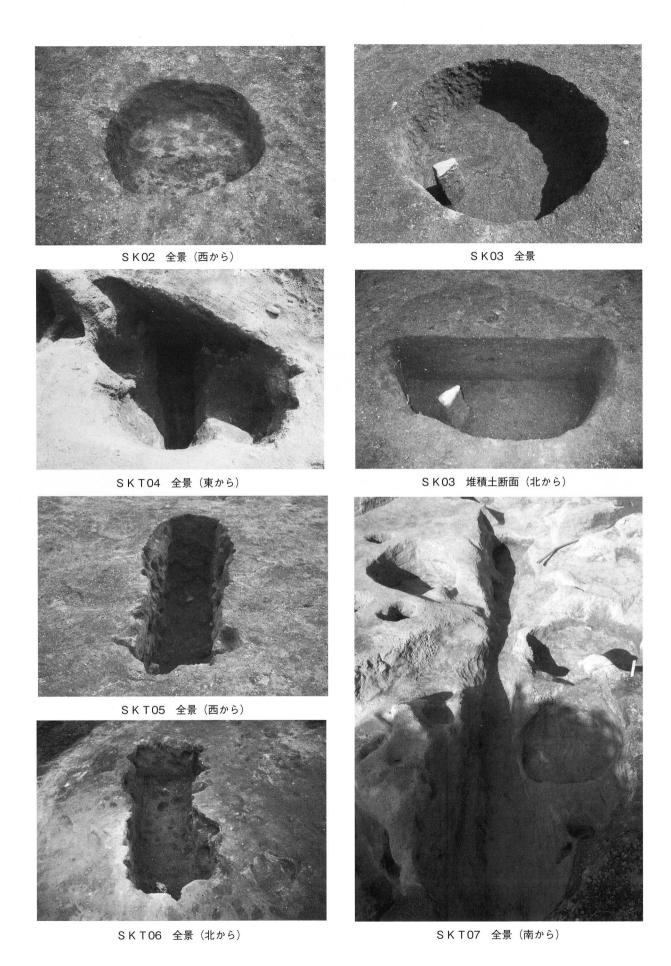


SKF01 全景(南から)

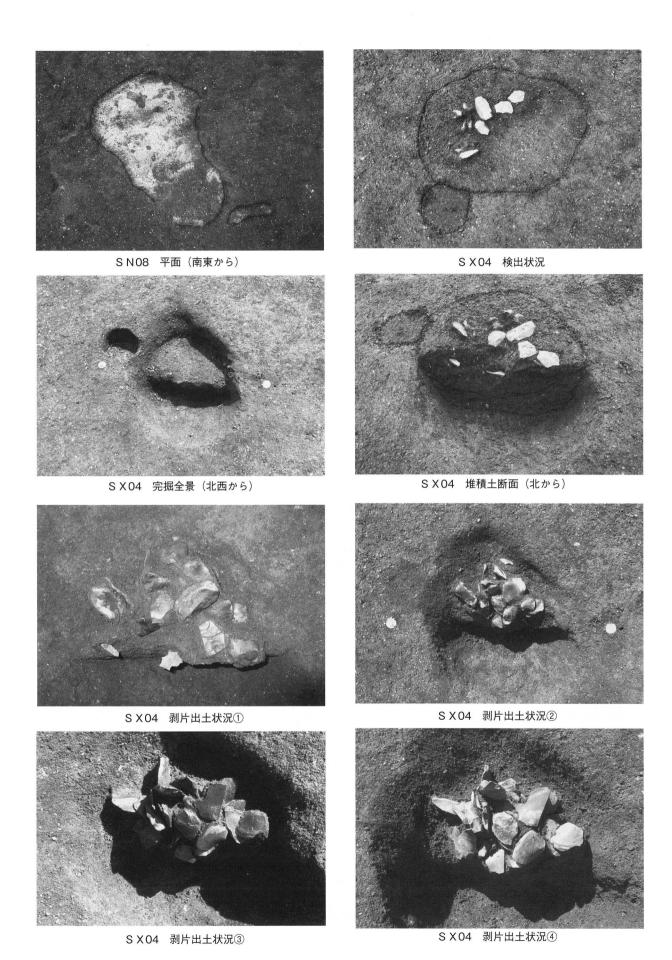


SKF01 堆積土段面(西から)

写真図版 6 S I 13 · 14、S K F 01



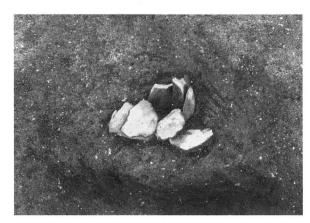
写真図版7 SK 02・03、SKT 04・05・06・07



写真図版8 SN08、SX04



S X 04 剥片出土状況⑤



S X 04 剥片出土状況⑥



土蔵跡 全景(西から)



現況地形測量 作業中



SC01西半部(直上から;上が北)

写真図版 9 SX 04、SC 01 ほか



SC01東半部とSC02(直上から;上が北)



SC01-a 全景(南東から)

写真図版 10 SC 01



SС01-a 柱穴群・SD02 検出状況



SCО1-a 精査状況



S C 01 - b 柱穴群・S D 01 検出状況①



S C 01 -b 柱穴群・S D 01 検出状況②

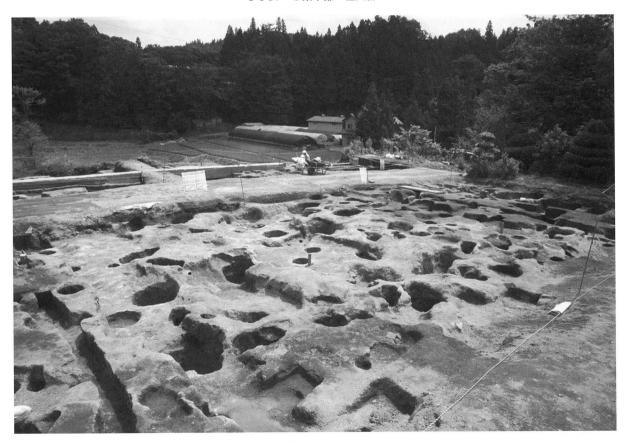


S C 01 - b 西半部

写真図版 11 S C 01



SC01-b東半部 柱穴群



SC01-c西半部(北西から)

写真図版 12 S C 01



SC01-c東半部(南から)



SC02 全景(南から;整地層除去後)

写真図版 13 SC 01 · 02

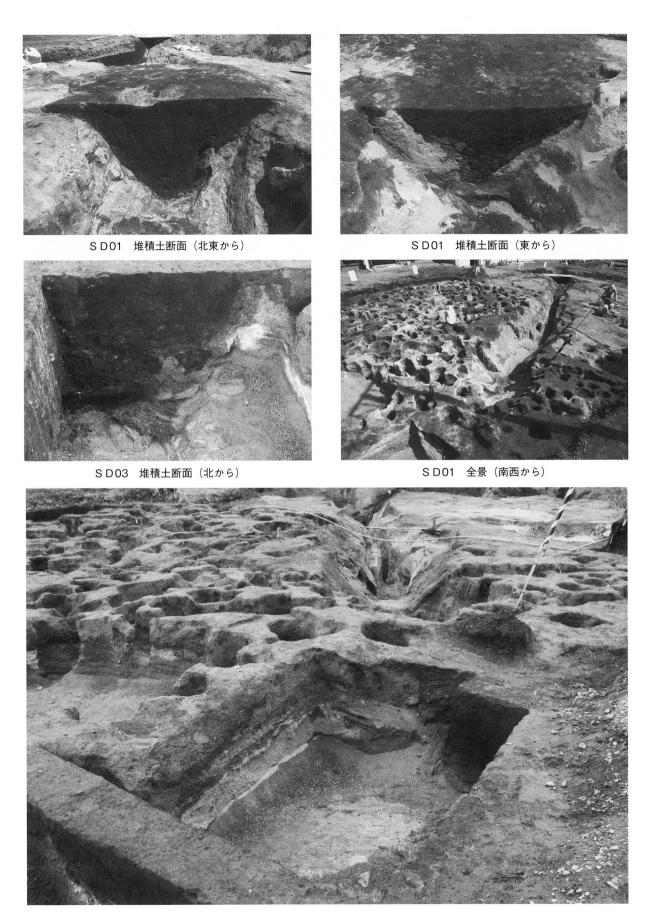


SC03 全景(北から)



SD01 全景(南西から)

写真図版 14 SC 03、SD 01



SD03 全景(南西から)

写真図版 15 SD 01·03



SD04 全景(南から)

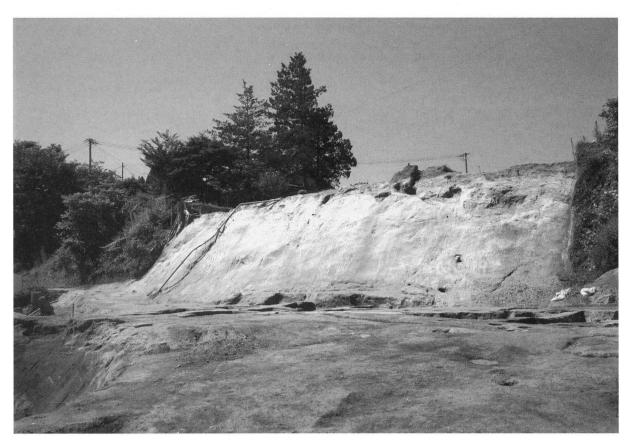


SD04 堆積土断面(南から)



SD04 堆積土断面(南から)

写真図版 16 SD 04

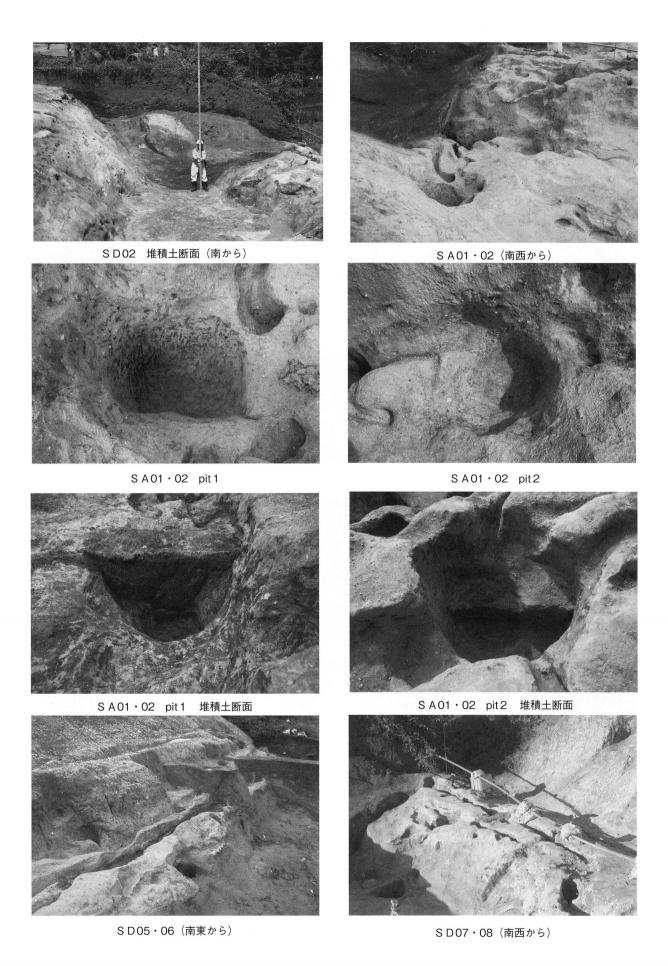


SF01 全景 (北東から)



SD02 全景(南から)

写真図版 17 SF 01、SD 02



写真図版 18 S D 02 · 05 · 06 · 07 · 08、S A 01 · 02



SI01 全景(南から)



S 1 02 全景 (東から)

写真図版 19 SI 01・02



S 1 03 全景 (西から)



SI04 全景(西から)

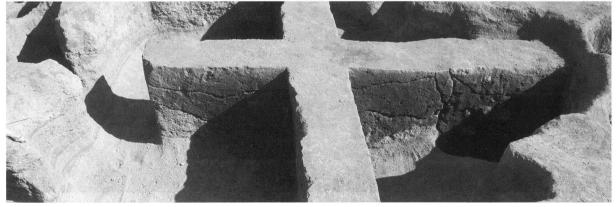
写真図版 20 SN 03·04



SI04 堆積土断面(南東から)



SI05 全景(南西から)



SI06 堆積土断面(北西から)

写真図版 21 S I 04·05·06



S 1 06 全景 (南から)



S I 07・08 全景(南東から)

写真図版 22 SI 06·07·08



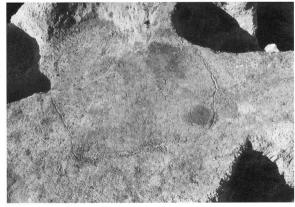
SI07・08(北東から)



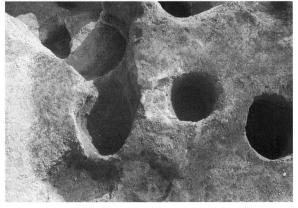
SI07 堆積土断面(南から)



SI09 全景(北東から)

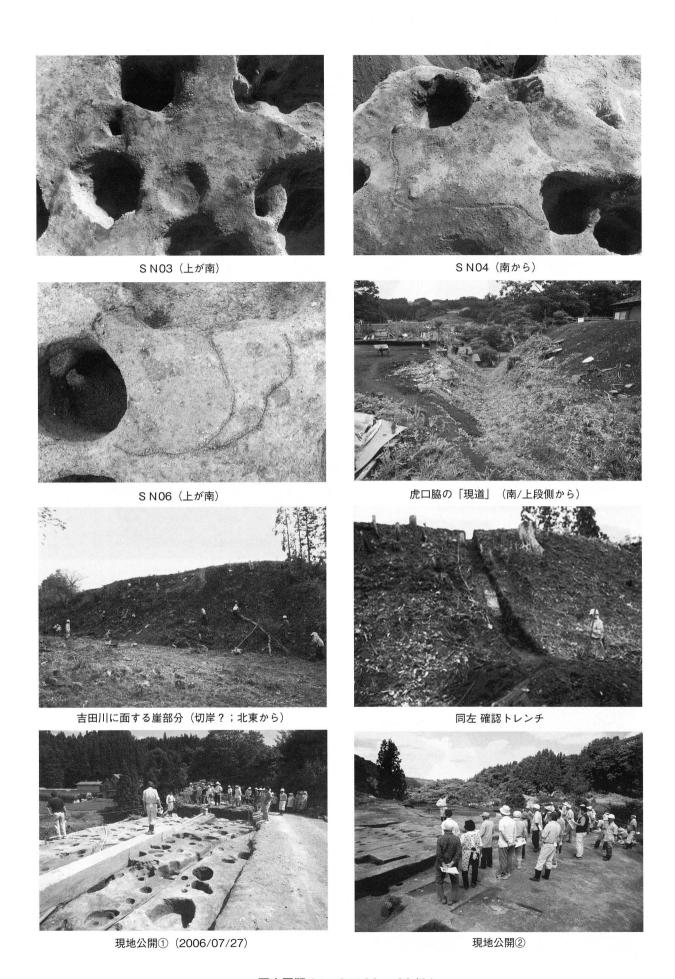


SN01 (上が北)



SN02(上が南)

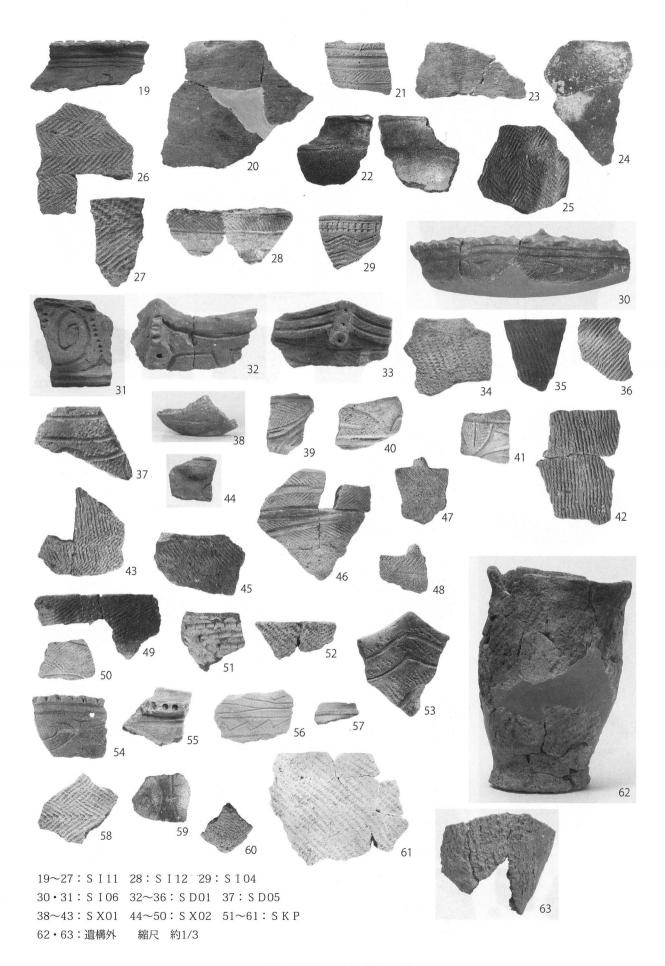
写真図版 23 SI 07·08·09、SN 01·02



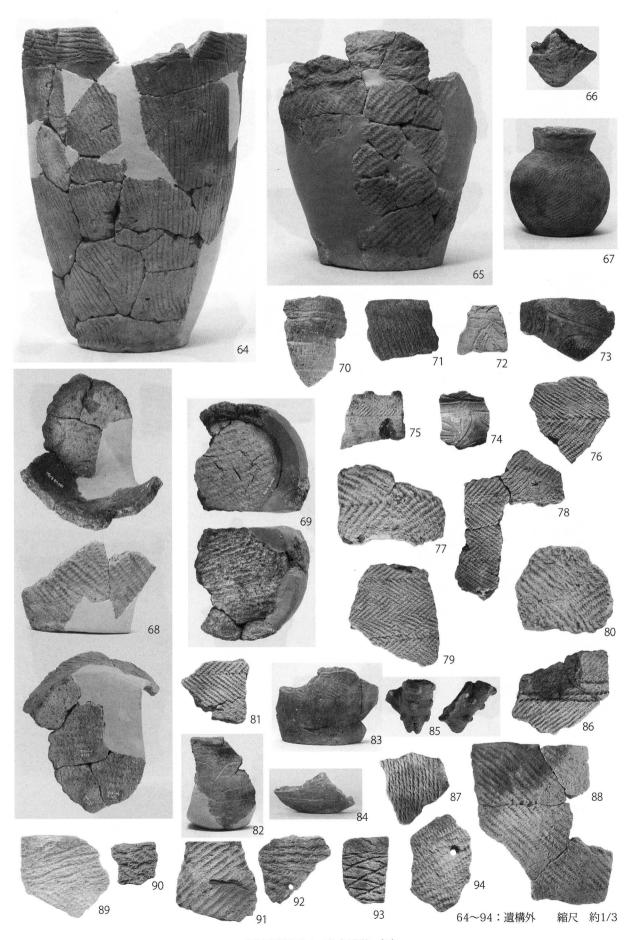
写真図版 24 SN 03 ~ 06 ほか



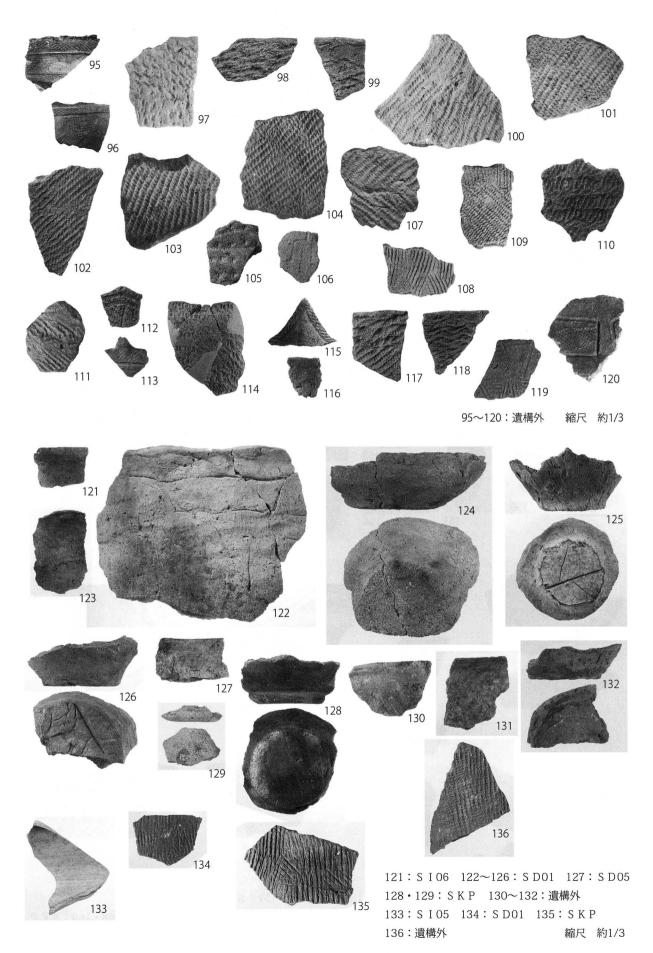
写真図版 25 出土遺物(1)



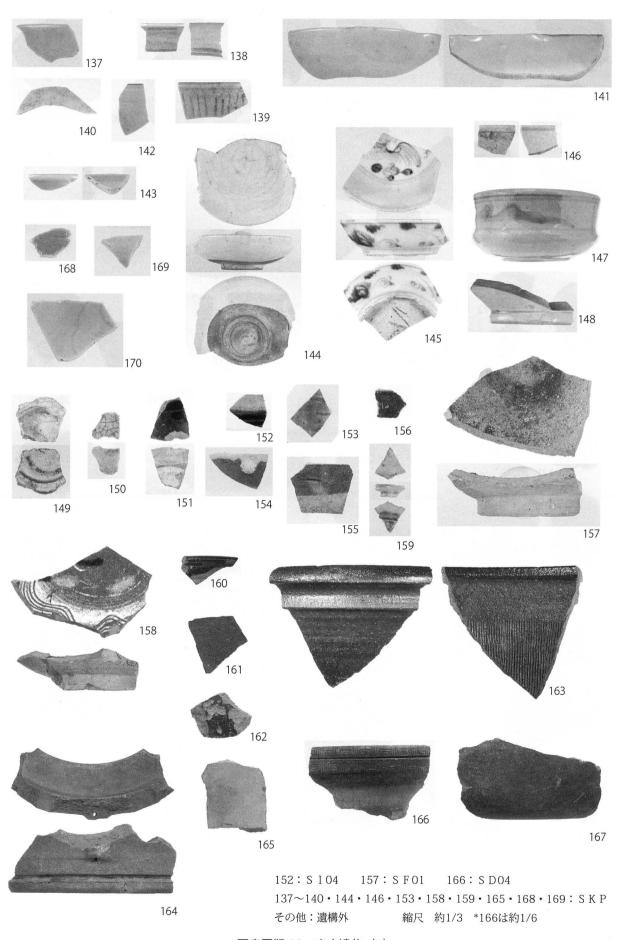
写真図版 26 出土遺物 (2)



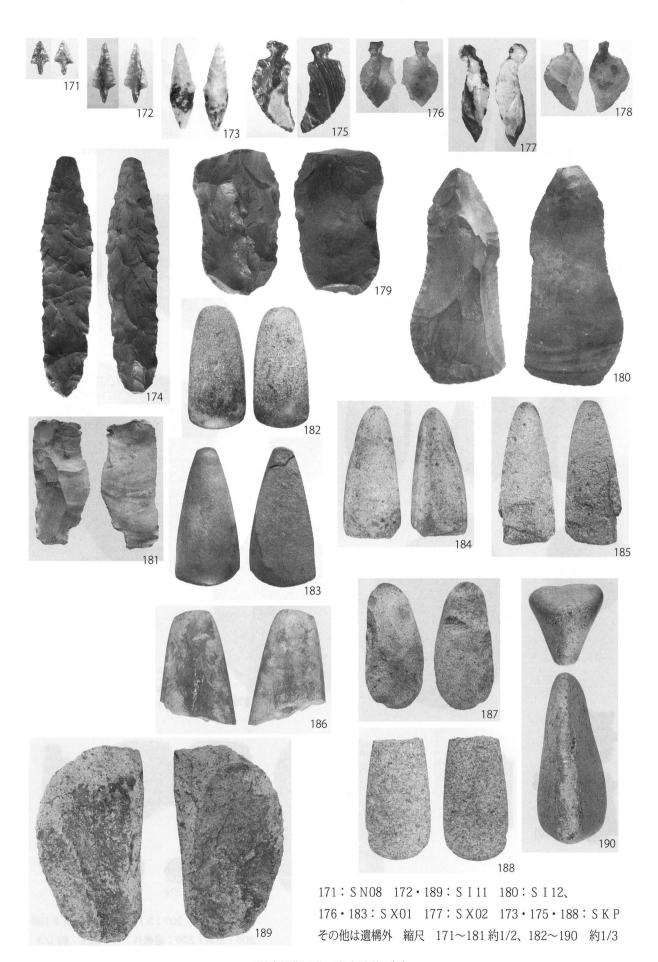
写真図版 27 出土遺物 (3)



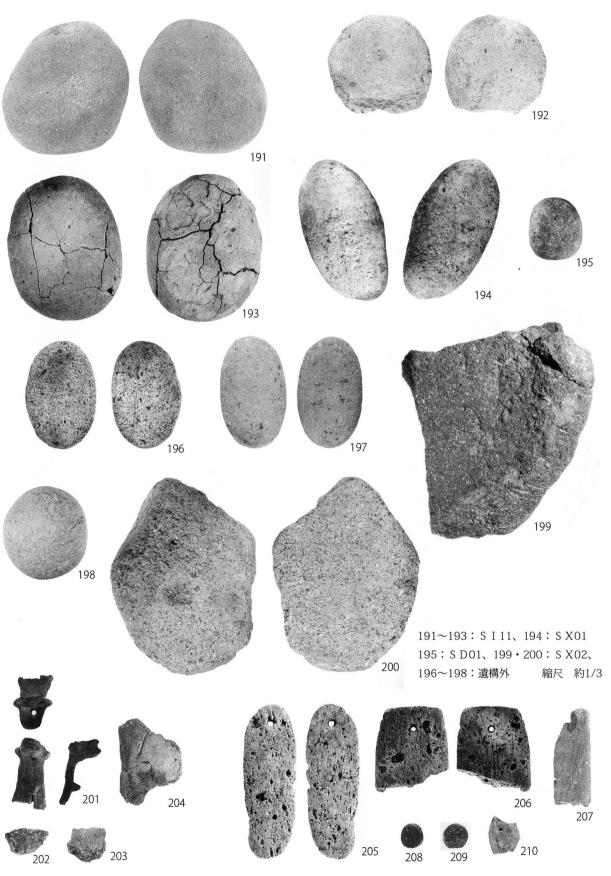
写真図版 28 出土遺物 (4)



写真図版 29 出土遺物 (5)



写真図版 30 出土遺物 (6)

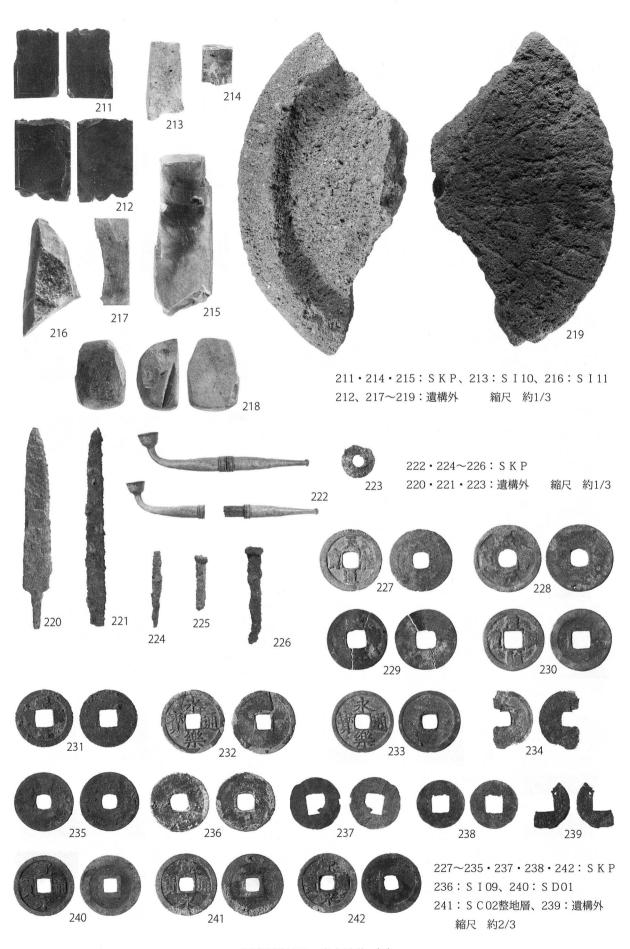


201: S I 11, 202: S K P8, 203: S D01

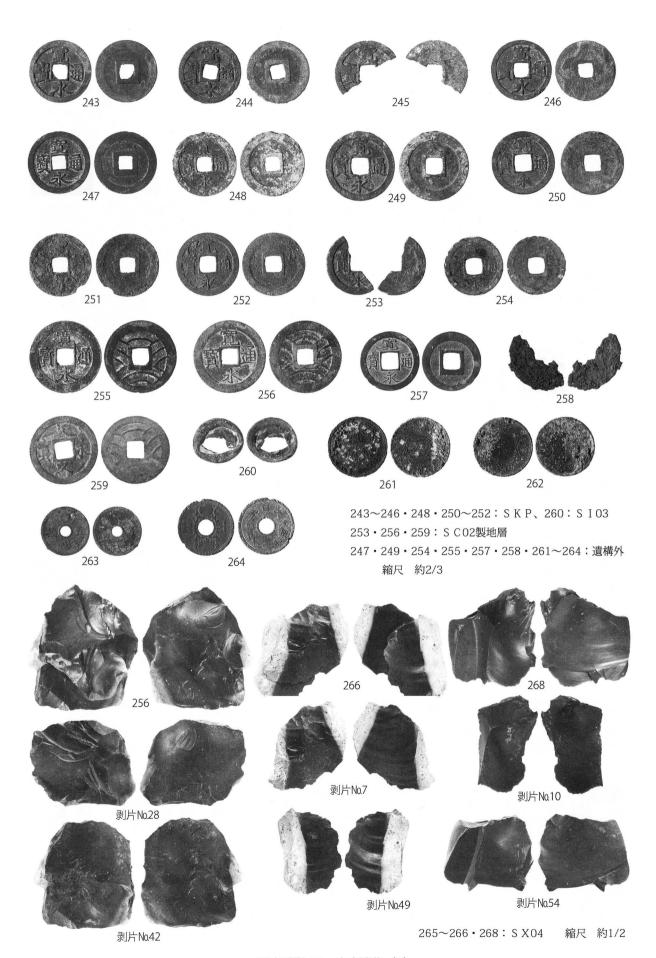
204: S D 03 縮尺 約1/3

205:S I 11、207:S D04、210:S K P126 206·208·209:遺構外 縮尺 約1/3

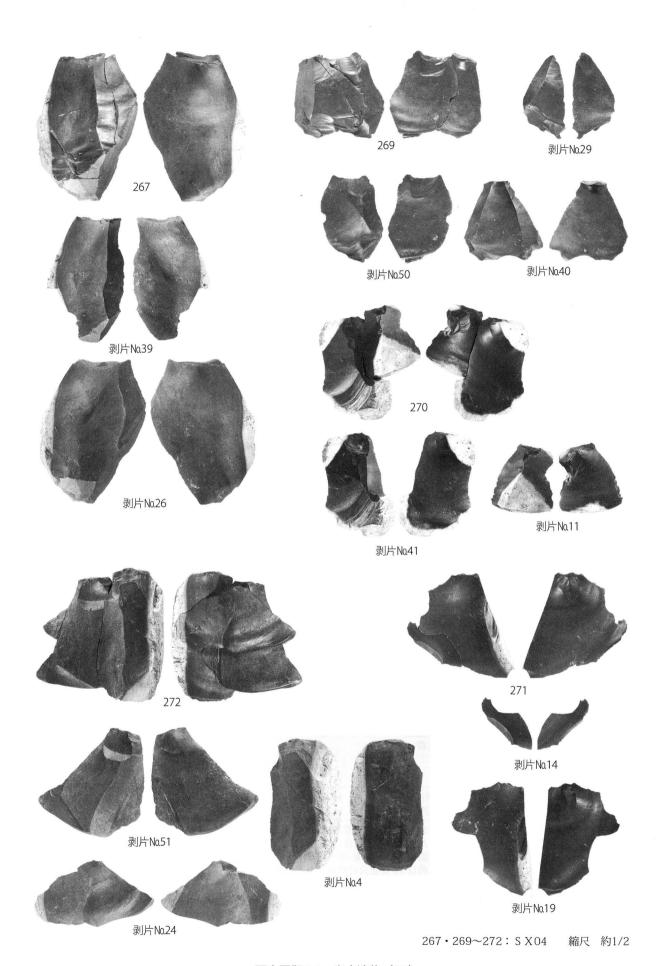
写真図版 31 出土遺物 (7)



写真図版 32 出土遺物 (8)



写真図版 33 出土遺物 (9)



写真図版 34 出土遺物(10)

報告書抄録

ふり	がな	よしだだていせきはっくつちょうさほうこくしょ						
書	名	吉田館	吉田館遺跡発掘調査報告書					
副書	2	名 主要地方道二戸五日市線緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査						
巻	次							
シリー	シ リ ー ズ 名 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シ リ ー ズ 番 号 第520集								
編 著 者 名 千葉正彦								
編集	機 関	(財)岩手	断岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター					
所 在	址	〒020-	- 0853 岩手県盛岡	市下飯	岡11地割1	185番地 TEL((019) 638 – 9	9001
発 行 年	月日	平成20	年 3月14日	I			T	
ふりがな 所収遺跡名	ふり 所 在	. tst	コード 遺跡番号	北緯。/ "	東経。,,,,	調査期間	調査面積	調査原因
ましただないせき吉田館遺跡	いわてけんに 岩手県二 じょうぼうじまち 浄法寺町 9-1ほ	大手	03213 JE37-0090	40度 10分 56秒	141度 9分 40秒	2006.05.16 ~ 2006.10.06	3,345 m²	県道改良(浄 法寺バイパス 建設)に伴う 緊急発掘調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特	記事項
	集 落 跡	竪穴遺構 1棟 掘立柱建物跡 1棟 土坑類 7基 配石遺構 2基				竪穴住居跡 2 棟は配石遺構を 伴う。 土器の主体は後期後葉(十腰 内IV式)および前期前葉(早 稲田 6 類)。		
	散布地	古 代			土師器、須	頁恵器		
吉田館遺跡	城 館 跡	中 世	堀跡 3 条 虎口 1 箇所 切岸 1 面所 土橋 1 箇所 竪穴建物跡 4 棟		(青磁、白磁、青華磁器)		館の主郭の一部を調査。 柱穴総数は2,600個以上。 左記遺構には近世以降のもの を含む可能性あり。 青磁は龍泉窯産、陶器は美濃 大窯産が含まれる。	
	集落跡?	近 世			国産陶磁器 古銭	급		
	集 落 跡	近 代	掘立柱建物跡 土蔵跡	1棟 1棟	古銭			

要約 吉田館遺跡は安比川右岸台地上に普請された中世城館跡である。館造営に伴う普請と作事痕跡が確認され、量的には少ないながらも中世に属する遺物が出土した。高位の平場は空堀と切岸によって区画されており、吉田館の主郭と解される。特にも2条の空堀により囲郭された内部で掘立柱建物や柵・塀を構成する多数の柱穴を検出している。陶磁器や古銭(北宋銭・明銭)など出土遺物の年代観に鑑みると、館は16世紀代に機能したと推測される。一方、普請の影響の少ない低位平場部分を中心として縄文時代の集落跡および狩り場が確認された。住居跡は後期後葉および早期~前期初頭のもので、後期の住居跡には配石を伴うものがある。また類例の少ない剥片埋納遺構(デポ)を検出した。出土した縄文土器は後期後葉を主体に、早・前・後・晩期までのものが含まれている。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第520集

吉田館遺跡発掘調査報告書

主要地方道二戸五日市線緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査

印 刷 平成20年3月10日 発 行 平成20年3月14日

発 行 (財岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 電話 (019) 638-9001 FAX (019) 638-8563

印 刷 (有ジロー印刷企画 〒020-0066 岩手県盛岡市上田2丁目17-4 電話(019)651-6644

